宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第39集

町屋敷遺跡（まちやしきいせき）

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

２００１年

宮崎県埋蔵文化財センター

町屋敷遺跡正誤表（A区・C区）本文

頁	行	誤	正
11	5	緩やかに	緩やかに
	6	調査区Bからの続き	調査区B～Aにかけている。また、調査区Bからの続き
	7	ぶかべ	土壁から
	10	底面	底面
14	24	ＳＥ６は、調査区の	ＳＥ１は、調査区の
34	5	２層断が延伸し口辺部に	２は調断が延伸し口縁部に
	11	１９は口縁が短く	１９は口縁部が短く
	15	３３は単調帯	３３は短調帯
	16	３５は火主縁実施の	３５は火主縁実施の
	17	４０、４１には口縁部先端が	４０、４１は口縁部に櫛描波状文を施す。４３、４４は口唇部にナデによる凹みが見られる。４６は口縁部先端が
	19	４８は口縁部に同縁文が施されている。	４８は一重口縁である。４９は口唇部に同縁文が施されている。
	20	５４は胴部下位に縁刺が見られ鋼の可能性もある。	５４は胴部下位に縁刺が施される。５５は底部外面に付着の刺突が施されている。６０は底部貼付の跡が見られ鋼の可能性もある。
	22	胴部胴部上位に	胴部上位に
	34	１１１はや直線的な	１１１はやや直線的な
35	2	１１２～１３４は	１２２～１３４は
95	9	３５４は柱状木器よりさらに	３５４は柱状木器であり、厚状木器よりさらに
	10	１４Ｃ	**C
	17	１４Ｃ	**C
	17	底部	底面
	18	１４Ｃねんだい測定	**C年代測定
114	6	調査区の南西で西壁へ	調査区の南西で西壁から西壁へ
	8	壁の構造を足すと	壁の構造を考えると
	9	埋土からは古墳前期	埋土からは古墳前期
	30	緩やかに	緩やかに
	30	東壁へ抜けている。	東壁へ抜けており、埋土の状況からＡ区のＳＥ７に続くと思われる。
117	13	縄木の柱	縄木の抜
	14	痕（東定部分）の積	痕（東定部分）の積
	14	細削した水を名が安と	細削し水を流したと
	17	ＳＥ３支魂は、	ＳＥ７支魂は、
	20	流動状態	流動状態
	27	結合えいる	結合している
129	2	２４３５は４番抗で	４３５は南から４番抗で
	2	内側	内側
	5	１４Ｃ	**C
	8	半部	平部
	8	現観してない抗で根種はクリで、１４Ｃ	現観していない抗で根種はクリ、**C
	9	４４０は３番抗である。	４４０は南から３番抗である。
	11	１４Ｃ	**C
	12	加工面数	加工面数
	14	ＳＥ３	ＳＥ７
	15	壊がの	球が
	15	１本替り	１本替り
133	6	思われる。水田の	思われる。底面に一次降灰の状態に近い高原スコリアの堆積が観察されることから中世に機能していた際と思われる。水田の
	10	ことか、	ことから、
	11	榛島火山起源の高原スコリアは第Ⅱ層	榛島火山起源の高原スコリアで、噴出年代は１１～１２世紀であると思われる。この高原スコリアは、第Ⅱ層
	13	第１層	第１層
	21	切れている部分と	切れている部分を
	27	スコリアが体積していた	スコリアが堆積していた
	27	水によりスコリアが凝集部分が	水によりスコリアがやや低いところに溜まったものと思われる。ＳＥ１０には、一次降灰に近い状態の多数のスコリア凝集部分が
	28	体積	堆積
	31	体積	堆積
	32	体積した畦畔上	堆積し畦畔上

頁	図	訂　正　箇　所
12	5	土層断面図Ｃ－Ｃ′のⅣ－１ｃと４－２ｂの間に、「Ⅳ－２ａ」層を挿入
13	6	Ａ区平面図の網掛け部分に、「縄群」を挿入
	6	土層断面図のＳＥ３を、「ＳＥ７」に訂正
	6	土層断面図の●印に、「土器」を挿入
97	73	遺物番号「３５３」を挿入
99	74	遺物番号「３５４」を挿入
116	87	土層断面図の外縁から外は、「Ⅵ層シラス」を挿入
118	88	土層断面図のＳＥ３を、「ＳＥ７」に訂正
	88	注記に、「８層　暗灰粘質土…７層より粘質は弱い。木片・砂粒を含む。」を挿入
	89	ＳＥ３を、「ＳＥ７」に変更
	91	ＳＥ３を、「ＳＥ７」に変更
134	105	Ａ区を「Ｂ区」に、Ｂ区を「Ａ区」に変更
	105	ＳＥ８を削除
135	106	方位のＭＮを「Ｎ」に訂正
	107	土層断面図Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′の太線から下のⅣ層を、「Ⅵ層シラス」に訂正
	107	土層断面図Ｄ－Ｄ′のＳＥ７を「ＳＥ６」に訂正
136	108	ＳＥ６を、「ＳＥ１０」に変更
	108	ＳＥ８を、「ＳＥ９」に変更
	108	平面図の網掛け部分に、「黄色砂岩堆積範囲」を挿入
	109	土層断面図Ａ－Ａ′の「Ａ′」を挿入
	110	断面図Ｂ－Ｂ′のＳＥ２を「ＳＥ６」に訂正
137	111	焼記のＳＥ８出土器を、「ＳＥ９出土器」に訂正

頁	表	訂　正　箇　所
48～54	9	出土地点のＳＥ１１層を、「ＳＥ１第１層」に訂正（遺物番号の９１・９８・１３６）
	9	出土地点のＳＥ３１層を、「ＳＥ３第１層」に訂正（遺物番号の１２４）
111	14	出土地点のＳＥ１　９層を、「ＳＥ１最下層」に訂正（遺物番号の３９３・３９４・３９５）
125	16	出土地点のＡ区ＳＥ３支流を、「Ａ区ＳＥ７支流」に訂正（遺物番号の４０３）

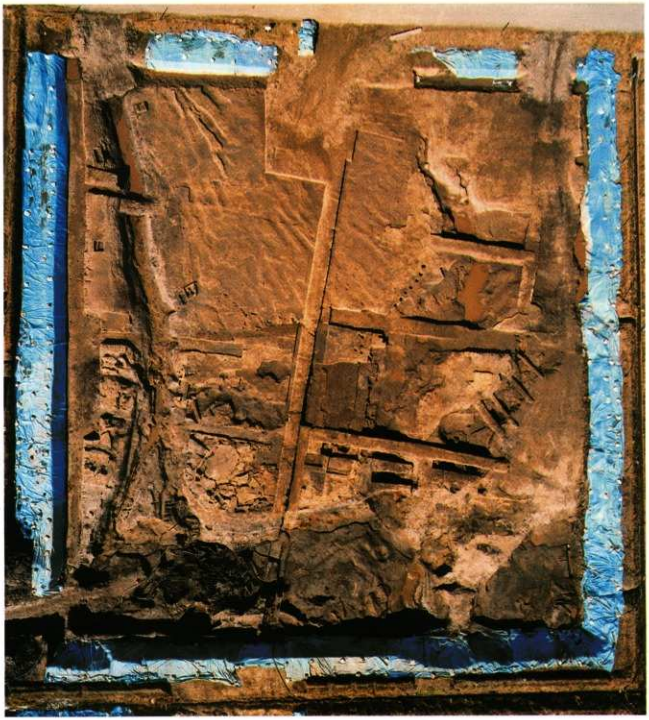
図版1

町屋敷遺跡全景（南から）

図版 2

A区　全景

図版 3



町屋敷遺跡　B地区全景

図版４（牛嶋　茂氏撮影）

B区　堰跡　出土杭（上379．下370）、加工木材（363）

A区　出土　鉢（350）

A区　出土　木錘（352）

A区　堰跡出土　杭（上から440．437．440）

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第39集

町屋敷遺跡（まちやしきいせき）

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

２００１年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成７年度から10年度にかけて実施してまいりました。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した宮崎市所在の町屋敷遺跡は、平成８年度から平成９年度にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって古墳時代と古代、中世の水田遺構と堰跡を検出しました。水田跡やそれに伴う灌漑施設の検出例の少ない南九州でこれらの遺構が確認できたことは、大きな成果でした。また同遺跡内の溝状遺構では弥生時代後期から古墳時代前期のものを中心にした多数の土器のほかに県内では出土例の少ない扉や大引といった大型の木製品が出土しました。

ここに報告する内容が学術面での資料や学校教育、生涯学習の場で多くの方々に活用されるとともに、今後の埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、現地での調査および報告書作成にあたって御協力いただいた多くの関係諸機関や地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　矢野　剛

例　　言

1．本書は、東九州自動車道（西都～清武）建設に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが行った町屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成９年１月14日から平成10年３月14日まで行った。

3．発掘調査にあたっては、宮崎市教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

4．現地での実測等の記録は、宮崎県埋蔵文化財センターの職員が行い、一部を業者に委託した。

5．空中写真は㈱スカイサーベイ、自然化学分析は㈱古環境研究所、木製品の保存処理は㈱吉田生物研究所、土壌調査は綾町有機農業開発センター有村玄洋氏に委託した。

6．本報告書では、日本道路公団作成の地形図と国土地理院発行の５万分の１の図を使用した。

7．土層断面及び土器等の色調は、『新版標準土色帖』に拠った。

8．本書で使用した方位は、磁北（M.N.）及び座標北（G.N.）である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海抜絶対高である。

9．本書の執筆は、第Ⅰ章、第Ⅱ章（B区・D区）、第Ⅲ章を崎田一郎、第Ⅱ章（A区・C区）を鳥原孝仙が行った。

10. 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影は、鳥原孝仙と崎田一郎が整理作業員の協力を得て行った。なお、遺物写真の一部は、奈良国立文化財研究所文部技官牛嶋茂氏に撮影していただいたものを使用した。

11. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

　　ＳＥ……溝状遺構　　ＳＯ……堰

12. 出土遺物及びその他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

町屋敷遺跡本文目次

第Ⅰ章　はじめに
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の組織 …… 1
　第3節　遺跡の位置と歴史的環境
　　1　遺跡の位置 …… 2
　　2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2
　第4節　調査の概要
　　1　調査の方法 …… 6
　　2　調査の経過 …… 7

第Ⅱ章　調査の成果
　第1節　古墳時代以前の遺構と遺物
　　1　発掘区の層序 …… 9
　　2　遺構の概要 …… 9
　　3　遺　構
　　(1)　旧河道（溝状遺構） …… 11
　　(2)　堰 …… 22
　　(3)　水　口 …… 31
　　(4)　水田跡・畦畔 …… 32
　　4　遺物
　　(1)　土　器 …… 34
　　(2)　木製品 …… 95
　　(3)　石　器 …… 111
　第2節　古代の遺構と遺物
　　1　遺　構
　　(1)　旧河道 …… 114
　　(2)　堰 …… 117
　　(3)　水田跡・畦畔 …… 122
　　2　遺物
　　(1)　土師器・須恵器 …… 124
　　(2)　木製品 …… 129
　第3節　中世以降の遺構と遺物
　　1　遺　構
　　(1)　旧河道 …… 133
　　(2)　水田跡 …… 133
　　2　遺　物 …… 140

第Ⅲ章　まとめ …… 142

第Ⅳ章　自然科学分析
　1　平成9年10月宮崎県、町屋敷遺跡B区におけるプラントオパール分析 …… 145
　2　平成10年3月宮崎県、町屋敷遺跡C・D区におけるプラント・オパール分析 …… 151
　3　平成10年10月宮崎県、町屋敷遺跡における自然科学分析 …… 166
　4　土壌分析 …… 173

挿 図 目 次

第 1図　遺跡位置図 …… 5
第 2図　町屋敷遺跡周辺地形図 …… 8
第 3図　町屋敷遺跡土層柱状図 …… 9
第 4図　町屋敷遺跡遺構分布図（古墳時代以前） …… 10
第 5図　A区土層断面図 …… 12
第 6図　A区SE1土層断面図 …… 13
第 7図　A区SE1杭列、槍状木器実測図 …… 13
第 8図　B区遺構分布図（古墳時代以前） …… 15
第 9図　B区北偶壁土層断面図 …… 16
第 10図　B区平面図 …… 16
第 11図　B西側壁土層断面図 …… 16
第 12図　B区平面図 …… 17～18
第 13図　B区溝状遺構1、2（SE1、SE2）土層断面図 …… 17～18
第 14図　D区溝状遺構検出状況図 …… 19
第 15図　D区平面図 …… 20
第 16図　D区東西中央トレンチ壁土層断面図 …… 20
第 17図　D区南北中央トレンチ壁土層断面図 …… 20
第 18図　B区堰跡1検出状況図 …… 23
第 19図　B区堰跡1、4、5（SO1、SO4、SO5）検出状況図 …… 25～26
第 20図　B区堰跡1（SO1）第1面平面実測図 …… 27～28
第 21図　B区堰跡1（SO1）第1面断面実測図 …… 27～28
第 22図　B区堰跡1（SO1）第2面平面実測図 …… 29
第 23図　B区堰跡1（SO1）第3面平面実測図 …… 30
第 24図　B区堰跡1（SO1）第3面断面実測図 …… 30
第 25図　B区北部検出水田平面実測図 …… 31
第 26図　B区水口断面図 …… 31
第 27図　B区溝状遺構2（SE2）平面実測図 …… 31
第 28図　B区検出遺構平面図 …… 32
第 29図　B区畦畔断面図 …… 32
第 30図　B区北部検出畦畔平面・断面実測図 …… 32
第 31図　B区南部検出畦畔平面、13水田断面実測図 …… 33
第 32図　A区出土土器(1) …… 36
第 33図　A区出土土器(2) …… 37
第 34図　A区出土土器(3) …… 38
第 35図　A区出土土器(4) …… 39
第 36図　A区出土土器(5) …… 40
第 37図　A区出土土器(6) …… 41
第 38図　A区出土土器(7) …… 42
第 39図　A区出土土器(8) …… 43
第 40図　A区出土土器(9) …… 44
第 41図　A区出土土器(10) …… 45
第 42図　A区出土土器(11) …… 46
第 43図　A区出土土器(12) …… 47
第 44図　B区溝状遺構1（SE1）出土土器(1) …… 58
第 45図　B区溝状遺構1（SE1）出土土器(2) …… 59
第 46図　B区溝状遺構1（SE1）出土土器(3) …… 60

第 47図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(4) …… 61
第 48図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(5) …… 62
第 49図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(6) …… 63
第 50図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(7) …… 64
第 51図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(8) …… 65
第 52図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(9) …… 66
第 53図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(10) …… 67
第 54図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(11) …… 68
第 55図　B区出土遺物水平分布図 …… 69～70
第 56図　B区出土遺物垂直分布図 …… 69～70
第 57図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(1) …… 72
第 58図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(2) …… 73
第 59図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(3) …… 74
第 60図　B区堰跡１、５（ＳＯ１、ＳＯ５）出土土器 …… 75
第 61図　B区複数遺構出土土器(1) …… 76
第 62図　B区複数遺構出土土器(2) …… 77
第 63図　B区複数遺構出土土器(3) …… 78
第 64図　B区遺物出土位置図 …… 79
第 65図　C区出土土器(1) …… 87
第 66図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(1) …… 90
第 67図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(2) …… 91
第 68図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(3) …… 92
第 69図　D区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(1) …… 92
第 70図　D区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(2) …… 93
第 71図　D区複数遺構出土土器 …… 93
第 72図　A区出土木製品(1) …… 96
第 73図　A区出土木製品(2) …… 97
第 74図　A区・D区出土木製品 …… 99～100
第 75図　B区木製品出土位置図 …… 101
第 76図　B区出土木製品(1) …… 103
第 77図　B区出土木製品(2) …… 104
第 78図　B区出土木製品(3) …… 105
第 79図　B区出土木製品(4) …… 106
第 80図　B区出土木製品(5) …… 107
第 81図　B区出土木製品(6) …… 108
第 82図　B区出土木製品(7) …… 109
第 83図　A区出土石器 …… 112
第 84図　B区出土石器 …… 113
第 85図　遺構分布図（古代） …… 115
第 86図　A区平面図 …… 116
第 87図　A区ＳＥ７支流土層断面図 …… 116
第 88図　A区ＳＥ１、ＳＥ７土層断面図（ＳＯ２部分） …… 118
第 89図　A区ＳＥ３土層断面図（ＳＯ２上流１ｍ部分） …… 118
第 90図　A区ＳＯ２実測図 …… 118
第 91図　A区ＳＥ１、ＳＥ７土層断面図 …… 119
第 92図　A区ＳＯ３実測図 …… 119
第 93図　B区堰跡４、５（ＳＯ４、ＳＯ５）検出状況図 …… 120
第 94図　B区堰跡４、５（ＳＯ４、ＳＯ５）平面実測図 …… 121

第 95図　B区堰跡４、５（ＳＯ４、ＳＯ５）断面見透し図 ……121
第 96図　D区検出畦畔平面実測図(1) ……123
第 97図　D区畦畔断面図(1) ……123
第 98図　A区、B区出土土器（古代） ……124
第 99図　C区出土土器（古代） ……126
第100図　D区出土土器（古代） ……127
第101図　D地区遺物出土位置図 ……127
第102図　A区出土木製品(3) ……130
第103図　A区出土木製品(4) ……131
第104図　A区出土木製品(5) ……132
第105図　遺構分布図（中世） ……134
第106図　C区平面図 ……135
第107図　C区土層断面図 ……135
第108図　C区水田跡平面図 ……136
第109図　C区ＳＥ10土層断面図 ……136
第110図　C区水田跡畦畔断面図 ……136
第111図　C区遺物出土位置図 ……137
第112図　D区検出畦畔平面実測図(2) ……139
第113図　D区畦畔断面図(2) ……139
第114図　B区、D区出土遺物 ……140

表　目　次

第１表　A区北壁、西壁土層断面注記表 …… 12
第２表　B区基本層序注記表 …… 16
第３表　B区溝状遺構土層断面注記表 …… 16
第４表　B区溝状遺構１、２土層断面注記表 …… 17～18
第５表　D区基本層序注記表 …… 21
第６表　D区溝状遺構土層断面注記表 …… 21
第７表　B区堰跡１第３面土層断面注記表 …… 30
第８表　B区水口土層断面注記表 …… 31
第９表　A区出土土器観察表（古墳時代以前） …… 48～54
第10表　B区出土土器観察表（古墳時代以前） …… 80～86
第11表　C区出土土器観察表（古墳時代以前） …… 88
第12表　D区出土遺物観察表（古墳時代以前） …… 94～95
第13表　B区、D区出土木製品観察表 ……110
第14表　出土石器観察表 ……111
第15表　B区堰跡４、５（ＳＯ４、ＳＯ５）土層断面注記表 ……121
第16表　A区、B区出土土器観察表（古代） ……125
第17表　D区出土土器観察表（古代） ……125
第18表　C区出土土器観察表（古代） ……128
第19表　C区基本層序注記表 ……135
第20表　B区出土遺物観察表（中世） ……141
第21表　C区出土遺物観察表（中世） ……141

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

東九州自動車道（北九州～加治木間、約436km）の西都・清武間は、平成3年12月3日の国土開発幹線自動車道建設審議会（国幹審）で整備計画区間に策定され、平成5年11月19日に建設大臣の施工命令が発令された。

その後、宮崎県教育委員会は、路線内の分布調査を行い、総延長27.5kmの区間に33遺跡約42万㎡の遺跡対象地を設定した。発掘調査は、平成7年度から清武工事区で開始し、平成8年度には、宮崎～西都間も始まった。

町屋敷遺跡の確認調査は、平成8年12月4日から平成9年1月9日にかけて行われた。調査対象面積が32,600㎡と広い範囲にわたっていたため、調査区内の水田区画ごとにトレンチを設定する方法をとった。その結果、市道糸原・金崎線と内の丸川に挟まれた調査区のトレンチから人為的に造られた溝が検出され、その中から弥生時代後期から古墳時代前期の土器片、土師器片、杭列が出土した。その後、溝を確認したトレンチ内の土と杭のプラント・オパール分析と放射性炭素年代測定を行ったところ、前者では現表土から高原スコリアより下位の褐色土にかけて高い値でイネが検出され、後者ではＡＤ450～600年間のものという分析結果が得られた。

これらをうけて、日本道路公団と宮崎県埋蔵文化財センターとの間で協議が行われ、本調査を実施することになった。発掘調査は、宮崎県埋蔵文化財センターが平成9年1月14日から平成10年3月14日にわたって行った。

第2節　調査の組織

町屋敷遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

教育長	田原　直廣（平成8年度）
	岩切　重厚（平成9年度）
	笹山　竹義（平成10年度～）
文化課長	江崎　富治（平成8年度）
	仲田　俊彦（平成9～11年度）
	黒岩　雅博（平成12年度）
埋蔵文化財係長	面高　哲郎（平成8年度）
	北郷　泰道（平成9～11年度）
	石川　悦雄（平成12年度）
主　査（調整担当）	永友　良典（平成8年度）
主　査（　〃　）	柳田　宏一（平成9年度）
主任主事（　〃　）	重山　郁子（平成10・11年度）
主任主事（　〃　）	飯田　博之（平成12年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長	藤本　健一（平成８・９年度）
	田中　　守（平成10・11年度）
	矢野　　剛（平成12年度）
副参事	木幡　文夫（平成８年度）
副所長	岩永　哲夫（平成８～９・12年度）
	江口　京子（平成11年度）
	菊地　茂仁（平成12年度）
調査第一課長	面高　哲郎（平成12年度）
調査第一係長	岩永　哲夫（平成８年度兼務）
	面高　哲郎（平成９～11年度）
主　事（調整担当）	飯田　博之（平成８年度）
主　査（　〃　）	菅付　和樹（平成９～11年度）
主　査（調査担当）	鳥原　孝仙（平成８～11年度）
主任主事（　〃　）	崎田　一郎（平成８～11年度）
主　査（編集担当）	鳥原　孝仙（平成12年度）
主　査（　〃　）	崎田　一郎（平成12年度）

第３節　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

町屋敷遺跡は、宮崎平野の南西部に位置し、宮崎市大字糸原字池ノ内に所在する。

糸原地区は、大淀川本流と支流の本庄川に挟まれた三角形状の地域で、大部分が沖積平野である。このため本遺跡も大淀川の西岸から約600m離れた標高約９m～11mの低地に位置している。地区の中央部には、高岡町西部に続く標高約50～70mほどの隆起洪積台地の稜線が見られ、一部に洪積層特有の礫層も存在する。これらの稜線は、標高のわりには急峻で、溜め池を造りやすい小さな山ひだを多く形成している。このため本遺跡の周辺には、多くの農業用の溜め池が点在している。また、遺跡の南側には高岡町南ケ峰から有田橋方面に向かって同地区を横断する内の丸川が流れている。

この地域の地質は、主に台地上の畑作地域が黒色の火山灰質土壌、平野部の水田地帯が黒褐色の粘土質土壌でおおむね肥沃な土壌といえる。これに先に述べた農業用水を得やすい地理的条件を加味すると本遺跡の周辺が稲作中心とした農耕に適した地域であったことが推測できる。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

縄文時代

近年の発掘の成果によって、この時代に関する新たな発見が続いている。本遺跡の周辺では、熱ルミネッセンス分析で約9000～１万年前という測定値を出した集石遺構を検出した草創期の堂地西遺跡

(宮崎市大字熊野)。早期から前期にかけての「縄文海進」の裏付けとなる跡江貝塚と柏田貝塚(宮崎市瓜生野)。後期後半から晩期前半の67軒の住居跡を確認した平畑遺跡(宮崎市大字熊野)等がある。また、東九州自動車道関係では、300基を越える炉穴を確認した別府原・西ケ迫遺跡(佐土原町)や100基近い集石遺構が検出された白ケ野遺跡(清武町大字船引)等が注目された。

弥生時代

この時代の特色として、稲作の全国的な伝播。磨製石器、金属器、紡織の普及。弥生土器の使用等があげられる。特に稲作については、佐土原町の伊賀給遺跡や都城市の跡穴遺跡でこの時代のものと推察される遺構が検出されるなど徐々に当時の生活文化を明らかにする成果が現れてきている。本遺跡の周辺では、9基の積石墓と3基の小児用甕棺墓を確認し、前期の集団墓地とされる檜遺跡や中期後半の土器編年を埋める資料を得た前原北遺跡(宮崎市大字熊野)。大型方形の花弁状周仕切り住居が検出された堂地東遺跡(宮崎市大字熊野)等が注目された。東九州自動車道関係では、塚原遺跡(国富町)、倉岡遺跡(宮崎市大字金崎)でこの時代の遺物、遺構が確認されている。

古墳時代

宮崎市周辺は、県内でも古墳の多い地域で、町屋敷遺跡周辺にも生目古墳群、野首古墳、倉岡古墳群、糸原古墳、浮田横穴墓群、跡江横穴墓群、下北方古墳群等がある。本遺跡の北側に位置する倉岡古墳群は、前方後円墳1基、円墳3基、横穴墓5基で構成されている。

東九州自動車道関係のものでは、木脇遺跡、松元遺跡(国富町)、倉岡遺跡、迫内遺跡(宮崎市大字富吉)、内宮田遺跡(宮崎市大字長嶺)、白ケ野遺跡がこの時代にあたり、木脇遺跡では大規模な集落跡が確認され注目された。また、生産遺跡では、内宮田遺跡で検出された水田跡がこの時代に位置する。

古　代

この頃日向の国には、5郡(臼杵・児湯・那珂・宮崎・諸県)と26郷が設けられ、8院(土持・飫肥・新納・櫛間・穆佐・水俣・眞幸・救仁)がおかれた。町屋敷遺跡周辺の糸原・瓜生野・倉岡地区はいずれも諸県郡に属していた。

「八幡宇佐宮御封田神領大鏡」(宇佐大鏡)によると天平年間(729～748年)に日向の臼杵、児湯、宮崎に御封田がおかれ、瓜生野別府起請定田50町と記されている。また、天平9年(737年)には、瓜生野八幡(現瓜生野神社)が建てられている。

その後、墾田の私有地化が進んでくると県内にも多くの荘園が形成された(「建久図田帳」┤1197年┤には、日向国の全耕地面積の8,064町歩中、荘園8,039┤99.69%┤、公田25町歩┤0.31%┤と記されている)。本遺跡の周辺地区は、下北方・南方が宮崎庄、瓜生野が瓜生野別府、金崎が諸県庄、糸原が島津庄穆佐院に属していた。

この時代の遺跡の発掘調査でも近年注目される成果が上がってきている。集落遺跡では、木脇遺跡

で竈と布目圧痕の土器片を伴う住居跡が検出された。生産遺跡では、内宮田遺跡、友尻遺跡（宮崎市大字富吉）で一区画が約７ｍ×７ｍからなる水田跡が検出された。

中　世

鎌倉時代、本遺跡の周辺地域は、島津氏（糸原）、伊東氏（金崎）、横山氏（瓜生野）、中原氏（上北方）の４氏によって治められていた。南北朝時代になると始め南朝方の伊東祐広、図師随円、瓜生野氏らがここを支配していたが、北朝方の伊東祐持、土持宣栄らがこれを滅ぼし、以後60年にわたって瓜生野を土持氏、糸原を伊東祐持と赤橋氏が支配することとなる。

今川貞世（了俊）が九州探題を務めた建徳２年（1371）から応永２年（1395）の間、日向国は、一時の小康を得るが、貞世が解任されると伊東氏と島津氏の対立による戦国時代を迎える。

1396年、島津元久は日向に侵攻し、翌年には大淀川流域の穆佐城（高岡町）、倉岡城（宮崎市大字糸原）等の重要拠点を手中にした。しかし、1446年再び伊東氏がこれらを奪取し、以後130余年にわたってこの地を支配した。1568年、日向国のほぼ全域を支配下においた伊東義祐は、伊東四十八城と呼ばれる全盛期を迎える。この頃、大淀川の戦略的な要衝の地となっていた倉岡城には、野村隠岐守が城主として入城している。

1572年の木崎原の合戦で伊東氏が島津氏に大敗すると伊東氏の力は急速に衰え、1577年には、豊後へと落ちていった。その後、倉岡城を中心としたこの地域は、再び島津氏の支配するところとなる。そしてこれは、豊臣秀吉の日向分断政策によって瓜生野を延岡領、金崎を秋月領、糸原を島津領に分割されるまで続くことになる。

東九州自動車道関係では、平田迫遺跡（佐土原町）で配石遺構や蔵骨器が出土し、掘切を供えた見張り台跡が確認された。本城跡（宮崎市古城町）は、防御用の土塁や曲輪、掘切を巡らした東西２つの城からなる山城で、土坑、柱穴群、溝状遺構等が検出され、多数の土師皿が出土した。また、迫内遺跡の五輪塔群もこの時代のものとされている。生産遺構では、塚原遺跡で検出された。水田跡がこの時代のものとみられている。

参考文献

「余り田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘報告書第１集』　宮崎県教育委員会　1997
「前田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘報告書第９集』　宮崎県教育委員会　1998
『宮崎県史資料編考古１』　宮崎県史刊行会　1989
『宮崎県史資料編考古２』　宮崎県史刊行会　1988
『宮崎県史通史編原始・古代１』　宮崎県史刊行会　1997
『宮崎県史通史編古代２』　宮崎県史刊行会　1998
『倉岡瓜生野郷土誌』　村尾季俊　1986
『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』　宮崎県史刊行会　1997
『宮崎県の歴史』　坂上康俊　長津宗重　福島金治　大賀郁夫　西川　誠　1999

町屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡

1 町屋敷遺跡	2 跡江貝塚	3 生目古墳群	4 跡江横穴墓群	5 浮田横穴墓群
6 糸原古墳	7 倉岡古墳	8 木脇城跡	9 倉岡城跡	10 穆佐城跡
11 松元遺跡	12 井手口遺跡	13 木脇遺跡	14 塚原遺跡	15 中別府遺跡
16 倉岡遺跡	17 迫内遺跡	18 友尻遺跡		

第1図　遺跡位置図

第4節　調査の概要

1　調査の方法

調査対象面積は、32,600㎡と広範囲にわたっていた。その後、対象地の水田区画ごとにトレンチを入れて確認調査を行ったところ、対象地の南端（市道糸原・金崎線と内の丸川の間）のトレンチから溝状遺構が確認され、そこから多数の弥生時代後期～古墳時代前期の土器片と杭列が検出された。また、各トレンチ内の土壌のプラントオパール分析を行った結果、内の丸川以北の4つの水田区画で水田跡の存在が考えられたので、この4区画で本調査を行うこととなった。なお調査区は調査開始時期の順にA、B、C、Dとした。

調査区には始め周溝を掘った。これは調査区の土層観察と排水のためで、特に四隅の部分は一段深くして水中ポンプを設置して調査区を水没させないように努めた。（A区は多量の湧水が予測されたため、矢板を打って調査を行った。）水田跡の調査の場合、畦畔は土層断面で確認できなくても平面を精査することで検出できる場合がある。町屋敷遺跡では作業員に一列に整列してもらい、よく砥いだ片手ネジリガマで粘土層を薄く削ってもらった。この時下の粘土層にわずかな高まりの畦畔があれば、上層の粘土とは異なる色調の部分が帯状に現れてくる。これに水田区画を想定しながら釘等でラインを入れて畦畔を認定していった。本遺跡の粘土は、粘性が強く乾燥すると硬化し精査ができなくなるものであったので、これらの作業が円滑に行えるよう調査区をブルーシートで覆って粘土が絶えず湿気を帯びる状態にした。

平面図は遺構については、1／50、土層断面図は1／20で作成した。この他、必要に応じて1／10、1／5、1／2の縮尺で遺構部分図や遺物出土状況図を作成した。また、A区で出土した堰跡は写真実測を行った。

遺構の写真撮影は基本的に35㎜カメラで白黒、リバーサル、カラーの3種類のフィルムを使用し、一部で6×7版カメラでの撮影を行った。各調査区の遺構全景は、ローリングタワーやラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

遺物は原則として出土レベルと位置を記録することとした。溝状遺構の遺物は遺構の上位で出土したものは、その地点の層を記録するようにしたが、底の面で出土したものは一部を除いて溝状遺構の所属として報告した。

町屋敷遺跡では、溝状遺構内から杭を中心として多くの木製品が出土した。出土当初は、それまで空気から遮断されていたため非常に良好な状態だったが、乾燥によって短時間の間に劣化していった。そこで実測中は、シートや水を含ませた布等をかぶせて湿気を保ち、実測後は直ちにビニール袋等に包んで事務所の水槽に保管した。また網代や樹皮のような脆弱な遺物は、発砲ウレタンでパックして取り上げるようにした。

2　調査の経過

町屋敷遺跡では1年2ヶ月にわたって発掘調査が行われた。調査は各調査区同時進行ではなく、用地買収と高速道路工事の行程の関係から平成9年1月14日からA区のみが先行して行われ、その後B、C、Dの順に調査が実施されていった。以下、簡単に調査の課程をまとめてみた。

平成9年1月。14日からA区の調査開始。調査期間が2ヶ月半という短期間であったため第Ⅴ層までを重機で除去し、溝状遺構の検出と溝内の遺物の取り上げを目標に調査を開始した。

2月。溝状遺構の検出がほぼ終了。試掘の際に出土した杭は、年代測定で古墳時代前期遺構のものとの結果が得られた。

3月。溝状遺構内の粘土を重機で掘り上げた。溝の最下層からは多量の土器の他に木器（扉状、臼状）や石器も出土した。なお、杭列は細かい調査が必要なため前後2mほどの幅を残しておいた。その後、溝状遺構の平板実測を行った。

4月。A区は溝状遺構内の杭列の検出後、杭列の出土状況図と土層断面図の作成を行った。月末からはB区の調査も始まり、調査区外周に側溝が掘られた。この側溝を使って調査区内の土層を確認し、表土の除去作業を開始した。

5月。A区では、4月と同じ作業が引き続き行われた。B区にはグリッド杭が設置され、側溝の土層断面図の作成も始まった。また、21日からはC区の表土の除去作業が開始された。

6～8月。A区では溝状遺構の支流を検出し、平板実測を行った。また本流部の遺物の取り上げと底部の流木の実測も行った。B区では、第Ⅲ層下面での畦畔検出作業と近世の溝状遺構の堀り上げを行った。C区では表土除去の後、側溝の造成を行った。

9月。A区の調査区西部の溝状遺構内から新たに堰跡が検出され、そこにも水留め用の樹皮が確認された。B区では引き続き第Ⅲ層下面の畦畔検出作業を行いつつ、古墳時代の溝状遺構の検出を行った。C区ではグリッドが設定され、第Ⅱ層下面での畦畔検出作業が開始された。

10月。A区の調査が終了。B区では、主に第Ⅳ層下面での畦畔検出作業が行われた。そしてこれと並行して近世の溝状遺構内の遺物の取り上げ、古墳時代の溝状遺構の土層断面図の作成、水口の検出の作業が行われた。C区は、先月の作業を引き続き行った。

11月。B区では、第Ⅳ層下面で検出した畦畔と古墳時代の溝状遺構の平板実測を行った。また、溝状遺構の底部から新たに堰跡が見つかり、この検出作業も始まった。C区でも第Ⅱ層下面で検出した畦畔の実測を行った。

12月。D区の調査が始まり表土除去の後、側溝を造成した。B区では古墳時代の溝状遺構内の遺物の取り上げと堰跡の検出。C区では第Ⅱ層下面での畦畔検出が引き続き行われた。

平成10年1月。B区は検出した堰跡の実測を行った。湧水などで足場が不安定な場所であったため、作業は困難を極めた。C、D区では、第Ⅱ層下面で検出された畦畔の実測と古墳時代の溝状遺構内の遺物の取り上げと土層断面図の作成が行われた。

2～3月。工期に追われる中、D区では第Ⅲ層下面で検出した畦畔の実測と古墳時代の溝状遺構の堀り上げ、遺構内の遺物の取り上げを行った。B区では堰跡の実測。C区ではトレンチによる古墳時

代の溝状遺構のルートの確認と土層断面図の作成が行われた。駆け足の作業であったが、期日までに調査を終了することができた。

現地調査の終了後、埋蔵文化財センター国富分室と佐土原新館において室内整理作業が行われた。整理作業では写真、図面の整理、土器の洗浄、注記、接合、実測の他木製品の一部は、高級アルコール含浸法による保存処理を施した。その後、報告書の刊行に向けて遺物、遺構のトレースを進めていった。

第２図　町屋敷遺跡周辺地形図（Ｓ＝１／8,000）

第Ⅱ章　調査の成果

第1節　古墳時代以前の遺構と遺物

1　発掘区の層序

町屋敷遺跡は、水田耕作と周辺河川の増水等の影響によって、各調査区ごとに若干層所に変化が見られるが、基本的には6層に分けられる。

第Ⅰ層は、現耕作土で現代の水田に用いられている層である。

第Ⅱ層は黒褐色粘土層で層の下面に赤褐色の軽石（高原スコリア）が堆積している。

第Ⅲ層は黒褐色粘土層である。第Ⅱ層と第Ⅲ層との境界は、B区では、ほぼ水平であるが、D区では、過去の水田耕作による5～20cmほどの巻き上げによって複雑な境界を作っている。

第Ⅳ層は灰色シルト層で、B区では層の下位に灰白色粘土が水平の筋状に入っていたことから、第Ⅳ－1層と第Ⅳ－2層の2つに分けた。

第Ⅴ層は堆積の際、水の影響を強く受けたラミナ層で植物遺体や炭化物が多く含まれている。

第Ⅵ層は水の影響で再堆積したシラスである。

第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて酸化鉄の斑紋やマンガン結核が確認されていることから、水田による稲作が継続的に行われていたことが考えられる。

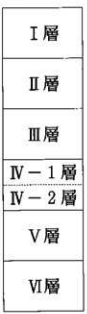
2　遺構の概要

A～Dの4調査区すべてで旧河道と思われる溝状遺構を確認した。溝状遺構は各調査区を複雑なルートをとりながら流れており、これらの最下層から弥生後期後半～古墳前期を中心とした時期の土器や石器、木器等が出土したほか、堰跡が検出された。

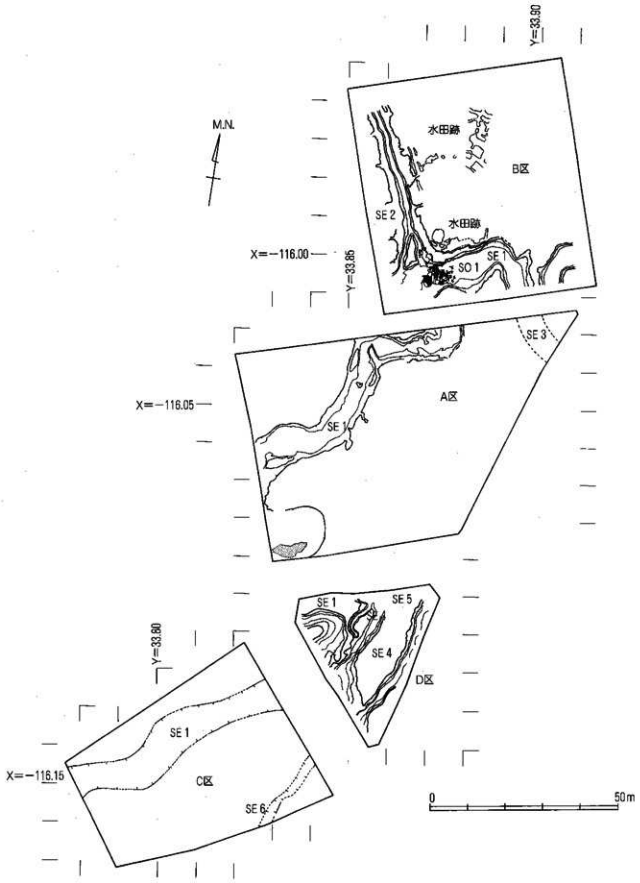
堰跡は、B区の南西側の溝状遺構内で9m×9mの範囲にわたって押し倒された状態で検出された。多数の杭を用いて築かれており、保水性を高めるために杭の前面に樹皮を張った形跡もみられた。

古墳時代の水田は、B区において第Ⅳ層と第Ⅴ層の境界を精査して検出した。面積が狭く、形状は、ほぼ長方形であるが区画は、まちまちで一律ではない。水田に水を取り入れる水口は、B区の南北に流れる溝状遺構と水田跡で数カ所確認した。

以上が町屋敷遺跡の古墳時代の遺構の概要である。以下これらの詳細と問題点等について述べていくことにする。



第3図　町屋敷遺跡土層柱状図



第4図　町屋敷遺跡　遺構分布図（古墳時代以前）　（S＝1／1,000）

3 遺 構

(1) 旧河道（溝状遺構）

① A区

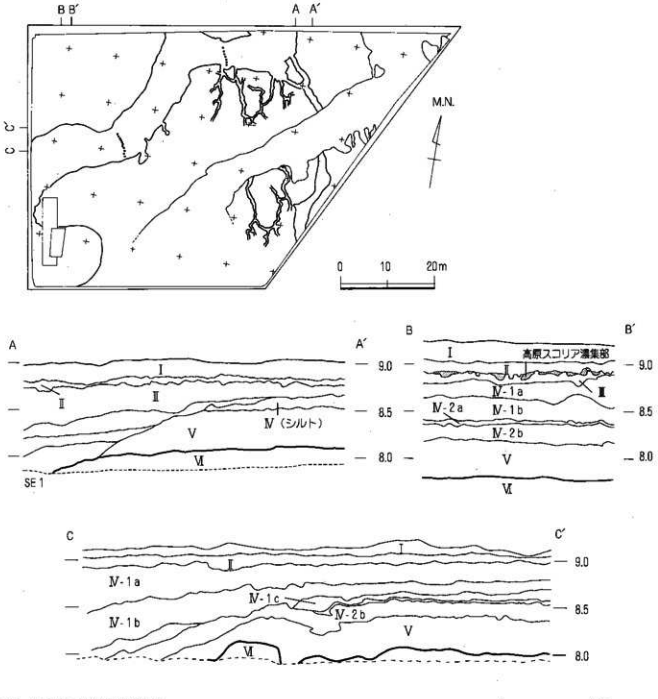
A区では、旧河道の本流と見られる幅約9～10mの溝状遺構（ＳＥ１）が確認された。

ＳＥ１は、調査区の南西で屈曲し、西壁に抜けるように流路を取りながら北東へ向かい、緩やかに蛇行しながら北壁に接し、さらには大きく屈曲して調査区Ｂかの続きと思われるＳＥ１の落ち込みを、北かべ東壁へ抜ける状態で確認した。

調査区の土層を観察すると、東壁・南壁はⅤ層が層を成してきれいに堆積しているが、西壁・北壁は北西にいくにしたがってグライ化が激しくなり上層の粘土の堆積も厚い。シラス面のレベルが傾斜していることから水の溜りやすい湿地的な環境であったと思われる。ＳＥ１の低面のレベルを観察すると、西から東へ傾斜していることから水はこの方向で流れていたと思われる。

ＳＥ１の埋土は、厚い粘土とシルト・砂質土から構成されており、最下層の砂質土は植物遺体や炭化物・流木を多量に含み、縄文から古墳前期の土器・石器・木器が出土した。また、南西壁際に接する屈曲部では、中央部底面レベルが7.3mでほぼ平坦になっており、東から南の壁際に向けて若干傾斜し、南の壁際は湧水が多く一日経つと水が溜まる状況であった。屈曲部底部に手のひらにのるくらいの石が敷き詰めてあるような場所が確認された。

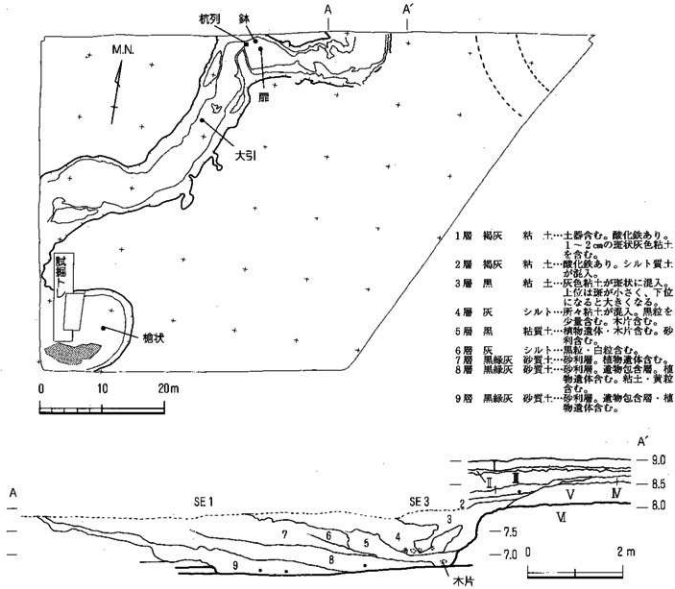
ＳＥ１のほぼ全域で流木等木片の出土があったが、この屈曲部はＡ区の中で一番集中していた。多数の木材も出土し、なかにはきれいに加工してある柱のようなものや杭の先端部・槍のような細くて鋭利な先端部をもつものも出土した。また、杭が打ち込まれた跡もあり、木材が流れないようにしてあるとも考えられ、木材の水つけ場の可能性もある。また、北壁際の溝底部には、10cm前後の径をもつ長さ50～70cmの細い杭が、底面に届く深さで８本打ち込まれている杭列を確認した。打ち込んだレベルおよび層は不明だが、この杭列の付近から鉢・扉などの木製品が出土している。



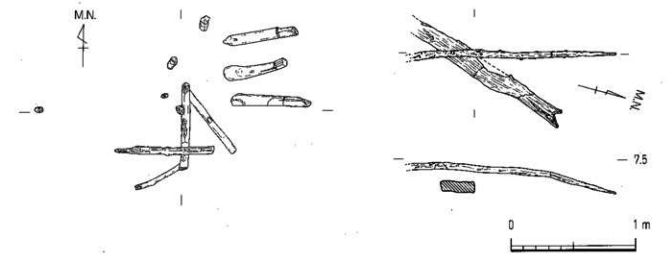
第1表　A区北壁・西壁土層断面注記表

層序		土色	土質	酸化鉄	混入物	備考
Ⅰ		黒褐色（10YR3／2）	粘土			現耕作土
Ⅱ		黒褐色（10YR3／1）	粘土		高原スコリア・マンガン粒	
Ⅲ		黒色（10YR2／1）	粘土	管状	マンガン粒・黒粒	
Ⅳ	1a	黒褐色（10YR3／1）	粘土	管状・雲状	マンガン粒	酸化鉄多い
	1b	黒色（7.5YR3／2）	粘土	管状・雲状	マンガン粒・黒粒・白粒	C－C′は酸化鉄多い
	1c	黒褐色（10YR3／1）	粘土	管状・雲状	マンガン粒	酸化鉄多い
	2a	黒色（7.5YR2／1）	粘質土	管状	マンガン粒・灰白色粒土・黒粒	
	2b	黒色（2.5Y2／1）	粘質土	管状	マンガン粒・黒粒・白粒	
Ⅴ		褐灰色（7.5YR4／1） 黄灰色（7.5Y5／1） 黄褐色（7.5Y5／3） 暗褐色（10YR3／3）	粘質土 混炭土	B－B′は管状あり	黒粒・シラス	ラミナ層 A－A′43層成層 B－B′25層グライ化 C－C′30層ややグライ化
Ⅵ		灰色（10Y6／1）	細礫土		砂	二次堆積シラス

第5図　遺跡A区　土層断面図　（S＝1／40）



第6図　A区　ＳＥ１　土層断面図　（Ｓ＝１／80）



第7図　遺跡　A区　ＳＥ１　杭列、槍状木器実測図　（Ｓ＝１／30）

② B区

B区では、旧河道の本流とみられる幅約6～10mのもの（ＳＥ１）と幅約４～７ｍでＳＥ１の支流とみられる（ＳＥ２）溝状遺構が確認された。

ＳＥ１は、調査区北部の西側の壁から東へ向かってのび、調査区中央部で南側の壁に抜け、その後再び調査区の南東部に弧を描くような形で検出された。ＳＥ１内で検出された堰跡の杭が西から東の方向へ押し倒される形で出土したことから、水は西から東に向かって流れていたと思われる。流路の上部は、黒色粘土が覆い、中位には灰色のシルトと砂質土が厚く堆積している。最下層は植物遺体や炭化物、流木、砂などを多量に含んだ暗青灰色の砂質土でこの層から弥生中期から古墳前期の土器が大量に出土した。

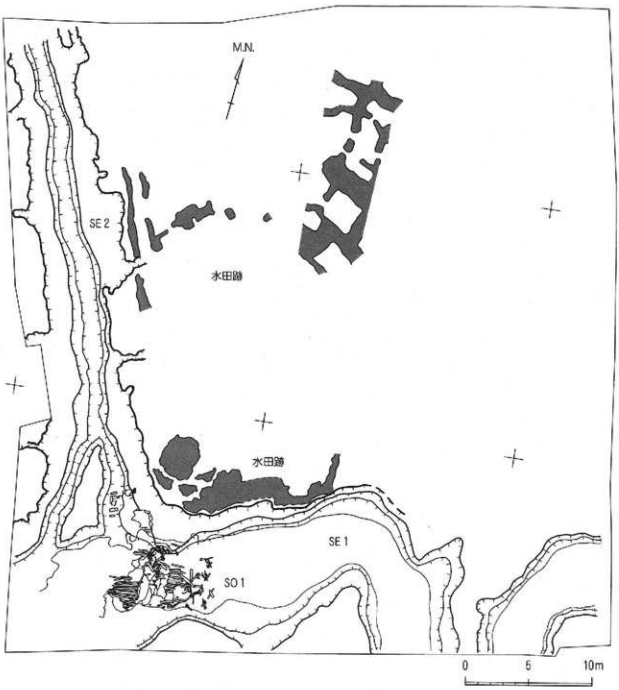
ＳＥ２は、調査区の西側を北から南に向かってのび、ＳＥ１の合流部手前で２本に分かれる。このＳＥ２の西側に２カ所東側に３カ所の水口が確認されていることから、これが水田耕作用の水路として利用されていたことが考えられる。遺構の土層をみると北側の上部は、黒色粘土に覆われており、中位に黒色砂質土、最下層に黒色粘土を含んだ黒色砂質土が堆積している。ＳＥ２もＳＥ１と同様最下層から弥生中期から古墳前期にかけての土器が大量に出土している。

ＳＥ２はＳＥ１との合流部手前で２つに分かれており、東側はＳＥ１にまたがって築かれた堰跡１（ＳＯ１）の一部になっている。東側と西側とでは土壌の堆積の仕方も異なる。西側はＳＥ１北側と同じように黒色の粘土や砂質土が堆積しているが、東側は灰色の粘土、砂質土と暗灰色の粘土が堆積している。土層の切り合いを見てみると西側の溝が東側の溝の層を切っている部分があることから、西側の方が新しいと思われる。遺物は、最下層から同時期のものが出土したが、その量は、溝の他の部分と比べると少ない。

③ C区

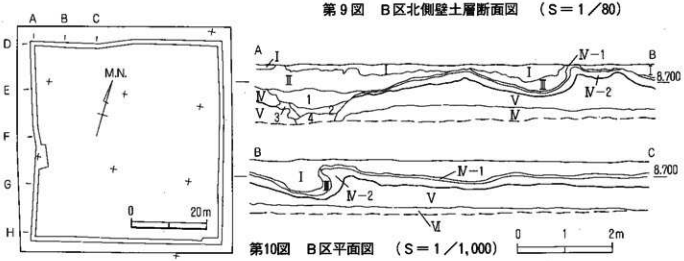
C区では、トレンチ調査の結果、旧河道の本流と見られる幅約９ｍの溝状遺構（ＳＥ１）と調査区Ｄに続くと思われる幅約３ｍの溝状遺構６（ＳＥ６）を確認した。

ＳＥ６は、調査区の西壁から緩やかに蛇行しながら東壁へ抜けている。ＳＥ６は南壁から東壁へ抜ける状態で流路を取っている。底面のレベルを観察するとＳＥ１はほぼ同じレベルで推移し、ＳＥ６は西から東へ傾斜しているようである。埋土はともに粘土とシルト・砂質土から構成されており、植物遺体や炭化物・流木を含み、弥生から古墳の土器が出土した。



第8図　B区　遺構分布図（古墳時代以前）　（S＝1：300）

第９図　Ｂ区北側壁土層断面図　（Ｓ＝１／80）



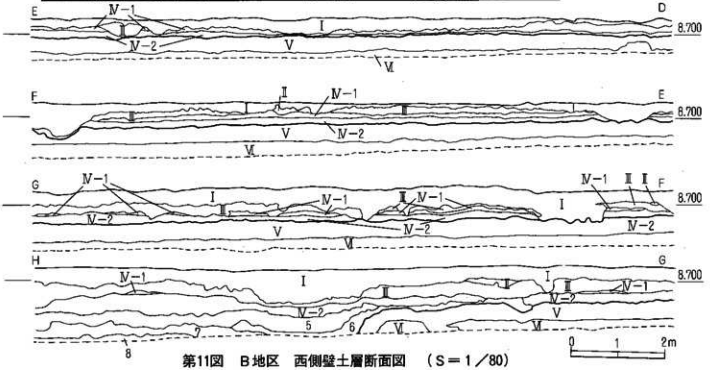
第10図　Ｂ区平面図　（Ｓ＝１／1,000）

第２表　Ｂ区基本層序注記表

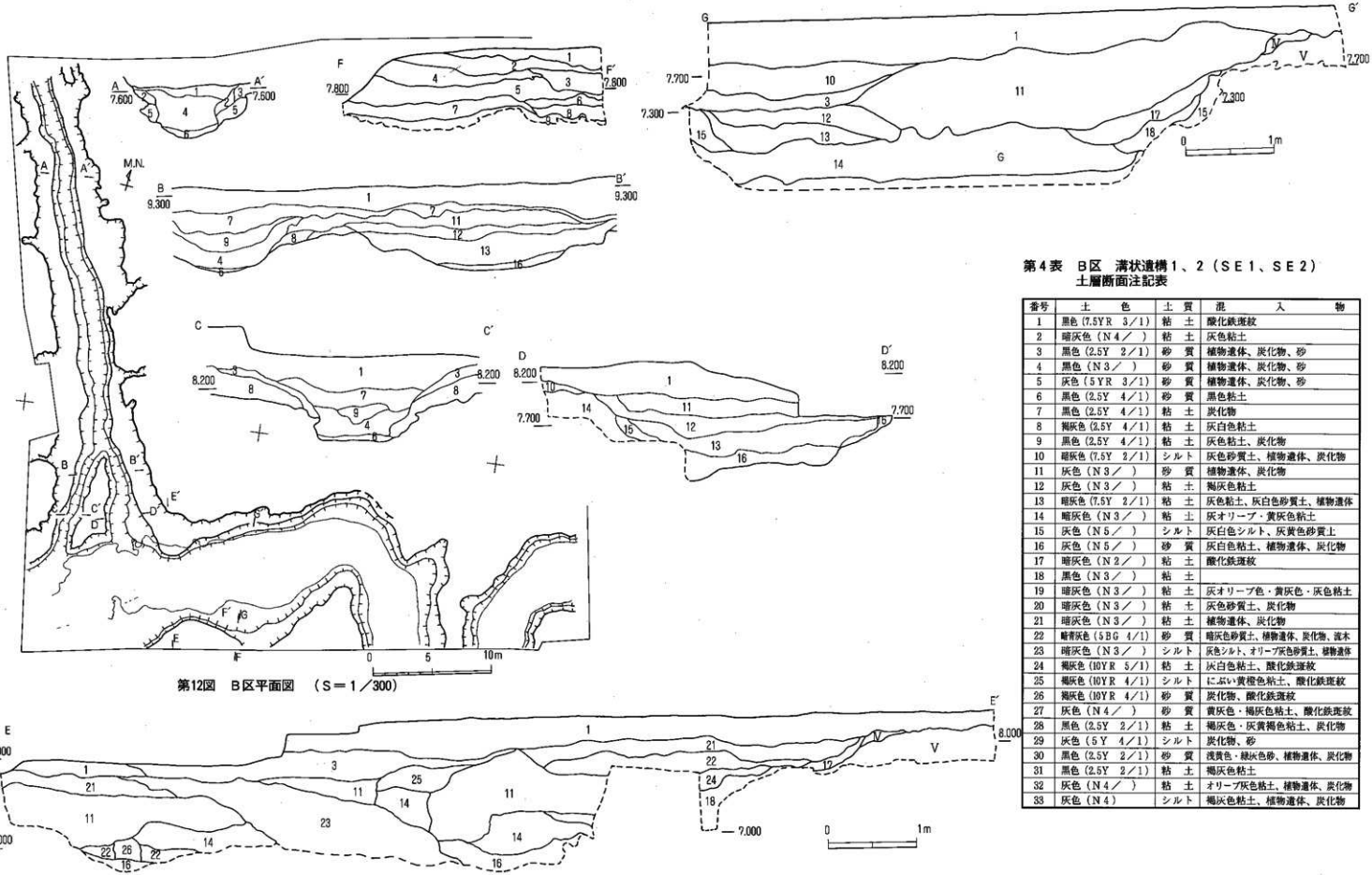
順　序	土　　色	土　質	酸化鉄	混　　入　　物	備　　考
Ⅰ				高原スコリア、砂岩片	現耕作土
Ⅱ	黒褐色（10YR　3／1）	粘　土	点状、雲状	高原スコリア、マンガン核	
Ⅲ	黒褐色（10YR　3／1）	粘　土	点状、雲状	マンガン核	
Ⅳ－1	灰　色（5YR　5／1）	シルト	点状、雲状	マンガン核	
Ⅳ－2	灰　色（5YR　5／1）	シルト	点状、雲状	灰白色粘土、マンガン核	
Ⅴ	灰　色（7.5Y　5／1）（5Y　4／1）		点状、雲状	植物遺体、炭化物	ラミナ層
Ⅵ	灰　色（10Y　6／1）	細礫土		砂	二次堆積シラス

第３表　Ｂ区構状遺構土層断面注記表

順　序	土　　色	土　質	酸化鉄	混　　入　　物
1	黒色（2.5YR　2／1）	粘　土	点状、雲状	
2	黒色（2.5YR　2／1）	粘　土		炭化物
3	灰色（N　4／　）	粘　土		黒色粘土
4	黒色（2.5YR　2／1）	粘　土		灰白色粘土、炭化物
5	黒色（2.5YR　2／1）	粘　土	点状、雲状	
6	黒色（2.5YR　2／1）	粘　土		褐灰色粘土
7	黒色（2.5YR　2／1）	砂　質		植物遺体
8	黒色（2.5YR　2／1）	砂　質		灰色砂、植物遺体



第11図　Ｂ地区　西側壁土層断面図　（Ｓ＝１／80）



第12図　B区平面図　（S＝1／300）

第13図　B区　溝状遺構1・2、（SE1、SE2）土層断面図　（S＝1／40）

第4表　B区　溝状遺構1、2（SE1、SE2）
土層断面注記表

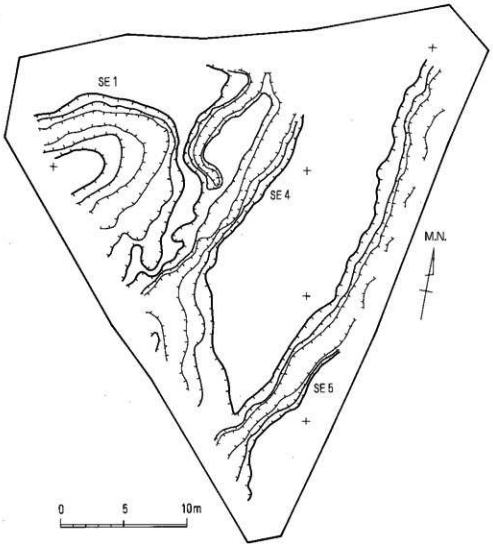
番号	土色	土質	混入物
1	黒色（7.5YR 3／1）	粘土	酸化鉄斑紋
2	暗灰色（N 4／ ）	粘土	灰色粘土
3	黒色（2.5Y 2／1）	砂質	植物遺体、炭化物、砂
4	黒色（N 3／ ）	砂質	植物遺体、炭化物、砂
5	灰色（5YR 3／1）	砂質	植物遺体、炭化物、砂
6	黒色（2.5Y 4／1）	砂質	黒色粘土
7	黒色（2.5Y 4／1）	粘土	炭化物
8	褐灰色（2.5Y 4／1）	粘土	灰白色粘土
9	黒色（2.5Y 4／1）	粘土	灰色粘土、炭化物
10	暗灰色（7.5Y 2／1）	シルト	灰色砂質土、植物遺体、炭化物
11	灰色（N 3／ ）	砂質	植物遺体、炭化物
12	灰色（N 3／ ）	粘土	褐灰色粘土
13	暗灰色（7.5Y 2／1）	粘土	灰色粘土、灰白色砂質土、植物遺体
14	暗灰色（N 3／ ）	粘土	灰オリーブ・黄灰色粘土
15	灰色（N 5／ ）	シルト	灰白色シルト、灰黄色砂質土
16	灰色（N 5／ ）	砂質	灰白色粘土、植物遺体、炭化物
17	暗灰色（N 2／ ）	粘土	酸化鉄斑紋
18	黒色（N 3／ ）	粘土	
19	暗灰色（N 3／ ）	粘土	灰オリーブ色・黄灰色・灰色粘土
20	暗灰色（N 3／ ）	粘土	灰色砂質土、炭化物
21	暗灰色（N 3／ ）	粘土	植物遺体、炭化物
22	暗青灰色（5BG 4/1）	砂質	暗灰色砂質土、植物遺体、炭化物、流木
23	暗灰色（N 3／ ）	シルト	灰色シルト、オリーブ灰色砂質土、植物遺体
24	褐灰色（10YR 5/1）	粘土	灰白色粘土、酸化鉄斑紋
25	褐灰色（10YR 4/1）	シルト	にぶい黄橙色粘土、酸化鉄斑紋
26	褐灰色（10YR 4/1）	砂質	炭化物、酸化鉄斑紋
27	灰色（N 4／ ）	砂質	黄灰色・褐灰色粘土、酸化鉄斑紋
28	黒色（2.5Y 2／1）	粘土	褐灰色・灰黄褐色粘土、炭化物
29	灰色（5Y 4／1）	シルト	炭化物、砂
30	黒色（2.5Y 2／1）	砂質	浅黄色・緑灰色砂、植物遺体、炭化物
31	黒色（2.5Y 2／1）	粘土	褐灰色粘土
32	灰色（N 4／ ）	粘土	オリーブ灰色粘土、植物遺体、炭化物
33	灰色（N 4）	シルト	褐灰色粘土、植物遺体、炭化物

④ D区

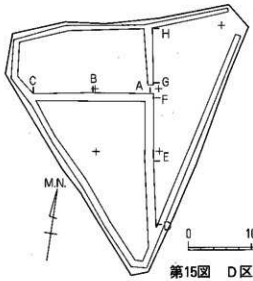
D区では、溝状遺構を3条検出した。ＳＥ５は、調査区の南端でＳＥ４から分かれ、東側の側面に平行するような形で検出された。北側のレベルが低いことから南から北の方向に流れていたと思われる。ＳＥ５の上部は、第Ⅳ層の灰色シルトが覆い、中位から下位に黒色粘土と黒色シルトが堆積する。遺物の大半は、最下層から出土し、時期的には弥生後期後半から古墳前期のものが多かった。

ＳＥ４は調査区の南端でＳＥ５と分かれ、西側中央部で調査区北側の中央に向かって延びている。レベルから南から北へ流れていたと思われる。北側部分には短い支流がみられる。ＳＥ５同様上部を第Ⅳ層の灰色シルトが覆い、中位から下位に黒色粘土と暗灰色シルトが堆積している。北側の短い支流には、中位に黄灰色シルト下位に黄灰色砂質土が堆積する。ＳＥ４も最下層からＳＥ５と同時期の遺物が出土したが、ＳＥ５、ＳＥ１と比較するとその量は少なかった。

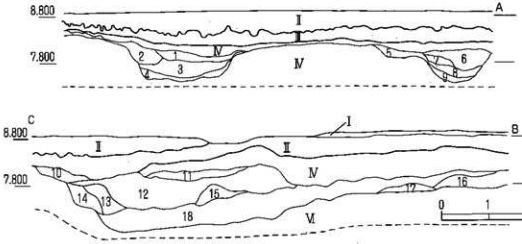
ＳＥ１は調査区北西部の西側から弧を描きながら北へ延び、再び西側の壁にぬける形で検出された。遺物の接合状況からみて、A区のＳＥ１につながると思われる。またレベルから見ると水も北から南へ流れていたと考えられる。溝の上部は灰色シルトが覆い、中位に暗灰色シルトが堆積する。最下層は植物遺体、炭化物、砂を多く含んだ暗灰色砂質土でここから弥生後期後半から古墳前期のものを中心にした多くの土器の他に木器（根太）が出土した。



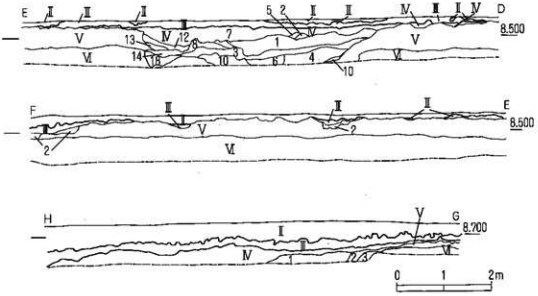
第14図　D地区溝状遺構検出状況図（S＝1／300）



第15図　D区　平面図（S＝1／600）



第16図　D区　東西中央トレンチ壁土層断面図（S＝1／80）



第17図　D区　南北中央トレンチ壁土層断面図（S＝1／80）

第5表　D区基本層序注記表

順序	土　　色	土　質	酸化鉄	混　入　物	備　考
Ⅰ				高原スコリア、砂岩片	現耕作土
Ⅱ	黒褐色（10YR　3／1）	粘　土	点状、雲状	高原スコリア、マンガン核	
Ⅲ	黒褐色（10YR　3／1）	粘　土	点状、雲状	マンガン核	
Ⅳ	灰色（5YR　5／1）	シルト	点状、雲状	マンガン核、暗赤褐色粘土	
Ⅴ	灰色（7.5Y　5／1）（5Y　4／1）		点状、雲状	植物遺体、炭化物	ラミナ層
Ⅵ	灰色（10Y　6／1）	細壌土			二次堆積シラス

第6表　D区溝状遺構土層断面注記表

番号	土　　色	土　質	混　　入　　物
1	黒褐色（7.5YR　3／1）	シルト	黒褐色シラス、灰黄色シルト、酸化鉄斑紋
2	黒色（2.5Y　5／1）	シルト	黄灰色・黒褐色シルト、暗灰黄色砂質土
3	黒色（2.5Y　2／1）	粘　土	黒色粘土
4	暗灰色（N3／　）	シルト	黄灰色粘土
5	黒褐色（5YR　3／1）	シルト	浅黄色シルト、黒褐色・灰黄色・黄灰色砂質土、酸化鉄斑紋
6	黄灰色（2.5Y　4／1）	シルト	植物遺体、酸化鉄斑紋
7	黄灰色（2.5Y　4／1）	シルト	灰色シルト、灰色・にぶい黄橙色砂質土、植物遺体、炭化物
8	黄灰色（2.5Y　4／1）	砂　質	灰色シルト、淡黄色シラス、植物遺体、炭化物
9	黄灰色（2.5Y　4／1）	砂　質	黒褐色シルト、植物遺体、炭化物、軽石
10	黒色（7.5Y　2／1）	シルト	灰色シルト、にぶい黄橙色砂質土、酸化鉄斑紋
11	暗灰色（N3／　）	シルト	黄灰色・明緑灰色粘土、灰色シルト、植物遺体、酸化鉄斑紋
12	暗灰色（N3／　）	シルト	植物遺体、炭化物、砂、岩片
13	黒色（7.5Y　2／1）	粘　土	植物遺体、炭化物
14	暗灰色（N3／　）	粘　土	明緑灰色粘土、にぶい黄色砂質土
15	灰色（N5／　）	シルト	植物遺体、炭化物
16	灰色（N5／　）	砂　質	灰色・青灰色粘土
17	黒色（N2／　）	粘　土	灰色シルト、植物遺体
18	暗灰色（N　3／1）	砂　質	植物遺体、炭化物、砂、岩片

(2) 堰

堰跡1（SO1）は、B区のSE1とSE2の合流部で検出された。杭がすべて西から東に向かって倒れていることから洪水等によって倒壊したと思われる。

SO1は3つの杭列から成り、東西約7m。南北では、SE1からSE2にかけて築かれている最長部で約9mになる。なおSE2のSE1への合流部から北約1.5mの間は堰の建築材がほとんど流出しているため、この部分の構造は不明である。

SO1の構造はSE1に造られた西側の部分でよく見てとれる。はじめに長さ約50～120cm、直径約6～10cmの杭を20～25cmの間隔で川底に打ち込み、それらを横木で押さえる。次にその上に樹皮を張り、横木と長さ約110～200cm、直径約10～15cmの杭を水平方向に敷き詰め、さらにこれらの上に樹皮を張るといった構造をとっている。

一方、SE2の部分では二通りの構造がとられている。一つは長さ約40～50cm、直径約5cmの杭を横に置き、その上に同程度の大きさの杭を水流の方向に敷き、それらの上に樹皮を張る構造で北端部分に見られる。もう一つは川底に板状の木材を敷き、その上に1～2枚の樹皮を張るものである。

SE1部分とSE2部分の構造を見てみると、SE1部分の方が構築材を多く用い、複雑な構造をとっていることがわかる。これはSE1の方が川幅が広く、水深も深いため、強固な構造をとらないと堰の施設が押し流されてしまうからであろう。また、杭列の上に樹皮を敷くことによって隙間から流れる水量が減り、堰の貯水性が高まったことが考えられる。

SO1の建築材を見てみるとSE1の部分では一部に他の建築材を受けるために先端を二枚柄状に削り出したり、材に貫通孔を入れるなどの複雑な加工を施したものがある。しかし大半は木の枝を払い、打ち込み部分を鋭角状にするといった簡単な加工による杭である。また、用いられている樹木も様々で樹種同定で判別しただけでもフジ、クヌギ、アカガシ、クリ、ネムノキ、イヌガヤ、エゴノキの名前があがっている。

一方、SE2部分の板状の建築材は、いずれも断面が飛行機の翼のような三角形の形状を呈している。樹種同定の結果、用いられている樹木はすべてアカガシであった。

SO1に用いられている樹皮は、イネ科タケ亜科の植物の茎を約3～7cmの厚さで水平に敷き詰めて作られたものと広葉樹の樹皮を織物のように組み合わせた厚さ約3～4cmのものの2種類があった。後者はSE1部分の西側杭列の一部にのみ使用されており、大部分は前者の方を用いている。

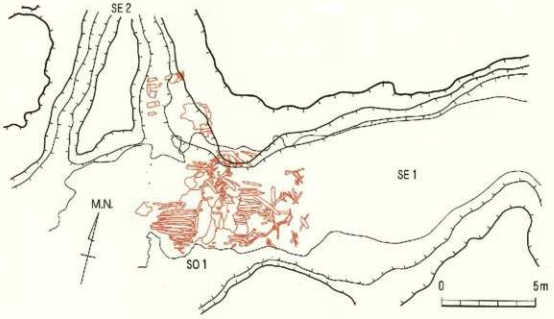
樹皮の出土状況を見ると、はじめに杭に対して茎が平行になるように張った場合次は、茎が杭に対して直交するように張られており、使用方法に法則性が伺われる。このように茎が同一方向に向かず、交差することによって堰の水溜め部分の強度と貯水性を高めていたのではないだろうか。

検出された杭のレベルを見るとSE1部分では最高で標高約7.1m、SE2部分では標高約7.4mである。溝状遺構（旧河道）の形状から判断して、SE2部分の堰跡は、SE1部分よりも倒壊度は低いと思われる。そこから考えるとSO1使用時の河川の水面レベルは、標高7.4m前後と想定される。しかし、堰が2段構造になっており検出された部分が下部であったとしたら、当時の水面レベルは当然高くなる。今回の調査では、そのあたりのことが十分把握されていないため、当時の河川水面のレ

ベルを導き出すことはできなかった。

以上、ＳＯ１を堰跡として記述してみたが、一方でこれを梁のような漁労施設と捉える考えもある。それは、ＳＯ１が魚の集まりやすい河川の合流部に造られていること。３列の杭列の間隔が人が中に入って、作業できるのに十分な広さを持つこと。支流のＳＥ２の両側に水を送りたいのであれば、ＳＥ２を堰き止める方が容易で作業量が少なくてすむことなどがその理由である。また、東京都立大学の山田昌久助教授は、ＳＯ１を漁労施設とＳＯ１の支流部の川底に置かれていた木材が鍬などの農業用具に加工する前の段階に似ていることから、木器溜め（木器用材の保存施設）として使用された可能性もあるとの見解を示された。いずれにせよ、現時点でＳＯ１を特定の施設として断定することは不可能あると考えられる。類例の増加を待ちたい。

遺物を見てみると弥生後期初頭～古墳前期にかけての様相を持った土器が出土している。個数的に見ると弥生終末期のものが多い。また、ＳＥ２部分の板状木材とＳＥ１部分の杭の14Ｃ年代測定を行ったところ板状木材がＡＤ235年、杭はＡＤ245年という結果が得られた。遺物と14Ｃ年代測定の結果から見てＳＯ１は、弥生後期後半から古墳前期あたりのものと考えられる。

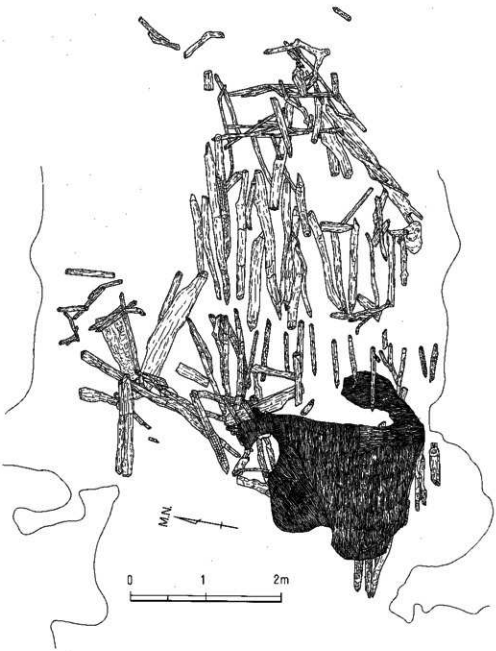


第18図　Ｂ区堰跡（ＳＯ１）検出状況図　（Ｓ＝１／200）

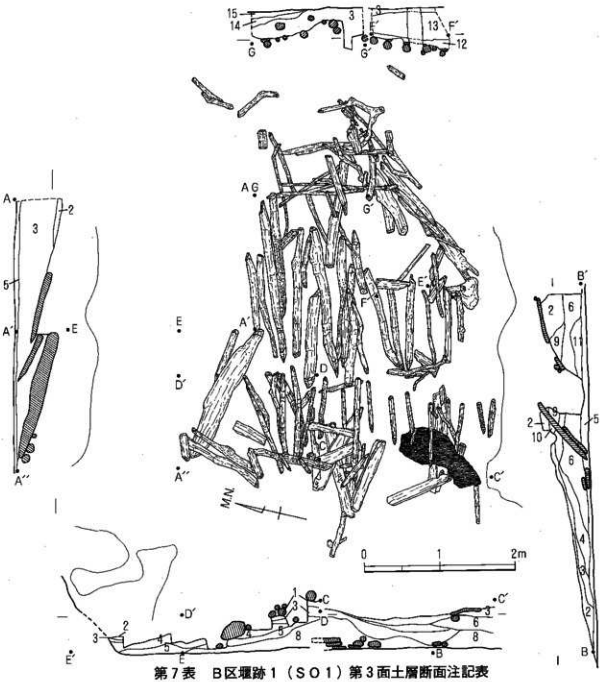
第19図　B区壕跡1、4、5（SO1、SO4、SO5）検出状況図　（S＝1／50）

第20図　B区堰跡1（SO1）　第1面平面実測図（S＝1／50）

第21図　B区堰跡1（SO1）　第1面断面実測図（S＝1／50）



第22図　B区堰跡１（ＳＯ１）　第２面平面実測図（Ｓ＝１／50）



第７表　B区壜跡１（ＳＯ１）第３面土層断面注記表

番号	土　色	土　質	混　入　物
1	黒色（2.5Y　2／1）	粘　土	木片
2	黒色（2.5Y　2／1）	砂　質	
3	灰色（N４）	粘　土	灰白色粘土
4	黒色（2.5Y　2／1）	粘　土	灰色粘土
5	黒色（2.5Y　2／1）	粘　土	黒色砂質土、木片
6	黒色（2.5Y　2／1）	砂　質	黄緑色粘土、木片
7	黒色（2.5Y　2／1）	砂　質	黄緑色粘土、灰色岩片、木片
8	黒色（2.5Y　2／1）	砂　質	黒色岩片、軽石
9	灰色（Ｎ４／　）	砂　質	黒色粘土、木片
10	灰色（Ｎ４／　）	砂　質	灰色粘土
11	灰白色（10Y　7／1）	シラス	
12	灰色（Ｎ４／　）	砂　質	木片、赤色・灰色岩片
13	灰色（Ｎ４／　）	砂　質	木片
14	灰色（Ｎ４／　）	砂　質	灰白色シラス、木片
15	黒色（2.5Y　2／1）	砂　質	黒色粘土、炭化物

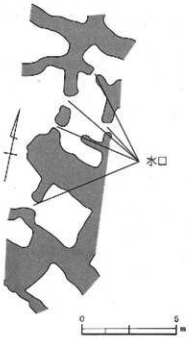
第23図　B区壜跡（ＳＯ１）　第３面平面実測図（Ｓ＝１／50）
第24図　B区壜跡（ＳＯ１）　第３面断面実測図（Ｓ＝１／50）

(3) 水口

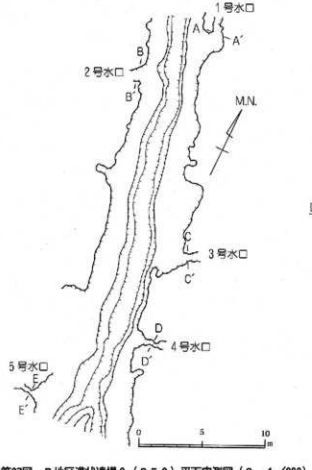
水口は、B区のＳＥ２と水田を結ぶものが５つ、B区北部の水田跡で５つが検出された。

ＳＥ２と水田を結ぶ水口は、第Ⅳ層から掘り込まれており、５号水口以外は、第Ⅴ層まで達している。１号水口と２号水口は、両者とも幅約１mで深さは約20cmである。２号水口は１号水口より掘り込み角度が緩やかである。３号水口はＳＥ２の東側を平行して延びる畦畔を切る形で検出された。幅は約60cm、深さは約20cmである。４号水口と５号水口は、共に幅約30cm、深さ約15～20cmで１号～３号水口と比較するとその規模が小さい。

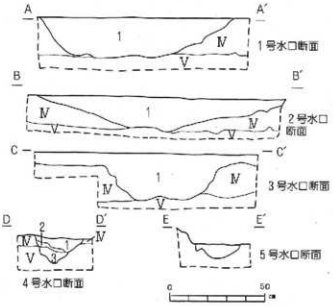
水口をもった水田跡のレベルは北西部が高く、南東部が低かった。この水田跡の水口も北西から南東へ水が流れやすい位置に作られており、用排水がこの方向で行われていたことが伺われる。



第25図　B区北部検出水田
平面図（S＝1／200）



第27図　B地区溝状遺構２（ＳＥ２）平面実測図（S＝1／300）



第26図　B区水口断面図（S＝1／20）

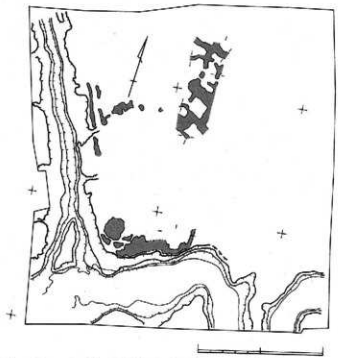
第８表　B区　水口土層断面注記表

番号	土　色	土質	混入物
1	黒色（2.5Y　2／1）	粘土	
2	黒色（2.5Y　2／1）	粘土	褐灰色粘土
3	黒色（2.5Y　2／1）	粘土	褐色・灰白色粘土

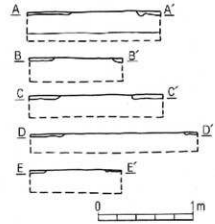
(4) 水田跡・畦畔

水田跡はB区の北部と中央部の2カ所で検出された。北部のものは標高約8.40~8.48m、中央部は標高約8.14~8.20mに位置していた。また調査区西側でも畦畔を検出した。

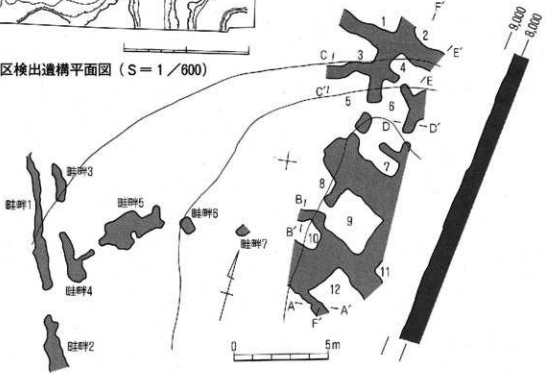
水田跡は、第Ⅳ層と第Ⅴ層との境界面を平面精査して検出した。第Ⅴ層水田は、第Ⅳ層に被覆されている。第Ⅳ層と第Ⅴ層は、溝状遺構（旧河道）と調査区東側を除く部分に見られ、ほぼ平坦な境界をつくっている。



第28図　B区検出遺構平面図（S＝1／600）



第29図　B区畦畔断面図（S＝1／40）

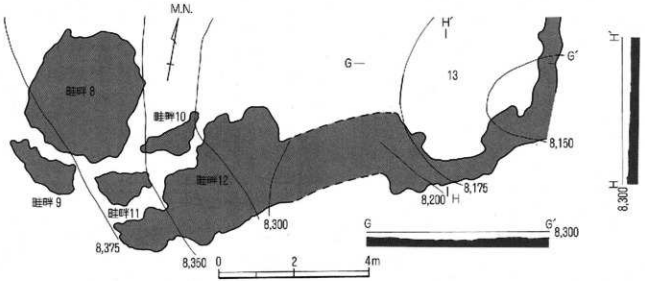


第30図　B区北部検出畦畔平面・断面実測図（S＝1／200）

水田跡は13枚が確認された。畦畔の幅は、約150～180cmの広いものと約25～50cmの細いものの２種類ある。水田の形状は、北側のものは不規則ではあるが北から南に延びる畦畔と北西から南東に延びる畦畔に囲まれ、ほぼ方形状の区画を作っている。各水田は大きさもまちまちで面積も狭い。区画のしっかりした６水田で約５㎡。９水田でも約5.75㎡である。水田を検出した面は北西が高く、南東が低い地形である。調査区北側で検出された水田を見るとこの方向へ水が流れやすいように水口が作られている。

調査区西側では、水田区画にはならなかったが12本の畦畔が検出された。畦畔１～４はＳＥ２に平行して北西から南東に向かって延びる形で検出された。畦畔１と畦畔２は３号水口によって切られている。畦畔４の東側部分と畦畔５～７は南西から北東に向かって延び、畦畔８～12はＳＥ１の北側に沿うような形で検出された。各畦畔の間には、水口状の切れ間が見られたが、水田区画が不明瞭な点とこの部分が過去に起こった地震によって一部地層に褶曲が見られる点から水口とは認定しなかった。畦畔検出後、プラントオパール分析を行った。その結果、調査区中央部の13水田の３点の試料では、すべての試料からイネが検出され、平均密度も3,200個／ｇという高いものであった。しかし、北側で検出した水田で採取した試料では、18点の内12水田で採取した１点で1,500個／ｇという低い数値がでただけで残りの試料からはイネは検出されなかった。この件について分析を行った古環境研究所は、水田検出面が中央部の13水田は、第Ⅳ層上面であったが、北側の１～12水田は第Ⅳ層下面で検出されていたことがこのような結果になったと報告書で述べている。Ｂ区の基本層序を見ると第Ⅳ層は、Ⅳ－１とⅣ－２の２つに分けられる。このことから水田が利用されていた時期は、第Ⅳ－１層の頃であったと考えられる。

水田面からの遺物を見てみると５水田で流れ込みと思われる縄文時代の石鏃が１点出土しただけで、水田の時期を決定する遺物は出土しなかった。調査指導でみえられた奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　工楽善通氏に検出した水田跡と畦畔を見ていただいたところ形状と水田区画の面積から古墳時代の可能性が高いという回答をいただいた。Ｂ区の溝状遺構から出土した土器も古墳前期以前のものであることからこれらの水田跡は、古墳時代のものと思われる。



第31図　Ｂ区南部検出畦畔平面、13水田断面実測図（Ｓ＝１／100）

4 遺物

(1) 土器

A区　出土土器

1～10は縄文土器である。1以外はＳＥ１の屈曲部からの出土である。1は口唇部に連続のキザミが施してある。2胴部が屈曲し口唇部に向かって外反するタイプである。3と4は口唇部が丸みをもつ。6は口唇部にキザミを施している。7は口唇部に連続の押圧が施してある波状口縁である。8は穿孔のある波状口縁である。10は口唇部に連続の押圧が施してある。

11～84は弥生土器である。11～16は甕で17は壺である。11～13はやや内湾しキザミ目の貼付突帯をもつ。14はやや内湾する。15は内湾し突帯のつくもの。16は口唇部に1条の沈線が施してある。17は穿孔が施してある。

18～30は甕である。18は緩やかに外反する口縁をもち頸部に工具痕を残す。19は口縁ぶ短く最大径となる。20は胴部上位が最大径となる。21は胴部が大きく張る。23は球形の胴部である。24、25は平底であり、26はやや上げ底である。28は口唇部にナデによる凹線が施されている。29、30は連続キザミを施す貼付突帯をもつ。

31～76は壺である。31、32は球形の胴部をもつ。33は単頸壺である。34は直口の壺で底部は丸底である。35は尖底擬気味の底部をもつ。36は口縁部がまっすぐ開く。37は口唇部に沈線が施される。38は胴部上位に線刻を施す。39はＤ区と接合している。40～42は二重口縁壺で、40、41には口縁部先端が少し外反する。46は長頸壺の口縁で、口唇部は丸みをもつ。47は口縁部に櫛描波状文を施し焼成が非常によい土器である。48は口唇部に凹線文が施されている。50は口唇部にナデによる凹みがある。51、52は貼付突帯をもつ。53～60は底部が平底を呈する。54は胴部下位に線刻が見られ碗の可能性もある。64は球形の胴部をもつ。65は線刻がありＣ区と接合している。71は底部貼付。72は長頸壺で頸部に10本の沈線が施され胴部胴部上位に綾杉文が巡らされている。底部内面は放射状にハケで調整されている。底部は平底をわずかに残す。75は底部に突起をもつ。

77は器台である。透かし穴が施されている。79は碗で口唇部が丸みをもつ。80は高坏である。透かし穴が施されている。81は脚台で粗いナデで調整されている。82、83は高坏の口縁部で緩やかに外反している。84は高坏の坏部である。

85～140は古墳時代の土師器である。85～92は甕である。87は球形の胴部で、頸部に粘土の溜りが見られる。88は頸部に粘土をはりつけている。90は頸部が立ちぎみである。91、92は口縁部が緩やかに外反する。

93～99は壺である。93は二重口縁壺で一次口縁がやや膨らむ。94、95は直口の壺である。

96はキザミ目の貼付突帯を頸部に施している。99は底部がタタキ調整されている。

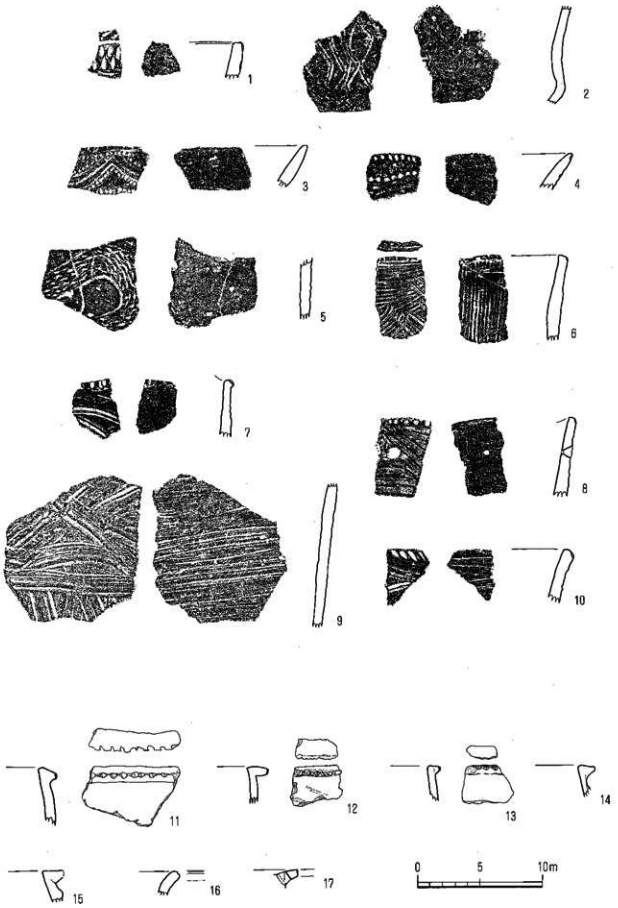
100～106は高坏である。100は据部が平坦である。101・105はやや深みのある坏部である。102、103は坏部の稜線が明瞭である。106は口縁部がやや外反している。107、108は内湾する口縁部をもつ坏と鉢である。109～115は高坏の脚部である。109、110、111はや直線的な脚部をもつ。112は中央部がやや膨らむ。113、114、115はやや開きぎみである。116は平底の底部である。117は小型土器の底部で上げ

底である。118は脚台である。119は小型土器、120は手捏ね土器である。

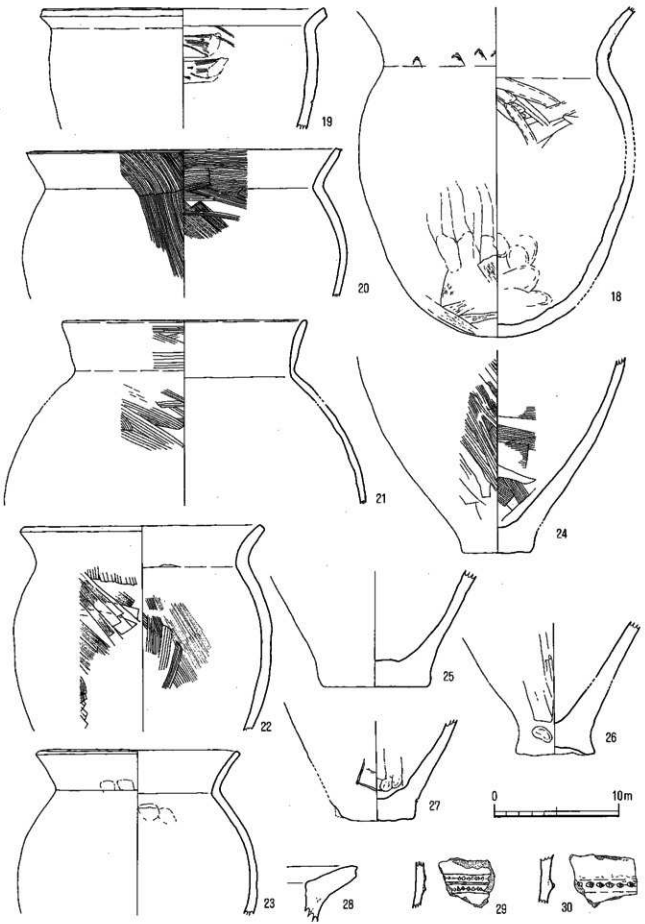
112～134は小型丸底壺である。122は口縁部がやや外反する。124は底部に粘土の貼付が見られる。127は底部に線刻が施されている。128～132は胴部径より口縁部径が大きい。133、134は二重口縁である。133は上げ底状の平底である。

135、136はミニチュア土器。137は小型土器である。138、139は手捏ね土器。139は凹凸の激しい指ナデで成形されている。

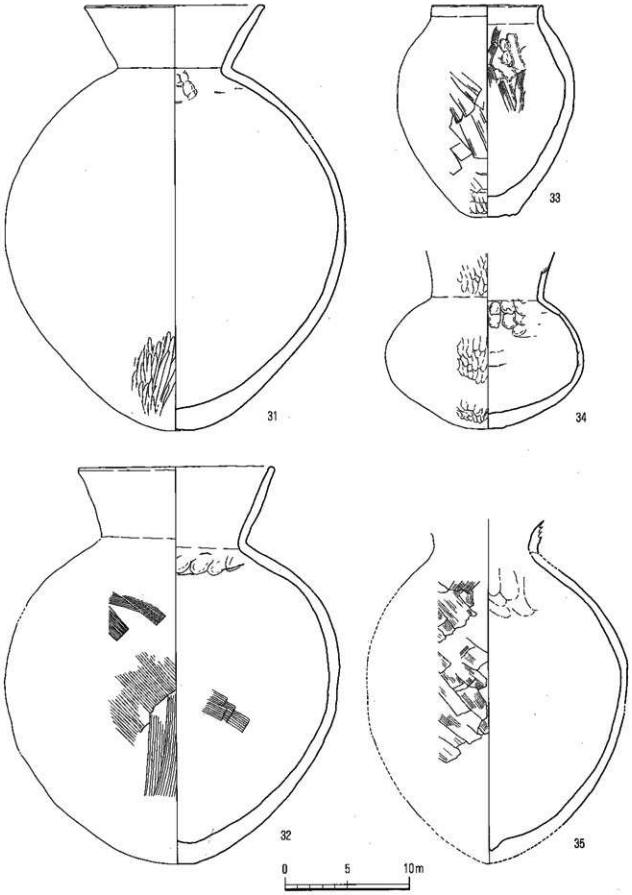
140は口縁部にキザミのある甕である。



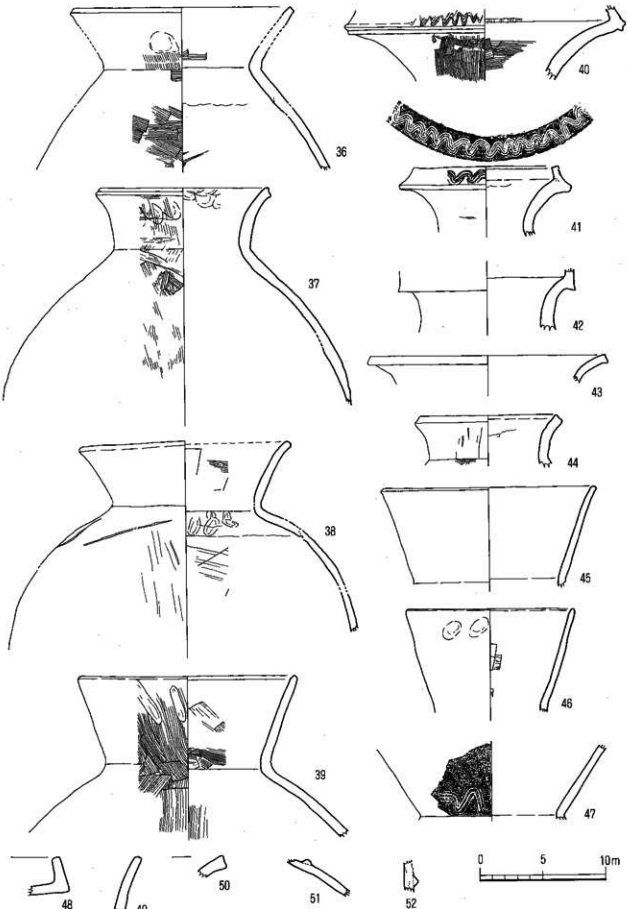
第32図　A区　出土土器(1)　（S＝1／3）



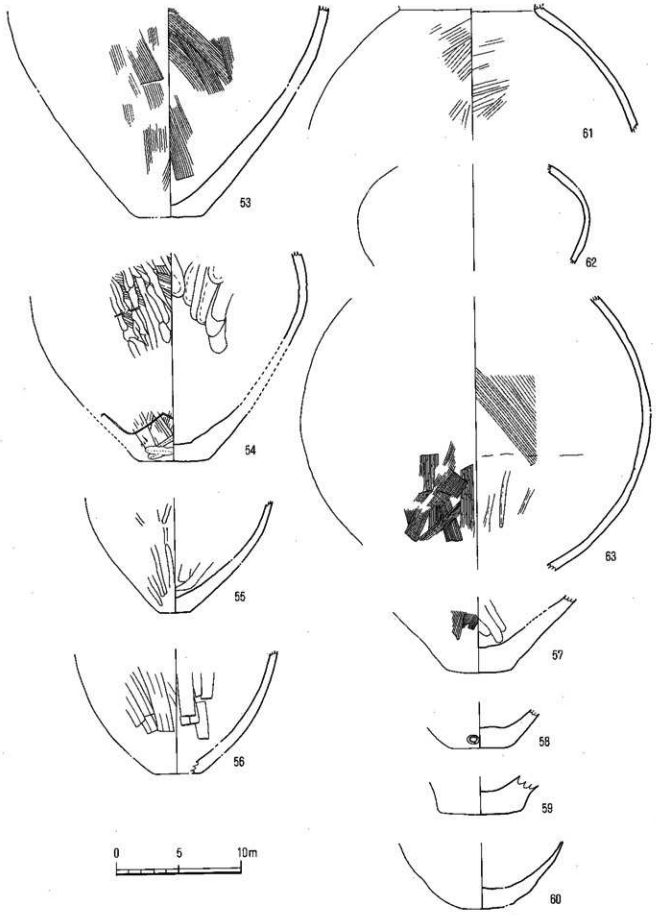
第33図　A区　出土土器(2)　（S＝1／3）



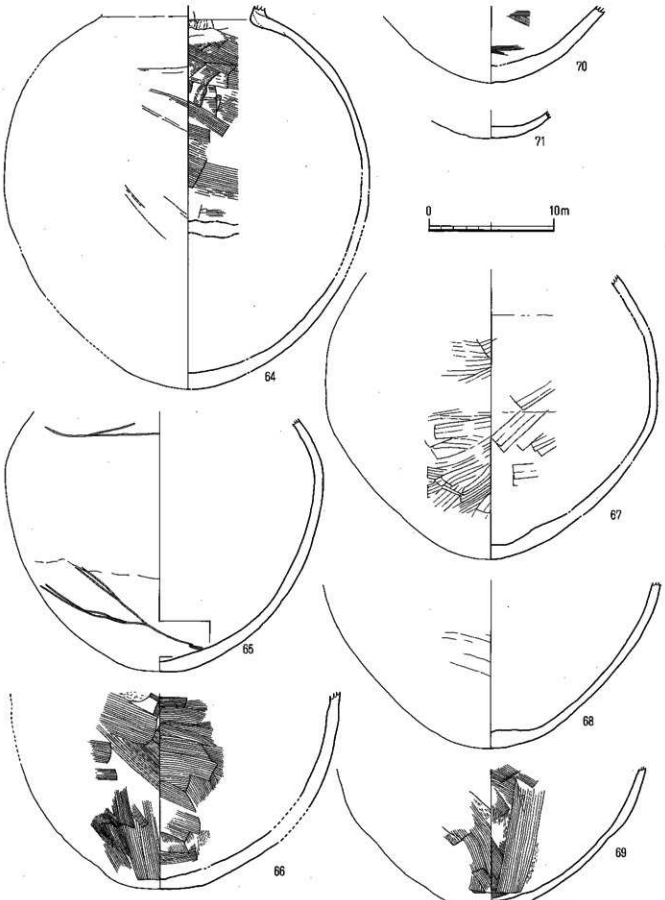
第34図　A区　出土土器(3)　（S＝1／3）



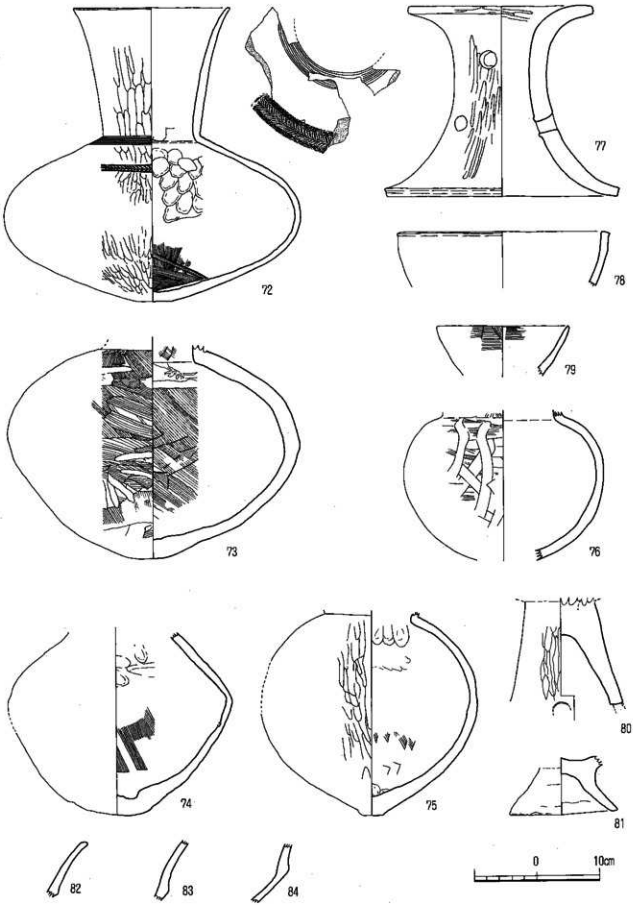
第35図　A区　出土土器(4)　（S＝1／3）



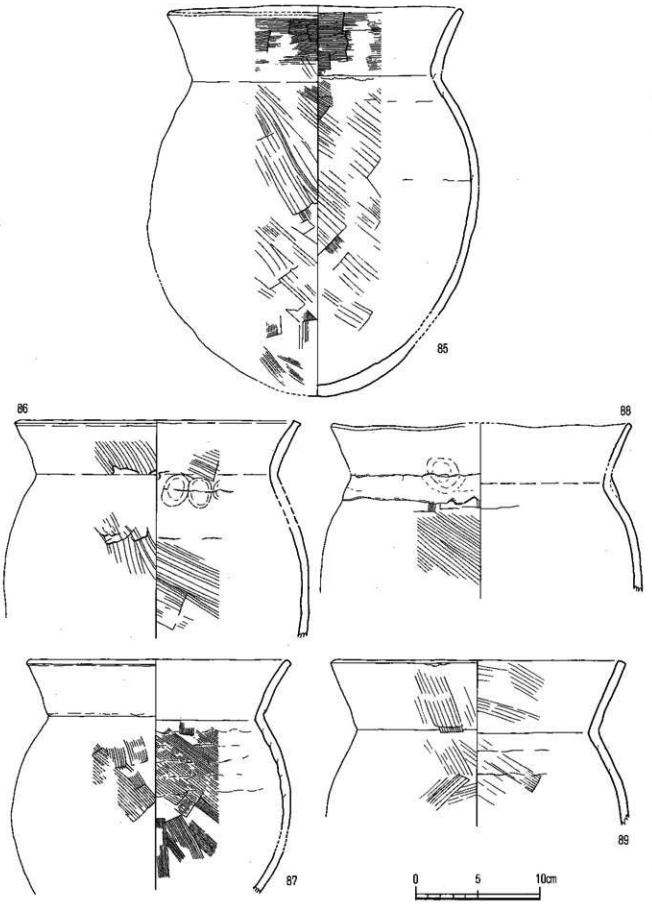
第36図　A区　出土土器(5)　（S＝1／3）



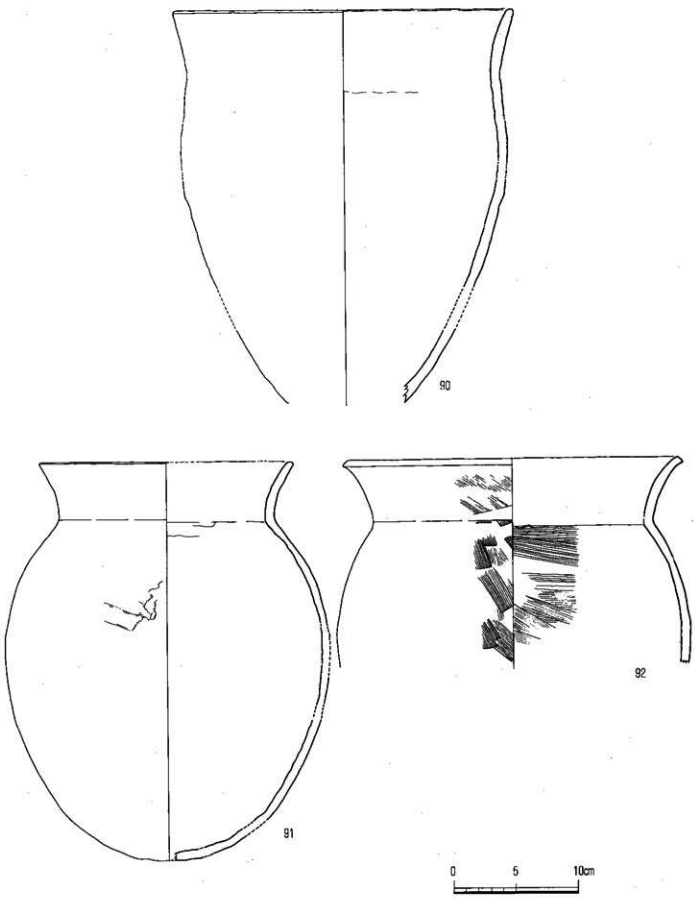
第37図　A区　出土土器(6)　（S＝1／3）



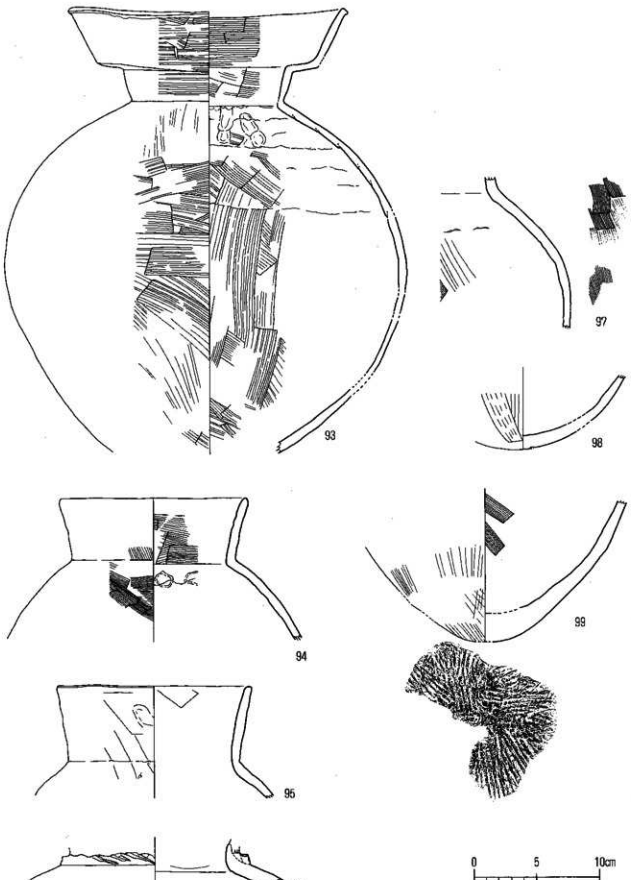
第38図　A区　出土土器(7)　（S＝1／3）



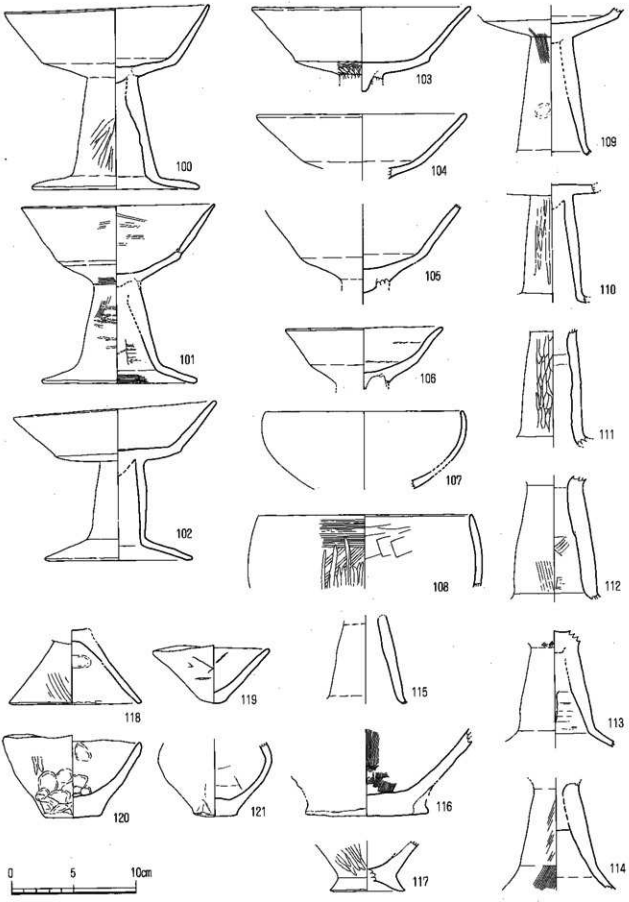
第39図　A区　出土土器(8)　（S＝1／3）



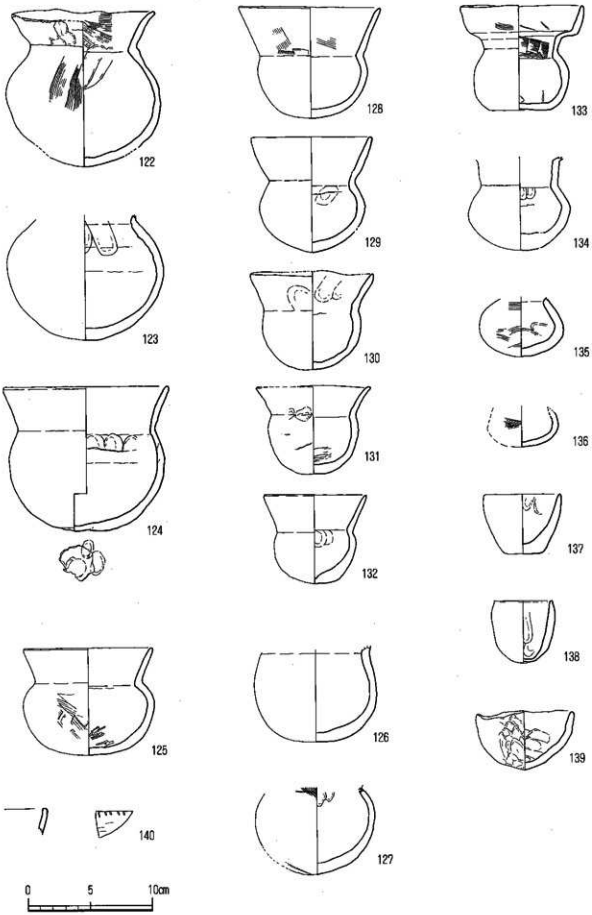
第40図　A区　出土土器(9)　（S＝1／3）



第41図　A区　出土土器(10)　（S＝1／3）



第42図　A区　出土土器(1)　（S＝1／3）



第43図　A区　出土土器(12)　（S＝1／3）

第９表　A区出土土器観察表（古墳時代以前）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
1	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１最下層				ヘラ状工具の連続押圧キザミ、２段にヘラ状工具による連続押圧痕	斜方向のナデ	黒褐(10YR３/１)	にぶい黄橙(10YR５/１)	微細な無色透明、黒色鋭光沢・乳白色の粒を多く含む。	前平式か風化
2	縄文土器	深鉢胴部	ＳＥ１屈曲部最下層				縦方向の波状沈線文か押型文	ナデ、指ナデ、指頭圧痕状の窪み	にぶい黄橙(10Y６/３)	褐灰(10YR５/１)	微細で無色透明鋭光沢、0.5㎜以下の黒色鈍光沢、１㎜以下の灰白・灰褐色の粒が多い。	手向山式風化
3	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				ナデ、棒状工具による刺突列点文・斜方向の沈線文	横ナデ	にぶい黄橙(7.5Y６/３) にぶい黄橙(10YR６/３)	灰黄褐(10YR５/２) 灰黄褐(10YR６/２)	１㎜以下の灰発色・黒色光沢、１㎜の黒色、1.5㎜以下の無色透明光沢の粒を含む。	塞ノ神式風化
4	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				刺突列点文、２条の沈線文	ナデ、スス付着	浅黄橙(7.5YR８/６)	浅黄橙(7.5YR８/４) 黒褐(7.5YR３/１)	微細で無色透明・黒色鋭光沢、0.5㎜以下の灰白色の粒を多く含む。	塞ノ神式か風化
5	縄文土器	深鉢胴部	ＳＥ１屈曲部最下層				沈線文、ナデ、沈線文区画内で網目状撚糸文	ナデ	にぶい橙(５YR６/４) にぶい橙(10YR７/３)	灰黄褐(10YR５/２) にぶい黄橙(10YR７/３)	微細の灰白色・黒色、1.5㎜以下の黒色光沢・白色光沢の粒を含む。	塞ノ神式風化
6	縄文土器	深鉢口縁～胴部	ＳＥ１屈曲部最下層				横ナデ、ヘラ状工具連続キザミ、横・斜方向貝殻条痕文	一部横・縦方向貝殻条痕文	黒(10YR２/１)	黒褐(2.5YR３/１)	微細で無色透明・黒色・鋭光沢鉱物粒を多く、１㎜の乳白色粒を少し含む。	鎌石橋式
7	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				丸棒状の施文具による連続押圧キザミ、ナデ上に幅狭の貝殻腹縁による曲線文、一部微隆起線文風	丁寧なナデ	オリーブ黒(５Y３/１)	にぶい黄(2.5Y６/３)	微細で無色透明・黒色鋭光沢鉱物粒、１㎜の白色粒を多く含む。	鎌石橋式か
8	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				横ナデ、連続キザミ文、幅狭の平らなヘラ状工具ナデ、ナデ間が微隆起線文状、焼成後の穿孔	横ナデ	にぶい黄橙(7.5YR７/２)	灰褐(7.5YR６/２)	1.5㎜以下の無色透明・黒色鋭光沢鉱物物を多く、１㎜の白色粒を少し含む。	轟Ｉ式
9	縄文土器	深鉢胴部	ＳＥ１屈曲部最下層				斜方向のナデ上にヘラ状又は板状工具による凹線文、微隆起線文状、斜・横方向ナデ	削り気味の強い横ナデ	にぶい褐(7.5YR６/３) 灰褐(7.5YR５/２)	にぶい褐(7.5YR５/３) 灰褐(7.5YR４/２)	１㎜の黒色、2.5㎜以下の灰白色、２㎜以下の無色透明光沢粒を含み、２㎜以下の黒色光沢粒を多く含む。	轟式か
10	縄文土器	深鉢口縁部	ＳＥ１最下層				横ナデ、棒状工具による連続押圧キザミ、棒状工具による浅い沈線文、ヘラ状工具沈線文	横ナデ	黒褐(５YR３/１)	褐灰(５YR４/１)	１以下㎜の灰白色と微細で無色透明鋭光沢粒を多く、微細で黒色不透明粒を少し含む。	指宿式か
11	弥生土器	甕口縁部	ＳＥ１最下層				横方向にキザミ目の貼付突帯、縦ハケ	横・斜ナデ	黒(N1.5/) 浅黄橙(10YR８/４)	灰黄(2.5Y７/２)	２㎜以下の灰白色、0.8㎜の黒色の砂粒。	
12	弥生土器	甕口縁部	ＳＥ１最下層				横方向にキザミ目の貼付突帯、横ナデ、斜ハケ後横ナデ	横ナデ	にぶい橙(7.5YR７/４)	にぶい橙(7.5YR７/３)	1.8㎜以下の灰白色・２㎜以下の褐色・褐灰色の岩片、1.8㎜以下の無色透明・鋭光沢で角柱状の鉱物粒。	風化気味
13	弥生土器	甕口縁部	ＳＥ１最下層				横方向にキザミ目の貼付突帯、一部斜方向の調整痕、風化のため調整不明	風化のため調整不明	明褐灰(7.5YR７/２)	にぶい黄橙(10YR７/２)	１㎜以下の無色透明・黒色光沢、２㎜以下の褐灰色、1.5㎜以下の黒色・軟質な赤茶色の砂粒を含む。	風化
14	弥生土器	甕口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				風化のため調整不明、横ナデ、貼付突帯	風化のため調整不明	浅黄橙(7.5YR８/３)	明褐灰(7.5YR７/２)	２㎜以下の褐灰色砂粒を多く、１㎜以下の赤茶色砂粒をわずかに、１㎜以下の無色透明・黒色光沢粒を含む。	風化
15	弥生土器	甕口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				横ナデ、風化	斜ナデ	灰色(10YR７/１)	灰色(10YR７/１)	２㎜以下のにぶい褐色・褐灰色・黒色の岩片	
16	弥生土器	壺口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				１条の沈線文、丁寧な横ナデ	１㎜幅の横方向のミガキ	にぶい橙(５YR７/４) 褐灰(５YR５/１)	にぶい橙(５YR６/４) にぶい橙(7.5YR７/３)	2.5㎜以下の褐灰色の岩片	
17	弥生土器	壺口縁部	ＳＥ１屈曲部最下層				ナデ、片面穿孔、横ナデ	粘土継目	灰黄(2.5Y７/２)	灰黄(2.5Y７/２)	1.5㎜以下の黒色・黄灰色の粒、１㎜以下の輝石を含む。	
18	弥生土器	甕口縁～底部	ＳＥ１屈曲部最下層	頸部径17.8(推定)	最大径21.2(推定)		横ナデ、工具端部による斜方向の押圧、縦方向の強い指ナデ、ヘラ状工具ナデ	ナデ、指ナデ、指頭痕、ヘラ状工具の縦方向ナデ後丁寧な斜ナデ	灰白(7.5YR８/１) にぶい橙(7.5YR７/３) 褐灰(7.5YR６/１) にぶい黄(2.5Y６/３)	灰白(10YR７/１) にぶい黄橙(10YR６/４) 暗灰(N３/)	２㎜以下の褐灰色・黒色の粒を多く含む。	焼成がよい。丸底。風化気味。
19	弥生土器	甕口縁～胴部	ＳＥ１最下層	22.3			浅く凹、横ナデ、斜・縦方向のナデ	ハケ・工具による擦痕、斜方向の指ナデ	浅黄橙(10YR８/４) 橙(５YR７/６)	にぶい橙(５YR７/４)	１㎜以下の無色透明・黒色鋭光沢の鉱物粒を多く含み、角の丸い３㎜以下の灰色・褐色の岩片を多く含む。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
20	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層	12.0 (推定)			ナデ、斜・縦方向のハケ	横・斜方向のハケ	黒 (N2/)	にぶい橙 (5YR7/3)	4.5mm以下の黒色・褐色・灰色の岩片	スス付着
21	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1最下層	19.2 (推定)			横ナデ、横・斜方向のハケ	横ナデ、斜ハケ後ナデ	淡赤橙 (2.5YR7/4) にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐灰 (10YR5/1) にぶい橙 (5YR7/4)	3mm以下の茶色小石、1mm以下の灰白色砂粒、3mm以下の黒色小石、0.8mm以下の無色透明光沢粒。	
22	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1最下層	18.6 (推定)			ナデ、横ナデ、縦方向ヘラナデ後横方向ナデ、横・斜方向ナデ	斜ハケ後横方向ナデ、縦方向ハケ	灰色 (2.5Y8/2)	黄灰 (2.5Y6/1)	3mm以下の黄灰色・にぶい褐色粒を多い。	スス付着
23	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層	15.6 (推定)			ナデ、指押さえ後ナデ、斜方向ハケ後ナデ	横ナデ、黒斑、指頭痕、粘土紐目、砂粒の動き	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	4.5mm以下の黒色・灰色・褐色の岩片、1.5mm以下の石英を含む。	スス付着
24	弥生土器	甕 胴部～底部	SE1最下層		5.3 (推定)		斜・横ハケ、炭化物(ふきこぼれ痕)、ハケの後ナデ	ハケ、炭化物付着	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y7/2) 暗灰 (N3/)	4mm以下の褐灰色・3mm以下の灰白色砂粒、3mm以下のガラス質の光沢粒。	スス付着
25	弥生土器	甕 胴部～底部	SE1屈曲部最下層		8.0 (推定)		工具による斜ナデ、横ナデ、丁寧なナデ	工具ナデ後丁寧なナデ、指頭によるナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の灰白色・1.8mm以下の黄灰色の砂粒、微細な無色透明光沢粒。	
26	弥生土器	甕 胴部～底部	SE1最下層		6.3		縦方向の削り状の粗いナデ、指ナデ・指押さえ、指頭による粗いナデ、一部ハケ目状の工具痕	縦・斜方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2) 橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR7/6)	4mm以下の褐灰色と3mm以下の黒褐色を多く、3mm以下の灰白色を少く、3mm以下の赤褐色を含み、1.5mm以下の無色透明光沢の砂粒をわずかに含む。	
27	弥生土器	甕 胴部～底部	SE1最下層		6.3 (推定)		斜ナデ、一部縦方向の強い工具ナデの後斜方向の指頭によるナデ、ナデ、工具圧痕	ナデ、縦方向の強いナデ、指頭痕	明褐灰 (7.5YR7/2) にぶい黄橙 (10YR7/2) 暗灰 (N3/)	灰 (N4/) 灰白 (2.5YR7/1)	4mm以下の黒褐色を多く、3mm以下の茶褐色を少し、1.5mm以下の無色透明光沢の砂粒を少し含む。	風化気味
28	弥生土器	甕 口縁部	SE1最下層	36.4 (推定)			指ナデによる凹線、丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の金色不定形・灰白色の鉱物粒、3mm以下の黒色の岩片を多く含む。	
29	弥生土器	甕 胴部	SE1屈曲部最下層				横ナデ、貼付突帯、工具による連続キザミ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐灰 (7.5YR6/1)	3mm以下の橙色、2mm以下の黒色・灰色、1mm以下の無色透明の粒。	
30	弥生土器	甕 胴部	SE1最下層				丁寧な横ナデ、縦方向のキザミ目	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	3mm以下の褐灰色で角の丸い粒	スス付着
31	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層	14	2	35	工具による横・斜ナデ、縦方向のヘラナデ、黒変	工具の横ナデ、浅い指押さえ、粘土紐目、縦方向の工具ナデ、工具ナデの後指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4) 明褐灰 (7.5YR7/1)	灰白 (7.5Y7/1) 灰 (7.5Y5/1)	1.5mm以下の黒色鈍光沢・微細な無色透明の鉱物粒を多く、2mmの角の丸い灰褐色・褐色の岩片を多く含む。	スス付着
32	弥生土器	壺 口縁～底部	SE1屈曲部最下層	15.2 (推定)			横・縦ナデ、工具ナデ、斜ハケ後ナデ、ハケの小工具による縦ナデ、工具端部痕	横ナデ、斜ハケ、指頭痕、粘土紐目、ハケ後ナデ、丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10Y7/2)	灰黄褐 (10YR6/2) 明黄褐 (2.5Y7/6) 浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下の褐灰色・4mm以下の明赤褐色・1.8mm以下の黒色光沢の粒、2mm以下の灰白色砂粒。	スス付着
33	弥生土器	壺 口縁～底部	SE1最下層	9.6 (推定)	4.8	16.9	横方向指ナデ、工具の粗いハケ・端部に粘土のかえり、斜ハケ、粘土紐目、縦ハケ後指ナデ、幅狭のハケ痕、くぼみ、タタキ	指ナデ、指による強いナデ上げ、指によるナデ上げ後ハケ、凹凸のある指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3) 褐灰 (7.5YR6/1)	にぶい橙 (5YR7/4)	1.5mm以下の無色透明光沢鉱物粒を少く、1.5mmの黒色鈍光沢鉱物粒を多く、3mm以下の褐色・茶褐色・褐灰色の角の丸い岩片を多く、微細で軟質な赤褐色の粒を多く含む。	スス付着
34	弥生土器	壺 頸部～底部	SE1屈曲部最下層				ヘラ磨き後斜ナデ、黒変、接地面風化	横指ナデ、指によるナデ上げ、粘土紐目	にぶい黄橙 (10YR7/3) 浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10YR7/1)	微細で無色透明の鈍光沢・黒色鈍光沢の鉱物粒を多く含み、1mmの灰褐色の角の丸い岩片を少し含む。	接地面風化
35	弥生土器	壺 口縁～底部	SE1屈曲部最下層				横方向の短線(タタキか?)、縦方向の工具ナデ、ハケ状の細目工具の斜ナデ	横・斜ナデ、指頭痕、ハケ	にぶい橙 (5YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の黒褐色・黄褐色・褐灰色の粒	
36	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1最下層	17.2 (推定)			横ナデ、縦ハケ後横方向ナデ、横・斜方向ハケ、黒変	横方向ハケ、指頭痕、ナデ、工具痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	5mm以下の褐灰色、4mm以下の灰褐色、2mm以下のにぶい赤褐色・黒褐色・黒色光沢・透明光沢の粒を含む。	
37	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1最下層				横ナデ、沈線文、縦ハケの後指ナデ、斜方向のハケ	横・斜ナデ、指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4) にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4) 暗灰 (N3/)	3mm以下の褐灰色・赤褐色・黒色粒が多い。	風化気味
38	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1最下層+SE	15.1 (推定)			ナデ、横ナデ、工具痕、斜方向の数本の線刻、斜・縦方向のハケの後ナデ	横方向ハケ後ナデ、絞り、指頭痕、粘土紐目、斜方向のハケ	にぶい黄橙 (10YR7/3) 橙 (2.5YR7/6)	灰 (N5/0) 淡赤橙 (2.5YR7/4) 灰白 (7.5YR8/1)	3mm以下の黒褐色を多く、3mm以下の褐灰色、1mm以下の黒色光沢無色透明、3.5mm以下の軟質な赤褐色の砂粒を含む。外面頸部に1.4cmの高師小僧が一個付着している。	スス付着
39	弥生土器	壺 口縁～肩部	SE1屈曲部最下層	17.2 (推定)			横ナデ、斜ハケ後横ナデ、指頭による斜ナデ上げ、斜・縦ハケ	横ナデ、わずかに凹む強い調整痕、斜・横・縦ハケの後横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3) 赤橙 (10R6/6)	淡赤橙 (2.5YR7/4) 灰白 (10YR8/1) 灰 (N5/)	1.5mm以下の黒色光沢・1mm以下の無色透明光沢・2mm以下の軟質な赤褐色の砂粒。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(㎝)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
40	弥生土器	壺(二重口縁)口縁部	SE1最下層				櫛描波状文、ナデ、横ナデ、縦・斜方向ハケ	横ナデ、縦方向ハケ後横ナデ、横方向ハケ	にぶい橙(7.5YR7/3)	灰褐(7.5YR6/2) 浅黄橙(10YR8/3)	2.5㎜以下の褐色を多く、1.5㎜以下の灰白色を少し、1㎜以下の無色透明光沢と1.5㎜以下の軟質赤茶色の砂粒をわずかに含む。	
41	弥生土器	壺(二重口縁)口縁部	SE1最下層	11.4(推定)			横ナデの後横方向の櫛描文、工具の横・斜ナデ後丁寧なナデ、工具痕	粘土継目を丁寧なナデ、粘土継目、工具横ナデの後ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	1.2㎜以下の褐灰色・2㎜以下の暗褐色・1.2㎜以下の灰白色の砂粒、0.8㎜以下の黒色光沢粒	
42	弥生土器	壺(二重口縁)口縁部	SE1最下層				横ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	3.5㎜以下の黒色・灰色・褐色の岩片、2.5㎜以下の石英・輝石を含む。	
43	弥生土器	壺 口縁部	SE1最下層	18.6(推定)			横ナデ	横ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	2㎜以下の灰色の岩片、石英を少し含む。	
44	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE1最下層	10.7(推定)			横ナデ、縦方向ハケ後横ナデ	横・斜方向ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3) 黄灰(2.5Y5/1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	3.5㎜以下の褐灰色、2㎜以下の灰白色を少し、1㎜以下の軟質赤茶色の砂粒をわずかに含む。	
45	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE1屈曲部最下層	16.6(推定)			横ナデ調整による浅い凹、工具痕による凹	横ナデ、黒変	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい赤褐(5YR5/4) 灰黄褐(10YR6/2)	1.5㎜以下の褐灰色、0.5㎜以下の黒色光沢を少し、1㎜以下の無色透明光沢の砂粒をわずかに含む。	
46	弥生土器	長頸壺 口縁～頸部	SE1最下層	13.15(推定)			横ナデ、指頭痕、横方向の丁寧なナデ、粘土継目	横ナデ、横方向の丁寧なナデ、工具痕	暗灰黄(2.5Y5/2) 黒褐(2.5Y3/2) 黒(2.5Y2/1)	にぶい黄(2.5Y6/3)	0.5㎜以下の灰色・黒色粒を多く含む。	
47	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE1屈曲部最下層				ハケ、櫛描波状文、横ナデ	横ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	3㎜のにぶい黄橙色・4㎜の暗褐色の粒、3㎜の細長い透明の鉱物を含む。	
48	弥生土器	壺 口縁部	SE1最下層				横ナデ	横ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい橙(5YR7/4)	2㎜以下の灰色の岩片、石英・輝石・長石。	
49	弥生土器	壺 口縁部	SE1屈曲部最下層				ナデ、横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	微細な無色透明・黒色鈍光沢、褐色の粒を多量に含む。	
50	弥生土器	壺 口縁部	SE1最下層				なだらかな凹、横ナデ、黒変	横ナデ	灰白(10YR8/2) 褐灰(10YR4/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜以下の黒色透明・灰色半透明の粒と2㎜以下の褐灰色・褐色の岩片が多い。	
51	弥生土器	壺 肩部	SE1最下層				横ナデ、貼付突帯	横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/3)	1㎜以下の黒色・橙色、2㎜以下の灰色の粒	風化気味
52	弥生土器	壺 胴部	SE1屈曲部最下層				横ナデ、貼付突帯	斜方向の指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2) 褐灰(10YR4/1)	灰白(10YR7/1)	1㎜以下の白色透明・0.5㎜の黒色鈍光沢の粒を少量含む。2㎜以下の褐灰色で角の丸い岩片を多く含む。	スス付着
53	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層		5.2(推定)		ナデ、縦・斜方向ハケ、黒斑	斜・縦方向ハケ後縦ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	暗灰(N3/)	3㎜以下の褐灰色・にぶい黄褐色、2.5㎜以下の軟質なにぶい橙色・黒色・透明光沢、1.5㎜以下の黒色光沢の粒を含む。	風化
54	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1屈曲部最下層		5.5		斜ハケ後ヘラナデ、ハケの後下から上にナデ、沈線、先端の丸い工具痕	指によるナデ上げ	灰(10YR8/4) 暗褐灰(7.5YR7/2) 褐灰(10YR6/1) 灰(N4/)	明褐灰(7.5YR7/1) 褐灰(10YR5/1) 灰(N5/)	4㎜の橙色、2㎜以下の黒色・灰色・白色、1㎜の黒色光沢の粒。	
55	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層		2.2		斜・縦ミガキ、一部強いハケ、丁寧なナデ、黒変	横・斜ナデ、縦・斜方向のヘラ工具ナデ、工具痕	灰白(2.5Y7/1) にぶい黄橙(10YR7/2) 暗灰(N3/0)	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.5㎜以下の黒色透明光沢を多く・灰白色を少し、5㎜以下の軟質赤褐色の砂粒をわずかに含む。	
56	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層				縦方向ハケ(上→下)	工具痕、縦指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2) にぶい黄橙(10YR6/3)	灰白(10YR7/1) 灰黄褐(10YR6/2)	5㎜以下の灰色、2.5㎜以下のにぶい橙色、2㎜以下の橙色、2㎜以下の白色の砂粒。	スス付着
57	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層		5.1(推定)		ハケ目、ナデ	指頭による横・斜ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	黒(7.5YR2/1)	4㎜以下の灰褐色・黒色・暗赤褐色小石。	スス付着
58	弥生土器	壺 底部	SE1最下層		4.7(推定)		ハケ後斜方向ナデ、竹管刺突痕、横ナデ	ハケ後指頭によるナデ上げ	にぶい橙(5YR7/3)	灰(N4/)	3㎜以下の赤褐色・4㎜以下の褐灰色小石、2㎜以下の無色透明砂粒を含む。	
59	弥生土器	壺 底部	SE1最下層		6.3		斜ナデ、中心より外へ斜ナデの端がみられる、丁寧なナデ	ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰(5YR6/1)	1㎜以下の茶褐色・6㎜以下の黄灰色・2.5㎜以下の褐灰色・0.6㎜以下の黒色光沢砂粒を含む。	
60	弥生土器	鉢(碗?)底部	SE1最下層		3.4(推定)		風化著しく調整不明、底部貼り付け	風化著しく調整不明	橙(2.5Y6/6)	橙(5YR7/6)	2㎜以下の褐灰色・0.8㎜の灰白色・2㎜以下のにぶい橙色の砂粒。	風化
61	弥生土器	壺 頸部～胴部	SE1屈曲部最下層				横ナデ、斜方向ハケ後ナデ、斜方向ナデ、斜方向強い工具痕	横方向ハケ後ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2) にぶい橙(2.5YR6/3)	灰白(7.5YR8/2)	1㎜以下の黒色光沢を多く、1.5㎜以下の灰褐色・軟質な赤茶色、1㎜以下の黒色の砂粒を含む。	スス付着

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
62	弥生土器	壺 胴部	SE1最下層				縦方向ミガキ	ナデ、指頭痕	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の透明光沢・黒色光沢粒を含む。	風化
63	弥生土器	壺 胴部	SE1最下層+SE				縦方向ハケ後横ナデ、斜方向ハケ後ナデ	斜方向ハケ後ナデ、粘土継目、深い工具痕	浅黄橙 (10YR8/3) 淡赤橙 (2.5YR7/4)	灰 (N6/)	1.8mm以下の褐灰色砂粒、微細のガラス質光沢粒、2mm以下の輝石を含む。	スス付着
64	弥生土器	壺 頸部～底部	SE1屈曲部最下層				横ナデ、横・斜ハケの後両方向のナデ、縦・斜方向の丁寧なナデ	横ナデ、粗いナデ、指調痕、横・斜ハケ、横・斜ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2) 明褐灰 (7.5YR7/2)	明褐灰 (7.5YR7/2) にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の黒褐色・灰褐色、2mm以下の軟質な赤褐色を少し、1.5mm以下の黒色光沢透明の砂粒を含む。	
65	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1屈曲部最下層+C区				黒変、線刻、ハケの後横・斜ナデ、粘土継目	横・斜ナデ、一部ハケの端部、粘土を寄せて作ったしぼり痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	明褐灰 (7.5YR7/2)	3mm以下の軟質明赤褐色・軟質灰褐色、2mm以下の黒色光沢、1mm以下の黒色、微細な光沢の粒を含む。	
66	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層		7.2		斜・縦方向ハケ目、黒斑、ナデ	縦・斜・横方向ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR6/1)	5mm以下の黒色・灰褐色、4mm以下の赤褐色、2mm以下の黒色光沢・灰白色・透明光沢・軟質な橙色の粒を含む。	
67	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1屈曲部最下層				横ハケ、斜方向ハケ、粗いハケ	ナデ、斜ハケ、狭い工具痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	灰黄褐 (10YR6/2) 灰黄褐 (10YR6/4)	2mm以下の輝石・褐灰色粒・灰黄褐色粒。	スス付着
68	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1屈曲部最下層		1.8 (推定)		斜・横方向ハケ、工具痕、ハケの端部痕、丁寧なナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR6/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	1.8mm以下の茶褐色・1.2mm以下の黒色の砂粒、微細の無色透明ガラス質の光沢粒。	スス付着、風化
69	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1最下層+SE				斜・縦方向ハケ後縦方向ナデ、黒変、粗いナデ	縦・斜方向ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	灰褐 (7.5YR6/2) 褐灰 (7.5YR5/1)	2mm以下の黒色光沢を多く、1.5mm以下の赤褐色砂粒を少し含む。	
70	弥生土器	壺 底部	SE1最下層				タタキ後ナデ	横・斜方向ハケ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3) 灰白 (7.5YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	4mm以下の橙色、3mm以下の灰色、2.5mm以下の黒色、2mm以下の無色透明光沢、1.5mm以下の黒色光沢の砂粒を含む。	
71	弥生土器	壺 底部	SE1最下層				ナデ、底部貼り付け	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3) 灰 (5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1) 灰白 (7.5YR8/2)	1.8mm以下の褐灰色の砂粒、0.5mm以下の半透明の光沢粒。	
72	弥生土器	壺 頸部～底部	SE1・屈曲部最下層	12.3 (推定)	3	23.4 (推定)	ナデ、縦方向の丁寧なミガキ、10本の平行沈線文、綾杉紋、指ナデ、黒変	ナデ、丁寧なナデ、浅い指頭痕、粘土のかえり、黒変、炭素吸着、縦ハケ後底部中央から放射状のハケ	にぶい橙 (7.5YR6/4) 橙 (5YR7/6) 褐灰 (5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4) 黄灰 (2.5YR6/1) 黒 (N2/0) 灰白 (2.5YR7/1)	2mm以下の黒褐色・1mm以下の透明光沢・黒色光沢の粒、微細で無色透明光沢鉱物粒、1mm以下の黒色鈍光沢の鉱物粒を多く含み、1mm以下の灰白色・茶褐色の岩片が多い。	風化気味
73	弥生土器	長頸壺 口縁～底部	SE1最下層				粘土継目、斜・縦・横ハケ、ハケ後ヘラ状工具ナデ	指頭による横ナデ、粗いナデ、粘土継目、斜ハケ、工具端部痕、ハケ後横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) にぶい黄橙 (10YR6/4)	灰白 (10YR8/2) 灰黄 (2.5YR6/2)	3mm以下の黒色・2mm以下の灰色の粒、3mm以下の橙色の粒を少量、1mmの黒色光沢粒。	
74	弥生土器	壺 肩部～底部	SE1最下層				横ナデ、横・斜・縦ハケ、粘土継目、工具ナデ	指頭痕、斜方向のハケ、約5mm幅の工具で回転するようなナデ、黒変	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3) 暗灰 (N3/)	5mm以下のにぶい赤褐色・4mm以下の黒褐色・3mm以下のにぶい橙色・褐灰色の砂粒、4mm以下の黒色光沢・2mm以下のガラス質透明光沢の粒を含む。	スス付着、風化気味
75	弥生土器	壺 頸部～底部	SE1最下層		1.4		ナデ、縦ミガキ、黒変	工具ナデ、ハケ、端部痕、斜方向の強いナデ、黒斑、丁寧なナデ、指頭痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/2)	0.8mm以下の茶褐色の砂粒、微細のガラス質光沢粒を含む。	
76	弥生土器	壺 頸部～胴部	SE1最下層				縦方向のハケ、横方向ハケ後不定方向のハケ	粗い仕上げ、縦方向のハケ、炭化物付着	淡橙 (5YR8/4)	灰 (5Y6/1)	2mm以下の赤褐色・黒褐色の砂粒、1mm以下のガラス質の鉱物粒を含む。	スス付着
77	弥生土器	器台 口縁～裾部	SE1屈曲部最下層	14.5 (推定)	18.3 裾部径 (推定)	15.2	横・縦ミガキ、透かし穴、工具による強い横ナデ	横ミガキ、工具横・斜ナデ、透かし穴、粘土のかえり、工具痕、丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の黒褐色砂粒、2mm以下の軟質明赤褐色・ガラス質透明光沢・黒色光沢、1mmの黒色の粒を含む。	透かし穴
78	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層				工具横ナデ後指ナデ、横ナデ	斜ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/3)	1mm以下の無色透明鉱物粒を多く・黒色鈍光沢鉱物粒を少なく、0.5mmの重視顕赤褐色の粒を多く含む。	風化気味
79	弥生土器	碗 口縁～胴部	SE1最下層	10.4 (推定)			横・斜ハケ、縦に粗くナデ	横ハケ、斜ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1mmの無色透明鈍光沢・微細な黒色鈍光沢の鉱物粒を多く含む。	
80	弥生土器	高杯 脚部	SE1最下層				縦目、縦方向ミガキ、透かし穴	粘土の盛り上がり、透かし穴	にぶい黄橙 (10YR7/4)	褐灰 (10YR5/1)	3mm以下の褐灰色・黒色粒を多く含む。	風化気味
81	弥生土器	脚台 脚部	SE1最下層		8.5 裾部径		凹凸の激しい指ナデ、指の横ナデ、粘土継目	横指ナデ、粗い斜ナデの擦痕、粘土継目	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/8)	1mmの白色不透明鈍光沢の鉱物粒・2mm以下の黒色・褐色・灰褐色の岩片を多く含む。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
82	弥生土器	高坏 口縁部	SE1屈曲部最下層	30.2(推定)			やや摩滅気味、横方向ヘラ磨き	横・縦方向ヘラ磨き	浅黄橙(7.5YR8/3) 淡橙(5YR8/4)	にぶい橙(5YR6/4) にぶい橙(7.5YR7/3)	1mm以下の橙色、微細で黒色・無色透明の砂粒を含む。	風化気味
83	弥生土器	高坏 坏部	SE1最下層				ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の灰褐色・褐色の粒を多量に含む。	風化気味
84	弥生土器	高坏 坏部	SE1最下層				斜・縦方向ナデ	斜方向ナデ	にぶい橙(5YR7/3)	にぶい橙(5YR7/4)	1.5mm以下の灰褐色・褐色の粒が多い。	風化気味
85	土師器	甕 口縁～底部	SE1最下層+SE3	13.05		31	横・斜・縦のハケ、ナデ、粗いナデ、粘土の溜り	横・斜ハケ後ナデ	にぶい橙(5YR7/4) 橙(2.5YR6/6) にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい橙(5YR7/3) 橙(2.5YR6/6) 青灰(5PB5/1) 暗青灰(5PB3/1)	3mm以下の黒褐色砂粒を多く、3mm以下の灰色砂粒、1mm以下の黒色透明光沢粒を少量。	スス付着
86	土師器	甕 口縁～胴部	SE1最下層+一括	22.7			横ナデ、斜ハケ後横ナデ、粘土溜り	横・斜ハケ、粘土継ぎ目、指頭痕	浅黄橙(10YR8/3) にぶい橙(7.5YR7/3) 灰褐(7.5YR6/2)	にぶい橙(5YR7/3) 橙(2.5YR7/6) 橙(5YR7/6)	4mm以下の灰色・3mm以下の橙色・2mm以下の白色透明光沢、1.5mmの黒色光沢・1mmの黒色の粒を含む。	スス付着
87	土師器	甕 口縁～胴部	SE1最下層+SE3	20.3(推定)			横ナデ、粘土かえり、斜ハケ後横方向ナデ、粘土つけたし	横方向ナデ、粘土継目、斜ハケ、縦斜方向ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	4mm以下の軟質赤褐色、3mm以下の灰色・橙色・黒褐色・褐灰色、2.5mm以下のにぶい赤褐色・無色透明光沢、2mm以下の黒色光沢、1mm以下の透明光沢の粒を含む。	スス付着
88	土師器	甕 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層	23.3(推定)			横ナデ、粘土貼り付け、指頭痕、斜方向ハケ後横ナデ	横ナデ、粘土継目、横・斜ハケ	にぶい橙(7.5YR7/4) 淡橙(5YR8/4) 黒(5YR1.7/1)	にぶい橙(5YR7/4) 褐灰(10YR5/1)	5mm以下のにぶい橙色、3mm以下の灰白色、1mmの橙色、微細な黒色光沢・無色透明光沢の砂粒を含む。	スス付着
89	弥生～土師器	甕 口縁～胴部	SE1最下層	22.2(推定)			横方向ナデ、ハケ目工具痕、斜方向ハケ目、横ナデ	斜ハケ後ナデ	にぶい橙(5YR7/4) 黒(5YR1.7/1)	明褐灰(5YR7/1)	4mm以下の褐灰色、3mm以下の暗灰色、2.5mm以下の褐色・明褐灰色・暗褐灰色・にぶい赤褐色を多く、1.5mm以下の無色透明鈍光沢、1mm以下の黒色光沢・明赤褐色の粒。	スス付着、風化気味
90	土師器	甕 口縁～胴部	SE1屈曲部最下層	26.8(推定)			横・縦ナデ、横・斜ハケ、ハケ後ナデ	ハケ後ナデ、横・斜ハケ、炭化物付着	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	4mm以下のにぶい赤褐色、3mm以下の黒褐色、3.5mm以下の褐灰色、2mm以下の赤褐色・軟質な橙色、1mm以下の黒色光沢・透明光沢の粒を含む。	スス付着
91	土師器	甕 口縁～底部	SE11層+一括		2.4(推定)		横・斜ナデ、工具痕	ナデ、粘土継目、斜ハケ	にぶい黄橙(10YR7/2) にぶい橙(5YR7/3)	にぶい橙(5YR7/4) 褐灰(5YR5/1)	5mm以下のにぶい赤褐色・褐灰色粒を多く含み、2mm以下の輝石を含む。	スス付着
92	土師器	甕 口縁～胴部	SE1最下層	26.1(推定)			ナデ、斜ハケ後横ナデ	横・斜方向ハケ	にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい橙(7.5YR7/4)	褐灰(10YR6/1) にぶい橙(7.5YR7/4)	2.5mm以下の黄灰色・褐灰色・灰黄褐色・にぶい橙色粒を多く含む。	スス付着
93	土師器	壺 口縁～胴部	SE1最下層	20.6			丁寧な横ナデ、黒斑、縦・横・斜ハケ後ナデ	ナデ、指頭痕、縦・斜・横ハケ	浅黄橙(7.5YR8/3) 灰黄褐(10YR6/2) にぶい橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/2) にぶい橙(5YR7/3) 灰(5Y4/1)	2mm以下の黒褐色砂粒を多く、3mm以下の灰褐色砂粒・2mm以下の黒色光沢粒・1mm以下の無色透明光沢粒を少し含む。	スス付着
94	弥生～土師器	壺 口縁～肩部	SE1最下層+一括	14.75			斜・横方向のハケ後横ナデ	横ナデ、横方向のハケ、粘土継目、指頭痕	にぶい橙(5YR7/3) 灰白(7.5YR8/2)	にぶい橙(7.5YR7/3) にぶい黄橙(10YR7/4)	5mm以下の灰色、1mmの黒色、1mm以下の黒色光沢、2mm以下の無色透明光沢の粒。	
95	弥生～土師器	壺 口縁～頸部	SE1最下層	15.2(推定)			横ナデ、工具の横ナデ、工具痕、指頭痕、粘土を貼り付けナデ上げ	斜ナデ、工具による横・斜ナデ	にぶい橙(5YR7/4) 赤橙(10R6/6)	褐灰(5YR6/1) にぶい橙(7.5YR7/4)	2.7mm以下の赤灰色・灰白色の砂粒、1mm以下の無色透明・1.2mm以下の黒色角柱状光沢の粒を含む。	
96	弥生～土師器	壺 口縁～頸部	SE1最下層				貼付突帯、ハケ後ナデ	ナデ、粘土たまり	明褐灰(5YR7/1) 灰白(N7/)	灰白(2.5Y7/1)	3mm以下の橙色を多く、5mm以下の灰色・3mm以下の黒色・2mm以下の黒色光沢・1mmの無色透明光沢の粒を含む。	
97	弥生～土師器	壺 頸部～胴部	SE1最下層				斜方向ハケ後ナデ	縦・横・斜方向ナデ、工具痕	淡赤橙(2.5YR7/4)	にぶい橙(5YR7/4)	3mm以下の茶褐色・褐灰色と1.2mm以下の灰白色砂粒、微細の無色透明ガラス質光沢粒。	スス付着
98	土師器	壺 底部	SE11層+SE3				縦方向ハケ、ナデ	ナデ	淡黄橙(7.5YR6/3) 明褐灰(7.5YR7/2)	にぶい橙(5YR7/3) 灰(10Y5/1)	4mm以下の赤灰色・1.2mm以下の赤褐色・1.8mm以下の灰白色砂粒、微細の無色透明光沢粒を含む。	
99	土師器	甕 底部	SE1屈曲部最下層				タタキ	ハケ後ナデ	灰白(2.5Y7/1)	オリーブ黒(7.5Y3/2)	4mm以下の灰色・黒色・褐色の岩片、1.5mm以下の石英・輝石・長石を含む。	スス付着

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
100	土師器	高坏 口縁～裾部	ＳＥ１最下層＋ＳＥ３	15.6	13.3	14.3	横・縦ナデ	横ナデ、丁寧なナデ、粗い指横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/2)	2mm以下の軟質な赤褐色、微細な黒色・灰褐色・無色透明銀光沢の粒を多く含む。	風化気味
101	土師器	高坏 口縁～裾部	ＳＥ１最下層＋ＳＥ３	15.2 (推定)	12	14.15	丁寧な横ナデ、斜・横ハケ後横・斜ヘラナデ	丁寧な横ナデ、やや斜・横ハケ後ナデ、横方向の削り状ナデ後ナデ	灰白 (7.5YR8/2) にぶい橙 (5YR7/4)	灰白 (7.5YR8/2) 橙 (5YR7/6)	3.5mm以下のにぶい褐色、1.5mm以下の軟質赤褐色・2mm以下の灰白色を少し、1mm以下の黒色光沢の砂粒。	
102	土師器	高坏 口縁～裾部	ＳＥ１最下層＋ＳＥ３	16.15 (推定)	11.5 裾部径	12.05	横ナデ、縦ハケ後ナデ	ハケ後横ナデ、丁寧なナデ、工具横ナデ	灰白 (7.5YR8/2) 浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10Y8/2) 浅黄橙 (10YR8/3) にぶい橙 (7.5YR7/4)	微細の白色透明を多く、1mmの橙色・2mm以下の灰色・黒色光沢の粒を含む。	風化
103	土師器	高坏 坏部～受部	ＳＥ１最下層				横ナデ、横方向磨き、放射状の中央へのヘラ磨き	丁寧な横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	4mm以下の暗赤褐色・1mm以下の灰白色・黒色を多く、1.5mmの軟質な赤褐色の粒を少し。	
104	土師器	高坏 坏部	ＳＥ３本流	16.7 (推定)			横ナデ、ミガキ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	2mm以下の半透明、1.5mm以下の黒色光沢・透明光沢、1mm以下の軟質な赤褐色の粒。	風化
105	土師器	高坏 坏部～受部	ＳＥ３本流				横・斜方向ナデ、黒斑	横方向ナデ、回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	3mm以下の褐灰色、2mm以下の灰色・灰白色、1.5mm以下の黒色光沢・透明光沢、2mm以下の軟質な明赤褐色の粒を含む。	
106	土師器	高坏 坏部～受部	ＳＥ１最下層				横ナデ	粘土継目、横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	浅黄 (7.5YR8/6) 黄灰 (2.5Y5/1)	微細で無色透明鉱物粒・1.5mm以下の黒色鈍光沢粒を多く、0.5mmの軟質赤褐色粒を少し。	風化気味
107	土師器	坏 口縁～胴部	ＳＥ１最下層	15.6			横ナデ、不定方向粗ナデ、砂粒の動き	丁寧な横ナデ、ナデ、黒斑	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	2mm以下の灰色・乳白色の粒を少し含む。	
108	土師器	鉢 口縁～胴部	Ａ区	16.85 (推定)			ナデ、横方向ハケ、斜ハケ後縦方向ミガキ	工具による横方向ナデ	黒褐 (7.5YR3/1) 浅黄橙 (7.5YR8/3)	灰白 (7.5YR8/2) 淡橙 (5YR8/3)	微細な黒色、1.5mmの無色透明・橙色の砂粒	スス付着
109	土師器	高坏 杯部～脚部	ＳＥ１最下層				ハケ後回転方向ナデ、縦ハケ、ハケ後ナデ、黒斑、ハケ後指押さえ	工具ナデ、粘土絞り目痕、縦方向指頭ナデ後横ナデ、砂粒の動き	にぶい橙 (5YR7/4) 灰黄 (2.5YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の輝石・長石、2mm以下の灰色の岩片・石英を含む。	
110	土師器	高坏 受部～脚部	ＳＥ１最下層				横・縦方向ミガキ、ナデ	ミガキ、横方向ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	明褐灰 (5YR7/2)	微細な無色透明鈍光沢・1mmの黒色・褐色の粒を多く含む。	
111	土師器	高坏 脚部	ＳＥ１最下層				縦方向ミガキ	工具痕、横方向ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	灰白 (10YR7/1)	2mm以下の軟質褐色・微細な灰白色を多く、微細な無色透明鈍光沢の粒を含む。	
112	土師器	高坏 脚部	ＳＥ１最下層				横ナデ、縦方向ハケ後ナデ、粘土だまり	横方向ナデ、粘土だまり、工具横方向粗ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3) 黄灰 (2.5YR6/1)	浅黄橙 (10YR8/3) にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下の無色透明光沢・黒色光沢、1mmの橙色の砂粒。	風化気味
113	土師器	高坏 受部～脚部	Ａ区				斜の強いハケ、ナデ	ナデ、一部ハケ、横削り状ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の黒色光沢を多く・赤茶色と無色透明光沢を少し、1.5mm以下の黒色光沢の砂粒	
114	土師器	高坏 脚部	ＳＥ１最下層				斜方向ナデ、斜方向ハケ	横方向ナデ	橙 (5YR6/6) にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	1mm以下の石英、2mm以下の褐灰色粒多い。	
115	土師器	高坏 脚部	ＳＥ３				ナデ	粘土継目、横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR8/6)	1.5mm以下の灰白色・褐色・暗褐色を多く、0.5mmの半透明・鈍光沢の粒を含む。	風化
116	土師器	不明底部	ＳＥ１最下層		7.9		粗ナデ、粘土たまり、粘土継目、縦方向ハケ	縦・横・斜方向ハケ	淡黄 (2.5Y8/3) 灰 (N4/)	暗灰 (N3/)	3mm以下の灰色、2mm以下の黒色・無色透明、1mm以下の橙色の砂粒を含む。	
117	土師器	小型土器 底部	ＳＥ１最下層		6.0 (推定)		横ナデ後縦方向粗ナデ、横方向粗ヘラナデ	黒斑、ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	灰黄 (2.5Y7/2)	3.5mm以下の濃褐色・灰色・黒色の岩片、1.5mm以下の石英・輝石を少し含む。	
118	土師器	脚付 脚部	ＳＥ１最下層		9.85 裾部径		粘土継目、斜ハケ後横ナデ	指頭痕、横ナデ、粘土のかえり	にぶい黄橙 (10YR7/2) 灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2) にぶい黄橙 (10YR7/3)	微細な黒色を多く、3mm以下の茶色、2mm以下の灰色・無色透明光沢、1mmの黒色光沢の粒を含む。	
119	弥生～土師器	小型土器 (坏) 口縁～底部	ＳＥ１最下層	9			工具横・斜ナデ、工具痕	工具横・斜ナデ	にぶい橙 (5YR7/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下の褐灰色、2mm以下のにぶい赤褐色、1.5mm以下の黒色・黒色光沢・透明光沢の粒。	
120	弥生～土師器	鉢(手捏ね) 口縁～底部	ＳＥ１最下層	10.9	4.3	6.6	工具粗横・斜ナデ、不明痕、指頭痕。粗指ナデ	指頭痕、工具横ナデ、横部中央より放射状工具成形痕後指ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の黒色鈍光沢の鉱物粒、4mm以下のにぶい赤褐色の砂粒、2mm以下のにぶい褐色・黒色粒を多く、4mm以下の乳白色粒を少し含む。	
121	弥生～土師器	壺又は鉢 胴部～底部	ＳＥ１最下層		3.65	5.8	ハケ後ナデ、ハケ工具痕	ハケ工具痕、ナデ	淡橙 (5YR8/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	2mm以下の軟質赤褐色、3mm以下の褐色・灰褐色・黒色の粒を多く含む。	風化気味

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
122	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1屈曲部最下層	11.1	3	12.2	縦・横工具ナデ、指頭痕、粘土継目、縦ハケ後横ナデ、粘土貼り付け、斜工具ナデ、炭化物（ふきこぼれ痕）	横・斜ハケ、斜方向指ナデ上げ、斜・横軽指ナデ、炭素吸着	淡橙 (5YR8/3) 黒 (5YR1.7/1)	浅黄橙 (10YR8/3) 暗灰 (N3/)	3㎜以下の灰褐色・褐色、1.5㎜以下の無色透明鈍光沢鉱物粒を多く、1㎜の赤褐色の粒を少し含む。	スス付着
123	土師器	小型丸底壺 頸部～底部	SE1最下層				横ナデ、縦・横方向の丁寧なナデ	指頭痕、横ナデ、丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3) にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3㎜以下の暗赤褐色・暗赤灰色・赤黒色の粒、2㎜以下の輝石を多く含む。	スス付着
124	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE31層	7.9 (推定)			横・斜ナデ、指頭痕、底部粘土板	横・斜ナデ、指頭痕、粘土継目	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3㎜以下のにぶい黄褐色・黒色・軟質な赤褐色・にぶい赤褐色、2㎜以下の灰白色のにぶい光沢、2㎜以下の黒色光沢・透明光沢の粒。	スス付着
125	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層	10.1			横ナデ、斜ハケ後ナデ、黒斑	ナデ、横ナデ、棒状工具痕	にぶい黄 (2.5YR6/3)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	2㎜以下の黒色・黄灰色、2㎜以下の透明光沢、微細な黒色光沢の粒を含む。	
126	土師器	小型丸底壺	SE1最下層		1.3		ナデ、粘土継目、指頭痕	横ナデ、砂粒の動き、横・斜方向ナデ、指押さえ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	4.5㎜以下の灰色・黒色・褐色の岩片、1.5㎜以下の輝石を含む。	スス付着
127	土師器	小型丸底壺	SE1最下層				不定方向ナデ、指頭ナデ、工具端部痕、ハケ、線刻	指頭ナデ、縦方向ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	灰オリーブ (7.5YR5/2)	2.5㎜以下の黒色・灰色・褐色の岩片、1.5㎜以下の石英・輝石を含む。	
128	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層	11.1			横・斜ナデ、頸部文に縦ハケの端部	ナデ、横・斜ハケ後ナデ、横・斜ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3㎜以下の黄灰色、2㎜以下のにぶい赤褐色・軟質な赤褐色、1㎜以下の黒色光沢・透明光沢の粒を含む。	
129	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層	9.6		9.1	横ナデ、ナデ	横ナデ、指頭痕、粘土継目、縦ハケ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3) 褐灰 (7.5YR6/1)	灰白 (7.5YR8/1) にぶい橙 (10YR7/3)	3㎜以下の灰色、1㎜の黒色を多く、2㎜以下の黒色光沢、1.5㎜以下の白色・白色光沢の粒を含む。	
130	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層		1		指頭痕、横ナデ、粗いナデ	横ナデ、粗いナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3) にぶい橙 (5YR7/3) 橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/3) 橙 (55YR763)	2.5㎜以下の褐色・褐灰色粒を多く含む。	
131	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層	8.4	2	7	指頭痕、ハケ様工具擦痕、横・斜ナデ、滑らかなナデ	横指ナデ、ハケ様工具擦痕、横・斜ナデ	浅黄橙 (10YR8/3) 淡橙 (5YR8/3)	明褐灰 (7.5Y7/2)	1㎜以下の黒色透明鈍光沢鉱物粒、1㎜の褐色・灰褐色粒を多く含む。	
132	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層				横ナデ、ハケの後ナデ	横・斜ナデ、指頭痕	にぶい橙 (7.5YR7/3) にぶい橙 (5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3) にぶい橙 (5YR6/3)	3㎜以下の赤褐色・2㎜以下の褐灰色の粒。	
133	土師器	二重口縁壺 小型 口縁～底部	SE1屈曲部最下層	9.6	5	8.2	横ハケ後横ナデ、縦方向ナデ、横・斜ナデ、浅くくぼむ上げ底状の平底、指ナデ	横・斜ハケ、底部中央より放射状工具ナデ、端部痕、指の凹凸ナデ	淡橙 (5YR8/3) 灰白 (5Y7/1)	淡橙 (5YR8/4)	微細で無色透明鈍光沢の鉱物粒、1㎜の乳白色粒を多く、2㎜以下の黒色鈍光沢の粒を少し含む。	
134	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1最下層				丁寧な横ナデ、ナデ	横ナデ、指ナデ	にぶい橙 (5YR6/3)	にぶい橙 (5YR7/3)	2㎜以下の白色不透明鉱物粒、1㎜以下の輝石を含む。	
135	土師器	ミニチュア土器	SE1最下層				工具による横ナデ、横・斜方向のナデ、ハケ	ナデ、強い指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4) 浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	3㎜以下のにぶい橙色・灰色、2㎜以下の黒褐色の岩片、黒色光沢鉱物粒、1㎜以下で無色透明光沢鉱物粒を含む。	
136	弥生～土師器	ミニチュア土器	SE11層		2	3.2	ハケ	風化のため調整不明	浅黄橙 (7.5YR8/3)	黄橙 (7.5YR8/3)	2㎜以下の黒色・無色透明・鈍光沢の粒を少し、2.5㎜以下の灰白色・褐色の粒が多い。	風化
137	弥生～土師器	小型土器 口縁～底部	SE1屈曲部最下層	5.9	3		黒斑、丁寧なナデ、赤変	横指ナデ、指頭痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	7㎜以下の黒褐色、5㎜以下のにぶい赤褐色、3㎜以下の軟質橙色・褐灰色、2㎜以下の黒色光沢・透明光沢の粒。	
138	弥生～土師器	小型土器 口縁～底部	SE1最下層	4.6	1	4.9	ナデ	指ナデ上げ、ナデ	にぶい橙 (5YR7/3)	褐灰 (5YR6/1)	2.5㎜以下の黒色・灰白色・褐色を多く、0.5㎜の無色透明の粒を含む。	
139	弥生～土師器	小形土器 （手捏ね） 口縁～底部	SE1最下層	7.5		4.6	凹凸の激しい粗い指ナデ	横工具ナデ後横・斜指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	0.5㎜の黒色鈍光沢鉱物粒、4㎜以下の赤褐色・1㎜の黒色の粒を多く含む。	
140	土師器	甕 口縁部	SE1屈曲部最下層				ナデ、横方向ナデ、縦方向連続キザミ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	1㎜以下の輝石・黒色微細粒を含む。	

B区　SE1（溝状遺構1）　出土土器

図の141～170は甕である。141は口縁部から胴部にかけてくびれをつけずに内湾しながらのびる器形を呈し、口縁部に2条の刻み目を持つ貼り付け突帯を有す。142は短い口縁部が外反し、胴部の張り出しがない器形で内面に指オサエと横方向へのハケメ、外面に指オサエと縦方向へのハケメが施されている。144～147は頸部が「く」の字に屈曲している。屈曲の度合は144が最も強い。145は屈曲後胴部が大きく張り出す器形を呈す。146、147は口縁端部を調整してい仕上げており、外面にハケメ調整が見られる。148～150は、やや穏やかにくびれる頸部を持つ。

152、154は小型の甕で脚台状の上げ底を指オサエで作り出している。151は指オサエによって深い脚台状の上げ底をつくっている。153は上げ底が浅く、乳頭状の底部を持つ。

155、156は同一個体で口縁が外反し、端部はほぼ平坦である。胴部は、長胴形を呈し、底部は平底で黒斑が見られる。外面の胴部上半にハケメ、下半にミガキ。内面は指と工具によってナデの調整が施されている。157は口縁の外反が穏やかで端部が若干丸みを帯びる。

158、159は穏やかに外反した口縁と中央がやや窪んだ方形状の断面の口縁端部を持つ。共に外面頸部に指オサエ、胴部にハケメが施されている。160、162は口縁部の外反度が強い。160は上げ底の底部を持ち、底部から外に広がるように胴部がのびている。161は小型で口縁が短く、外反がやや穏やかである。163は口縁がやや長く、中位が若干ふくらみ、口縁端部と頸部上位が細くなる形状を呈す。164は頸部が強く外反し、頸部上位から口縁端部に向かってしだいに厚くなる口縁部を持つ。

165、166は短く外反した口縁を持ち、球形の胴部を持った小型の甕である。165は口縁端部手前で上へ折れ、口縁端部が鋭角状である。167、168は短く、やや穏やかに外反した口縁を持ち、細長い胴部の小型の甕である。底部は共に指オサエによって脚台状の上げ底になっている。

169、170は胴部で外面にタタキ、内面にハケメ調整が施されている。

171から221は壺である。171は小型の無頸壺で手ずくねによって作られ、厚い底部を持つ。172は「く」の字に強く屈曲した頸部を持つ。口縁端部には2本の沈線があり、頸部には調整による強いハケメが見られる。173～175は瀬戸内系の土器の影響が見られる広口の壺の口縁部である。172、173は口縁端部に2本の細い沈線が施されている。175は口縁端部が上下に拡張し、内面に円形浮文を付している。

176は口縁端部が厚く、中央に浅い凹線が見られる。177は頸部に貼り付け突帯と楕円形の浮文を付している。178は頸部がしまり、張り出した胴部を持ち、底部は平底である。頸部に貼り付け突帯が巡り、胴部上半にミガキ、下半にハケメ調整が見られる。179は口縁端部が下方へわずかに拡張する。180は胴部上位に最大径を持つが、底部は丸底に近い形状を呈す。181は頸部から外反する口縁を持ち、体部は扁球状である。

183～188は長頸壺である。183、184は薄く、丁寧な作りで外面にミガキを施している。183には丹塗りの跡が見られる。185はSE1からほぼ完形に近い状態で出土した。口縁部は外反気味に開く。胴部は算盤玉状に張り、底部は平底である。頸部に1条、胴部中央に2条の突帯が巡る。外面は頸部から上に工具による丁寧なナデ、胴部全体に細かいミガキが施されている。胴部内面の調整は上位が指によるオサエ、下位がハケメである。185～188はいずれも算盤玉状に張った胴部を持つ。外面調整は185

はハケメ。187、188はミガキである。188には丹塗りの跡が見られる。189は口縁が外反し、端部が平坦である。191～193は外反した口縁端部に小さな凹凸が見られる。194、195は最大径を胴部上位に持つ。193は、胴部中央部に最大径を持ち、竹管文が押されている。196は口縁が頸部からほぼ垂直に立ち、口縁端部を平坦にしている。

197、198は口縁端部が球状である。197は頸部がほぼ垂直に立つのに対し、198は外反する。199は長頸壺で内外面ともにミガキが見られる。200は口縁が外反し、端部が平坦である。202は口縁端部の上位が舌状にのびる。203は端部の上位と下位がわずかに拡張する。201は胴部の中央付近に最大径を持ち、底部はわずかに上げ底状になる。204は胴部が扁球状で外面にハケメ調整が施されている。

205、206は広口の壺で口縁部外面に櫛描波状文を施す。207～210は複合口縁壺である。209は拡張部がわずかに外側に延び、口縁端部が細くなる。内外面とも工具によるナデが施されている。207、210は拡張部がわずかに内側にのび、二次口縁に櫛描波状が巡る。ともに口縁端部は細くなるが210は平坦に仕上げてある。208は拡張部が内湾気味に内側にのびる。口縁端部は細くなり、平坦面を持つ。二次口縁には櫛描波状文が巡っている。

211～214は壺の胴部～底部である。211はやや扁球状の胴部をを持ち、底部は平底である。212は平底で長胴に近い胴部を持つ。214は胴部上位に最大径を持つ。外面にはハケメによる調整が施されている。213は、ほぼ完形に近い状態で出土した。頸部から外反する口縁部を持ち、胴部は球状である。底部は丸底に近い平底状である。215は短頸の直口壺である。216は口縁部が短く「く」の字状に外反する。217は外反し、中位で膨らみ、端部で細くなる口縁を持つ。

218～221は小型丸底壺である。218は扁球状の胴部を持ち、外面にミガキが見られる。219～221は口縁部が緩やかに外反し、219、220は端部側が細くなる。

222は甑である。内面に指によるナデ調整の痕が見られる。

223～234は鉢である。223は口縁端部がごく短く毎側にのびる。224は球状の体部と丸底の底部を持つ。口縁部内面に横方向のハケメ調整が見られる。225は平底の底部から体部が外側にのびる。226、227は底部が脚台状をなし、体部が緩やかに内湾しながらのびる。228～232は口縁部が二段に屈曲し、外側に開く。233は脚台状の底部を持ち、体部が碗状をなす。234は厚手の底部を持ち、体部が直線的に外側にのびる。

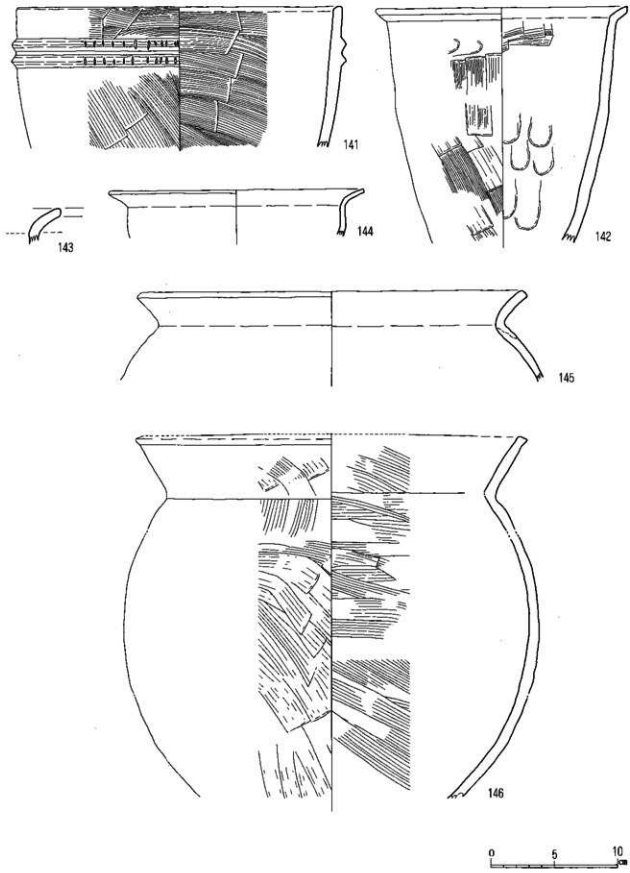
235～256は高坏である。235は口縁部がわずかに外湾し、端部が球状である。236は口縁端部が短く外側にのびる。237は口縁部が外湾し、端部がわずかに窪む。238は杯部が屈曲し、口縁部は外湾しながら垂直に近い角度でのびる。内外面ともミガキが施されている。239、240はわずかに外湾しながら外側に広がって延びる脚柱部を持つ。240は裾部で強く外反して開く。脚柱部の中位に穿孔が入れられ、外面にはミガキが施されている。243は脚柱部が長く、緩やかに外湾しながら裾部で開く。241、242は裾部の端部で242には浅い沈線状の窪みが入る。

244はは坏部が屈曲部から外側にのびる。口縁は緩やかに外湾し、端部が外側にわずかに拡張する。245は外側にほぼ直線的に延びる脚柱部を持つ。246は坏底部が大きな広がりを持つ。脚部は低く、裾部が大きくラッパ状に広がる。外面はにぶい橙色を呈す。坏底部～脚部にかけてミガキが施され、脚部

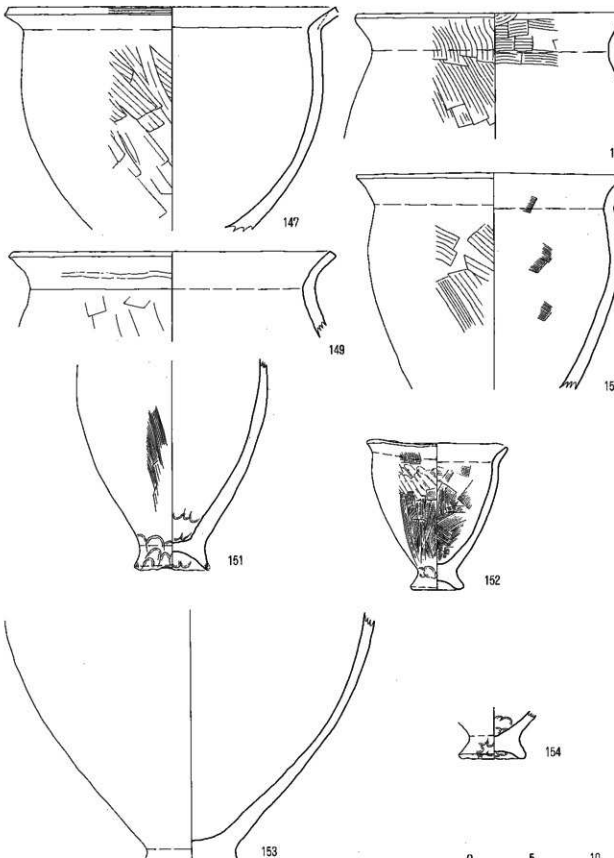
中位に穿孔が入る。畿内の河内Ⅴ－3様式の中にほぼ同じ形状の高杯が見られる。248は緩やかに広がる裾部を持つ。247は裾部が着地点で外側にのび、広い接地面を作っている。また、裾端部に波状文が描かれている。249は坏底部で屈曲し、そこから口縁部にかけて直線的に広がりながら延び、坏高を高くすることで容量の大きな坏部を作っている。255は裾部で強い外反が見られる。脚部は中位で若干膨らみを持ち、その後裾部に向かって開き気味にのびる。

251から257は器台の脚部である。251、252は裾部が大きく外反して開く。252は器受部径、裾部径がほぼ等しい。251は脚部の下位に、252は脚部の上位と下位に穿孔が入る。253～256は裾部が屈曲せずにラッパ状に広がる形状を呈す。254は裾端部が上位に引き延ばされ、外面にミガキが程これている。253～256の裾端部には窪みが見られる。257は脚部の高い大きめの器台で裾部が大きく外反して開き、器受部径、裾部径がほぼ等しい。裾端部はやや細くなって平坦面を持つ。脚部と上位と下位に穿孔が入り、外面にはミガキが施されている。

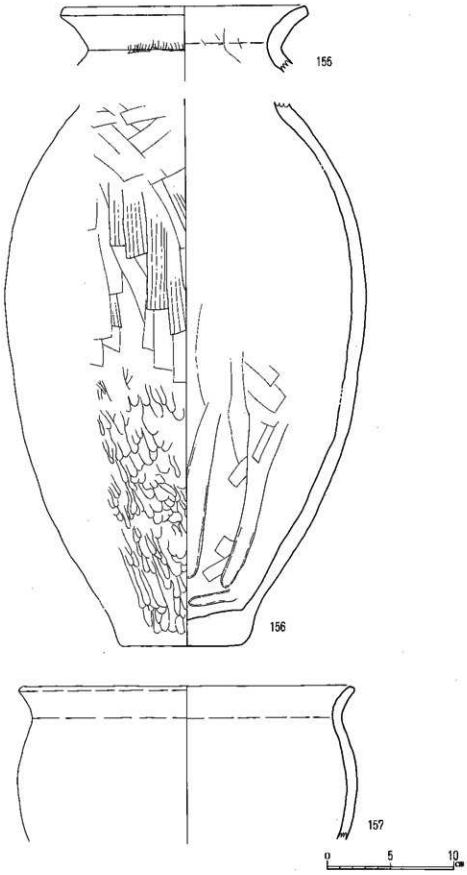
258は手捏ねの匙型土器である。内外面に指頭圧痕が見られる。



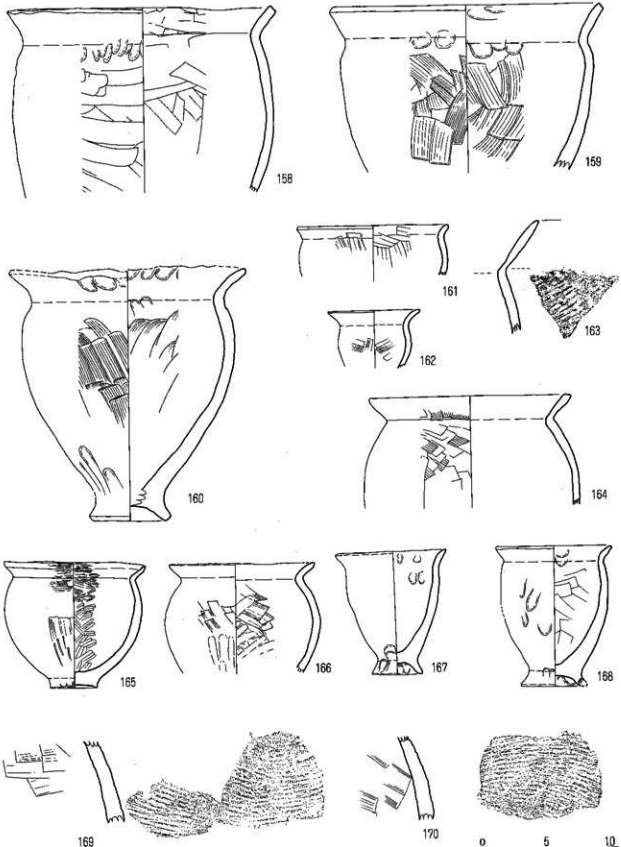
第44図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(1)　（Ｓ＝１／３）



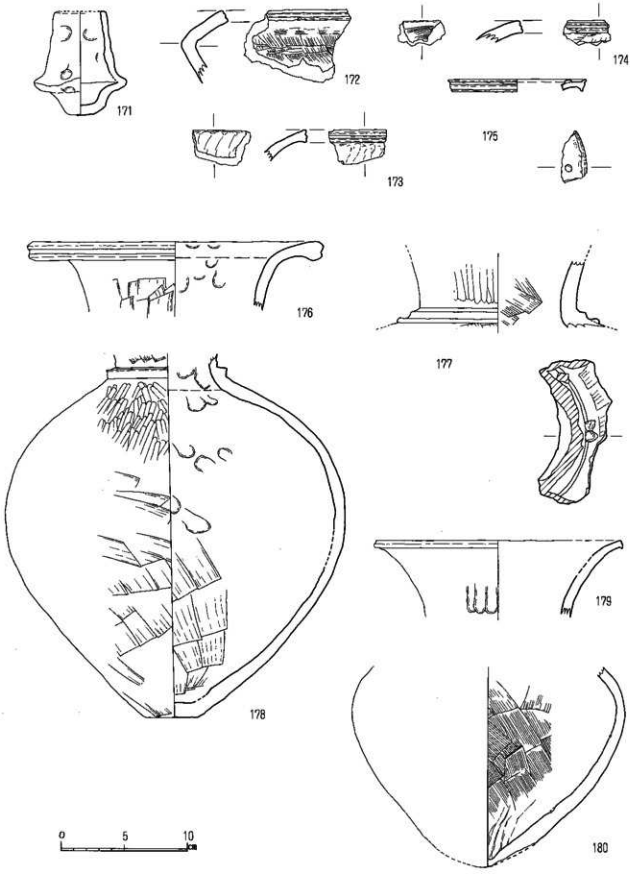
第45図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(2)　（S＝１／３）



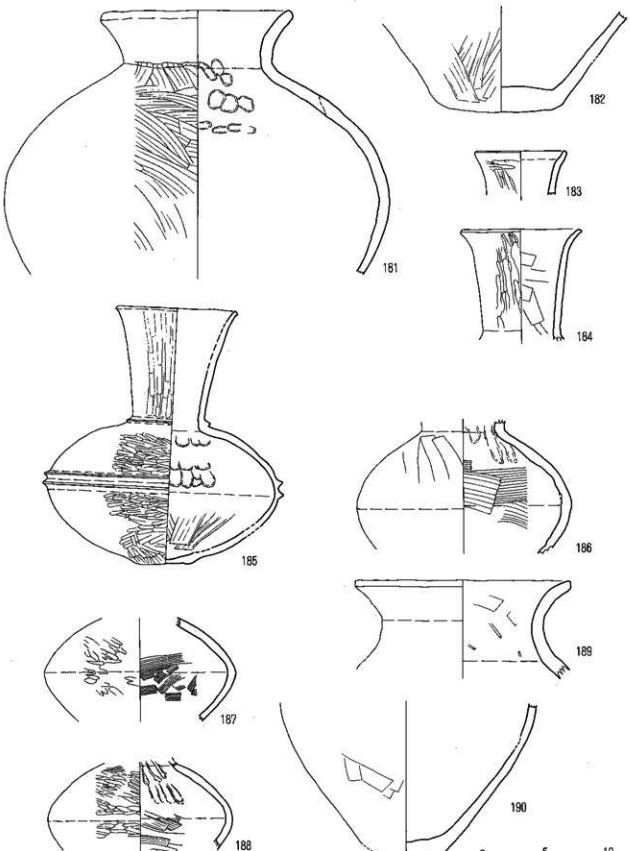
第46図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(3)　（Ｓ＝１／３）



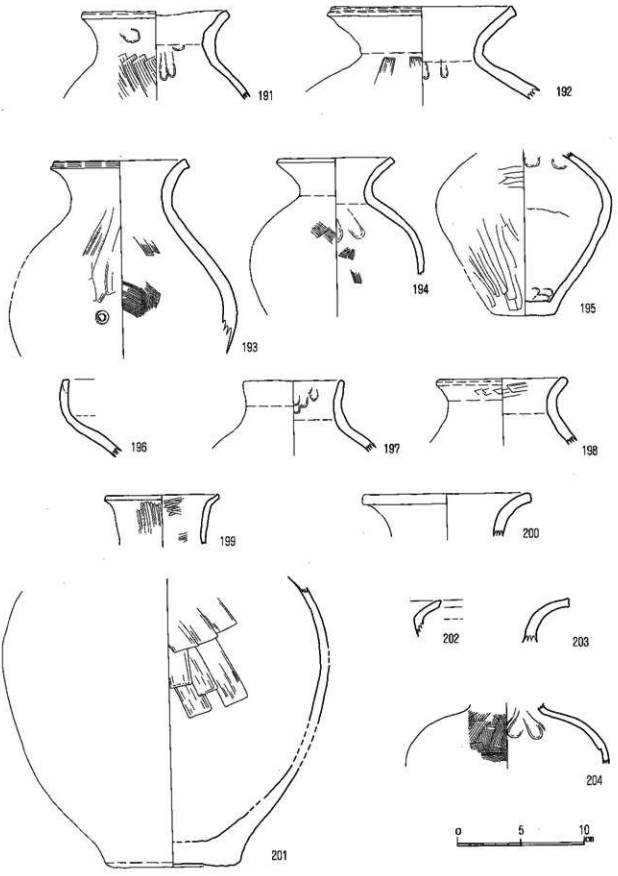
第47図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(4)　（S＝１／３）



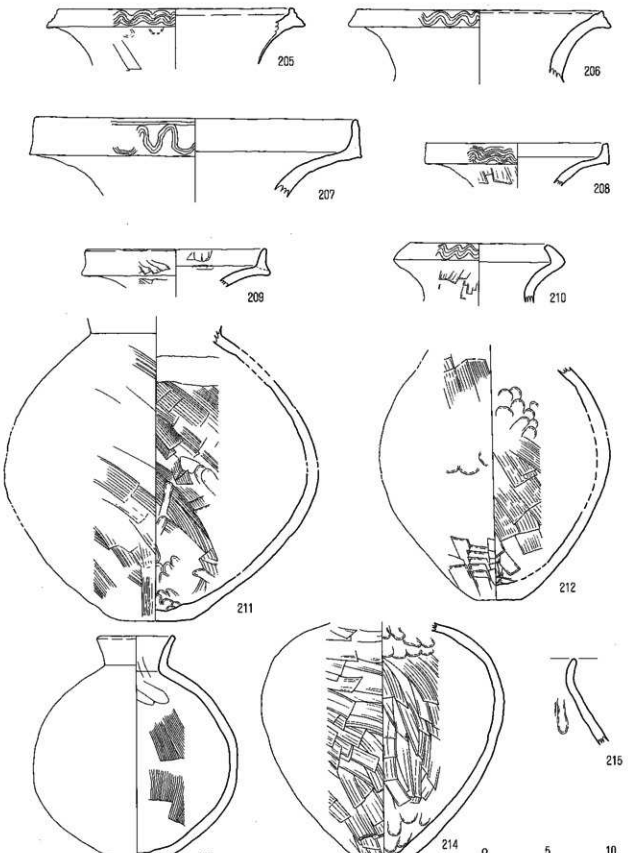
第48図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(5)　（Ｓ＝１／３）



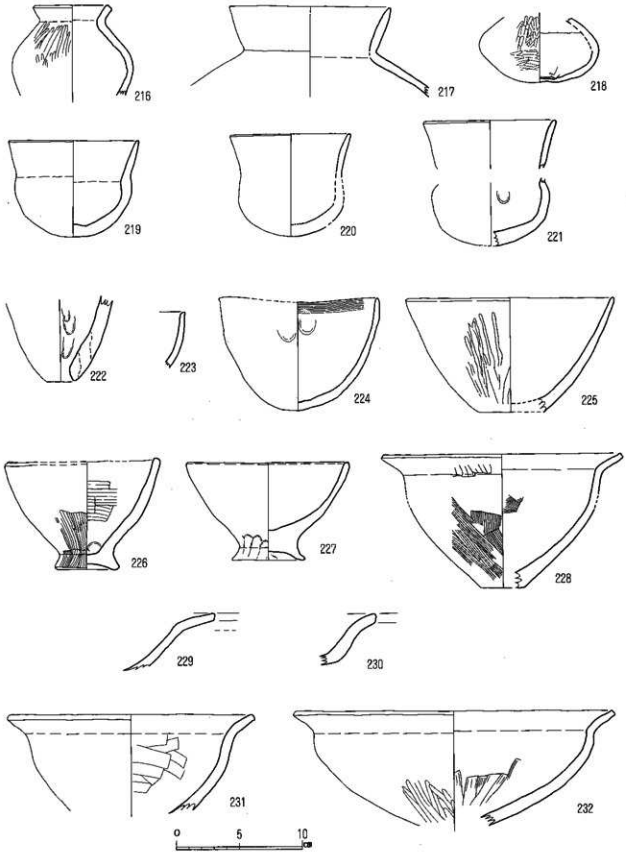
第49図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(6)　（Ｓ＝１／３）



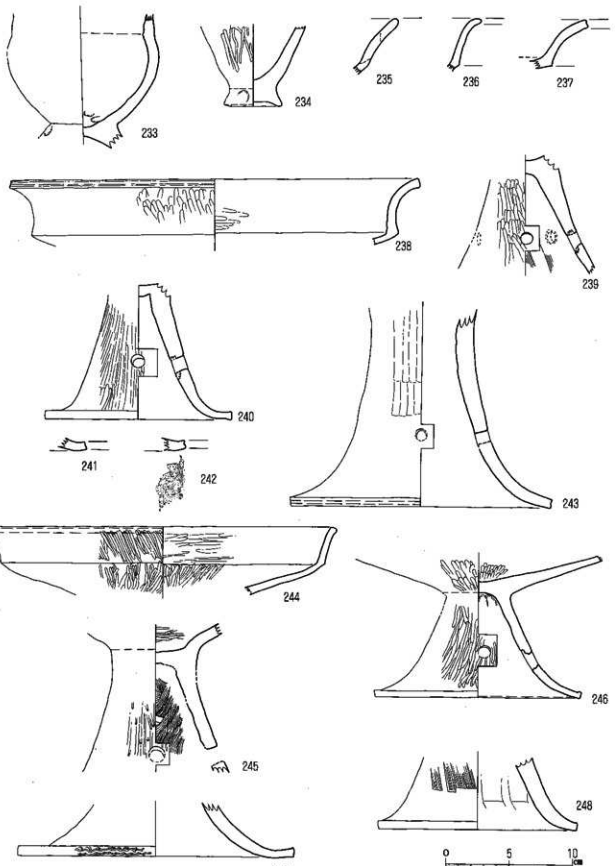
第50図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(7)　（Ｓ＝１／３）



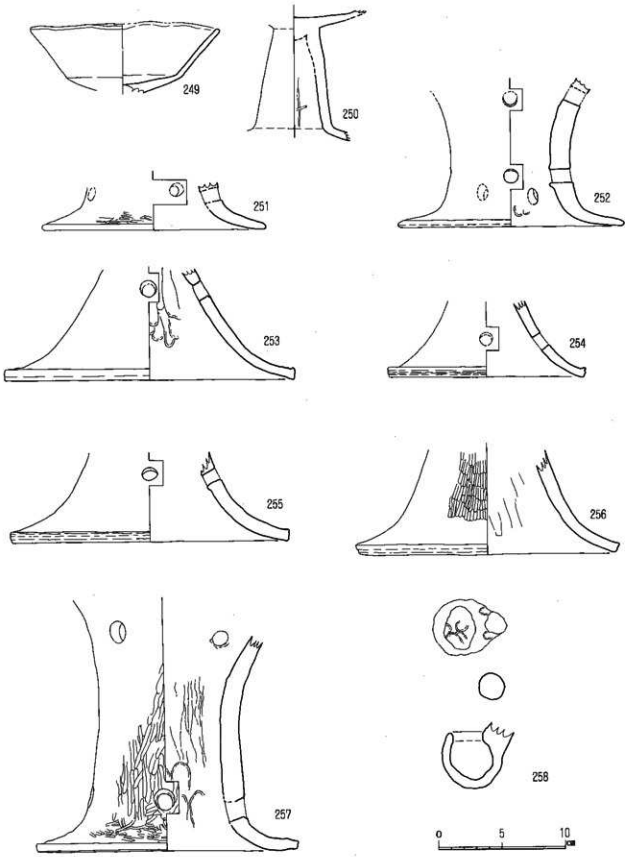
第51図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(8)　（Ｓ＝１／３）



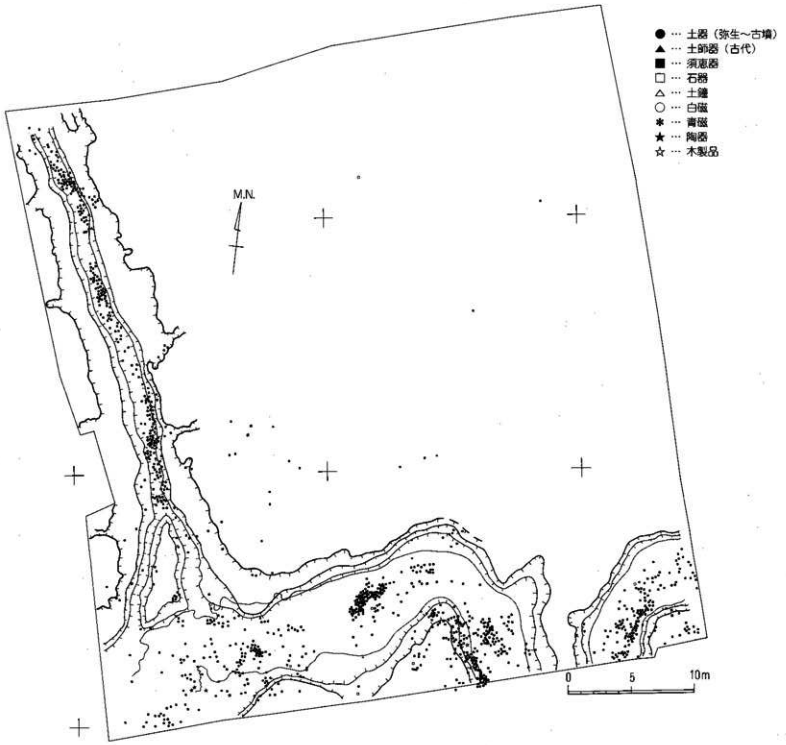
第52図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(9)　（Ｓ＝１／３）



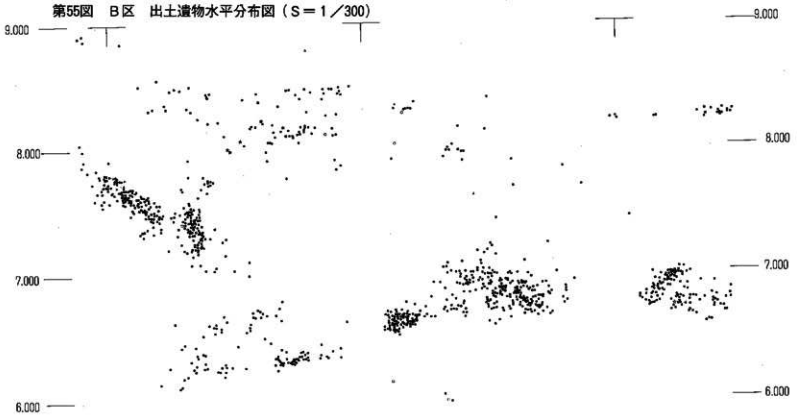
第53図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(10)　（Ｓ＝１／３）



第54図　B区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(1)　（Ｓ＝１／３）



第55図　B区　出土遺物水平分布図（S＝1／300）



第56図　B区　出土遺物垂直分布図　（S＝1／300）

B区　SE2（溝状遺構2）出土土器

259～271は甕である。259は口縁部に刻み目を持つ2条の貼り付け突帯を有す。内面はハケメが施されている。260から264は口縁部から頸部にかけてのもので、260と261には口縁端部に窪みが見られる。262は口縁端部に平坦面を持つ。263、264は口縁端部上位を外側に舌状に拡張されている。

265～267は頸部が「く」の字に外反する。267は胴部の張り出しが小さい。268は胴部が少し張り、口縁部がやや強めに外反する。外面にハケメ、内面にナデ調整が施されている。

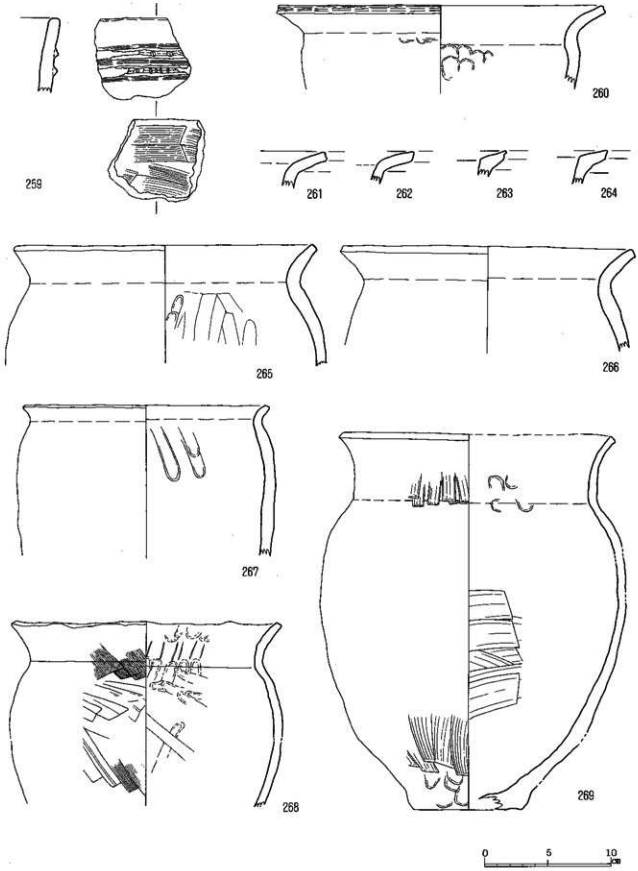
269～271は口縁部が頸部から垂直に立ち上がり、口縁部中位付近でゆるやかに外反する形状を呈す。口縁端部は下位が外側にわずかに拡張する。

272は大型の長頸壺の頸部である。273は小型の壺で口縁端部に平坦面を持つ。274は広口の壺で口縁部が大きくラッパ状に外反する。口縁端部は下位が斜め下方に拡張している。275は壺の胴部上半で頸部付近にハケメ調整の後、山形の線刻を入れている。276はどうぶで内外面ともハケメ調整を施している。また外面の胴部上半に渦巻き状と波状の線刻が見られる。277、28はいずれも平底の底部で278の外面にはケズリによる調整の跡が見られた。279は扁球状の胴部を持った小型丸底壺である。280は底部が尖底状で外面にミガキが見られる。

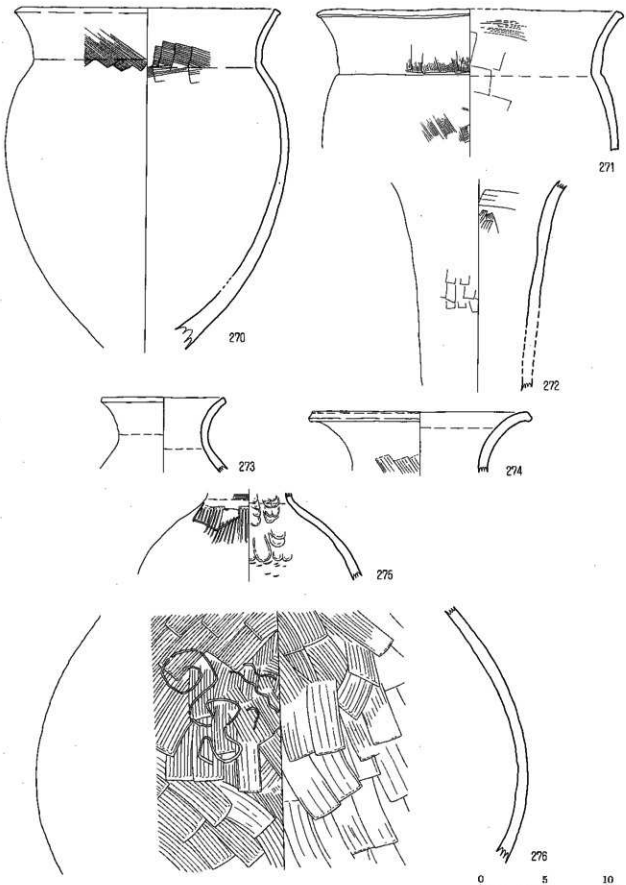
281～283は、鉢である。282、283の胴部は球状を呈し、283は高台を持つ。

284～288は高坏である。284は脚部が屈曲せずに広がる形状で外面にミガキを施し、脚部下位に穿孔を有す。285は坏底部が大きく広がりながらのび、屈曲部から口縁がやや外反しながら上方へのびる。口縁端部は平坦面を有している。286は、ほぼ完形で出土した。坏部は屈曲部からわずかに外反しながら斜め上方へのび、坏高の高い形状を作っている。脚部は広がり気味にのび、中位で若干膨らみを持つ。裾部は90度に近い角度で外反し、広い接地面を作っている。脚部にミガキが見られる。287は坏高の高い坏部を持ち、外面にミガキと丁寧なナデ、内面に横・斜め方向へのミガキが見られる。288は坏底部がラッパ状に広く開き、浅い皿状の形状を作っている。明瞭な屈曲部を持ち、垂直に近い角度で口縁部が上方にのびる。

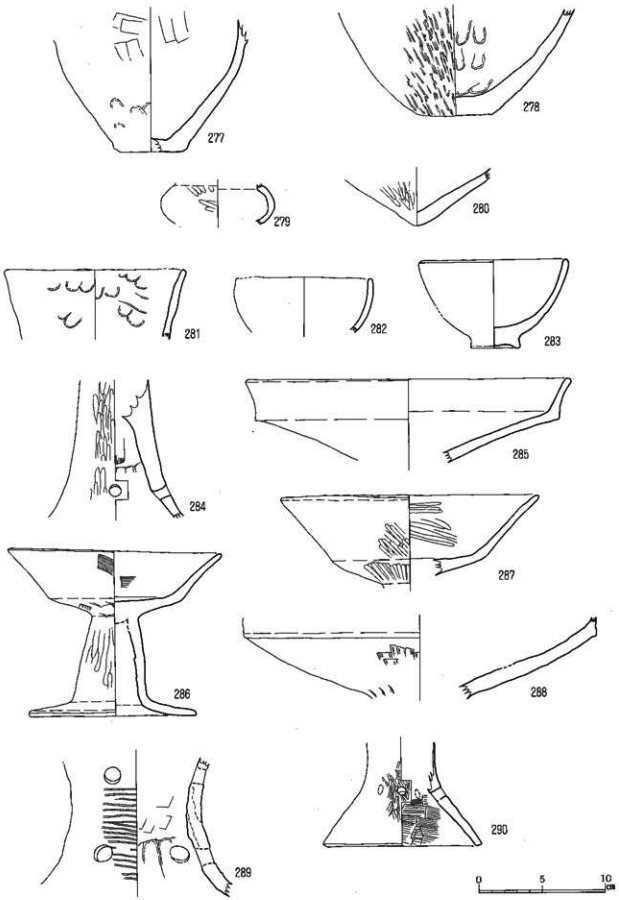
289、290は器台である。289は短い柱状部から緩やかに上下に開く形状を呈す。外面は灰黄色で横方向の凹線紋が柱状部を中心に施され、脚部の上位と下位に穿孔を有す。畿内の河内Ⅳ－4様式の中に類似したものが見られる。290は内湾気に開いた裾部を持つ。裾端部は平坦縁を持ち、内端面で接地する。外面にミガキ、内面にハケメによる調整が施され、屈曲部に穿孔が入る。



第57図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(1)　（Ｓ＝１／３）



第58図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(2)　（Ｓ＝１／３）

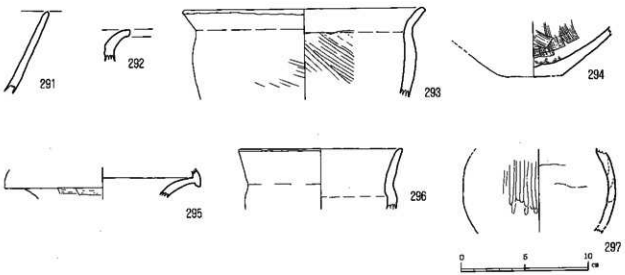


第59図　B区溝状遺構２（ＳＥ２）出土土器(3)　（Ｓ＝１／３）

B区　SO1（堰跡1）、SO5（堰跡5）出土土器

SO5から出土した遺物は、291の1点である。291は壺の口縁部で端部に向けてわずかに細くなりながら直線的に延びる形状を呈す。

292～297はSO1から出土したものである。292、293は口縁が外反した甕である。294は底部が平底で内面に指によるオサエとハケメによる調整が見られる。器種は、不明である。295は複合口縁壺の口縁部である。拡張部は内湾気味に内側に延びると思われる。296、297は小型丸底壺である。269は緩やかに外反し、端部が少し細くなる口縁部を持つ。297は球形の胴部を持ち、外面にミガキが施されている。



第60図　町屋敷B地区堰跡1、5（SO1、SO5）出土土器　（S＝1／3）

B区複数の遺構にまたがって出土した土器

298～306はＳＯ１（堰跡１）とＳＥ１（溝状遺構１）で出土した破片が接合したものである。

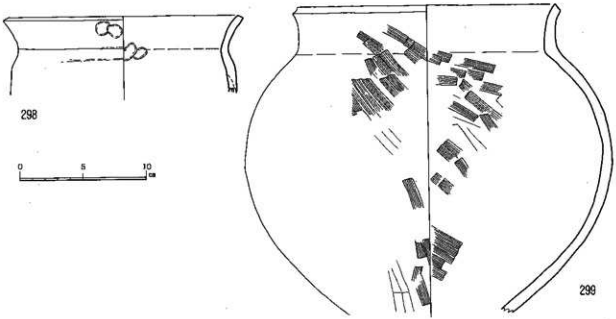
298、299は甕である。298は口縁部が緩やかに外反し、端部は平坦に仕上げている。299は口縁がほぼ垂直に立ち上がり、端部付近で短く外側へ屈曲する。口縁端部は窪みを持ち、内外面ともハケメ調整が施されている。

300～305は壺である。300は頸部で「く」の字屈曲し、直線的に外側にのびるやや長めの口縁を持つ。胴部上半に最大径があり、内外面ともハケメ調整が施されている。301は長頸壺の扁球状の胴部と思われる。胴部の上位に線刻が見られる。302はしまった頸部と扁球状の胴部を持つ。外面にハケメ、内面にハケメとナデによる指頭痕が見られる。303は丸底に近い平底状の底部を持つ。胴部は扁球状に近い形状であったと思われる。304は長胴形で底部は丸底に近い平底状を呈す。305は丸く張った胴部を有し、そのほぼ中央に最大径を持つ。底部は平底である。外面はにぶい黄橙色で縦方向のハケメが施され、内面には横と斜め方向へのハケメが施されている。

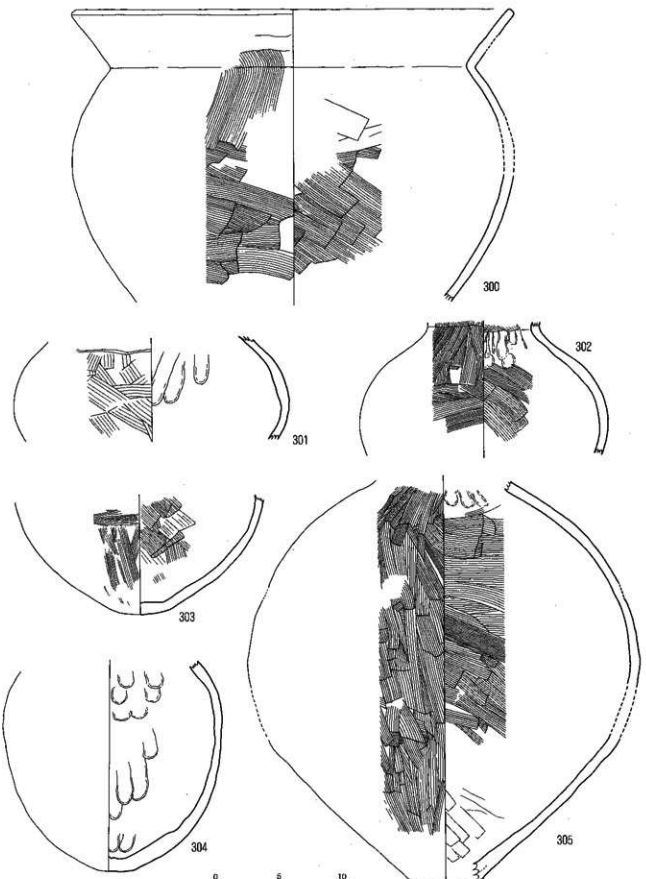
306は鉢で、口縁部直下に突帯状の拡張部を有す。307はＳＯ１とＳＥ２（溝状遺構２）で出土した破片が接合したものである。器種は甕で外反した口縁部と張りの小さい胴部を持つ。口縁端部の中央に窪みが見られ、胴部上位には三角形の断面を持つ貼り付け突帯を有す。外面は主に指によるナデとヨコナデであるが頸部にはハケメによる調整が見られる。内面は口縁部から頸部にかけてナデとヨコナデ、胴部に斜め方向のハケメが見られる。

308はＳＥ１とＳＥ２で出土した破片が接合したもので、器種は壺である。口縁部は外反し、端部は平坦である。長胴の形状を持つものであったと思われる。

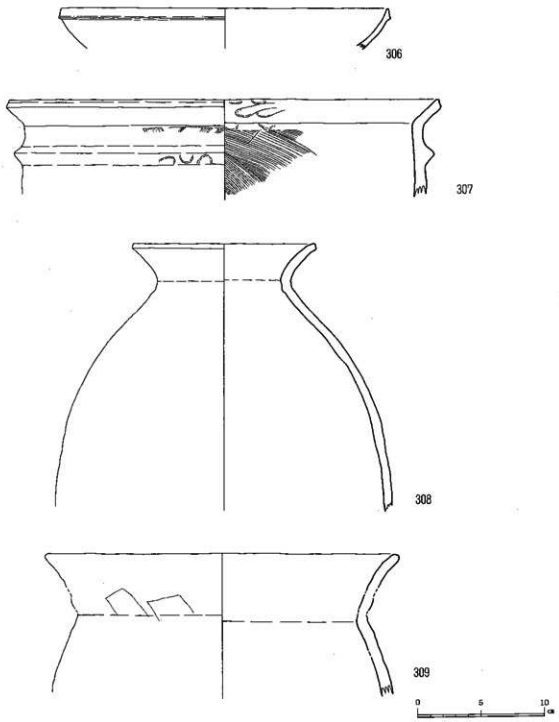
309はＢ区のＳＥ１とＡ区のＳＥ１とで出土した破片が接合したもので、外反した口縁部を持つ甕である。内外面とも風化気味で、外面の口縁部下位にハケメ調整が見られる。



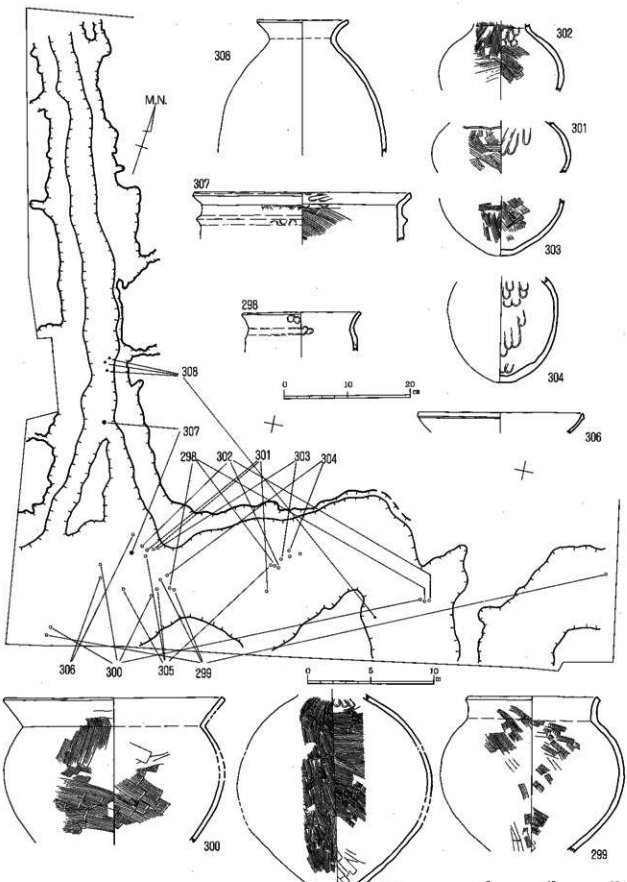
第61図　Ｂ区複数遺構出土土器(1)　（Ｓ＝１／３）



第62図　B区複数遺構出土土器(2)　（S＝1／3）



第63図　B区複数遺構出土土器(3)　（S＝1／3）



第64図　B区遺物出土位置図　（平面図S＝1／300、遺物S＝1／6）

第10表　B区出土土器観察表（古墳時代以前）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
141	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	25.8(推定)			ナデ、ハケメ、貼付刻み目突帯、スス付着	ナデ、ハケメ	浅黄橙色(10YR8/4)	灰白色(10YR7/1)	1～2mm程のにぶい赤褐色・黄灰色・灰色の粒。	
142	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	19.8(推定)			ナデ、ヨコナデ、斜方向のハケメ、指頭痕、スス付着	ナデ、ヨコナデ、横方向のハケメ、指頭痕、スス付着	浅黄橙色(2.5Y8/3)	灰白色(10YR7/1)	1～2mmの灰色・暗灰色・赤褐色・明赤灰色・輝石の粒。	
143	弥生土器	甕 口縁部	SE1 22層				ヨコナデ	ナデ	淡黄色(2.5Y8/3)	灰白色(10YR8/2)	2mm以下の暗赤褐色・明赤褐色・にぶい赤褐色・黒褐色・灰色・黒色の粒。	
144	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	20(推定)			ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色(2.5Y7/2)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の褐色・石英・輝石の粒。2mm以下の暗褐色の粒。3mm以下の黒色の粒。	後期後半
145	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層 SO1	30(推定)			ナデ、ヨコナデ、スス付着	ヨコナデ	浅黄橙色(10YR8/4)	褐灰色(10YR6/1)	2mm以下の長石・輝石の粒。3mm以下の黒色・灰褐色・褐色・石英の粒。	後期後半
146	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	29.7(推定)			縦・横・斜方向のハケメ、ナデ	横・斜方向のハケメ、黒斑あり	灰黄色(2.5Y6/2)	浅黄橙色(10YR8/3)	3mm以下の灰白色、赤褐色の粒。5mm以下の灰色の粒。	後期後半
147	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	25.8(推定)			ヨコナデ、ハケメ、一部に黒斑あり	縦・斜の工具ナデ、ヨコナデ、黒斑あり	浅黄橙色(10YR8/3)	灰黄色(2.5Y7/2)	0.5～6mmの褐色・暗褐色の粒。	後期後半
148	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	21.8(推定)			ナデ、縦・斜方向のハケメスス付着	ナデ、ハケメ	浅黄橙色(7.5YR8/4)	明褐灰色(7.5Y7/1)	1mm以下の酸化鉄の粒。1mm程の石英の粒。3mm程の灰色の粒。	後期後半
149	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	25.2(推定)			ヨコナデ、ハケメ、スス付着	ナデ、ヨコナデ、風化気味	にぶい黄橙色(10YR7/3)	明褐灰色(5YR7/2)	1mm以下の輝石の粒。2mm以下の石英の粒。3mm以下の長石の粒。4mm以下の黒褐色・黒色の粒。	後期後半
150	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	21.8(推定)			ナデ、ヨコナデ、斜方向のハケメ、スス付着	ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙色(10YR7/3)	灰黄褐色(10YR6/2)	2mm以下の黒色・灰白色の粒。3.5mm以下の黒褐色・褐色の粒。	後期後半
151	弥生土器	甕 胴～底部	SE1		5.8(推定)		工具による縦方向のナデ、オサエ、ナデ、スス付着	ナデ、オサエ	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	4mm以下の灰色・褐色・石英・長石・輝石の粒。	後期後半
152	弥生土器	甕 完形	SE1 22層	10.9	3.6	12.1	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭痕	ヨコナデ、ハケメ	浅黄色(2.5Y7/3)	浅黄色(2.5Y7/3)	1～2mmの灰色・黒色・白色・褐色・長石の粒。	
153	弥生土器	甕 胴～底部	SE1 22層		7.2(推定)		ナデ、ヨコナデ、丁寧なナデ、縦方向のハケメ、スス付着	丁寧なナデ	灰白色(10YR8/3)	暗灰色(N3/)	3mm以下の長石の粒。4mm以下の灰色・褐色・黒色の粒。	
154	弥生土器	甕 底部	SE1 22層		4.6		ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	灰白色(5Y7/1)	灰黄色(2.5Y7/2)	1～3mmの暗灰色・灰色・灰褐色・暗赤褐色の粒。	
155	弥生土器	甕 口縁～頸部	SE1 22層	19(推定)			ヨコナデ、工具によるオサエ	ナデ、ヨコナデ	淡赤橙色(2.5Y7/4)	明褐灰色(5YR7/2)	3mm以下の褐色・灰白色・石英・輝石の粒。4mm以下の黒褐色・灰褐色・暗褐色の粒。	156と同一個体、後期後半
156	弥生土器	甕 胴～底部	SE1 22層		10.3		ナデ、ハケメ、縦方向のミガキ、黒斑あり	ヨコナデ、ナデ、工具による縦方向のナデ、スス付着	浅黄橙色(7.5YR8/4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	3mm以下の褐色・灰色・暗褐色の粒。3.5mm以下の黒色の粒。4mm以下の灰褐色の粒。	
157	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	26(推定)			ナデ、ヨコナデ、スス付着	ナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	灰黄色(2.5Y7/2)	4mm以下の灰色・褐色の粒。	
158	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	20.1(推定)			ナデ、横方向のハケメ、指頭痕	ハケメ、ナデ	浅黄橙色(10YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の酸化鉄の粒。1mm程の長石の粒。1～3mmの灰色・黒色の粒。	終末期
159	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	21(推定)			ナデ、ハケメ、指頭痕、スス付着	ナデ、ハケメ、指頭痕、スス付着	灰黄色(2.5Y7/2)	灰色(N6/)	1～3mmの灰色・黒色・灰白色・にぶい褐色の粒。	終末期
160	弥生土器	甕 口縁～底部	SE1 22層	18.5(推定)	5.8(推定)	20.1(推定)	ナデ、ハケメ、オサエ、スス付着、指頭痕	ナデ、ハケメ、オサエ	にぶい黄橙色(10YR7/3)	浅黄橙色(10YR8/3)	2mm程の褐色・灰色・黒色・石英・長石の粒。	終末期
161	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1	12(推定)			ナデ、ハケメ	ハケメ	灰白色(10YR8/2)	灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の黒色・石英の粒。2mm以下の灰褐色の粒。4mm以下の褐灰色の粒。	終末期
162	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	7.3(推定)			工具によるヨコナデ、斜方向のハケメ、スス付着	ヨコナデ、斜ハケメ	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	3mm以下の灰色・灰褐色の粒。	終末期
163	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1				ナデ、ヨコナデ、タタキ	ナデ	淡橙色(5YR8/4)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	1mm以下の輝石の粒。2mm以下の石英の粒。3mm以下の灰白色・黒色の粒。5mm以下の灰褐色の粒。	終末期
164	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1	15.1(推定)			ナデ、ヨコナデ、オサエ、スス付着	ヨコナデ、スス付着	にぶい黄橙色(10YR7/3)	灰色(N5/)	1mm以下の灰白色・石英の粒。2.5mm以下の赤色の粒。3mm以下の黒色の粒。5mm以下の灰褐色・暗褐色の粒。	終末期
165	弥生終末～古墳初頭	甕 ほぼ完形	SE1 22層	11	3.6	10.1	工具によるナデ、ナデ、ハケメ、ケズリ	工具によるナデ、ハケメ、ミガキ	灰黄色(2.5Y7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	1～1.5mmの黒色・暗灰黄色・にぶい赤褐色・褐灰色・輝石の粒。2mm程の暗灰色・灰白色・黄灰色の粒。	
166	弥生終末～古墳初頭	甕 口縁～胴部	SE1 22層	12.4(推定)			ヨコナデ、ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	灰黄色(2.5Y7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1mm程の灰褐色・黒褐色・灰色・黒色・輝石の粒。3mm程の灰褐色・褐灰色の粒。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
167	弥生終末～古墳初頭	甕 口縁～底部	SE1 22層	8.6	4	9.9	ナデ、オサエ、指頭痕	ナデ、指頭痕	浅黄橙色(2.5YR8/3)	浅黄橙色(2.5YR8/3)	2.5mm以下の石英・長石・輝石の粒。3.5mm以下の灰色・黒色の粒。	
168	弥生終末～古墳初頭	甕 口縁～底部	SE1 22層	9 (推定)	4.2 (推定)	11.3	ナデ、オサエ、指頭痕	ハケメ、ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1mm以下の石英・輝石の粒。3mm以下の灰白色・黒色の粒。3mm以下の褐灰色の粒。	
169	土師器	甕 胴部	SE1 22層				タタキ、スス付着	ハケメ	灰白色(10YR7/1)	褐色(2.5YR4/3)	2～4mmのにぶい黄褐色・暗褐色・暗緑灰色・明黄灰色・赤褐色の粒。	古墳時代初頭
170	土師器	甕 胴部	SE1 22層				タタキ、スス付着	ハケメ	灰白色(10YR7/1)	褐色(2.5YR4/3)	2～4mmのにぶい黄褐色・暗褐色・暗緑灰色・明黄灰色・赤褐色の粒。	古墳時代初頭
171	弥生土器	甕 口縁～底部	SE1	5.3 (推定)	2.3	8.3	ナデ、指頭痕、スス付着	ナデ、指頭痕	にぶい橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	2mm以下の灰色・褐色・黒色・石英・輝石の粒。	
172	弥生土器	甕 口縁部	SE1				ナデ、ヨコナデ、上下へのハケメ、沈線	ナデ、ヨコナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	灰白色(10YR7/1)	1～2mmの灰色・青灰色・灰白色・茶色輝石の粒。	
173	弥生土器	甕 口縁部	SE1				ナデ、ヨコナデ、指頭痕、沈線	ナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい橙色(5YR7/3)	1～2mm青灰色・灰白色・暗青灰色の粒。	瀬戸内系の土器の影響が見られる。
174	弥生土器	甕 口縁部	SE1				ナデ、ヨコナデ、横ハケメ、沈線	ナデ、斜ハケメ	淡橙色(5YR8/4)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm程の灰白色・灰色・黒色・輝石の粒。	瀬戸内系の土器の影響が見られる。
175	弥生土器	甕 口縁部	SE1	10.6 (推定)			ヨコナデ、沈線、円形浮文	ヨコナデ・指頭痕	にぶい黄橙色(10YR6/3)	にぶい橙色(10YR5/4)	1～2mmの淡黄色・灰白色・輝石の粒。	瀬戸内系の土器の影響が見られる。
176	弥生土器	甕 口縁～頸部	SE1 22層	21.8 (推定)			ヨコナデ、オサエ、縦ハケメ、指頭痕	ナデ、ヨコナデ、オサエ、指頭痕、スス付着	灰白色(10YR8/2)	浅黄橙色(2.5YR8/3)	1mm程の黄灰色・灰色・オリーブ黒色・赤褐色の粒。2mm程のにぶい褐色・褐灰色の粒。	
177	弥生土器	甕 頸部	SE1 22層				ナデ、ヨコナデ、縦・斜ハケメ、押文	ナデ、斜ハケメ、胴部面が広い	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2～3mm明褐灰色・灰色・褐灰色・灰オリーブ色・灰白色の粒。	
178	弥生土器	甕 頸～底部	SE1 22層				ヨコナデ、ミガキ、ナデ、斜・横方向のハケメ、スス付着	ナデ、オサエ、縦・斜方向のハケメ、指頭痕	橙色(2.5YR7/6)	灰色(N5/)	1～2mmの青黒色・灰色・暗青灰色・にぶい赤褐色・にぶい橙色の粒。2～4mmの青黒色・灰色・灰褐色の粒。	
179	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	19.5 (推定)			ナデ、ヨコナデ指頭痕	ナデ、ヨコナデ、風化が著しい	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色(2.5YR8/3)	1～2mmの灰色・褐灰色・にぶい赤褐色・赤色・黒色の粒。	
180	弥生土器	甕 胴～底部	SE1 22層		2.4 (推定)		ナデ、風化が著しい	ナデ、シボリ、ハケメ、胴裾部が広い	浅黄橙色(2.5YR8/4)	灰色(N4/)	1～2mmの灰色・灰赤色・暗赤褐色・褐灰色・灰白色・黒色の粒。	
181	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層	14.5			ヨコナデ、ハケメ、工具によるオサエ、スス付着	ヨコナデ、タテナデ、指オサエ	にぶい黄橙色(10YR7/2)	暗灰色(N3/)	1～3mmの灰色・白色・褐色の粒。	
182	弥生土器	甕 胴部～底部	SE1 22層		9.9		ナデ、縦・斜方向のハケメ又は有、黒斑あり	ナデ、縦方向のナデ	にぶい黄橙色(10YR7/3)	暗灰色(N3/)	5～6mmの灰色の粒。3mm以下の灰色・長石の粒。2mm以下の黒色の粒。1.5mm以下の石英の粒。	
183	弥生土器	長頸壺 口縁～頸部	SE1 22層	6.8 (推定)			ナデ、ヨコナデの後ミガキ。一部に指頭痕り	ナデ、ヨコナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色(10YR8/3)	3mm以下の灰色・灰褐色・石英の粒。3mm以下の長石の粒。	
184	弥生土器	長頸壺 口縁～頸部	SE1 22層	9.1 (推定)			ナデ、ヨコナデの後ミガキ、一部に黒斑	ヨコナデ、工具ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/4)	灰白色(10YR8/1)	1mm以下の黒褐色・石英・輝石の粒。1.5mm以下の黒褐色の粒。	
185	弥生土器	長頸壺 完形	SE1	9.1	4.4	20.8	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、工具によるナデ、撫なでナデ、貼付突帯	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色(10YR7/3)	暗灰色(N3/)	1mm以下の暗灰色・灰白色・赤色の粒。	
186	弥生土器	長頸壺 頸～胴部	SE1 22層				ナデ、ハケメ	ナデ、ヨコナデ、横ハケメ	浅黄橙色(10YR8/3)	灰色(N5/)	1mm以下の黒色の粒。	
187	弥生土器	長頸壺 胴部	SE1 22層				ミガキ、一部にスス付着	ナデ、工具ナデ	にぶい黄橙色(10YR7/3)	黒色(2.5Y2/1)	2mm以下の灰色の粒。3mm以下の黒色・褐色の粒。	
188	弥生土器	長頸壺 頸～胴部	SE1 22層				ミガキ、一部黒化、丹塗り	縦・横方向へのエ具ナデシボリ	浅黄橙色(10YR8/3)	灰色(N4/)	1mm以下の灰白色の粒。4mm以下の黒褐色・灰褐色の粒。	
189	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1 22層	17 (推定)			ナデ	ナデ、横・斜方向へのエ具ナデ、一部に黒斑	にぶい橙色(10YR8/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の白色の粒。3mm以下の褐色・灰色の粒。4mm以下の黒色の粒。	後期後半
190	弥生土器	壺 頸～底部	SE1 22層		5.6 (推定)		ナデ、縦・斜方向のハケメ、スス付着	ナデ、丁寧なナデ	にぶい橙色(2.5Y6/4)	灰褐色(2.5YR5/2)	5mm以下の灰色・黄灰色の粒。	後期後半
191	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE1	11.1 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭痕	ナデ、指頭痕	浅黄橙色(10YR8/3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1～2mmの黒褐色・灰褐色・灰色・黒色の粒。3mm程の灰褐色の粒。	後期後半
193	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE1 22層	14.2 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ハケメ、ハケで調整後ナデ	ナデ、ヨコナデ	灰白色(10YR8/1)	浅黄橙色(10YR8/3)	1mm程の石英・長石の粒。3mm以下の灰色の粒。	後期後半

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
193	弥生土器	※ 口縁～頸部	SE1 22層 L1縁～頸部 SE1 11層	10.2			ナデ、縦・横方向のハケメ、ヨコナデ、竹管文	ヨコナデ、ハケメ、顆粒に粘土の盛り	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	2mm程の石英の粒、3mm程の暗褐色・黒色の粒。4mm以下の灰褐色の粒。	後期後半
194	弥生土器	※ 口縁～頸部	SE1	8.7 (復元径)			ナデ、ヨコナデ、ハケメ、一部ユスリ状痕	ナデ、ハケメ、ナデ上げによる粘土の盛り	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	ナリーブ黄色 (5Y8.5/4)	1mm以下の石英の粒。2mm以下の灰色の粒。3mm以下の黄橙色の粒。	後期後半
195	弥生土器	※ 肩～底部	SE1		4.8		ナデ、縦方向のハケメ	ナデ、ヨコナデ、指頭痕、底面付近に粘土の盛り	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mm以下の輝石の粒。2mm以下の灰褐色・石英の粒。3mm以下の暗褐色の粒	後期後半
196	弥生土器	※ 口縁～頸部	SE1 22層				ヨコナデ、ナデ、ヘラ状工具によるナデ	ヨコナデ、ナデ、一部摩耗	浅黄橙色 (10YR8/3)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の暗褐色・石英の粒。3mm以下の灰褐色・黒色・灰色の粒。	後期後半
197	弥生土器	※ 口縁～頸部	SE1 22層	7.6 (推定)			ナデ	ナデ、指頭痕	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1.5mm以下の石英・輝石の粒。3mm以下の長石の粒。3.5mm以下の灰色・褐色・黒色の粒。	
198	弥生土器	※ 口縁～頸部	SE1	10 (推定)			ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	浅黄色 (2.5Y7/3)	浅黄色 (2.5Y7/3)	2.5mm以下の褐色の粒。3mm以下の黒色・暗灰色の粒。	
199	弥生土器	長頸壺 口縁部	SE1 22層	8.8 (推定)			ヨコナデ、ヨコナデの後横・縦方向のミガキ	ヨコナデ、一部ミガキ	灰白色 (10YR8/2)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1mm程の長石の粒。2mm程の灰褐色の粒。	
200	弥生土器	壺 口縁部	SE1 22層	13 (推定)			ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	1mm以下の石英・長石の粒。2mm以下の灰色の粒。	
201	弥生土器	壺 胴～底部	SE1 22層		10.4 (推定)		ナデ、風化が著しい	ナデ、縦・横方向のハケメ、一部黒斑あり、風化が著しい	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の石英の粒。2mm以下の黒色・黄褐色・黄橙色の粒。4mm以下の灰色の粒。	
202	弥生土器	壺 口縁部	SE1 11層				ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	灰白色 (2.5Y8/2)	浅橙色 (5YR8/4)	1～2mmの黒色・灰色・明褐色・褐灰色の粒。3～4mmの明褐灰色の粒。	
203	弥生土器	壺 口縁部	SE1				ヨコナデ	ヨコナデ、スス付着	にぶい橙色 (5YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1～2mmの黒色・灰色・橙色・にぶい褐色・褐灰色・輝石の粒。	
204	弥生土器	壺 胴部	SE1 22層				縦・横方向のハケメ、ヨコナデ	ナデ、指頭痕	にぶい橙色 (5YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の黒色の粒。	
205	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SE1 22層	18.2 (推定)			櫛描波状文、ヨコナデ、工具ナデ、ナデ上、指頭痕	ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の輝石の粒。1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の灰色・黒色の粒。3mm以下の暗褐色の粒。	
206	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SE1 22層	19.4 (推定)			ナデ、櫛描波状文	ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2mm以下の褐色・石英の粒。3mm以下の灰色・黒色の粒。	
207	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SE1 22層	25.4 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ヨコナデの後櫛描波状文	ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の黒色・石英の粒。2.5mm以下の灰褐色の粒。	
208	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SO1	14.2 (復元)			ナデ、ハケメ	ナデ、指頭痕	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1mm程の黒色・にぶい黄褐色・褐灰色・灰色の粒。2～3mmの灰黄褐色・青灰色の粒。	
209	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SE1 22層	14.2 (推定)			ナデ、ヨコナデの後ハケメ、工具ナデ	ヨコナデ、工具ナデ、工具によるオサエ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の灰白色・石英の粒。3mm以下の輝石の粒。4mm以下の灰褐色の粒。5mm以下の暗褐色の粒。	
210	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SE1 22層	10.8 (推定)			櫛描波状文、横方向のハケメ	ナデ、ヨコナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	1～2mmの黒色・灰色・にぶい橙色の粒4～6mmの白色・灰色・黄灰色・灰褐色・黒色の粒。	
211	弥生土器	※ 胴～底部	SE1 22層		6.8		ナデ、ハケメ、風化が著しい	ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	2mm以下の灰色・黒色の粒。	終末期
212	弥生土器	※ 胴～底部	SE1 6層	5.7 (復元)	1.9	18.1	ナデ、ハケメ、指頭痕、風化が著しい	ナデ、ハケメ、指頭痕、刺突部が広い	にぶい黄橙色 (10YR6/2)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	1～3mm7明褐色・灰色・黒色・暗灰色・灰赤色の粒。	終末期
213	弥生土器	※ ほぼ完形	SE1 11層		3		ナデ、黒斑あり	ナデ、工具ナデ、頸部に粘土のシボリ	浅黄橙色 (10YR8/3)	灰白色 (2.5Y7/1)	2mm以下の石英・長石・輝石の粒。3.5mm以下の褐色・灰色・黒色の粒。	終末期
214	弥生土器	※ 胴～底部	SE1				ハケメ、風化気味	ナデ、ハケメ、指頭痕、ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1～3mmの明褐灰色・にぶい黄色・暗灰色・灰色・黒色の粒。	終末期
215	弥生土器	※ 口縁～胴部	SE1 22層				ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ、指頭痕	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	1.5mm程の石英の粒。3mm以下の赤褐色・灰白色・褐灰色の粒。	終末期
216	弥生終末～古墳初頭	小型丸底壺 胴～底部	SE1 22層	5.4 (推定)			ヨコナデ、ナデ、丁寧なナデ	ナデ	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/2)	1mm程の灰色・石英・輝石の粒。3mm程の灰色の粒。	
217	土師器	壺 口縁～胴部	SE1 22層	12.6 (推定)			ナデ	ナデ	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	浅橙色 (5YR6/4)	1.5mm以下の黒褐色の粒。2mm以下の灰色・褐色の粒。	古墳時代前葉
218	弥生終末～古墳初頭	壺 胴～底部	SE1		2.8		ミガキ	ナデ、工具によるオサエ	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm以下の灰白色・灰赤色・灰色・赤色の粒。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
219	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1 22M	10.4 (推定)	3.1	7.7	ナデ、ヨコナデ、ス ス付着	ナデ、ヨコナデ、ス ス付着	淡赤橙色 (5YR7/4)	淡赤橙色 (5YR7/4)	1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の明褐灰色・黒色の粒。3mm以下の灰色の粒。	
220	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1 22層	9.4 (推定)	2.5	8.1	ヨコナデ、風化気味	ヨコナデ、風化気味	明褐灰色 (5YR8/1)	灰白色 (5YR8/2)	1mm以下の赤褐色・黒色・石英の粒。	
221	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE1 22層	10.3 (推定)			ナデ、ヨコナデ、黒斑あり	ナデ、オサエ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1mm以下の石英の粒。1.5mm以下の褐灰色の粒。2mm以下の暗灰色・黒色の粒。	
222	弥生土器	甕 底部	SE1 23層				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	2mm以下の石英の粒。3mm以下の灰色・黒色の粒。4mm以下の灰褐色の粒。5mm以下の暗褐色の粒。	後期後半
223	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE1				ナデ、ヨコナデ、横方向のハケメの後斜方向のハケメ	ヨコナデ、斜方向のハケメ	灰白色 (7.5YR8/2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	0.5～3mmの褐色の粒。	
224	弥生土器	鉢 口縁～底部	SE1 22層	12.5	1.8	8.7	ナデ、ヨコナデ、オサエ、指頭痕、風化が著しい	横方向のハケメ、オサエ、ナデ、指頭痕	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1mm以下の黒色の粒。3mm以下の暗灰色の粒。	
225	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE1	16.2 (推定)			ナデ、オサエ、指頭痕	ナデ	灰白色 (10YR8/2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	1mm以下の石英・長石の粒。2mm以下の灰色・褐色の粒。	
226	弥生土器	鉢 完形	SE1 22層	11.8	4.6	8.9	ヨコナデ、粗いハケメ	ヨコナデ、ハケメ、オサエ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1mm程の黒色・酸化鉄の粒。1～2mmの白色・輝石の粒。2mm程の褐色・灰色の粒。1～3mmの黒色の粒。	
227	弥生土器	鉢 口縁～頸部	SE1 22層	12.7 (推定)	5.6	7.9	ヨコナデ、工具ナデ、一部に黒斑あり	ナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	浅黄色 (2.5Y7/3)	1mm以下の石英・輝石の粒。2.5mm以下の黒色の粒。	
228	弥生土器	鉢 口縁～底部	SE1 22層	18.8 (推定)	3.5 (推定)	10.6 (推定)	ヨコナデ、ハケメ	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、ス ス付着	浅黄橙色 (10YR8/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.5～2mmの褐色の粒。	
229	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE1 22層				ヨコナデ、工具ナデ	横・斜方向の工具ナデ、ス ス付着、一部に黒斑あり	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の灰白色の粒。4mm以下の赤褐色・黒褐色の粒。	
230	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE1 22層				ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰色 (N4/)	1mm以下の暗赤色・赤灰色・黒色・輝石の粒。1mm程の灰白色の粒。	
231	弥生土器	浅鉢 口縁～胴部	SE1	19.2 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ス ス付着、風化気味	工具による横・斜方向のナデ、風化気味	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	淡橙色 (5YR8/3)	2mm以下の赤褐色・灰白色・輝石の粒。3mm以下の灰褐色・黒色の粒。	
232	弥生土器	浅鉢 口縁～胴部	SE1 22層	25 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ス ス付着、風化気味	ヨコナデ、工具による縦方向のナデ、ス ス付着	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅黄色 (2.5Y7/3)	2mm以下の赤褐色・石英・長石の粒。3mm以下の暗褐色・黒色の粒。4mm程の粒。	
233	弥生終末～古墳初頭	鉢 胴～底部	SE1 22層				ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、オサエ、指頭痕	淡橙色 (5YR8/3)	淡橙色 (10YR7/3)	1mm以下の黒色の粒。4mm以下の火砕の粒。5mm以下の灰色の粒。	
234	弥生終末～古墳初頭	鉢 底部	SE1 22層		4		ヘラミガキ、ナデ、オサエ、指頭痕、ス ス付着	ナデ、黒斑あり	灰白色 (2.5Y8/2)	黄灰色 (2.5Y5/1)	3mm以下の灰褐色の粒。4mm以下の灰白色・灰色の粒。	
235	弥生土器	高坏 口縁部	SE1				ヨコナデ、縦・横方向へのミガキ	横方向へのミガキ、ス ス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	2mm以下の灰褐色・褐灰色・灰色・黒色の粒。	後期後半
236	弥生土器	高坏 口縁部	SE1				ヨコナデ、横方向のミガキ	横方向のミガキ、ス ス付着	にぶい橙色 (10YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1mm以下の褐灰色・黒褐色の粒。	後期後半
237	弥生土器	高坏 口縁部	SE1 22層				ヨコナデ、ヨコナデの後ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	1mm以下の長石の粒。4mm以下の褐灰色・褐色・灰色の粒。	後期後半
238	弥生土器	高坏 口縁～坏部	SE1 22層	32.2 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ヨコナデの後縦方向のミガキ	ヨコナデの後ミガキ、部分的にス ス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄色 (10YR7/4)	3mm以下の灰色・灰褐色・灰白色の粒。	後期後半
239	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層				ミガキ、磨孔	オサエ、ハケメ、ス ス付着	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の石英・輝石の粒。2mm以下の灰白色・褐色の粒。3mm以下の灰褐色の粒。	後期後半
240	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層		14.8 (推定)		縦方向のミガキ、ナデ、磨孔	ナデ、ヨコナデ	灰白色 (5.5Y8/2)	暗青灰色 (5PB4/1)	1mm以下の灰色・褐色・石英・輝石の粒。	後期後半
241	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層				ナデ	ナデ、布目痕あり	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1.5mm以下の石英の粒。2.5mm以下の黒色・暗褐色の粒。	後期後半
242	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層				ナデ	ナデ、布目痕あり	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1.5mm以下の輝石の粒。3.5mm以下の黒色・暗褐色の粒。	後期後半
243	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層			20.5 (推定)	ナデ、丁寧なナデ	ナデ	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅黄色 (2.5Y6/3)	2mm以下の石英・長石の粒。3mm以下の灰色・褐色・黒色の粒。	後期後半
244	弥生土器	高坏 坏部	SE1 22層	35.6 (推定)			ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	2mm以下の灰白色・暗灰色・酸化鉄の粒。	終末期
245	弥生土器	高坏 脚部	SE1 11M				ハケ状工具による縦方向のナデ、ナデ	ハケメ、工具によるオサエ	淡黄橙色 (10YR8/3)	淡黄橙色 (7.5YR8/3)	1mm以下の酸化鉄・石英の粒。1mm程の灰色の粒。	終末期
246	弥生土器	高坏 受～脚部	SE1 22層		16.3 (推定)		ヨコナデ、ミガキ、磨孔	ヨコナデ、オサエ、指頭痕	にぶい橙色 (2.5YR6/4)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	2mm以下の灰白色・赤色・灰褐色の粒。	終末期

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm)				手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面		
247	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層			21.8 (推定)		ヨコナデ、ナデ、波状線刻、連続一筒文	ナデ、ヨコナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	2mm以下の灰色・褐色・長石の粒。	終末期
248	弥生土器	高坏 脚部	SE1 22層	14.8				ナデ、ハケメ	ナデ、工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2mm以下の黒色・褐色・石英の粒。3mm以下の褐灰色の粒。	終末期
249	土師器	高坏 坏部	SE1 22層					ヨコナデ、風化気味	ヨコナデ、風化気味	浅黄橙色 (2.5Y8/3)	灰白色 (2.5Y8/2)	1mm以下の黒色・石英の粒。1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の灰色・褐灰色の粒。	古墳時代初頭
250	土師器	高坏 坏一脚部	SE1 22層					ヨコナデ、ナデ、工具によるオサエ、スス付着、風化気味	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	褐灰色 (7.5YR6/1)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	1mm以下の石英・輝石の粒。1.5mm以下の輝石の粒。2mm以下の灰色・黒色の粒。	古墳時代初頭
251	弥生土器	器台 脚部	SE1 22層			17.4 (推定)		ナデ、ヨコナデ、穿孔、一部ミガキ	ナデ	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	1mm以下の石英の粒。2mm以下の輝石の粒。3mm以下の灰色・黒褐色の粒。	後期後半
252	弥生土器	器台 脚部	SE1 23層			17.6 (推定)		ナデ、穿孔	ナデ、指頭痕	灰黄色 (2.5Y7/2)	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	1～3mmの灰色・オリーブ灰色・褐灰色・赤褐色・黒色の粒。	後期後半
253	弥生土器	器台 脚部	SE1 23層			22.8 (推定)		ナデ、穿孔	ナデ、工具ナデ	灰白色 (2.5Y8/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	3mm以下の石英・長石・輝石の粒。5.5mm以下の灰色・明褐色・黒色の粒。	後期後半
254	弥生土器	器台 脚部	SE1 22層			15.4 (推定)		ナデ、穿孔	ナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	灰白色 (2.5Y8/2)	2mm以下の灰色・石英・長石・輝石の粒。	後期後半
255	弥生土器	器台 脚部	SE1 23層			23 (推定)		ナデ、穿孔、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2mm程の輝石の粒。2mm以下の石英・長石の粒。3mm以下の灰色・黒褐色の粒。	後期後半
256	弥生土器	器台 脚部	SE1 22層			20.4 (推定)		ナデ、ヨコナデ、縦方向のミガキ	ナデ、ヨコナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	2mm以下の黒色・長石の粒。3mm以下の灰色・黒褐色・灰褐色の粒。	後期後半
257	弥生土器	器台 脚～裾部	SE1 22層			19 (推定)		ナデ、ヨコナデ、縦方向のミガキ、オサエ、指頭痕、粘土の張り	ナデ、ヨコナデ、縦方向のミガキ、オサエ、指頭痕、粘土の張り	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の石英の粒。2mm以下の褐粗色・灰褐色・灰白色・輝石の粒。2.5mm以下の褐色の粒。	
258	弥生土器	鉢形態土器 杯部	SE1					ナデ	ナデ、ヨコナデ、指頭痕	褐灰色 (10YR6/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の灰白色・輝石の粒。4mm以下の灰褐色・黒色の粒。	後期後半
259	弥生土器	甕 口縁部	SE2 6層					ハケメの後ヨコナデ ナデ、貼付刻み目突帯	ナデ、ハケメ	浅黄橙色 (10YR8/3)	橙灰色 (10YR6/1)	1mm程のにぶい橙色・赤灰色・灰褐色・赤灰色・輝石の粒色の粒。突帯の矢印部がない。	突帯の欠損部が広い
260	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE3 6層	25.6 (推定)				ナデ、ヨコナデ、指頭痕	ナデ、ヨコナデ、指頭痕	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の灰色・明黄灰色・灰黄褐色・赤灰色・輝石・石英の粒。1.5mm以下の黒色の粒。	
261	弥生土器	甕 口縁部	SE2 6層					ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR7/1)	2mm以下の灰褐色・褐灰色・茶灰色・黒色の粒。2～3mmの灰色・灰白色の粒。	
262	弥生土器	甕 口縁部	SE2 6層					ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅黄色 (2.5Y7/3)	2mm以下の灰色・オリーブ黒色・灰黄色・にぶい赤褐色・黒石・石英の粒。	
263	弥生土器	甕 口縁部	SE2 6層					ナデ、ヨコナデ	工具ナデ	浅黄色 (2.5Y8/3)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の灰褐色・褐色・橙色・赤灰色の粒。3mm程のにぶい赤褐色の粒。	
264	弥生土器	甕 口縁部	SE2 6層					ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	灰白色 (10YR8/2)	2mm以下の黄灰色・にぶい黄色・にぶい黄褐色・橙色・暗青灰色・輝石の粒。	
265	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	23.3 (推定)				ナデ、ス付着	ナデ、ヨコナデ、工具ナデ、指頭痕	にぶい黄色 (10YR7/2)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	1.5mm以下の石英の粒。2mm以下の黄橙色・輝石の粒。3mm以下の褐色の粒。5mm以下の灰色の粒。	終末期
266	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	22.3 (推定)				ナデ、ヨコナデ、スス付着	ナデ、ヨコナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	灰黄色 (2.5Y7/2)	2mm以下の輝石の粒。3mm以下の灰色・黒色・灰褐色の粒。	終末期
267	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	18.8 (推定)				ナデ、ヨコナデ、スス付着、風化気味	ナデ、指頭痕、風化気味	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の石英・輝石の粒。3mm以下の灰色・黒色の粒。4mm以下の暗褐色の粒。	終末期
268	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	20.6 (推定)				ナデ、ハケメ、スス付着	ナデ、ハケメ、工具によるオサエ、指頭痕・黒斑あり	浅黄橙色 (10YR8/3)	黄橙色 (10YR8/3)	1mm以下の灰色・輝石の粒。3～5mmの灰色の粒。	
269	弥生土器	甕 口縁～底部	SE2 6層	21.4 (推定)	7 (推定)	30.4		ナデ、ヨコナデ、オサエ、ハケメ、指頭痕、スス付着	ヨコナデ、ハケメ、指頭痕、風化が著しい	灰黄色 (2.5Y7/2)	橙色 (2.5YR7/6)	2～5mmの灰色・灰褐色・暗赤褐色・赤褐色・黒色の粒。	
270	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	20.2 (推定)				ナデ、スス付着	ナデ、ヨコナデ、ハケメの後ナデ	浅黄色 (2.5Y8/4)	黄灰色 (2.5Y5/1)	2mm以下の石英・輝石の粒。4mm以下の長石の粒。4.5mm以下の黒色・灰色・褐色の粒。	
271	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層	23 (推定)				ヨコナデ、ハケメ、スス付着	横・斜方向のハケメ、スス付着	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/2)	5mm以下の灰白色・灰色の粒。	

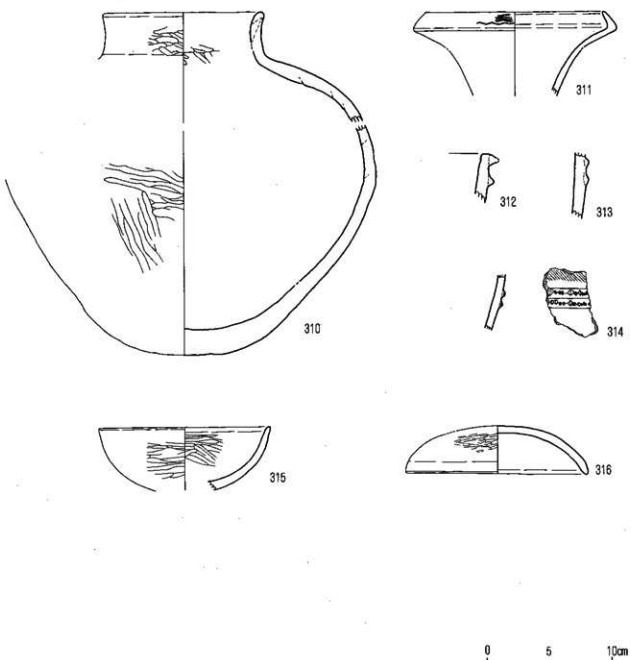
遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内部	胎土の特徴	備考
272	弥生土器	長頸壺 頸部	SE2 6層				ハケメの後ナデ、ヨコナデ、黒斑あり	ナデ、ハケメ	灰白色 (2.5YR7/1)	灰色 (N5/)	1mm以下の輝石・石英の粒。3mm程の褐色・灰色の粒。	
273	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE2 6層	9.6 (推定)			ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	2mm以下の灰色・褐色の粒。3mm以下の黒褐色・石英の粒。	
274	弥生土器	壺 口縁～頸部	SE2 6層	17			ナデ、ハケで調整後ナデ	ナデ	淡橙色 (5YR8/3)	淡黄橙色 (2.5YR8/3)	1mm程の石英・雲化物の粒。2mm程の灰色の粒。	
275	弥生土器	壺 胴部	SE2 6層				ヨコナデ、縦方向のミガキ、横斑あり	ナデ	灰白色 (5Y7/1)	灰白色 (10YR8/1)	1mm以下の雲化物の粒。1mm程の白色・石英の粒。2mm以下の灰色の粒。	
276	弥生土器	壺 胴部	SE2 6層				ハケメ、丁寧なナデ風化が著しい	ハケメ、風化が著しい	灰白色 (10YR8/2)	暗灰色 (N3/)	1～3mm灰色・明赤灰色・赤灰色の粒。	
277	弥生土器	壺 胴～底部	SE2 6層		5 (確定)		ナデ、ハケメの後ナデ、一部に黒斑、風化が著しい	ナデ、ハケメの後ナデ、オサエ、風化が著しい	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の白色・石英・輝石・雲化物の粒。1mm程の灰色の粒。3mm程の灰色の粒。	
278	弥生土器	壺 底部	SE2 6層		5.9		ナデ、ケズリ、スス付着	ナデ、指頭痕、スス付着	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰白色 (10YR8/1)	1mm程の赤色の粒。1～2mmの黒色・灰色・褐色・暗赤褐色・オリーブ褐色の粒。3mm程の灰色の粒。	
279	弥生土器	壺 胴部	SE2 6層				ミガキ	ヨコナデ	にぶい橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の黒褐色の粒。	終末期
280	土師器	壺 底部	SE2 6層		4.2		ミガキ、風化気味	ナデ、黒斑あり	灰白色 (10YR8/1)	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の黒褐色・灰色・石英の粒。	古墳時代前期
281	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE3 6層	14 (確定)			ヨコナデ、オサエ、指頭痕	ヨコナデ、オサエ、指頭痕	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/1)	1mm以下の褐灰色・灰褐色・灰色・輝石の粒。3～4mmのタカラコジの粒。	
282	弥生土器	鉢 口縁～胴部	SE2 6層	10.4 (推定)			ナデ、風化が著しい	調整、風化が著しく、調整不明	浅黄橙色 (2.5YR8/3)	灰白色 (2.5YR8/2)	雲母	
283	弥生終末～古墳初頭	鉢 口縁～底部	SE2 6層	11.3 (推定)	3.2	7.1	調整不明、一部にスス付着	調整不明、黒斑あり	にぶい橙色 (5YR7/4)	浅黄橙色 (2.5YR8/3)	1mm以下の灰色・石英・輝石の粒。	
284	弥生土器	高坏 脚部	SE2 6層				ミガキ、穿孔、風化の箇分が広い	工具ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の灰褐色・石英・長石の粒。3mm以下の黒褐色・輝石の粒。	後期後半
285	弥生土器	高坏 坏部	SE2 6層	25			ナデ	ナデ	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR8/2)	1.5mm以下の輝石の粒。2mm以下の長石の粒。	終末期
286	弥生土器	高坏 完形	SE3 6層	16.7	13.3	13.5	ヨコナデ、ハケメ、工具によるオサエ、ミガキ、スス付着	ヨコナデ、ナデ、丁寧なナデ、ハケメ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1mm程の赤色・灰白色・石英・輝石の粒。1.5mm以下の黒褐色の粒。	古墳時代初頭
287	弥生土器	高坏 坏部	SE2 6層	21			ナデ、斜方向のミガキ、縦方向の丁寧なナデ	ナデ、ヨコナデ、斜～斜方向のミガキ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1.5mm以下の輝石の粒。4mm以下の褐色の粒。	古墳時代初頭
288	弥生土器	高坏 脚部	SE2 6層				ナデ、ヨコナデ、ハケメ、風化が著しい	調整不明、風化が著しい	浅黄橙色 (10YR8/3)	灰白色 (2.5Y7/1)	1～2mmの緑褐色・緑灰色・灰色・オリーブ灰色の粒。	古墳時代初頭
289	弥生土器	高坏 脚部	SE3 6層				黒斑平行線文、ナデ、摩耗	ナデ、工具ナデ、粘土の継ぎ目	灰黄色 (2.5Y7/2)	浅橙色 (5YR8/3)	2mm以下の石英・長石・輝石の粒。4mm以下の灰褐色・暗褐色・黒色の粒。	後期後半
290	弥生土器	器台 脚～裾部	SE2 6層		11.8 (確定)		ナデ、ミガキ、摩耗	ハケメ	浅黄橙色 (10YR8/3)	橘灰色 (10YR8/1)	1mm以下の黒色・灰色・橙色・暗褐色の粒。	終末期
291	土師器	壺 口縁～胴部	SO5				ヨコナデ、スス付着		淡橙色 (5YR8/4)	灰白色 (5YR8/2)	1mm以下の黒色・赤色・石英・輝石の粒。	小型丸底壺
292	弥生土器	甕 口縁部	SO1				ヨコナデ、スス付着	ヨコナデ、スス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の黒色・石英の粒。2mm以下の暗灰色の粒。4mm以下の灰色の粒。	終末期
293	弥生土器	甕 口縁～胴部	SO1	18.9 (確定)			ナデ、ハケメ、スス付着	ナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	0.5mm以下の石英・輝石の粒。2、3mm以下の褐色の粒。	終末期
294	弥生土器	不明 底部	SO1		4.2		ナデ、スス付着	ハケメ、オサエ、指頭痕	灰白色 (5Y7/1)	暗灰色 (N3/)	1mm以下の褐色・暗褐色・灰色・黒色の粒。2～3mmの輝石の粒。	終末期
295	弥生土器	二重口縁壺 口縁部	SO1				工具によるヨコナデ、ナデ	工具によるヨコナデ、ナデ	浅黄色 (2.5Y7/3)	浅黄色 (2.5Y7/3)	1～2mmの黒色・灰色・明赤灰色・灰黄褐色・褐色・輝石の粒。	
296	弥生土器	小型丸底壺 口縁～頸部	SO1	13 (推定)			ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	にぶい褐色 (2.5YR6/3)	2mm以下の黒色・輝石の粒。3mm以下の褐灰色の粒。4mm以下の赤灰色の粒。	終末期
297	弥生土器	壺 胴部	SO1				ミガキ	ナデ、粘土の継ぎ目あり	浅黄色 (2.5Y7/4)	灰黄色 (2.5Y7/2)	2mm以下の灰色・灰褐色の粒。6mm程の赤褐色の粒。	終末期
298	弥生土器	甕 口縁～胴部	SO1	18.1 (推定)			ナデ、ヨコナデ、指頭痕	ナデ、ハケメ、一部黒斑あり	明褐灰色 (7.5YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.5～5mmの灰色・褐色・暗褐色の粒。	終末期
299	弥生終末～古墳初頭	甕 口縁～胴部	SE1 2層	21.2 (推定)			工具によるヨコナデ斜方向のハケメ	工具によるヨコナデ斜方向のハケメ	褐灰色 (5YR6/1)	灰褐色 (5YR6/2)	3mm以下の灰褐色・長石の粒。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
300	土師器	壺 口縁～胴部	SE1 22層 SO1	34.5 (復定)			ヨコナデ、縦・横方向のハケメ	ヨコナデ、斜方向のハケメヌスが付着	明褐灰色 (7.5YR7/2)	灰色 (N4/)	2mm以下の石英の粒。5mm以下の赤色の粒。	古墳時代前期
301	弥生土器	長頸壺 胴部	SO1				ナデ、ハケメ、風化気味で一部にスス付着	ナデ、ヨコナデ	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	黒色 (2.5Y2/1)	1mm以下の石英の粒。2mm以下の褐色・輝石・長石の粒。3mm以下の黒褐色の粒。	
302	弥生土器	壺 肩～胴部	SE1 22層 SO1				縦・横方向のハケメ、部分的にヌス付着。一部赤変	ナデ、オサエ、縦・斜方向のハケメ、指頭痕、ヌス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1～2mmの褐色・灰色の粒。	後期後半
303	弥生土器	壺 胴～底部	SE1 22層 SO1		5.6 (底径)		ナデ、縦・横ハケメ、ヌス付着、赤変と黒斑部分あり	ナデ、ハケメ、ヌス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1～2mmの褐色の粒。1mm程の輝石の粒。	後期後半
304	弥生土器	壺 胴～底部	SE1 22層 SO1		2.2		ナデ、ヌス付着	ナデ、指頭痕	灰白色 (10YR8/2)	灰白色 (10YR7/1)	1～2mmの灰色・黒色・にぶい赤褐色の粒。3～5mmの赤褐色・灰色・赤褐色の粒。	
305	弥生土器	壺 胴～底部	SE1 22層 SO1		5.8 (復定)		縦・斜方向のハケメ、ヨコナデ、煤煙あり	ナデ、横・斜方向のハケメ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	黒色 (7.5Y2/1)	1～3mmの暗褐色・灰色・褐色の粒。	終末期
306	弥生土器	体 口縁～胴部	SE1	25.8 (推定)			ヨコナデ	ナデ	黒色 (N1.5/)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の褐色・輝石の粒。1mm程の褐灰色・にぶい赤褐色・灰色・黒色の粒。	
307	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE2 6層 SO1	34.2 (推定)			ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭痕、粘付痕帯	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、指頭痕	灰白色 (2.5Y7/1)	浅黄色 (2.5Y7/3)	2mm以下の褐灰色・褐色・黒色の粒。1～3mmの灰色・灰オリーブ色の粒。	
308	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE2 6層	14.4 (推定)			ナデ、風化が著しい	ナデ、風化が著しい	黄灰色 (2.5Y5/1)	にぶい橙色 (2.5Y7/3)	2.5mm以下の石英の粒。4mm以下の灰色・褐色・黒色の粒。	後期後半
309	弥生土器	甕 口縁～胴部	SE1 22層 SO1	27.5 (復定)			ヨコナデ、ハケメ、スス付着、風化気味	ナデ、ヨコナデ、斜方向のハケメ、風化気味	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	褐灰色 (7.5YR6/1)	2～3mmの赤褐色・明赤褐色・赤灰色・黒色・輝石の粒。3mm程のにぶい橙色・にぶい赤褐色・灰白色の粒。	終末期

③ C区

310～314は弥生土器である。310は短頸の壷でヘラミガキが施される。311は口縁部に櫛描波状文が施される。312～314は貼付突帯がついており、314は突帯部にキザミ目が施される。

315・316は古墳の土師器である。ともにヘラミガキで調整されている。



第65図　C区出土土器(1)　（S＝1／3）

第11表　C区出土土器観察表（古墳時代以前）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
310	弥生土器	壺 口縁～底部	4・PSE 6 10層	12.45 (復元)	2.5 (推定)		横・斜方向のヘラミガキ、工具ナデ、黒変	横・斜方向のヘラミガキ、ナデ、軟土師II	浅黄橙 (2.5YR8/3) 黒 (N1/)	灰白 (10YR7/1) (5Y8/1)	5mm以下の灰色、4mm以下の黒褐色・黒色、3mm以下の灰白色・白色、2.5mm以下の褐色、5mm以下の無色透明光沢の砂粒。	風化気味
311	弥生土器	甕 口縁部	2・D トレンチ	14.3 (推定)			横指波状文、風化のため調整不明	ハケ	にぶい橙 (5YR7/3) 灰 (2.5YR8/1)	灰白 (2.5Y7/1) 浅黄橙 (10YR8/3)	4mm以下の灰色、3.5mm以下の灰白色、3mm以下の褐色・橙色、2mm以下の無色透明の粒。	二重口縁 風化気味
312	弥生土器	壺 口縁部	2・D トレンチ				横ナデ、貼付突帯	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	5mm以下の黄灰色、3mm以下の橙黄橙色・灰黄褐色、2.5mm以下の軟質なにぶい赤褐色、2mm以下の黒色、1mm以下の黒色光沢・透明光沢の粒。	
313	弥生土器	甕 胴部	1・BII層				貼付突帯	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰 (N4/)	2mm以下の黒褐色・にぶい赤褐色、1mm以下の暗灰色・灰白色・橙色・透明光沢・黒色光沢・黒色の粒。	風化
314	弥生土器	壺 胴部	C区				斜方向のハケ、工具による横・斜方向のナデ、貼付突帯	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰 (N5/)	2mm以下の灰白色・淡色・透明光沢・灰色・黒色光沢の粒。	
315	土師器	鉢 口縁～胴部	4・BSE 6 10層	13.4 (推定)			横ナデ、横方向のヘラミガキ	横・斜方向のヘラミガキ、工具痕部痕	浅黄橙 (10YR8/3) (5YR8/3)	浅黄橙 (2.5YR8/6) にぶい橙 (5YR7/3)	1.5mm以下の黒色光沢・微細な褐色と灰色・無色透明の粒。	
316	土師器	坏底 天井～口縁	C区	14.3 (推定)			斜方向のヘラミガキ、横方向のナデ、ヘラの工具痕	丁寧なナデ、横方向のナデ、ヘラの工具痕	灰 (N4/) 灰白 (2.5YR8/2)	灰 (N5/) 灰白 (2.5YR8/2)	2mm以下の灰白色、1.5mm以下の黒色光沢、1mm以下の透明光沢の粒。	供膳器の模倣品

D地区　ＳＥ５（溝状遺構５）出土土器

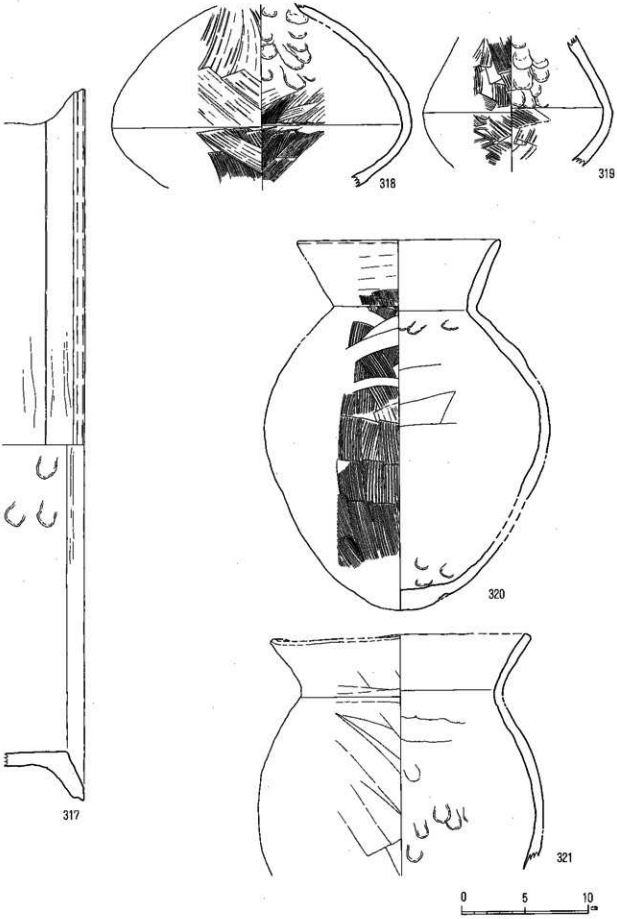
317は甕である。口縁部は外反し、外側に直線的に短くのびる。口縁部の厚みは端部に行くに従って若干薄くなり、端部の上位は外側へ舌状に拡張する。外面の頸部に工具によるヨコナデ調整の際にできた非常に細い凹線が見られる。

318～327は壺である。318、319は長頸壺の胴部で318は横長の扁球状、319は縦長の扁球状を呈す。ともに外面はハケメ、内面は上位に指によるナデと下位にハケメが施されている。320は外反し、直線的にのびる口縁部を持つ。胴部中央よりやや上に最大径を持ち、底部は厚く、レンズ状である。外面の頸部から胴部に縦と斜め方向のハケメが見られる。321は外反した口縁部を持つ。口縁端部はやや厚くなり、中央がわずかに窪む。322は長胴形の壺で、外面に縦と斜め方向のハケメ、内面に横と斜め方向のハケメが見られる。323は口縁が緩やかに外反し、端部中央が窪む。胴部の中央に最大径があり、内面に粘土のつなぎ目が残されている。324、325は口縁がラッパ状に広がる。325は外面の口縁部中位に指によるナデ調整で段差を作りだしている。326は複合口縁壺である。口縁は頸部から外湾しながら広がり、拡張部はわずかに外湾して上方外側に向かってのびる。口縁端部と口縁屈曲部は外側への球状の拡張部が見られる。胴部は扁球状でほぼ中央に最大径を持つ。調整は外面の口縁部にナデ、工具によるヨコナデ、ハケメ。頸部に工具によるオサエ、胴部に斜め方向のハケメが見られる。内面には工具によるヨコナデと指によるナデが施されており、粘土のつなぎ目も残っている。326とほぼ同型の土器は大淀川対岸の迫内遺跡からも出土している。327は小型の壺で口縁が緩やかに外反し、直線的に延びる。口縁端部は細くなり、胴部は球状である。底部は端部をつまみだした上げ底状である。

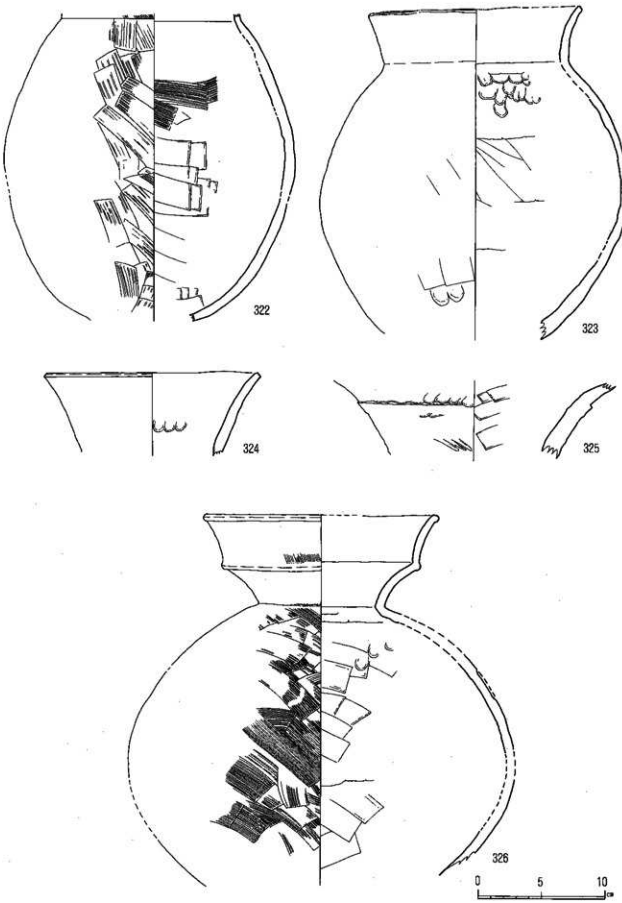
328～333は小型丸底壺である。328はわずかに内湾し、緩やかに外反する口縁部と丸底の底部を持つ。手捏ねで作られており、内、外面に指頭痕が明瞭に見られる。329は外反し、直線的外側にのびる口縁部を持つ。口縁端部上位には平坦面が見られる。胴部はあまり張らず、底部は平底を呈す。330は緩やかに外反し、直線的に外側にのびる口縁部を持つ。口縁端部は細まり、胴部は扁球状である。底部は厚く、丸底を呈す。331は外反し、直線的に外側にのびる口縁部を持つ。口縁端部は丸みを帯び、胴部は扁球状である。外面と内面の口縁部にハケメによる調整が見られる。332は外反し、わずかに内湾しながらラッパ状に広がる口縁部を持つ。内、外面ともハケメによる調整が施されている。333は頸部の屈曲が緩やかで外湾しながらラッパ状に広がる口縁部を持つ。

334～336は鉢である。334は半球形状の鉢で内、外面にハケメによる調整が見られるが、外面の口縁部には特にあらいハケメ調整が施されている。335はラッパ状に広がる口縁部を持った高台付きの鉢である。336は小型の鉢で手捏ねによって作られている。

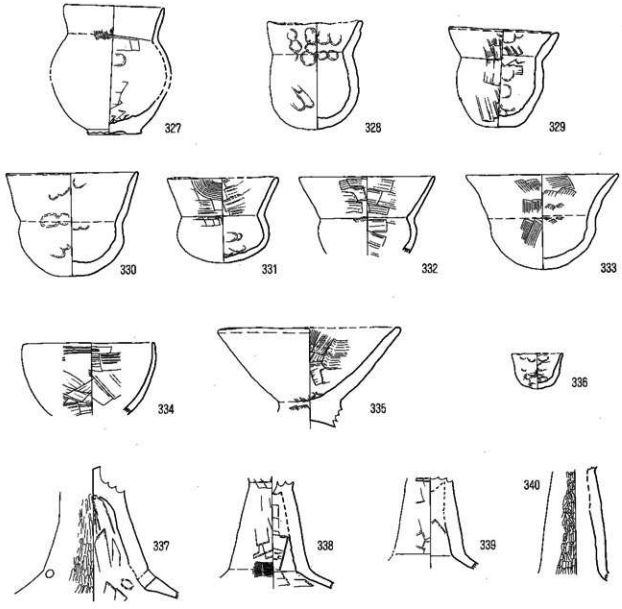
337～340は高坏の脚部である。337はわずかに内湾しながら直線的に外側に広がり、裾部で屈曲する。屈曲部に穿孔を有し、外面はミガキ、内面は工具と指によるナデとオサエの調整が施されている。338、339は、わずかに外湾しながら外側に広がり、裾部で屈曲する。340はエンタシス状の形状を呈し、外面に丁寧なミガキが施されている。



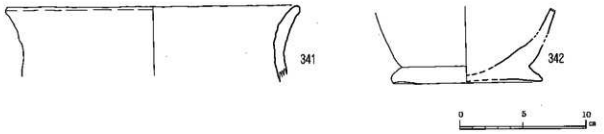
第66図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(1)　（Ｓ＝１／３）



第67図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(2)　（S＝1／3）



第68図　D区溝状遺構５（ＳＥ５）出土土器(3)　（S＝１／３）



第69図　D区溝状遺構１（ＳＥ１）出土土器(1)　（S＝１／３）

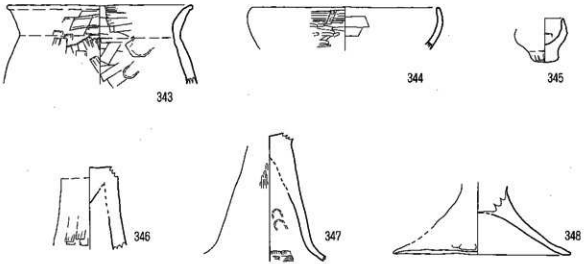
D区　SE1（溝状遺構1）出土土器

341～343は甕である。341は緩やかに外反する口縁部を持つ。342は上げ底気味の底部を持つ。341、342とも風化が著しく、調整は不明であった。343は外反した口縁部を持つ。口縁端部は細くなり、外側に拡張する。内、外面ともナデとハケメの調整が施されている。344は口縁部が内湾した鉢である。345はミニチュア土器で器種は不明である。手捏ねによって作られており、口縁部は、わずかに内側に傾く。

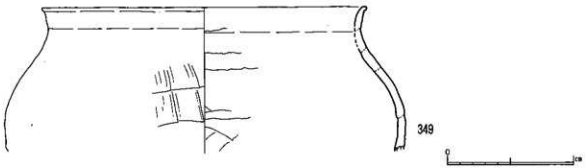
346～348は高坏である。346は脚部が外側に向かってほぼ直線的に広がりながらのびる。327は脚部がわずかに膨らみを持ちながら外側に広がってのび、裾部で緩やかに屈曲する。348は大きくラッパ状に広がる裾部を持つ。

D区　複数の遺構にまたがって出土した土器

349はSE1とSE4とで出土した破片が接合したもので、器種は甕である。349は短く、ほぼ垂直に立ち上がった口縁部持ち、胴部上位が張り出す。外面にはナデ、ヨコナデ、ハケメによる調整。内面にはナデと工具によるナデの調整が施されている。



第70図　D区溝状遺構1（SE1）出土土器(2)　（S＝1／3）



第71図　D区複数遺構出土土器　（S＝1／3）

第12表　D区出土土器観察表（古墳時代以前）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
317	弥生土器	壺 口縁	SE5	6.6 (推定)			工具によるヨコナデ	ナデ、指頭痕	にぶい橙色 (5YR7/3)	にぶい橙色 (5YR6/4)	0.5mm程度の明赤褐色の粒。2mm以下の黒色の粒。	
318	弥生土器	長頸壺 頸部	SE5				ハケメ、一部にナデ	ナデ、ハケメ、工具によるオサエ、指頭痕	浅黄橙色 (10YR8/4)	灰色 (N4/1)	1～2mmの黄灰色・黒色・灰色・にぶい赤褐色・橙色の粒。3～4mmの赤灰色・灰色・暗赤褐色の粒。	終末期
319	弥生土器	長頸壺 頸部	SE5				ハケメ、一部にナデ	ナデ、ハケメ、指頭痕	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰色 (N4/1)	1mm程度の灰色・橙色の粒。3mm程度の粒。	終末期
320	弥生土器	壺 口縁～底部	SE5	16.0 (推定)	5 (推定)	20.1	ナデ、工具によるヨコナデ、ハケメ、指頭痕	ナデ、工具によるヨコナデ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰白色 (10Y7/1)	1mm程度の灰色・にぶい橙色・黒色の粒。2～3mm程度の灰白色の粒。	終末期
321	弥生土器	壺 口縁～胴部	SE5	19.5			ナデ、ヨコナデ、ハケメ	ナデ、ヨコナデ、指頭痕	灰白色 (2.5YR8/2)	灰白色 (2.5Y7/1)	1～2mmの黒色・黒褐色・黄褐色・にぶい褐色の粒。3～4mmのにぶい赤褐色・褐灰色の粒。	終末期
322	弥生終末～古墳初頭	壺 胴部	SE5				ハケメ	ハケメ、工具によるナデ	灰黄色 (2.5Y7/2)	灰黄色 (2.5Y8/2)	1mm以下の赤色・黒褐色・輝石の粒。	
323	土師器	壺 口縁～胴部	SE5	16.4			ナデ、ヨコナデ、風化が著しい	ナデ、工具によるナデ、指頭痕、風化が著しい	灰白色 (10YR8/2)	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	1～2mmの黒色・灰色・にぶい黄色・褐色・黄灰色の粒。3～4mmの灰色・黒色の粒。	
324	土師器	壺 口縁部	SE5	16.6 (推定)			ナデ、工具によるヨコナデ	工具によるヨコナデ、オサエ、指頭痕	にぶい橙色 (5YR7/4)	褐灰色 (10YR5/1)	1mm程度の灰白色・黒色・石英の粒。3mm程度の暗灰色の粒。	
325	土師器	壺 口縁～頸部	SE5				ナデ、ヨコナデ、オサエ	ナデ、ハケメ	灰白色 (2.5Y7/1)	灰色 (10YR6/1)	1～3mmの灰色・暗灰黄色・黒色の粒。5mm程度のにぶい橙色・灰白色の粒。	
326	土師器	二重口縁壺 口縁～胴部	SE5	18 (推定)			ナデ、ハケメ、工具によるヨコナデ、工具によるオサエ	工具によるヨコナデ、ナデ、指頭痕	にぶい橙色 (5YR7/4)	灰白色 (N7/)	1～2mmの灰色・灰黄色・赤色・黒色の粒。	
327	土師器	壺 口縁～底部	SE5	7.8 (推定)	4.3	10.4	ナデ、ヨコナデ、ハケメ、風化面が広く遺存	ヨコナデ、ナデ、ハケ、指頭痕、工具痕、黒斑あり	灰黄色 (2.5Y7/2)	淡黄色 (2.5Y7/4)	1mm以下の灰色・灰白色・褐色・石英の粒。2mm程の輝石の粒。	
328	土師器	小型丸底壺 ほぼ完形	SE5	7.2	1.2	8.5	ナデ、指頭痕、黒斑あり	ナデ、指頭痕、黒斑あり	浅黄橙色 (10YR8/4)	淡橙色 (5YR8/4)	1mm程の灰色・褐灰色・赤色の粒。2mm程の赤褐色・赤橙色・青黒色の粒。3～4mmの灰色・赤色・暗灰色の粒。	
329	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE5	8.6 (推定)	3.4	7.8	ナデ、ハケメ、指頭痕	ナデ、ハケメ、指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄色 (10YR6/3)	1mm程の明赤褐色の粒。1～3mmの黒色・灰色・褐色・暗褐色の粒。5mm程の褐灰色の粒。	
330	土師器	小型丸底壺 ほぼ完形	SE5	10.4	1.9	8.3	ナデ、ヨコナデ、指頭痕、黒斑あり	ナデ、ヨコナデ、指頭痕、黒斑あり	灰白色 (10YR8/2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	1～2mmの黒色・灰色・赤褐色・灰赤色・石英の粒。3mm程の橙色・褐黒色の粒。	
331	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE5	8.7 (推定)	0.9	2.8	ナデ、ハケメ、工具によるオサエ	ナデ、指頭痕	浅黄橙色 (10YR7/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1mm程の灰白色・灰色・褐色・明赤褐色の粒。2mm程の褐色の粒。	
332	土師器	小型丸底壺 口縁～底部	SE5	10.7 (推定)			ナデ、ハケメ、ハケメ、黒斑あり	ナデ、ハケメ	浅黄色 (2.5Y7/3)	灰黄色 (2.5Y7/2)	1mm以下の暗灰色・灰色・褐色・暗赤褐色・石英・輝石の粒。	
333	土師器	小型丸底壺 ほぼ完形	SE5	11.9 (推定)	2	7.6	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ、指頭痕	灰白色 (10YR8/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1～2mmの灰色・黒色・褐色・石英の粒。3mm程の黒色・灰色・褐灰色の粒。	
334	土師器	鉢 口縁～胴部	SE5	10 (推定)			ナデ、ハケメ、比較的浅い粗いハケメ	ナデ、ハケメ	橙色 (2.5YR6/6)	灰褐色 (7.5YR6/2)	1mm以下の灰色・橙色・石英の粒。	
335	土師器	脚付鉢 口縁～底部	SE5	14			ナデ、ヨコナデ、ハケ、裾端部が広い	ナデ、ハケメ、指頭痕	浅橙色 (5YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1mm以下の赤色・褐灰色・灰色・黒色・長石の粒。3mm程の暗灰黄色の粒。	
336	土師器	鉢 (小型) 口縁～底部	SE5	3.8 (推定)	2.2 (推定)	2.9	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	灰白色 (10YR8/2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1mm程の灰色・橙色・明赤褐色・赤褐色・石英・輝石の粒。3mm程の灰色・褐灰色の粒。	
337	土師器	高坏 脚部	SE5				ミガキ	ナデ、オサエ	浅黄橙色 (10YR8/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1mm以下の暗褐色・明褐色・灰色・輝石の粒。1mm程度の赤色の粒。2mm程度のにぶい橙色の粒。	終末期
338	土師器	高坏 脚部	SE5				ハケメ、ハケのあとナデ	ナデ、ハケ	浅黄色 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	1mm程の灰色・灰褐色・褐色・にぶい赤褐色の粒。	
339	土師器	高坏 脚部	SE5				ヨコナデ、工具によるナデ	ナデ、工具によるナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	0.5～1mm程の灰色・黄褐色・黒色・褐色・石英の粒。2～3mmの暗赤褐色・灰色の粒。	
340	土師器	高坏 脚部	SE5				丁寧なミガキ	ナデ	浅黄色 (2.5Y7/4)	灰白色 (2.5Y8/2)	0.5mm以下の灰色・褐色・石英・輝石の粒。	

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
341	弥生土器	壺 口縁～肩部	SE5	33 (推定)			調整不明 風化が著しい	調整不明 風化が著しい	淡橙色 (5YR8/4)	灰白色 (10YR8/2)	2～5mmの灰白色・黒褐色・青灰色の粒。2～4mmの橙色の粒。	終末期
342	弥生土器	壺 胴部～底部	SE1		11.6		調整不明 風化が著しい	調整不明 風化が著しい	橙色 (5YR7/6)	灰色 (10Y5/1)	3mm以下の灰褐色・暗灰色・青灰色・黒色の粒。3～3mmの灰色・灰白色の粒。	終末期
343	土師器	壺 口縁～胴部	SE1	14.5 (推定)			ナデ、ハケメ	ハケメ、ナデ、指頭痕、	灰白色 (2.5Y7/1)	浅黄色 (2.5Y7/3)	2～4mmの黒色・灰白色・褐色・暗褐色・黒石・石英の粒。	
344	土師器	鉢 口縁～胴部	SE1	14.6 (推定)			ミガキ、ハケメ	ハケ	灰白色 (5Y8/2)	灰黄色 (2.5Y7/3)	1mm以下の黒色・褐色・赤褐色・石英の粒。2～3mmの明赤褐色の粒。	
345	土師器	不明 口縁～底部	SE1		1.9	3.5	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	淡橙色 (5YR8/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	1～2mmの灰色・灰白色・赤色・黒色・明赤褐色・明灰色・明緑灰色の粒。4mm程の褐灰色・明赤褐色の粒。	
346	土師器	高坏 脚部	SE1				ハケ、工具痕	ナデ、ハケ、工具痕	灰白色 (2.5Y8/2)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	1mm以下の褐色・黒色・灰色・褐灰色・石英・の粒。1mm程の明赤褐色の粒。	
347	土師器	高坏 脚部	SE1				ミガキ、ハケメ、風化面が広い	ナデ、ハケメ、指頭痕	灰白色 (2.5Y8/2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	1mm以下の灰白色・灰色・黒色・石英の粒。1～2mmほどの灰白色・灰オリーブ色・石英の粒。	
348	土師器	高坏 脚部	SE1		13.9		調整不明 風化が著しい	調整不明 風化が著しい	橙色 (2.5YR7/6)	橙色 (2.5YR7/8)	1mm以下の灰色・明赤褐色・石英の粒。3～4mmの明赤褐色の粒。	
349	土師器	壺 口縁～胴部	SE1	35.4 (推定)			ヨコナデ、ナデ、ハケメ	ナデ、工具によるナデ、風化が著しい	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	灰黄褐色 (10YR5/2)	3～5mm程の褐灰色・灰白色・黄褐色・灰色・暗褐石の粒色の粒。	

(2) 木製品

A区出土木製品

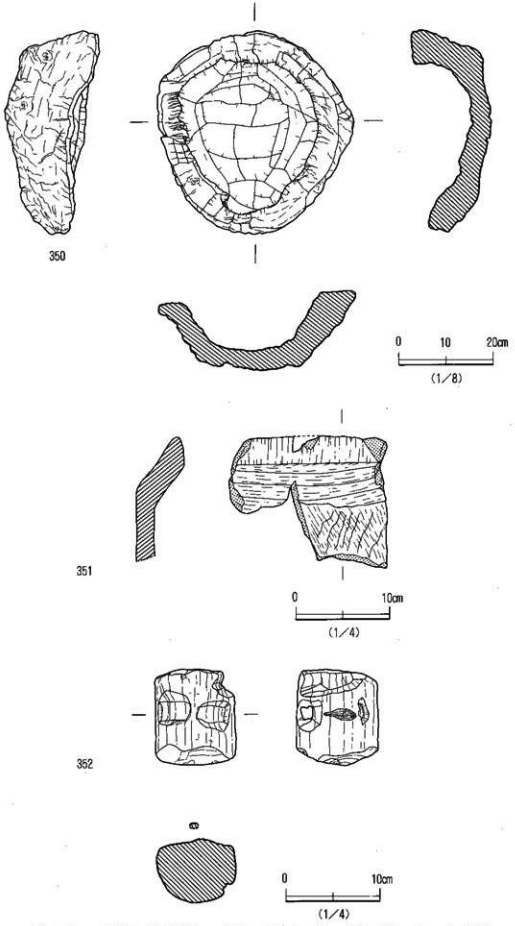
木製品はSE1の最下層とその上層粘土から出土した。353は罪状木器である。SE1が北壁に接する箇所に打ち込まれた杭の下流側で出土した。縦141.7cm・横65.3cm・厚み5.0cmで15.7cm×3.5cmのほぞ穴が中央にある。ほぞ穴があることから両開きの扉と思われる。樹種はクスノキ。端部には長さ4cm・厚み5cmの突起がついており建物の受け部に差し込んで開閉したと思われる。しかし、一端しか残存していないため扉の上下関係は不明である。重量も不明だが出土時に大人4人で抱えるほどの重さであった。

354は柱状木器よりさらに上流側で複数に折れて出土した。長さ4m50cmで樹種はコナラ属アカガシ亜属。6本柱の高床倉庫の大引と思われる。14C年代測定では550年が得られている。

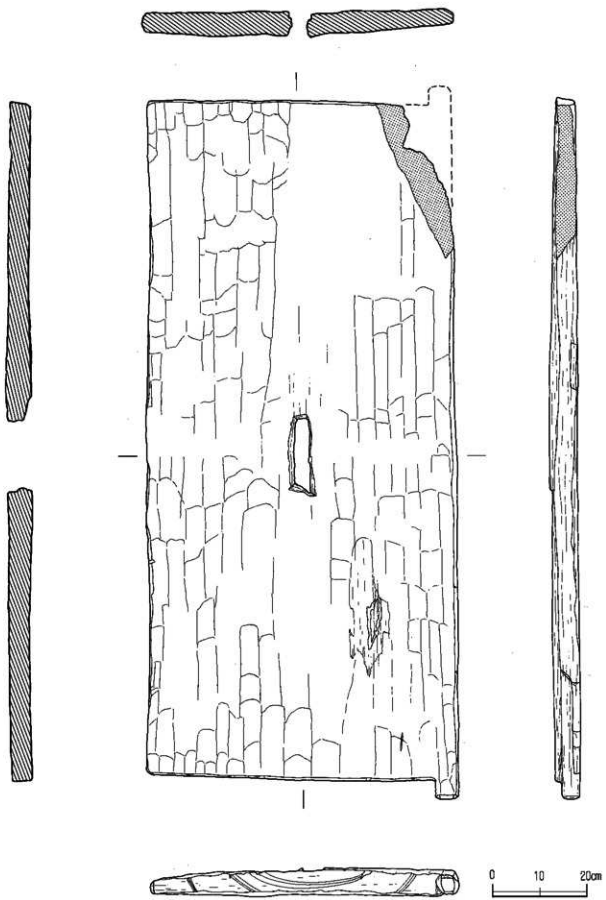
350は鉢である。杭近くの下流側で出土した。樹種はクスノキ。木の根株を利用した容器である。径は約42cm・深さ11.2cm。底部の厚みは約4.2cm。鉢底部の内面器壁からイネの籾殻（頴）が4粒検出された。

352は木錘（つちのこ）である。穴の部分は約1.4cm。編み物を編むときの経糸をつりさげる錘として利用される。

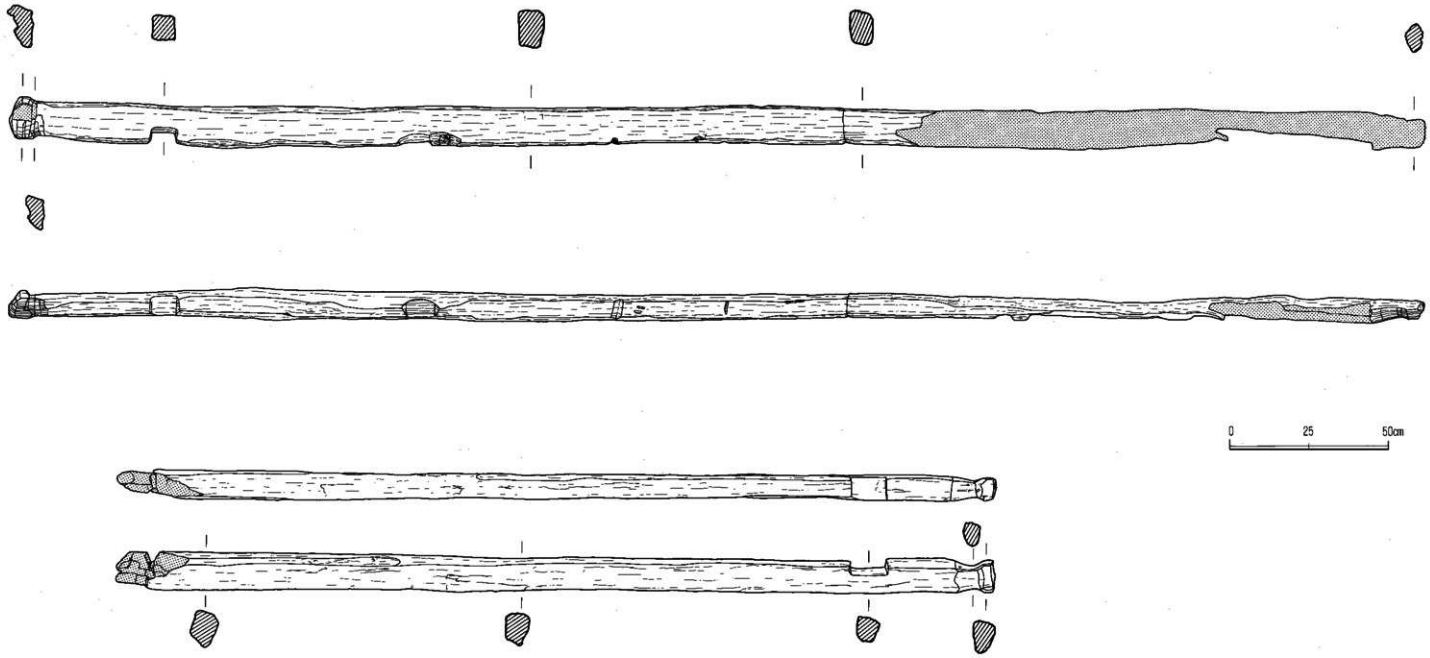
351は皿状木器である。方形の槽と呼ばれるくりものの容器で、深さは、3.2cmである。樹種はヤブツバキで、14C年代測定は405年が得られている。その他、図面は載せていないがSE1屈曲部の底部出土の木杭が14Cねんだい測定で160年。樹種はコナラ属クヌギ節という結果が得られている。



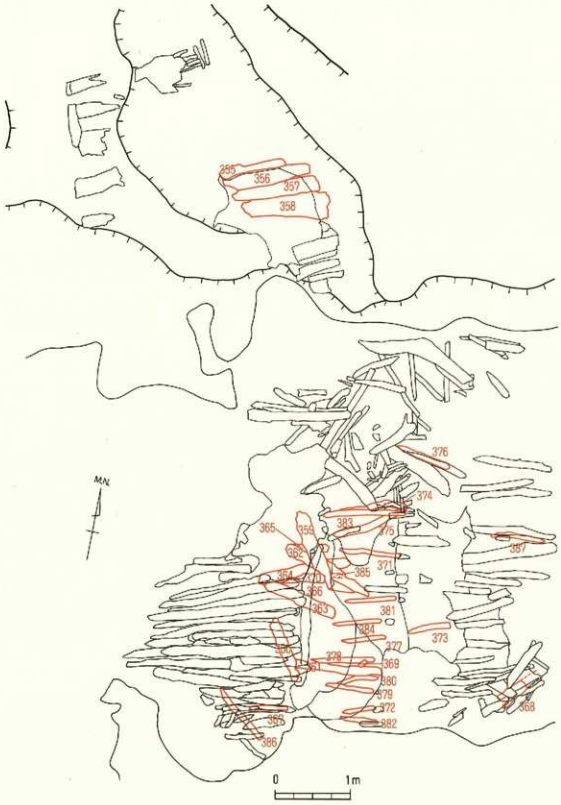
第72図　A区出土木製品(1)　(350…S＝1／8．351・352…S＝1／4)



第73図　A区出土木製品(2)　（S＝1／8）



第74図　A区、D区出土木製品　（S＝1／12）



第75図　B区木製品出土位置図（S＝1／50）

第75図　B区木製品出土位置図（S＝1／50）

B区　SO1（堰跡1）出土木製品

355～366はSO1の建築材である。いずれも板状で断面は翼のような三角形の形状を呈す。樹種はすべてコナラ属アカガシ亜属である。

355～358は堰北側のSE2部分から出土した。357－1には貫通孔が入れられている。359は西側杭列部分から出土した。出土状況から見て、杭の上部を支える横木として用いられていたと考えられる。360～366は西側杭列最下面から出土した。レベル的に359よりも低い位置にあることから堰の下層部分を構築する時に用いられたと思われる。

367は木刀のような形状に加工されたもので、樹種はムクノキである。どの様な用途に用いられたのかは不明である。368は二枚柄状の突出部を持ったもので、樹種はフジである。東側杭列から出土した（出土した時点では約1mの長さがあったが、下位部分は折れて、破損していたため、上位の加工面を持つ部分のみを持ち帰った）。突出部が垂直でなく、30度ほど傾いている点や突出部の側面や先端に人為的な加工が施されていない部分が見られる点などから伐採した木の自然な形状を活かして作られたと考えられる。加工痕を見てみると内側は突出部を削り出すために材を細かく切り出した痕が見られるが、側面は枝を払う程度の簡単なものである。369は中央部に貫通孔が入れられ、両端に縄かけ状の浅い溝を持つ。樹種はヒノキである。中央区杭列から出土したが、用途は不明である。

370～387はSO1に用いられていた杭である。370～375の樹種はクヌギである。371～375は中央区杭列のもので、370は西側杭列から出土した。370～372は、先端部を鋭角状に加工している。373は加工を施しているが、先端部を鋭角状に仕上げていない。374、375は端部をあまり加工せず、切り落とした状態で杭として使用している。

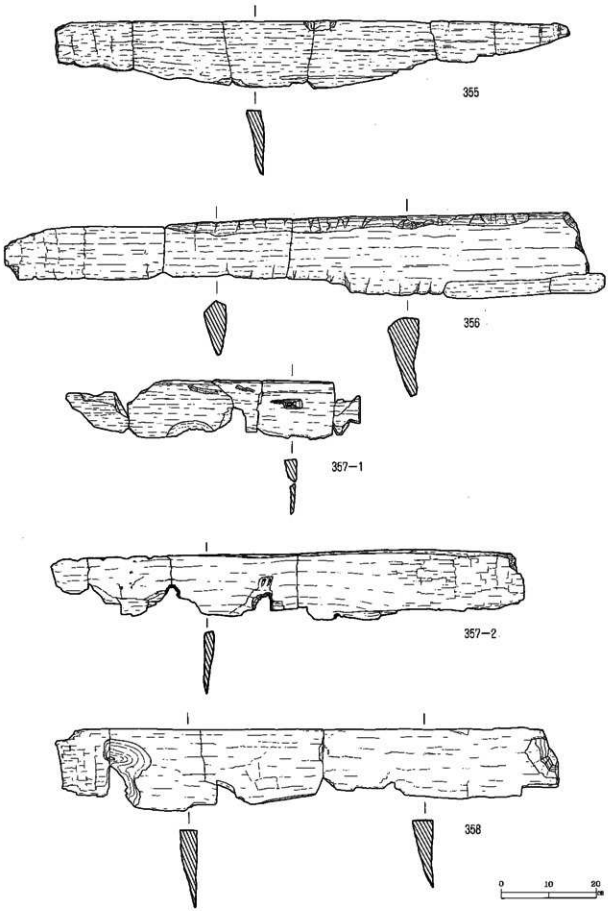
376～380の樹種はアカガシで、いずれも中央杭列から出土した。380は切り落とした状態で端部にあまり加工を施していないが、376～379は先端部を鋭角状に加工している。381～385も中央区杭列のもので、樹種は381がネムノキ、382と383はイヌガヤ、384と385がエゴノキである。

383は約1.8mの長さで、381、384、385と同じ様に端部を鋭角状に加工している。382は端部を斜めに半裁することで杭に鋭角面を作り出している。386、387の樹種はクリである。386は西側杭列、387は東側杭列のもので、ともに端部を鋭角状に加工している。

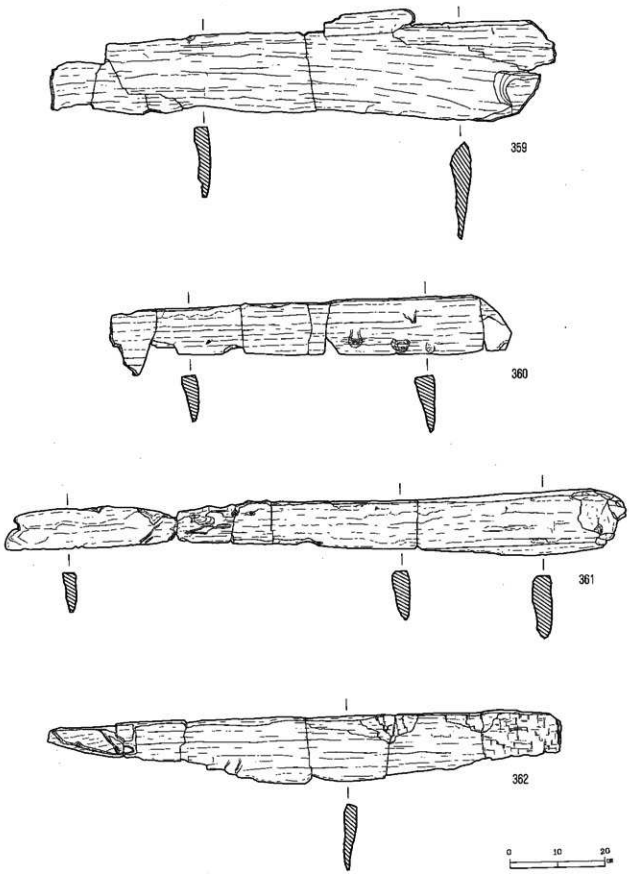
B地区　SE1（溝状遺構1）出土木製品

388は、屈曲した端部を持つ木製品で鎌の柄として用いられたと考えられる。丸みを帯び、焼痕のある方が握る部分である。樹種は環孔材であることのみが判明しているが、モミの可能性が高い。

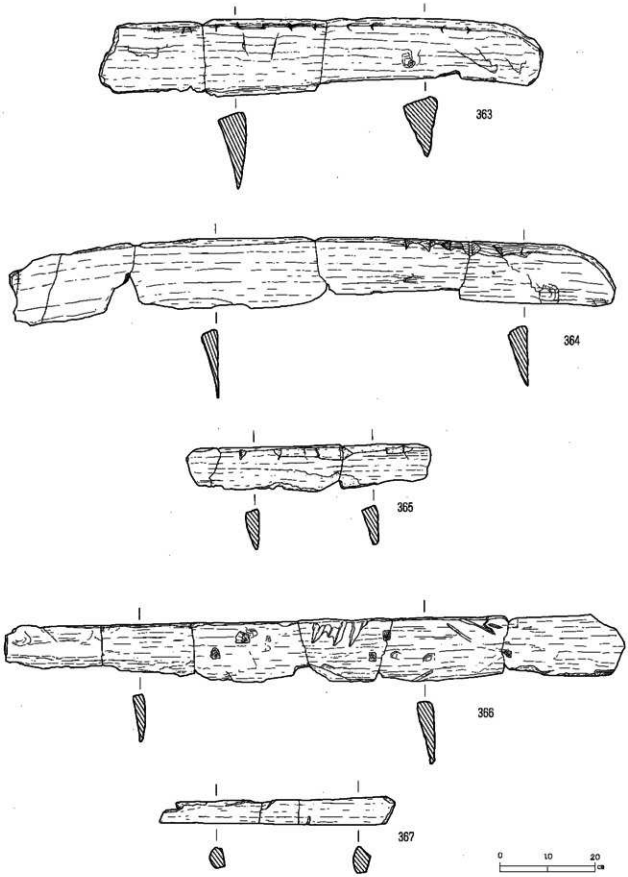
389は編み物の一部である。樹種同定でイネ科タケ亜科の植物で作られたものであることが判明した。名称及び用途は不明である。



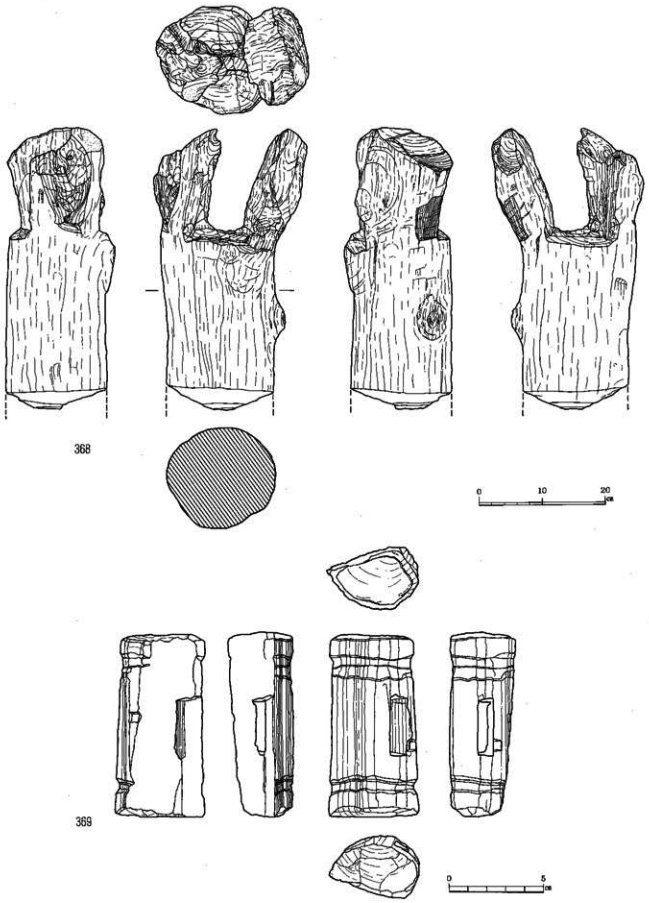
第76図　B区出土木製品(1)　（S＝1／8）



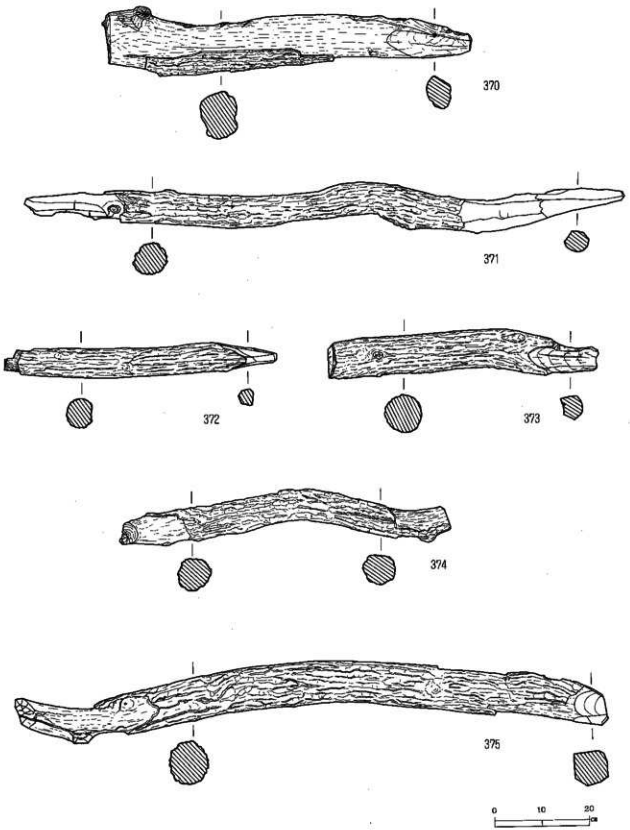
第77図　B区出土木製品(2)　（S＝1／8）



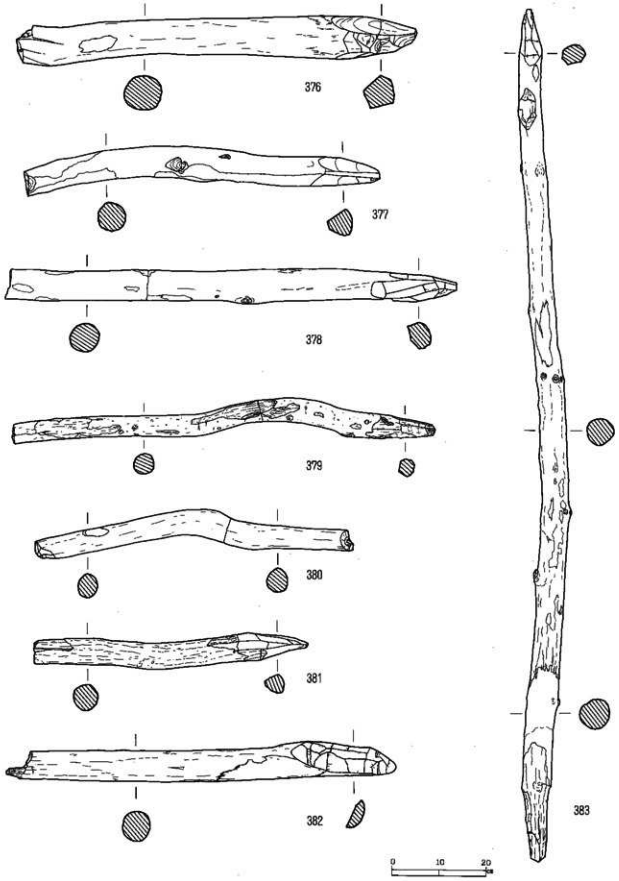
第78図　B区出土木製品(3)　（S＝1／8）



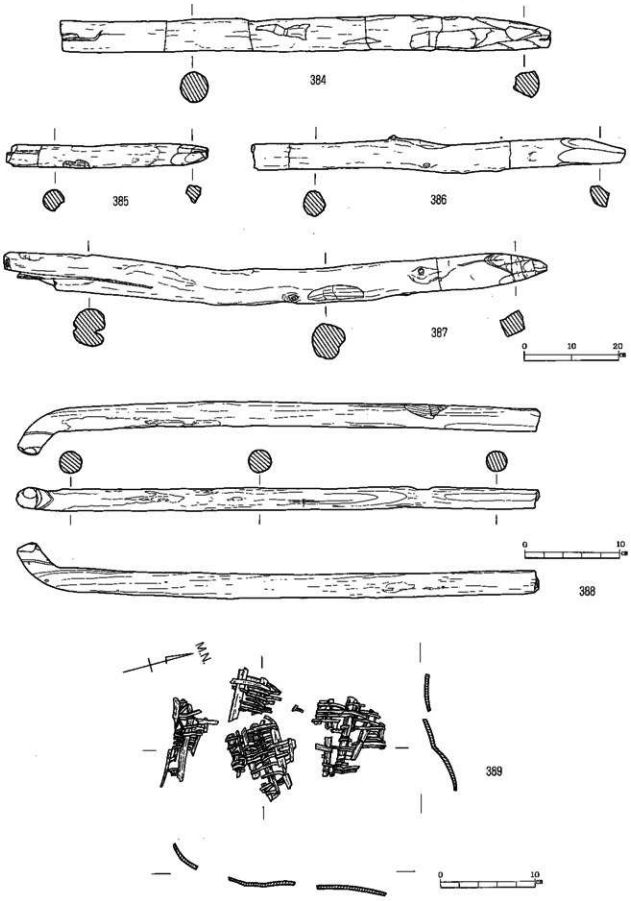
第79図　B区出土木製品(4)　(14…S＝1／6、15…1／2)



第80図　B区出土木製品(5)　（S＝1／8）



第81図　B区出土木製品(6)　（S＝1／8）



第82図　B区出土木製品(7)　(30～33…S＝1／8、34、35…S＝1／4)

第13表　B区、D区出土木製品観察表

No.	用　途	出　土　地　点	樹　　種	備　　考
355	堰建築材	B区　SO1のSE2部	コナラ属アカガシ亜属	板状
356	堰建築材	B区　SO1のSE2部	コナラ属アカガシ亜属	板状
357	堰建築材	B区　SO1のSE2部	コナラ属アカガシ亜属	板状
358	堰建築材	B区　SO1のSE2部	コナラ属アカガシ亜属	板状
359	堰建築材	B区　SO1西側杭列	コナラ属アカガシ亜属	板状
360	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
361	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
362	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
363	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
364	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
365	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
366	堰建築材	B区　SO1西側杭列最下面	コナラ属アカガシ亜属	板状
367	不　　明	B区　SO1西側杭列最下面	ムクノキ	板状
368	堰建築材	B区　SO1東側杭列	フジ	二枚柄状突出部あり
369	不　　明	B区　SO1中央杭列	ヒノキ	中央部に貫通孔、両端に縄かけ状の溝あり
370	堰建築材	B区　SO西側杭列	コナラ属クヌギ節	杭
371	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
372	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
373	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
374	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
375	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
376	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
377	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
378	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
379	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
380	堰建築材	B区　SO1中央杭列	コナラ属クヌギ節	杭
381	堰建築材	B区　SO1中央杭列	ネムノキ	杭
382	堰建築材	B区　SO1中央杭列	イヌガヤ	杭
383	堰建築材	B区　SO1中央杭列	イヌガヤ	杭
384	堰建築材	B区　SO1中央杭列	エゴノキ属	杭
385	堰建築材	B区　SO1中央杭列	エゴノキ属	杭
386	堰建築材	B区　SO1西側杭列	クリ	杭
387	堰建築材	B区　SO1東側杭列	クリ	杭
388	不　　明	B区　SE1	不明（環孔材）	屈曲部あり、端部に焼痕
389	不　　明	B区　SE1	イネ科タケ亜科	網代
390	建 築 材	D区　SE1	コナラ属アカガシ亜属	根太

D区ＳＥ１（溝状遺構１）出土木製品

390は長さ約2.82mの建築材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。大きさと角材のような加工方法が用いられていることから６本柱の倉庫の部材と考えられる。Ａ区で出土したものより小型であることから床板を受ける根太、もしくは側根太として使用されていた可能性が高い。

一端に縄かけ状の溝と欠きこみが切られている。完形ではなかったため、反対側の端部に加工が施されていたかは不明である。縄かけ状の溝は端部から７～８cmの部分で全集を巡る。溝の断面は浅く、緩やかなＵ字形を呈す。先端部は中央にわずかな高まりがあるが、平坦に近い状態に削られている。欠きこみは、端部から約36～46cmの部分に３～４cmの深さで長方形状に作られている。

材の幅は、破損している方にかけて直線的にわずかに広がっていく。しかし、反りや曲がりがほとんどないことから真直な芯を持つ材を選んで加工したと思われる。

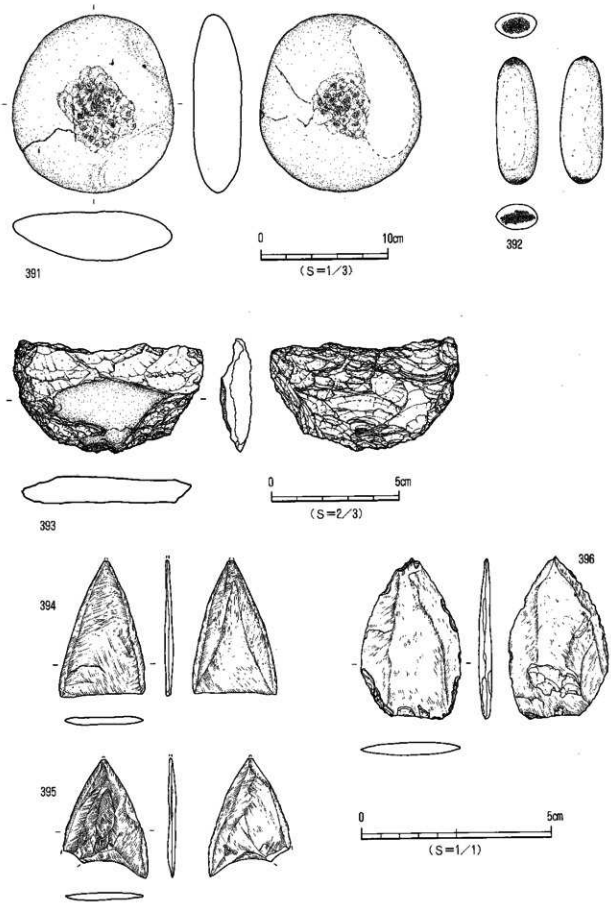
(3) 石器

① Ａ地区出土石器

Ａ区では６点の石器が出土した。詳細な時期は判断できないが計測表を参考にしていただきたい。

第14表　出土石器観察表

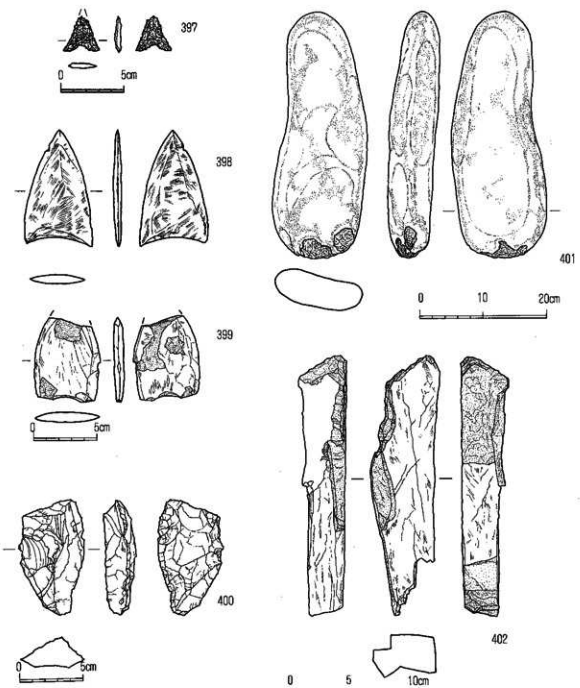
遺物番号	出土地点	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
391	Ａ区	石皿	14.2	12.8	3.75	996.9	砂岩
392	ＳＥ１　１層	敲き石	10	3.3	1.95	91.1	砂岩
393	ＳＥ１　９層	スクレイパー	4.5	7.45	1.1	40.3	頁岩
394	ＳＥ１　９層	石鏃	3.7	2.2	0.2	2.1	輝緑凝灰岩
395	ＳＥ１　９層	石鏃	3.15	2.2	0.2	1.3	硅質頁岩
396	Ａ区	石鏃	4.3	2.6	0.37	4.9	輝緑凝灰岩
397	Ｂ区　Ⅳ層	石鏃	1.4	1.4	0.25	0.3	黒曜石
398	Ｂ区　ＳＥ１	石鏃	4.7	2.7	0.35	4.7	凝灰岩
399	Ｂ区　Ⅲ層	石鏃	3.65	2.65	0.4	5.2	凝灰岩
400	Ｂ区　ＳＥ１	使用痕剥片	4.6	2.6	1.4	13.5	チャート
401	Ｂ区　ＳＥ１	敲き石	19.7	7.1	2.6	711	砂岩
402	Ｂ区　ＳＥ２	砥石	10.4	2.6	1.8	58.6	頁岩



第83図　A区出土石器（391、392…S＝1／3　393…S＝2／3　394～395…S＝1／1）

② B地区出土石器

397は黒燿石を用いた打製石鏃で、B区北側水田面の第Ⅳ層から出土した。398、399は凝灰岩製の磨製石鏃で両面に細かい擦痕が見られる。399は第Ⅲ層、398はＳＥ１から出土した。400はチャート製の使用痕剥片である。401は砂岩製の敲石で明瞭な敲打痕が見られる。402は頁岩製の砥石でＳＥ２から出土した。



第84図　B区出土石器　（S＝2／3、401…S＝1／3）

第2節　古代の遺構と遺物

1　遺　構

(1) 旧河道（溝状遺構）

① A区

A区では、旧河道の本流上部に幅約3～7mの溝状遺構7（SE7）が確認された。

SE7は、調査区の南西で西壁へ大きく屈曲して抜け、再び西壁から北東へ向かい蛇行しながら北壁に接し、さらには大きく屈曲してB区へ抜けている。SE7のレベルを観察すると西から東へ傾斜しており、堰の構造を足ると水はこの方向で流れていたと思われる。流路の埋土は粘土・シルト・シラスの斑状の堆積から構成されており、埋土からは古墳前期の土器や木片・網代が出土した。また、水を止める堰跡が2ヵ所検出された。

溝は何度かの造り替えを行っているうえに、SE1の底面をさらに掘削しているためSE1時代の土器類・遺物がSE7埋土の中に混入している。そのため、SE1最下層とSE7埋土との間で土器が接合している。

② B区・D区

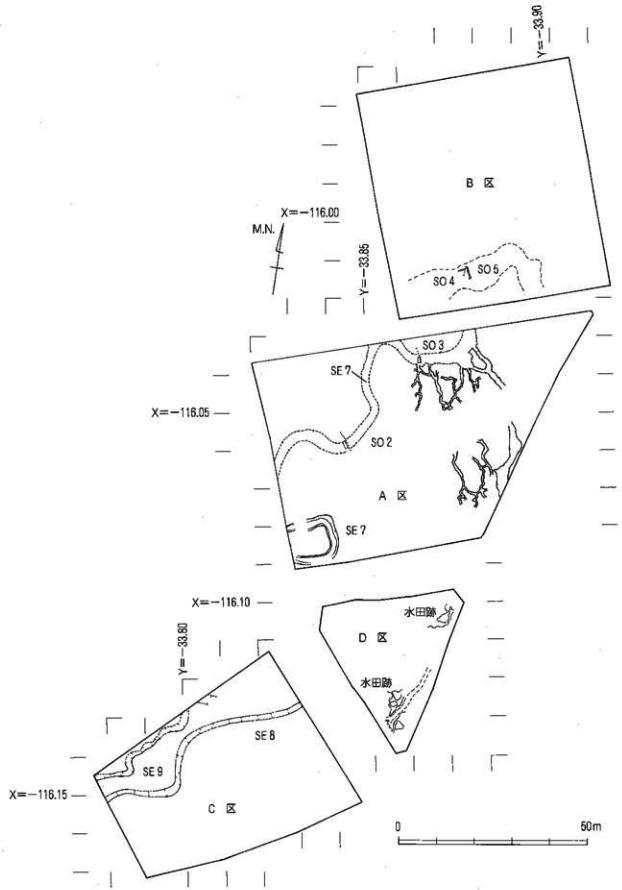
古代においてB区、D区内を河川がどのようなルートで流れていたかは、今回の調査で明らかにすることはできなかった。そこで、ここでは、調査で得られたデーターから当時の河道の推測してみることにする。

今回の調査では、各調査区で検出された溝状遺構の最下層か多量の土器が出土した。これらの土器は、古墳時代前期以前のものでそれ以後のものは含まれていなかった。A区、B区の古墳時代の溝状遺構内で検出された古代の堰の杭列の幅は、約3.5~4.5mであった。ただし、B区で検出した堰は、横木の東側に杭が打ち込まれていた。これは、東から西に杭が押し倒される形で出土した古墳時代の堰の時とは、河川の流れが逆になっていることを表している。また、D区第Ⅳ層で検出した水田の畦畔は、溝状遺構に添うような形になっていた。

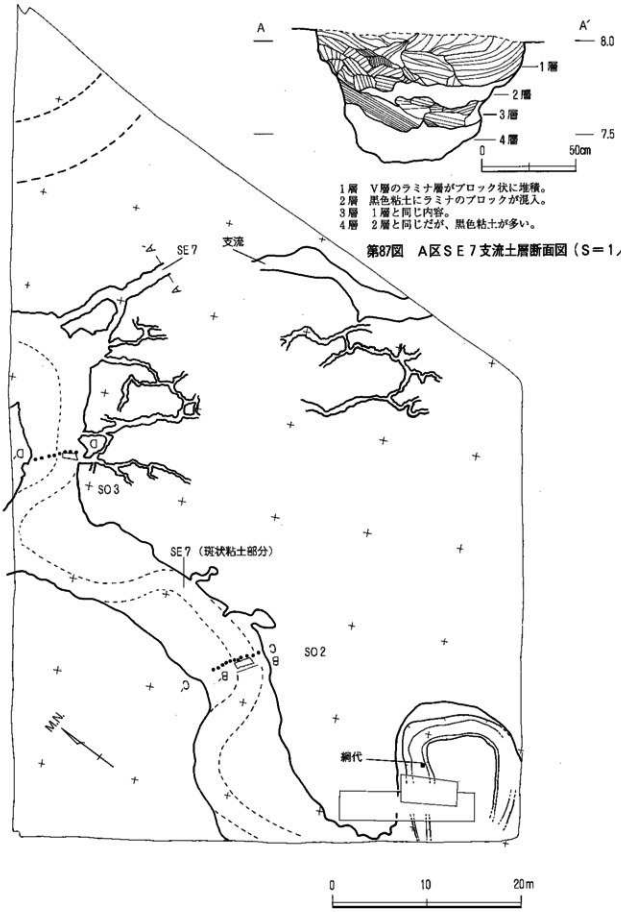
これらのことから、古墳時代前期のある時代に一度短期間で埋まった旧河道は、その後以前と同じようなコースを複雑に蛇行しながら約4～5mの幅で流れていたと思われる。また、A区、B区で検出した堰の杭が倒れずに打ち込まれた状態であったことから、短期間ではなく、ある一定の期間これらの河道の水が灌漑に用いられていたことが予想できる。

③ C区

C区では、旧河道の本流上部に幅約3mの溝状遺構8（SE8）を、その北側に幅約2mの溝状遺構9（SE9）を確認した。SE8は、調査区の西壁から穏やかに蛇行しながら東壁へ抜けている。SE9は西壁から北壁に接しながら東壁へ向かう流路を取っている。SE8・SE9のレベルを観察すると、西から東へ傾斜していることから水はこの方向で流れていたと思われる。SE8の埋土は粘土・シルト・シラスの斑状の堆積から構成されている。SE9の埋土は黒色の粘土からなり古代の土器が底面から出土した。また、断面を観察すると、SE8の上部にⅣ層は堆積しているが、SE9は溝の中にⅣ層が落ち込むような形で堆積している。SE8が埋没した後にSE9が掘削されその後Ⅳ層が堆積したものと思われる。



第85図　遺構分布図　（S＝1／1,000）



第87図　A区ＳＥ７支流土層断面図（Ｓ＝１／20）

第86図　A区平面図　（Ｓ＝１／400）

(2) 堰

① A区

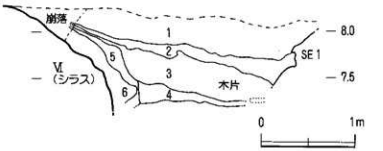
堰跡はＳＥ７の２ヵ所で検出された。いずれも上部が削弊され埋められたような埋土の状態であるため完全な形では残っていないが構造を伺い知ることはできる。両堰とも構造はほぼ同じである。

ＳＯ２はＳＥ７の上流部で検出された。堰の構造は、流路に一列に11本の杭を打ち込み、そのうちの流路凹部の杭の手前に横木を入れ、さらに樹皮を溝の形状に合うように張り、横木と樹皮を固定するために樹皮の前部に細木の枝をあてて植物のようなもので結びつけている。溝の底部は樹皮が余裕をもてるように張ってあり、また溝の底部からは板状の木片が出土した。この木片が堰の構造物かどうかは不明であるが、溝側面を固定するための材の可能性もある。樹皮の底面のレベルは7.5ｍ。配水のための水口は確認できなかった。

ＳＯ３はＳＥ７の下流部で検出された。堰の構造は、流路に一列に８本の大杭を打ち込み、その手前に角張った横木を入れ、さらに樹皮を溝の形状に合うように張り、横木と樹皮を固定するために樹皮の上部に細木の柱をあてて植物のようなもので結びつけている。溝の底部は樹皮が余裕をもてるように張ってある。ＳＯ２で出土したような板状の木片は出土しなかった。堰（樹皮部分）の枝（南側）に水口が確認された。シラスをＶ字状に掘削した水を名が安と思われるが、溝の検出面がシラス上のため実際の深さ・形状は確認できなかった。シラス面からの深さは約40㎝。樹皮の底面のレベルは7.5ｍで水口のレベルは堰の上位に位置する。また、堰の下流部で合流するＳＥ３支流は、合流部のレベルが7.4ｍで、堰の樹皮部分の底面より10～15㎝程深くなっている。水口からは南の方向へシラス面に粘土の堆積が筋状に検出できた。ＳＥ７支流の断面図を見ると、底面には水が流れたような堆積土はなく、流動状葱の黒色粘土の上にラミナが混入され埋められたような埋土状況である。また、底面はシラスのためか堅く締まっていた。水田は検出することができなかったが、プラント・オパールでは水田の存在が予想されたため、検出された堰はそれに伴うものではないかと思われる。

堰の使用されていた年代であるが、ＳＯ２とＳＯ３の構造をみてみると、どちらも流路の幅に広く杭を打ち込み、深い溝の部分には太い杭を選んで堰の支えにしている。しかし、杭の加工をみるとＳＯ３がきれいに加工され、横木も丁寧に加工された角材を使っているのに対して、ＳＯ２は太いもの細いものと混在しており横木も枝を代採したものを使っている。再利用の木材の可能性もある。遺物を見てみると、検出面と最下層出土の土器が結合えいることから同じ溝で何回かの掘削が行われたと思われる。また、古墳の土師器が埋土から出土していることや杭の14Ｃ年代測定、さらに溝が埋没した後に堆積した土層に一次降灰に近い高原スコリアの混層があることなどから、古代の時期に使用されたのではないかと思われる。その他、図面は載せていない杭が14Ｃ年代測定で550年の年代を得られている。

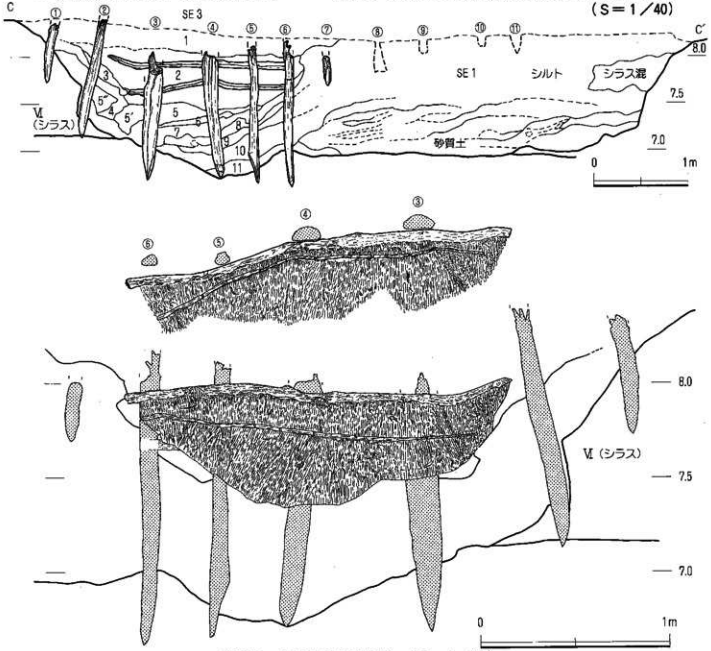
第88図　A区ＳＥ１・ＳＥ７土層断面図
（ＳＯ２部分）　（Ｓ＝１／40）



1層　黒　粘　土…黒状灰色粘土・ラミナ・シラスのブロックが少量混入。
2層　黒　粘　土…黒状灰色粘土・ラミナ・シラスのブロック混入。
3層　暗灰粘土…シラス混入。1～2㎜の炭化物粒含む。
4層　暗灰粘土…1～2㎜の炭化物粒含む。
5層　灰　粘　土…2～3㎝の灰色・暗灰色斑状粘土混入。
5′層　灰　粘　土…5層よりやや粘質が強い。内容は5層と同じ。
5″層　灰　粘　土…小さな斑状灰色粘土混入。内容は5層と同じ。
6層　灰シルト土…さらさらしている。粘土はほとんどまじらない。
7層　暗灰粘質土…植物遺体含む。5層より粘質は弱い。1㎝未満の灰色・暗灰色斑状粘土混入。
9層　暗灰シルト質土…さらさらしている。8層より明るい灰色。砂粒・木片含む。
10層　暗灰粘質土…砂粒・木片・炭化物粒含む。シルト混入。
11層　暗灰砂質土…砂粒・木片・炭化物粒を含む。

1層　黒　粘　土…黒褐色・黄灰色の斑状粘土・ラミナのブロックを含む。
2層　黒　粘　土…1層よりやや柔らかい。植物遺体を含む。
3層　黒　粘　土…黒褐色・黄灰色の斑状粘土。植物遺体を含む。1層よりシラス・ラミナのブロックを多く含む。
4層　暗灰粘土…軟質。小さな斑状粘土。
5層　黒　粘　土…シルトを少し含む。
6層　灰シルト質土…シラス・ラミナのブロックを含む。

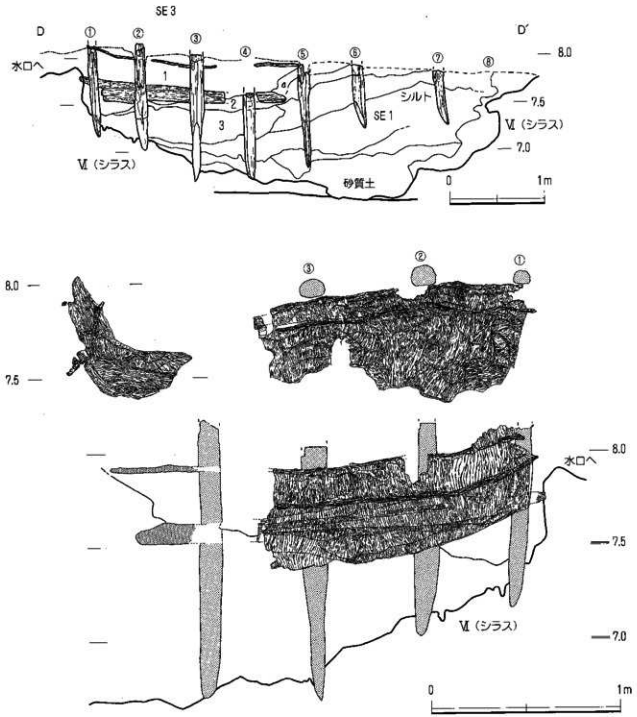
第89図　A区ＳＥ３土層断面図（ＳＯ２上流１m部分）
（Ｓ＝１／40）



第90図　A区ＳＯ２実測図　（Ｓ＝１／20）

第91図　A区　ＳＥ１、ＳＥ７土層断面図　（Ｓ＝１／40）

１層　灰粘質土…黒褐色・黄灰色の大きな斑状粘土。シラス・ラミナの大きなブロックを多く含む。
２層　黒　粘　土…灰色・黒色の小さな斑点状粘土を含む。
３層　黒　粘　土…黒褐色・黄灰色の斑状粘土。１層より小さなシラス・ラミナのブロックを含む。



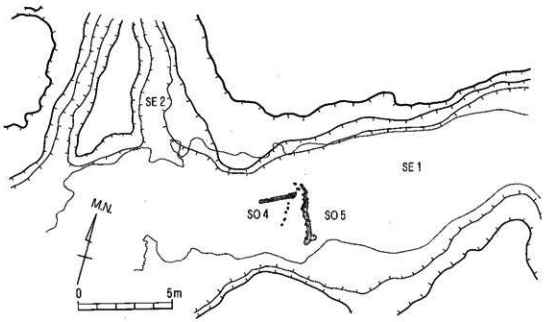
第92図　A区　ＳＯ３実測図　（Ｓ＝１／20）

(2) B地区　堰跡4、5（SO4、SO5）

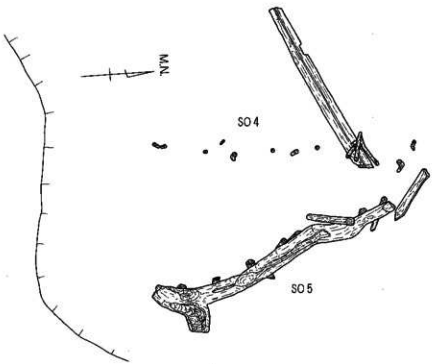
B区で検出された堰は、上下二段構造的な形で検出された。上部（SO4）は、約4mの幅に直径3～6cmの13本の杭が標高約7.4～6.8mの間に打ち込まれている。上部の杭列に伴って出土した板状の木材は、両側に溝が切られており、北側の溝の方に杭が3本打ち込まれていた。おそらく、もう一方の溝にも固定用の杭が打たれていたと思われる。水流等の影響で固定用の杭がはずれ、横木が押し流されてこのような形になったと思われる。なお、A区で検出された堰で見られた水留め用の樹皮は、確認できなかった。

下部（SO5）は、上部とほぼ同じ幅で直径約5～12cmの9本の杭が標高約7.0～6.3mの間に打ち込まれている。これらの杭の西側に横木が置かれていたが、この横木は、自然木の形状を残しており、加工痕は、北側先端部にわずかに見られる程度である。建築材から見ると、上部よりも強固な構造になっている。

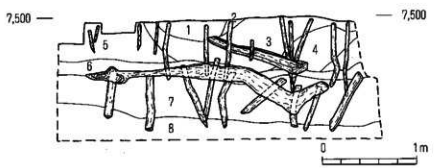
この上部と下部の杭列と横木が同一時期のものであるか、という疑問もあるが、横木が杭の東側にあること、杭が倒れずに打ち込まれた状態で検出されたことなどから見て、河川が東から西に向かって流れていた時期に造られた強固な土台を持つ堰とみてよいのではないだろうか。



第93図　B区堰跡4、5（SO4、SO5）検出状況図　（S＝1／200）



第94図　B区堰跡4、5（SO4、SO5）平面実測図（S＝1／40）



第95図　B区堰跡4、5（SO4、SO5）断面見透し図（S＝1／40）

第15表　B区堰跡4、5（SO4、SO5）土層断面注記表

番号	土　色	土　質	混　入　物
1	灰色（2.5Y 2／1）	シ　ル　ト	灰色粘土、灰白色・灰色砂質土
2	灰色（2.5Y 2／1）	シ　ル　ト	灰色粘土、灰白色・灰色砂質土、炭化物
3	黒色（N 4／　）	粘　土	炭化物、木片
4	暗灰色（2.5Y 2／1）	粘　土	軽石
5	灰オリーブ色（2.5Y 2／1）	シ　ル　ト	シルト砂
6	灰色（2.5Y 2／1）	砂　質	灰色・白色砂質土、炭化物、木片
7	オリーブ黒色（2.5Y 2／1）	砂　質	砂質植物遺体、炭化物
8	暗灰色（2.5Y 2／1）	砂　質	植物遺体、炭化物、砂

(3) 水田跡・畦畔

水田跡は、D調査区の南部と北東部、標高約8.68～8.8mで検出された。

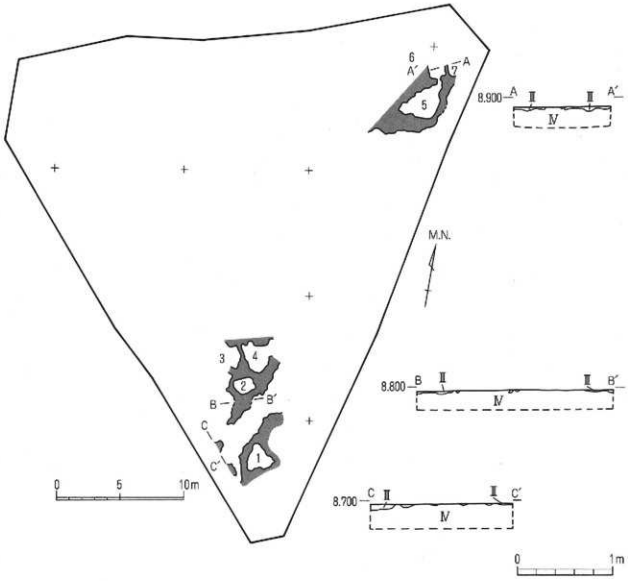
この水田跡は、第Ⅲ層と第Ⅳ層の境界面を平面精査して検出した。第Ⅳ層水田は、第Ⅲ層に被覆されている。第Ⅳ層は、調査区の中央部を除くほぼ全域に見られ、溝状遺構の上部以外、その直下に接するのは第Ⅴ層である。第Ⅳ層は、調査区の西部で最大約60cmの厚さをもつものの平均すると約8～10cmほどである。第Ⅲ層と第Ⅳ層は、ほぼ平坦な境界をつくっているが、北部と南部で巻き上げによる不明瞭な境界も見られた。

水田跡は、7枚が確認されている。いずれの水田も不定形で面積も約1.8～3.65m²と小規模である。これらの原因として、①河川が平野部を蛇行しながら流れていたため広い区画をとれなかった。②低湿地であったため土圧で畦畔が押しつぶされた、こと等が考えられる。また、水田面は、北側の水田6、7の方が南側の水田1、2よりも高い。

水田1、2の間は、前時代において自然流路があったことからみて、これらの水田が経営されていた時期も河川であった可能性が高い。水田で用いられた水も水田6、7の北側か東側を流れる河川から取り入れられ、水田面の高低差を利用して、北から南に向かって流し、再びこの河川に排水していったと思われる。また、水田5の北側と水田1の西側には、水口状の畦畔の切れ目が見られる。

この第Ⅳ層検出水田に伴う遺物は、出土しなかった。そのため水田の年代は、遺物で位置付けることはできない。しかし、高原スコリア降下以前の水田であること、水田の規模が小さいことから古代のものと考えてよいのではないだろうか。

畦畔検出後、19地点の土壌のプラントオパール分析を行った。その結果16地点で密度が3,000個／g以上の高い値を示し、平均でも約3,700個／gであった。また、当時の稲籾の送料を算出したところ、層厚10cmで面積10a（10,000m²）あたり約3,800kgとなった。年間生産量を10aあたり100kgとするとおよそ38年間稲作が営まれていたことが推定された。



第96図　D区検出畦畔平面実測図(1)　（S＝1／300）

第97図　D区検出畦畔断面図(1)　（S＝1／40）

2．遺　物

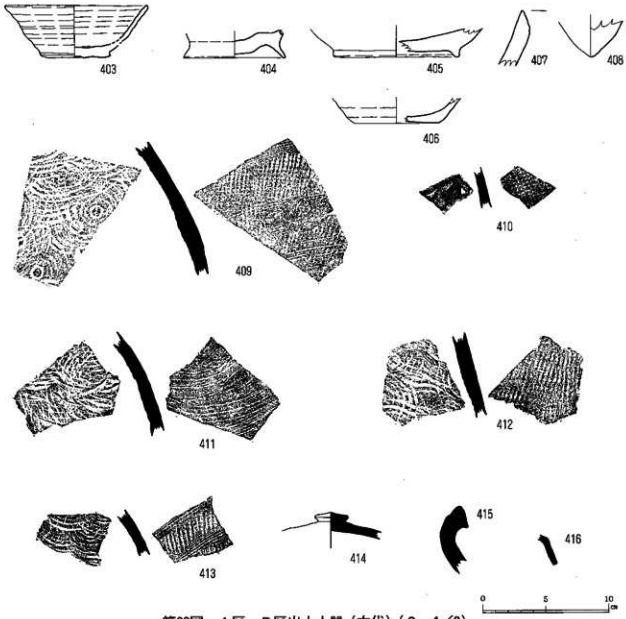
(1)　土師器・須恵器

A区

403は、ヘラ切り底の坏である。

B区

404は、第Ⅲ層から出土した碗で、高台の先端部が先細りとなり、底部内面に浅いくぼみがある。405は、約5㎜の高台をもった坏。406は、風化が著しいものの底部にヘラ切りの痕が見られた。407、408は、布痕土器である。414、416は須恵器の壺である。414には算盤玉状（疑宝珠）のつまみが見られる。他の6つの須恵器片は、いずれも甕である。412は、大型の甕でやや強めに外反する口縁部を持つ。410は外面に格子目タタキが施されている。内面の原体は不明である。409、411、412、413は内面に同心円文当て具によるタタキが施されている。412、413の外面は格子目タタキが施され、413はその上にカキ目の調整が見られる。411の外面は平行タタキの後にハケメの調整、409は平行タタキの上にカキ目の調整を施している。



第98図　A区、B区出土土器（古代）（S＝1／3）

第16表　A区、B区出土土器観察表（古代）

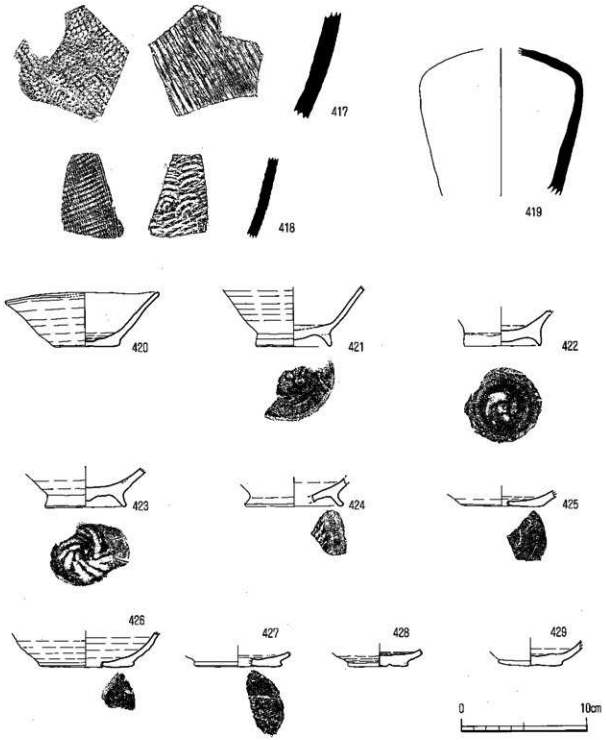
遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
403	土師器	坏 口縁～底部	A区SE3 覆土	11.1	4.3	4.15	横ナデ、ヘラ切り底	横ナデ	灰 (2.5Y5/1)	灰 (2.5Y5/1)	1㎜以下の灰白色・0.5㎜以下の無色透明光沢の砂粒。	風化
404	土師器	高台付椀 底部	B地区		8 (推定)		ナデ	ナデ	浅黄橙色 (2.5YR8/6)	にぶい橙色 (2.5YR7/4)	1㎜以下の赤色・灰色の粒。3㎜程のにぶい黄橙色・赤褐色・灰白色の粒。	古代（8C末～9C初頭）
405	土師器	高台付坏 底部	B地区		10 (推定)		ナデ、ヨコナデ	ナデ	灰白色 (10Y4/1)	にぶい黄色 (10YR7/3)	1～2㎜の灰色の粒。	古代
406	土師器	坏 底部	B地区		6.7 (推定)		ヨコナデ、ヘラ切り、風化が著しい	ヨコナデ	淡橙色 (5YR8/3)	淡橙色 (5YR8/3)	1㎜以下の赤色・灰色・黒色の粒。	古代
407	弥生土器	鉢 口縁部	B地区				調整不明 風化が著しい	調整不明 風化が著しい	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	2㎜以下の黒褐色の粒。4㎜以下のにぶい橙色・灰色の粒。	古代
408	弥生土器	鉢 底部	B地区		1.9		調整不明 風化が著しい	ナデ、指頭痕	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	2㎜以下の灰色の粒。7㎜以下の灰褐色の粒。	古代
409	須恵器	壺 胴部	B地区				格子目タタキの上にカキ目	同心円文状当て具痕	灰色 (N6/)	灰色 (N6/)	1㎜以下の白色・黒色・石英の粒。	
410	須恵器	壺 胴部	B地区				格子目タタキ	原因不明の当て具痕	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (2.5Y7/1)	精良	
411	須恵器	壺 胴部	B地区 第Ⅱ層				平行タタキの後ハケメ	同心円文状当て具痕	灰白色 (2.5Y7/1)	灰色 (N6/)	1㎜以下の白色・黒色・石英の粒。	
412	須恵器	壺 胴部	B地区				格子目タタキ	同心円文状当て具痕	灰色 (N6/)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1㎜以下の白色・黒色・石英の粒。	
413	須恵器	壺 胴部	B地区				平行タタキの上にカキ目	同心円文状当て具痕	灰色 (5Y6/1)	灰色 (N6/)	1㎜以下の黒色・石英の粒。	
414	須恵器	壺 つまみ～天井	B地区 第Ⅱ層				ナデ	ナデ	灰色 (N6/)	灰白色 (N7/)	1㎜以下の白色の粒。	
415	須恵器	不明 口縁部	B地区 第Ⅰ層				ヨコナデ	ヨコナデ、風化が著しい	黄灰色 (2.5Y6/1)	黄灰色 (2.5Y6/1)	1.5㎜以下の灰色の粒。	
416	須恵器	蓋 口縁部	B地区 第Ⅰ層				回転ナデ	回転ナデ	灰色 (N6/)	灰色 (N6/)	精良	

第17表　D区出土土器観察表（古代）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
430	土師器	坏 底部	D層 4		5.8 (推定)		ナデ、工具痕、風化が著しい	ナデ、風化が著しい	浅黄橙色 (2.5Y7/4)	浅黄橙色 (2.5Y7/3)	1㎜以下の灰色・石英の粒。	
431	土師器	高台付椀 底部	D層		6.8 (推定)		ナデ、風化が著しい	調整不明 風化が著しい	橙色 (2.5YR6/6)	橙色 (2.5YR7/6)	1～2㎜のタカヒコゴの粒。1㎜以下の灰色・灰白色の粒。	
432	須恵器	不明	D層				ナデ	ヨコナデ	灰色 (N6/)	青灰色 (10BG6/1)	2㎜以下の灰白色・褐色の粒。	
433	土師器	高台付椀 底部	D層		7 (推定)		ナデ、風化が著しい	調整不明 風化が著しい	橙色 (2.5YR7/6)	橙色 (2.5YR7/6)	1㎜程度の赤色・灰白色・灰色・輝石の粒。	
434	土師器	坏 口縁～底部	D地区	16.6 (推定)	8.2 (推定)	4.3	回転ナデ、ヘラ切りの後ナデ、風化が著しい	ナデ、ヨコナデ、風化が著しい	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (2.5Y8/2)	1㎜程度の灰白色・黒褐色・明褐灰色・黒色の粒。	

C区

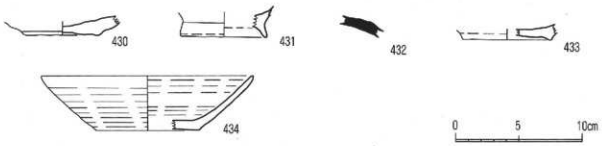
417～419は、須恵器である。417は、内面に平行タタキ、418は、内面に同心円のタタキが施される。419は壺である。420～429は坏である。



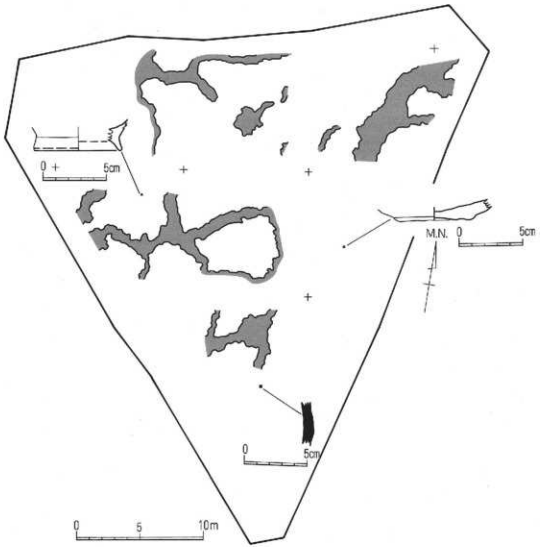
第99図　C区出土土器（古代）　（S＝1／3）

D区

430、431は第Ⅲ層検出した水田跡の水田面（第Ⅲ層部分）から、432は畦畔（第Ⅱ層部分）から出土したものである。430は内外面とも風化が著しく調整が不明な部分が覆いが、底部に工具痕跡がわずかに見られる。431は先端部が若干細くなる高台を持つ碗である。432は須恵器で器種は不明であるが、胎土は東播系の鉢に似ているところがある。433は低い台形状の高台を持つ坏。434の坏は外面に回転ナデの調整が見られ、底部はヘラ切りの後ナデを施している。



第100図　D区出土土器（古代）　（S＝1／3）



第101図　D区遺物出土位置図　（S＝1／300）

第18表　C区出土土器観察表（古代）

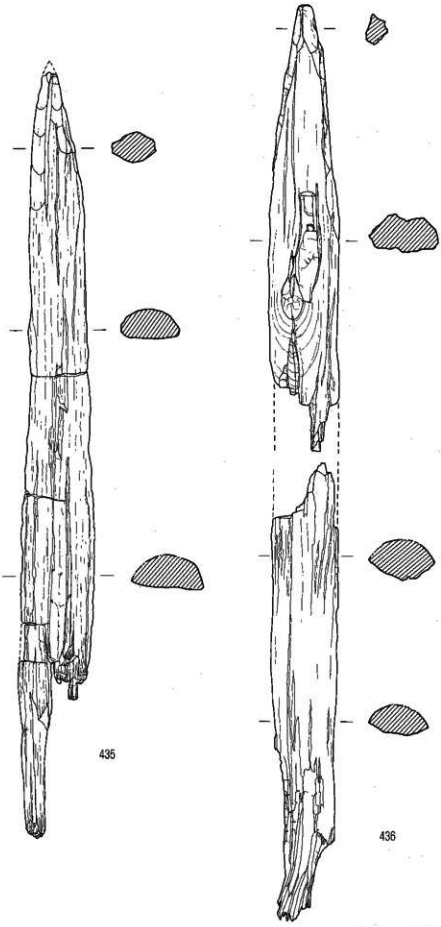
遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
417	須恵器	甕 胴部	1・DE層				格子目タタキ、斜方向の使い込痕、工具痕による凹み	斜方向の平行タタキ	灰 (N6/)	灰 (N5/)	1㎜以下の灰白色砂粒。	
418	須恵器	甕 胴部	2・AII層				斜方向のカキ目の後斜方向の平行タタキ、ナデ	同心円のタタキ	青灰 (5PB5/1)	青灰 (5PB5/1)	1㎜以下の灰白色砂粒。	
419	須恵器	甕 胴部～頸部	4EII－III層 3・EII層				横方向のナデ、自然釉	回転ナデ	黄灰 (2.5Y5/1) 黒褐 (10YR4/1)	灰 (N5/) (N4/)	1㎜以下の黒褐色砂粒。	
420	土師器	坏 口縁～底部	SE9	11.9	4.4	4.4	ナデ、横ナデ、ヘラ切	横ナデ	にぶい橙 (5YR7/4) 橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6) 橙 (5YR6/6)	5.5㎜の明黄灰色、2.5㎜以下の乳白色・赤褐色の粒、2㎜以下の雲母。	
421	土師器	坏 胴部～底部	I・AB SE9 最下層		6.7 (推定)		横ナデ、ナデ、ヘラ切、磨り痕	横ナデ	淡赤橙 (2.5YR7/4) 浅黄 (5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/3) 黄 (2.5Y8/4)	3㎜以下の褐灰色粒、1㎜以下の石英。	
422	土師器	坏か鉢 底部	3・EII層		6.0 (推定)		回転ヘラ切り、粘土塊Ⅱ	横ナデ、ナデ、剥離	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	3.5㎜以下の橙色、2㎜以下の灰色・白色の砂粒。	風化
423	土師器	鉢 底部	1・DF II層		6.35 (推定)		放射状の削調整後、回転ヘラ切り	渦巻状のナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	5㎜以下の橙色、微細な黒色の砂粒。	風化
424	土師器	鉢 底部	1・CII層		7.8 (推定)		回転ナデ、高台内放射状調整後、回転ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4) にぶい橙 (7.5YR7/3)	橙 (7.5YR7/6)	0.2㎜以下の黒色・灰褐色、微細な無色透明鉱光沢の粒。	
425	土師器	皿 底部	1・BV層		6.6 (推定)		横ナデ、回転ヘラ切	回転ナデ、ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	3㎜以下の赤褐色粒。	
426	土師器	坏 底部	4・FII層		7.5 (推定)		横ナデ、回転ヘラ切り底	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	1㎜以下の黒褐色粒。	風化
427	土師器	坏 底部	1・EII層		7.0 (推定)		ナデ、回転ヘラ切	ナデ	灰白 (7.5YR8/2)	橙 (5YR7/6)	3㎜以下の褐色粒。	
428	土師器	坏 底部	2・EDII層		4.7		回転ナデ、底部に棒状の圧痕	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜以下の無色透明・黄色・鉱光沢、微細な灰褐色・黒色・褐色の粒。	風化
429	土師器	坏 底部	3・CV層		3.05		風化のため調整不明	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR7/1)	3㎜以下の軟質褐色、1.5㎜以下の無色透明・灰白色鉱光沢、0.2㎜以下の黒色の粒。	風化

(2) 木製品・網代

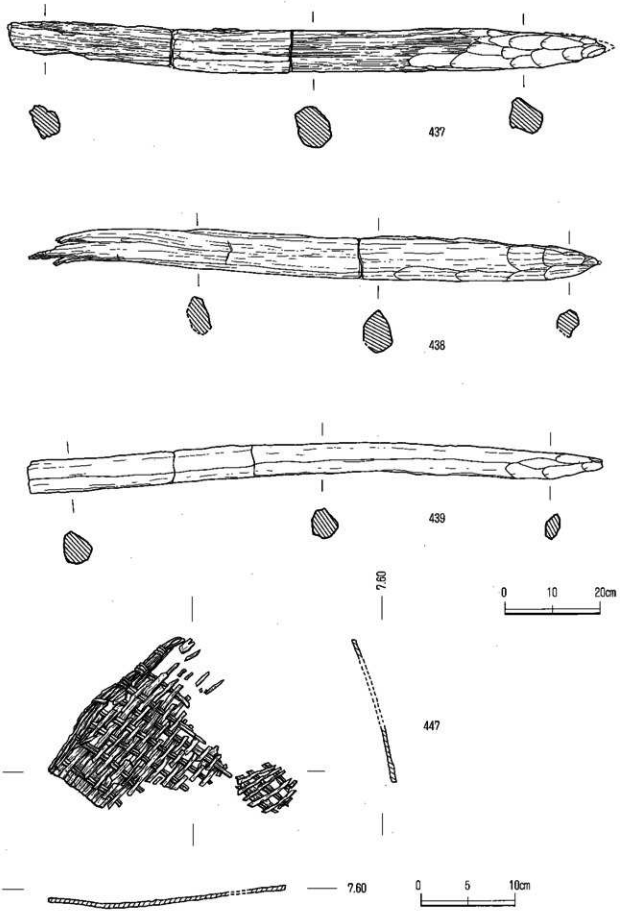
435～439は堰1の構築材である。435は4番杭で樹木を半裁してフラットな面を内側にして横木が固定しやすいように打ち込んである。長さ98cm・最大幅15.2cm・半裁箇所の厚み7.4cm先端の加工面数は20。436は3番杭で435と同様半裁され打ち込んである。長さ195cm・最大幅14.5cm・半裁箇所の厚み8.4cm・先端の加工面数は25。樹種はクリ、14C年代測定は405年が得られている。437は5番杭である。半裁した樹木をさらに分割して加工してある。長さ124.5cm・最大幅9.5cm。先端の加工面数は23。438は2番杭である。437同様に加工してある。長さ69.4cm。加工面数は19。439は6番杭である。長さ119.9cm。加工面数は12。掲載してない杭で樹種はクリで、14C年代測定では420年が得られている杭もある。

440～446は堰2の構築材である。440は3番杭である。長さ131cm。加工面数は21。樹種はシイ属である。441は2番杭である。加工面数は16。442は1番杭である。樹種はシイ属。443は4番杭である。444は5番杭である。加工面数は16。445は7番杭である。14C年代測定では665年が得られている。加工面数は12。446は6番杭で樹木を半裁してフラットな面を内側にしている。加工面数は20。杭の先端はいずれも鋭くなっており打ち込みやすい様に加工してある。

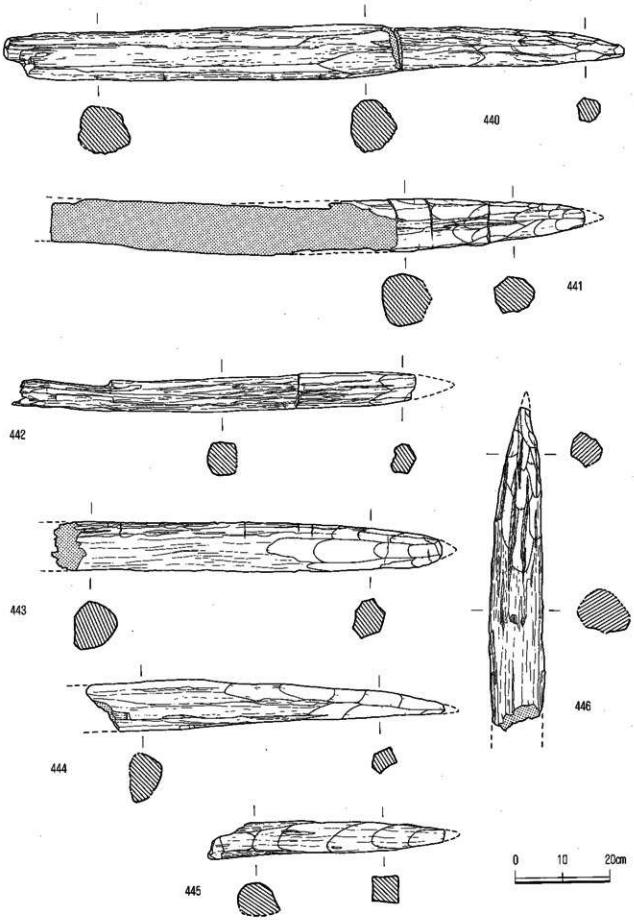
447は網代である。SE3屈曲部の斑状粘土を除去したところで出土した。検出レベルは7.58m。埋土とレベルから判断すると堰がの機能していた時期のものと思われる。網み方は1本超え1本替り1本送りで経条と緯条を交互に規則的に編んでいる。経条の1単位は2本の材で構成され緯条は1本の材で構成されている。端部は3本の横材を1ヵ所3くくりして固定している。材料はヨシかアシで籠の一部と思われる。



第102図　A区出土木製品(3)　（S＝1／8）



第103図　A区出土木製品(4)　（437～439…S＝1／8、447…S＝1／4）



第104図　A区出土木製品(5)　（S＝1／8）

第3節　中世以降の遺構と遺物

1　遺　構

(1) 旧河道

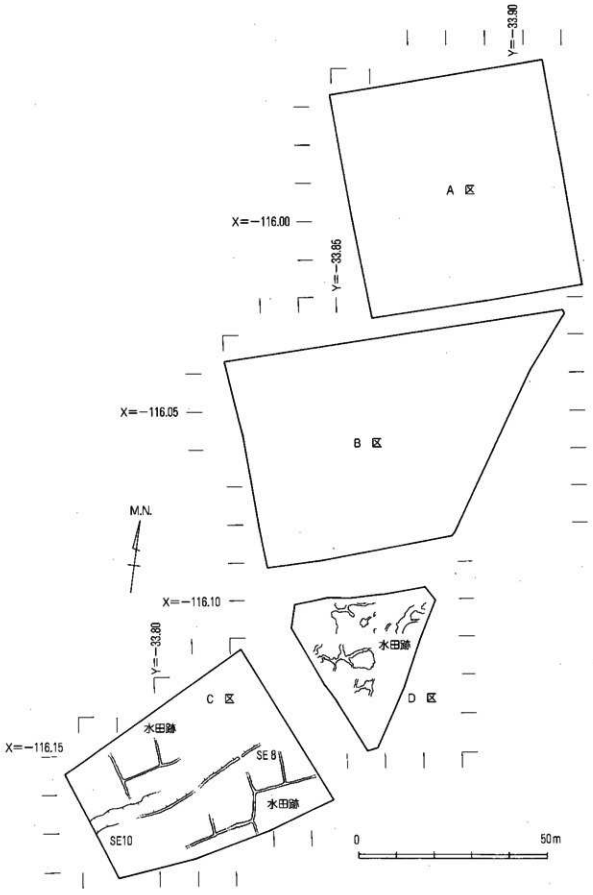
C区においてこの時代の幅約4～5mの溝条遺構10（SE10）を検出した。SE10は、調査区の西壁から東壁へ抜けている。SE10のレベルを観察すると西から東へ15cm程の傾斜がみられることから水はこの方向で流れていたと思われる。水田の水口も確認された。

(2) 水田跡

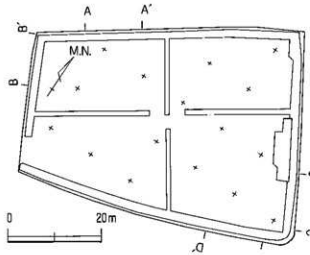
① C区

A区の第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳ層において、イネのプラント・オパールが5000／g以上と高い価であったことか、C区では第Ⅱ層と第Ⅲ層との境界で水田跡の検出をめざした。

第Ⅱ層には火山灰が混入しており自然科学分析により降下軽石の霧島火山起床の高原スコリアは第Ⅱ層の下位にいくほど多くなり、第Ⅱ層と第Ⅲ層の境界に足跡状のような凝集部を造っていた。土層断面では畦畔を確認することができなかったので、まず、第1層を重機にて除去し、第Ⅱ層を人力で除去しながら、平面上で畦畔を捕まえるために、慎重に削り下げ精査していった。発掘用具としては、大型の両刃草削鉄と角スコップを使用した。第Ⅱ層と下層との境界に達した地点で畦畔状の筋を9条検出した。トレンチを4ヵ所入れて断面で確認したところ、検出時の畦畔の幅は約30cm～40cm、高まりは約5cmを確認できた。畦畔は、ほぼ正方位の東西方向と南北方向に走り長軸方向10～14m、短軸方向10m、面積約100～140㎡程度であり、中規模の水田区画を造っていたと思われる。C区では9枚の区画が認められた。水田跡からは杭列や矢板は出土せず、水田を区画したり耕作土流出を防ぐための盛土のみで造られた畦畔を持つ水田と思われる。また、C区の中央部には、東西方向に溝状遺構10（SE10）が検出され、水口と思われる畦畔の切れている部分と確認した。ここではさらに高原スコリアの集中が見られ、水田と水口でスコリアの集中部が検出された。それぞれの区画に水口が作られていたと考えられるが、他には検出できなかった。しかし、中央トレンチの畦畔切断箇所でV字状の断面を確認し、さらに南に向けてスコリアの集中部が伸びていたこともあり水口の可能性がある。また、水田の区画内に段違いの部分も確認した。これは、当時の水田は盛土のみの小畦畔で小さな区画に仕切り、水をオーバーフローさせて給水する可能性もある。南北の畦畔の横と段違いの部分に、幅約1～2m、厚さ約2cmでスコリアが体積していた部分があった。水によりスコリアが凝集部分が検出されたが、これは水田耕作を受けずに第Ⅱ層が体積し被覆された結果だと思われる。反面、水田区画内は、連続した耕作の影響を受けスコリアが撹拌される結果となった。水田区画内のスコリア凝集部は、第Ⅱ層中の踏み込みによるものと考えられる。また、この凝集部分は畦畔上では検出されなかった。また、C区の北側には丘陵部がひかえており、そこからの崩落と思われる黄色砂岩の体積がSE10を境にして北側だけに見られた。この砂岩は第Ⅲ層の上位に体積した畦畔上にはほとんどなかった。



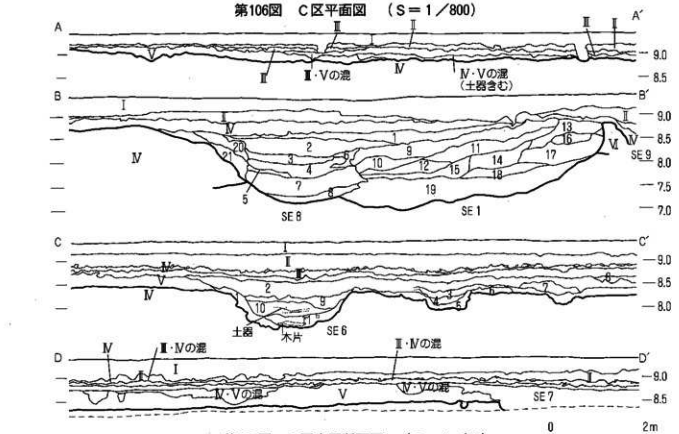
第105図　遺構分布図（中世）　（S＝1／1,000）



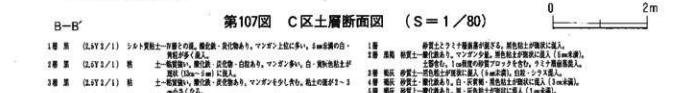
第19表　C区基本層序注記表

順序		土質	酸化鉄	混入物	備考
Ⅰ				高原スコリア、砂岩片	現耕作土
Ⅱ	黒褐色（10YR3/1）	粘土	管状、雲状	高原スコリア、マンガン核	
Ⅲ	黒褐色（10YR3/1）	粘土	管状、雲状	マンガン核	
Ⅳ	灰色（5YR6/1）	シルト	管状、雲状	マンガン核	
Ⅴ	灰色（7.5Y6/1）（5Y4/1）	シルト粘質土	管状、斑状	植物遺体、炭化物	ラミナ層45層炭層
Ⅵ	灰色（10Y6/1）	粘質土		砂	二次堆積シラス

第106図　C区平面図　（S＝1／800）



第107図　C区土層断面図　（S＝1／80）



1層 黒　(2.5Y3/1)　シルト質粘土～弱質土の層。植化鉄・炭化物あり。マンガン上位に多い。5mm未満の白・黄粒が多く混入。

2層 黒　(2.5Y3/1)　粘　土～粘質強い、腐植源・炭化物・白粒あり。マンガン多い。白・黄粒を粘土が混入（15cm～5mm）に混入。

3層 黒　(2.5Y3/1)　粘　土～粘質強い、腐植源・炭化物あり。マンガンを少し含む。粘土の量が2～3cmさくなる。

4層 黒　(2.5Y3/1)　粘　土～粘土の混5mm未満、シラスがブロック状に混入。炭化物あり。

5層 黒　(2.5Y3/1)　粘　土～作土の混ある。上部3号炭化物多い。

6層 灰　(N3/0)　シルト質粘土～5層上位と同じ内容。

7層 灰　(N3/0)　粘　土～上層より粘質強い。炭化物多い。植物遺体（腐化するに含に含む）あり。

8層 黒　(N3/0)　粘　土～マンガン・腐植源あり。炭化物土位に多く含む。

9層 青 灰 (2.5Y4/1)　シルト質粘土～マンガンを上位に少量含む。炭化物含む。

10層 青 灰 (2.5Y4/1)　粘　土～炭化物・マンガン多い。炭化物少量。

11層 青 灰 (2.5Y4/1)　シ ル　ト～炭化物少量。

12層 青 灰 (2.5Y4/1)　シ ル　ト～炭化物少量。

13層 暗 灰 (10Y3/1)　粘　土～粘質強い、腐植源多い、シラスがブロック状に混入。炭化物あり。

14層 暗 灰 (10Y3/1)　シ ル　ト～砂質強い、腐植源あり。炭化物・炭化含の腐植粘土（3cm未満）あり。白粒多い。

15層 青 灰 (5Y4/1)　シルト質粘土～炭化物少量。

16層 黒 灰 (10Y3/1)　シルト質粘土～粘質強多い、マンガン層、シラスがブロック状に混入（10cm未満）。炭・白・灰色の腐植粘土（1cm未満）あり。炭化物あり。

17層 暗 灰 (10Y3/1)　シ ル　ト～腐化あり。炭化物・腐物遺体・白粒（3mm未満）を含む。

18層 黒 褐 (2.5Y3/1)　シルト質粘土～粘質強土位に少しあり。炭化物多い（5cm未満）、白粒を含む。

19層 黒褐灰 (7.5YR3/1)　砂　質　土～白粒・腐物遺体・土器を含む層、灰色の腐植粘土混入。底面に黄色の砂岩あり。

20層 黒　(5Y2/1)　シ ル　ト～マンガン・腐化あり。腐植な炭化物・白粒混入。下位に灰色粘土混入。

21層 青 灰 (10Y3/1)　シ ル　ト～シラスと粘土の混ざり。腐植源・マンガン土位に多い。植基の炭化物含有。

1層　砂質とラミナ層基盤が混ざる。黒色粘土が強度に混入。

2層 黒褐　粘質土（混ある）。マンガン多量。黒色粘土が強度に混入（5mm未満）。
　土質含む。1mm程の砂質フロックを含む。ラミナ基盤混混入。

3層 暗灰　砂質土～黒色粘土が強度に混入（4mm未満）。白粒・シラス混入。

4層 暗灰　砂質土～腐化混ある）。白～灰黄粒・黒色粘土が強度に混入（3mm未満）。

5層 暗灰　砂質土～腐化混ある）。黒～灰色粘土が強度に混入（1mm未満）。

6層　灰　粘質土～ラミナ層基調。黒褐色粘がブロック状に混入。白色シルト基底に混入。

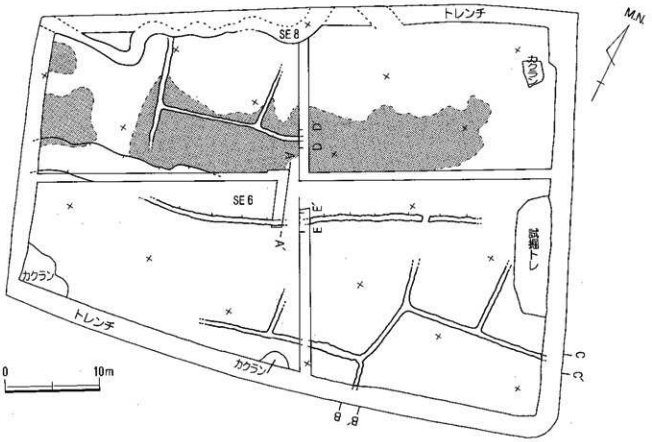
7層　灰　ラミナ～シラス質の基調。腐化混ある。白色シルトを多量に含む。シラス混。

8層 黒灰　粘質土～腐化混・マンガンあり。白色シルトを多量に含む。黒色粘土が強度に混入（1mm未満）。

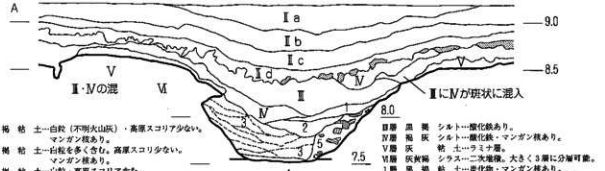
9層 黒灰　粘質土～腐化混・マンガンあり。白粒を少し含む。ラミナ基盤混ある。
　黒色粘土や白粒粘質土・シルト質混じ含む（5mm未満）。

10層 灰　粘質土～腐化混・木片・土器・炭化物を含む。シルト混じりる粘質土を含む（中層いから下位）。

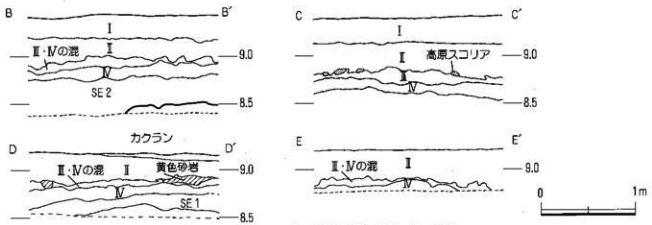
11層 灰　粘質土～6片・土器を含む。黒色粘土が強度に混入（3mm未満）。白粒・白色粘質土を含む。



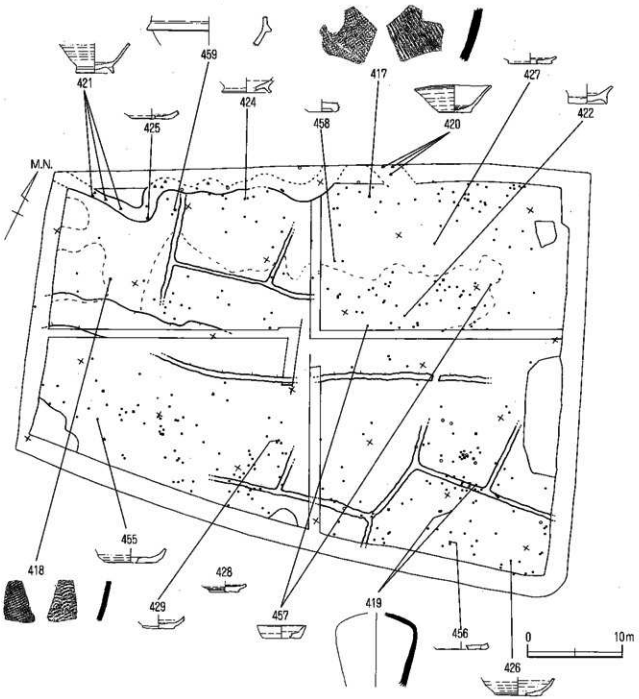
第108図　C区　水田跡・平面図（1／400）



第109図　C区　SE10土層断面図



第110図　C区　水田跡畦畔断面図（1／40）



第111図　遺跡Ｃ区遺物出土位置図（１／400）

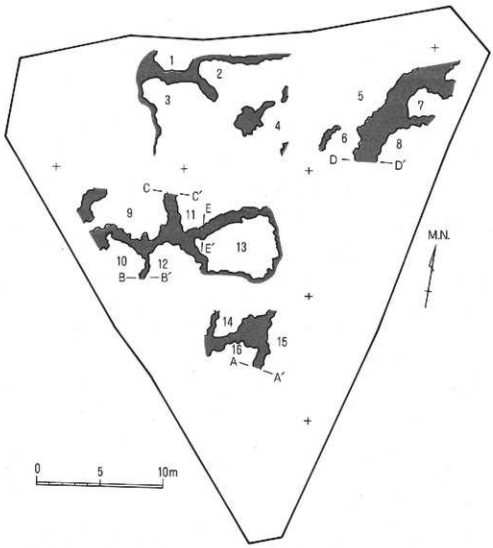
② D区

水田面は、第Ⅱ層と第Ⅲ層の境界面を平面精査して標高約8.45～8.88mで検出した。第Ⅲ層水田は、第Ⅱ層に被覆されている。第Ⅲ層は、調査区全域に見られ調査区の中央部で最大約50cmの厚さをもつが、平均すると約15cmほどである。第Ⅱ層と第Ⅲ層は調査区の中央部では平坦で明瞭な境界をつくっているものの、5～20cmの小さな巻き上げによって複雑な境界をつくっていた。

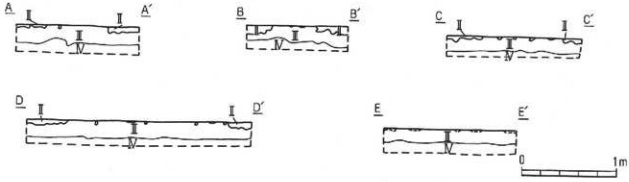
水田跡は、16枚が確認された。畦畔でかこまれた水田面は13水田（面積約21.1㎡）のみで、他のものは、不定形でしっかりとした水田区画としては検出できなかった。また、畦畔の幅も40～200cmと不規則であった。この時代の水田は河川が埋まった部分に造成されたため、土圧の影響を受けやすかったことがこのような形となった原因ではないだろうか。なお、検出された水田面のレベルは北側と南側が高く、中央部が低くなっている。また、水田面には上から踏み込まれた足跡状のものが多数確認された。

調査区内からこれらの水田に伴う水利施設や溝等は、検出できなかった。おそらく、大淀川に伴う支流がこの時代にも調査区周辺にあり、そこから水を取り入れ、また排水していたのであろう。水田面からは古代の特徴を持った3点の遺物（土師器2点、須恵器1点）が出土した。中世の遺物は出土しなかったが、第Ⅲ層が霧島・高原スコリア（Ｋｒ－Ｔｈｓ）混じりの第Ⅱ層に覆われていたことから、これらの水田は高原スコリア降下後（中世）に経営されていたものと考えられる。

畦畔検出後、プラントオパール分析を行った。その結果、採取した26点のすべての試料でイネが検出され、内18点が密度3000個／ｇ以上の高い値を示し、平均値も約2623個／ｇをかぞえた。また当時の稲籾の総量は、層厚10ｃｍで10ａ（10000㎡）あたり約3000ｋｇで、仮に年間生産量を10ａあたり100ｋｇとすると、およそ30年間稲作が営まれていたことが算出された。



第112図　D区検出畦畔平面実測図(2)　（S＝1／300）



第113図　D区畦畔断面図(2)　（S＝1／40）

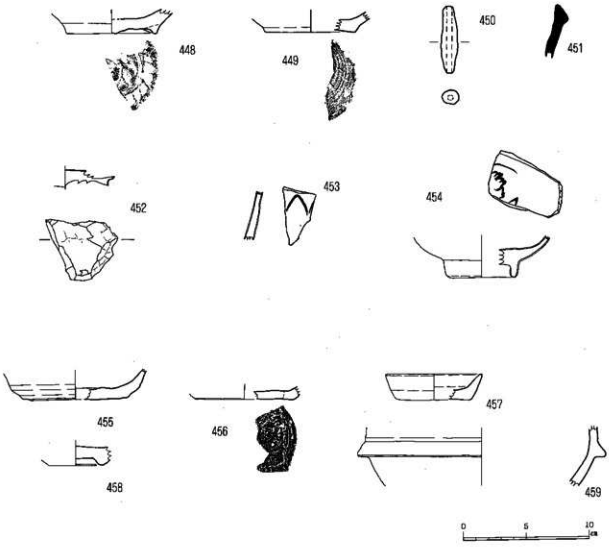
2．遺　物

(1)　土器

448、449は、土師器の坏である。448には、短い高台が付き、底部に放射状圧痕がみられる。449は、糸切り底である。450の土錘は第Ⅱ層から出土したものである。451の須恵器は、12世紀後半の東播系の鉢の口縁部で第Ⅱ層から出土した。455～457は、C区出土の坏である。

(2)　その他の遺物（陶磁器類）

452は白磁の大き目の鉢の底部で、外面の底部には釉を施していない。458はC区で出土した碁笥底の白磁である。14から15世紀の中国からの輸入品と思われる。453、454は青磁で453が13～14世紀、454は14～15世紀の中国竜泉系のものと思われる。454は、筒型に近い大ぶりの碗で見込みに劃花紋が入る。453は碗の胴部で蓮弁紋の剣先の部分が見られる。また内外面とも貫入が見られる。



第114図　B区、C区出土遺物（中世）　（S＝1／3）

第20表　B区出土遺物 観察表（中世）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
448	土師器	高台付坏 底部	B区		7.2 (推定)		ヨコナデ、ヘラ切り、放射状圧痕	ナデ	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	1mm以下の灰白色・赤色の粒。2mm以下の黒色の粒。	古代末～中世
449	土師器	坏	B区		7.2 (推定)		ナデ、糸切り	ナデ	浅黄橙色 (10YR8/6)	浅黄橙色 (10YR8/6)	精良	古代末～中世
450	土師器	土錘	第Ⅱ層						にぶい橙色 (7.5YR7/4)		1mm以下の白色・石英の粒。	
451	須恵器	不明 口縁部	第Ⅱ層				ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 (N6/)	灰白色 (10Y7/1)	1mm以下の白色・黒色の粒。	
452	白磁	坏 底部	B区				施釉	施釉 風化が著しい	灰白色 (10Y8/1)	灰白色 (10Y8/1)	1mm以下の石英の粒。	14～15C 中国産
423	青磁	碗 底部	第Ⅰ層		6.6 (推定)		施釉、連弁文	施釉	明緑灰色 (7.5GY7/1)	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	2mm以下の褐色の粒。	13～14C の龍泉系のもの
454	青磁	碗 胴部	第Ⅱ層				施釉	施釉	明緑灰色 (7.5GY7/1)	明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	1mm以下の褐色の粒。	14～15C 中国製

第21表　C区出土遺物 観察表（中世）

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
455	土師器	坏 底部	3・AⅡ層		7 (推定)		横ナデ、糸切	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4) (2.5YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下の赤褐色、1mm以下の褐灰色の粒。	
456	土師器	皿 底部	4・EⅡ層		8.0 (推定)		糸切	回転ナデ	灰白 (10YR8/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の乳質明赤褐色・軟質橙色の粒。	風化
457	土師器	皿 口縁～底部	3・EⅡ層	7.6 (推定)	5.7 (推定)	2.05	風化のため調整不明	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の軟質赤褐色、1mm以下の軟質橙赤褐色の粒。	風化
458	白磁	坏小碗 底部	2・DⅡ層		4.3 (推定)		回転ナデ、露胎	施釉	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	精良	
459	陶器	甕 胴部	1・BⅢ層				横ナデ、全面に丹葉り	回転ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5mm以下の灰白色・褐色の砂粒。	

まとめ

町屋敷遺跡は宮崎市の西部、大淀川と本庄川の合流部の南側の低地に位置する。今回の調査では3時期の水田面を検出し、自然科学分析の結果から水田耕作を肯定するデーターも得られた。また、古墳時代以前の溝状遺構から2時期の堰跡が検出されたほか、扉や大引、鉢などの木製品や大量の土器が出土した。これらの資料が今後の歴史研究に寄与できれば幸いである。以下、簡単に今回の調査のまとめを述べることにする。

水田遺構について

町屋敷遺跡の調査でB区において古墳時代のものと考えられる水田跡と堰を確認した。一般に水田は、弥生前期に湿田、弥生中期以降にそれに半乾田が加わり、古墳中期以降に乾田の開発が始まるととらえられている。B区検出の水田は、灌漑施設があることから導水を要する半乾田であったと考えられるが、遺跡が河川の影響を受けやすい位置あることから湿田もあったと思われる。用水路は自然流路を利用し、そこに水口を作って水田に水を引き入れていたと考えられる。水田部には水口が数カ所見られるが、オーバーフローによって田越えで灌水する部分もあったであろう。B区で検出された水田はいずれも区画が小さい。これは広い区画に水を張る技術がまだ未熟であったからであろう。一方、自然科学分析の結果ではⅣ層上面において平均約3,200個／gのイネが検出された。区画の小さな水田にしては高い値が出たことから、当時から本格的に稲作が行われていたことが推測される。

古代の水田と考えられるものはD区で検出された。B区で検出された堰が押し倒された状態であったことから、これらの水田は、洪水等によって先の時代とは異なる地形上に作られたと思われる。区画は、約1.8～3.65㎡と小規模である。しかし、プラントオパールは平均約3.700個／gと高いことから広い区画に水を張る技術的な問題の他に、河川の支流が複雑に蛇行しながら遺跡内を流れていたために広い区画を作れなかったという、地形上の問題があったことも考えられる。

中世の水田と考えられるものは、C区とD区で検出された。D区で検出された水田で畦畔に囲まれ区画のはっきりしているものの面積は、約21.1㎡あり、先の2時期のものと比べて区画の大きさが目立つ。D地区の畦畔は不定型な形状であったが、C区では、直線状の形で検出された。畦畔で囲まれた区画がないので1枚あたりの面積は不明だが、水田の面積はD区同様明らかに過去の2時期のものより広いことは見て取れる。これは、水田の湛水深を均等にする技術が進んだからではないだろうか。

堰跡について

町屋敷遺跡発掘調査で検出された遺構の中で、もう一つ注目されるものに堰跡がある。中でもB区の溝状遺構1（SE1）内から押し倒された状態で検出された堰跡1（SO1）とA区で杭が打たれた状態で検出された堰跡2、3（SO2、SO3）は、当時の土木技術をみる上で興味深いものがある（SO1に関しては、漁労施設もしくは木器用材の保存施設の可能もある。）。堰跡1（SO1）は、3列の杭列で構成されている。その構造は、直径約6～10㎝、長さ約50～120㎝（一部に180㎝を越えるものあり）の杭を20～25㎝の間隔で川底の打ち込んでいる。それらを横木で押さえた後、樹皮を張り、

その上に杭を敷き詰め、さらにその上に樹皮を張っている。この構造の中で目を引くのは、保水性を保つために用いられている樹皮である。樹皮には、一部に材料を織物状に組み合わせて作られたものがあるが、ほとんどは、イネ科タケ亜科の植物の茎を約3～7㎝の厚さで水平に敷き詰めたものである。この後者の樹皮の張り方をみてみると初めに杭に対して茎が平行するように張った場合は、二枚目は、杭と茎が直交するように張ってあることから一種の法則性が伺える。

杭に用いられている樹木は、フジ、クヌギ、アカガシ、クリ、ネムノキ、イヌガヤ、エゴノキ等、種類が豊富である。このことから当時遺跡の周辺には広葉樹林が広がっていたことと土木用材には、樹種の選定はあまりなされていなかったことが伺える。

A区では、SO2とSO3の2つの堰跡が検出された。調査区の北側で検出されたSO3は、直径約8～14㎝、長さ約50㎝～80㎝の本の杭を約40か～75㎝の間隔で1列に打ち込んで造られている。調査区の中央部で検出されたSO2では、直径約8～20㎝の一列に並んだ7本の杭が検出されたが、さらに西側に杭を打ち込んだ跡が4カ所あったことから11本の杭で構成されていたと思われる。そして、これらの杭の上流側に2本の横木をわたし、その上に保水のための樹皮を張っている。この横木は、上部の方が樹皮の上端部を押さえるように置かれていることから、杭を固定することと樹皮の接着させる2つの役割を持っていたと思われる。また、上部の横木に平行するように幅約2～3㎝ほどの木材が補強のために樹皮の上に打たれている。

A区で検出された2つの堰跡を観るとB区のSO1よりも使用されている杭が太いことからその堅牢さが伺える。また、水留めの樹皮の張り方も丁寧で耐久性を高める技術が施されている点などから灌漑施設建築の進歩が現れている。また、杭に使用されている杭がいずれもアカガシであることから土木用材の樹種の選定がなされていたことも考えられる。

遺物について

遺物は、縄文時代～中世の時間幅で土器類、木製品、石器、陶磁器等が出土した。量的に多いのは、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器類である。ここでは、土器と木製品で注目されるものを再度取り上げてみたい。

土器類では、畿内様式の高坏と器台。そして複合口縁壺が注目される。遺物番号289の器台は柱状部に横方向の凹線紋が施され、脚部の上位と下位に穿孔が入れられている。畿内の河内Ⅳ－4様式に類似した形状のものが見られる。しかし、河内Ⅳ－4様式が回転台を用いて凹線紋を入れるのに対して、町屋敷遺跡出土のものには回転台を使用したような洗練さはない。遺物番号246の高坏はラッパ状に大きく広がる裾部を持ち、畿内の河内Ⅴ－3様式にその形状が似ている。畿内後期の仕上げの特徴である緻密なミガキが坏底部から脚部にかけて見られる。

遺物番号93と326の複合口縁壺は、口縁が頸部から外湾しながら広がり、拡張部がわずかに外湾して上方外側に向かって延びている。口縁端部と口縁屈曲部には、球状の拡張部を持ち、胴部は、扁球状である。これと類似した形状の複合口縁壺は、町屋敷遺跡のある宮崎市倉岡地区の大淀川を挟んで対岸に位置する迫内遺跡（宮崎市大字富吉）の古墳時代前期の古墳の周溝と本庄川を挟んで北に位置す

る木脇遺跡（国富町大字木脇）の土坑から出土している。

宮崎市の生目古墳群の生目１号墳は、最古の大型前方後円墳である奈良県の箸墓古墳と同じ設計原理のもとに造られたと考えられている。生目１号墳は３世紀後葉～３世紀末頃に築造されており、町屋敷遺跡と同型の複合口縁壺が出土した迫内遺跡の円墳もほぼ同時期のものである。迫内遺跡は地理的に見て生目古墳群を築造した勢力圏にあったとみるのが自然であろう。このことから町屋敷遺跡でも同型の壺が出土したことは、町屋敷遺跡周辺も生目古墳群築造勢力の圏内であり、その勢力の食料生産の場であったことが考えられる。また、畿内様式の高坏、器台は、生目古墳群築造勢力とヤマト王権との交流をしめすものではないだろうか。

木製品では、扉と２本の建築部材が注目される。扉は片方の長側辺の上下に冠木・蹴放しの軸孔にはめるのが一般的である。東京都立大学の山田昌久助教授は、町屋敷遺跡から出土したものは、残っている軸が短いことから破損している方が上部であった可能性が高いとの見解を示された。扉の中央部には、長方形の孔が入れられている。この孔については把手状突起（門受け）をはめ込むためのものか、あるいは扉を開けるときに手を入れるためのもの等を考えることができるが、明確な答えは出ていない。

建築部材は、長さ約450cmと約280cmの２本が出土した。２本とも端部をこけしの頭部の形に削り、他の部材と組み合わせるための欠きこみ（ほぞ）が入れられている。完形でないことから当時の建築物の正確な大きさは導き出せないが、材木を丸太ではなく角材に加工していることやほぞが入れられていることから６本柱の倉庫に用いられたものと考えられ、大型の方が大引、小型の方が根太もしくは側根太の部分と思われる。また、クスノキから一枚板の扉を削り出したり、柱のほぞの鋭い切り口等から当時の木材加工技術の高さも伺える。

参考文献

『水田の考古学』　工楽善通　東京大学出版会　1991
『図解技術の考古学』　潮見　浩　有斐閣　1988
柳沢一男　「日向の古墳時代前期首長墓系とその消長」『宮崎県史研究』第９号　宮崎県　1995
『木器集成図録近畿原始篇（解説）』　奈良国立文化財研究所　1993
『日本土器辞典』　大川　清　　鈴木公雄　工楽善通　雄山閣　1996
『富沢遺跡第30次調査報告書Ⅰ（縄文～近世編）』『仙台市埋蔵文化財調査研究所調査報第149集』　仙台市教育委員会　1991
『瀬名遺跡Ⅰ～Ⅲ』『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報第10集』　静岡県教育委員会　1992～1994
『野多目遺跡群－稲作開始期の水田遺跡の調査－』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集』　福岡市教育委員会　1987
『那珂久平遺跡Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集』　福岡市教育委員会　1987
『余り田遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘報告書第１集』　宮崎県教育委員会　1997
『前田遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第９集』　宮崎県教育委員会　1998
『荒迫遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘報告書第11集』　宮崎県教育委員会　1998
『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』　宮崎県教育委員会　1985
『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第４集』　宮崎県教育委員会　1988
『丸谷地区遺跡群』『都城市文化財調査報告書第34集』　都城市教育委員会　1996
『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ』『兵庫県文化財調査報告第185冊』　兵庫県教育委員会　1999
『宮崎県史通史編原始・古代１』　宮崎県史刊行会　1997
『宮崎県史資料編考古２』　宮崎県史刊行会　1988
『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』　宮崎県史刊行会　1997

第Ⅳ章　自然科学分析

1　平成９年10月　宮崎県、町屋敷遺跡Ｂ区におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

町屋敷遺跡Ｂ区の発掘調査では、霧島高原スコリア（Kr-ThS，約９～13世紀）の下位に位置する４層から、不定形の畦畔状遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

２．試　料

分析試料は、４層確認面から採取された21点、およびＡ地点から採取された５点の計26点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対して直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出し

た。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１、２に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5．考　察

(1)　水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、県内では密度が3,000個／ｇ程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個／ｇとして検討を行った。

１）４層確認面（図１）

４層に由来する畦畔状遺構は、調査区北部では４層下面（５層との境界付近）で、調査区南部（試料19～21）では４層上面（３層との境界付近）で確認された。

４層下面の確認面では、試料１～18の18点について分析を行った。その結果、試料18の１点からイネが検出されたが、密度は1,500個／ｇと低い値である。その他の17点からはイネはまったく検出されなかった。このことから、同確認面で稲作が行われていた可能性は考えにくい。

４層上面の確認面では、試料19～21の３点について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。密度は平均3,200個／ｇと高い値である。したがって、同確認面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

２）Ａ地点（図２）

３層（試料１）から５層（ラミナ層、試料５）までの層準について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2)　堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

４層確認面では、全体的にヨシ属が比較的多く検出され、タケ亜科も部分的に多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、調査区北部の４層下面では、ヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。また、調査区南部の４層上面では、イネとともにヨシ属が優勢であり、タケ亜科やススキ属型も比較的多くなっている。

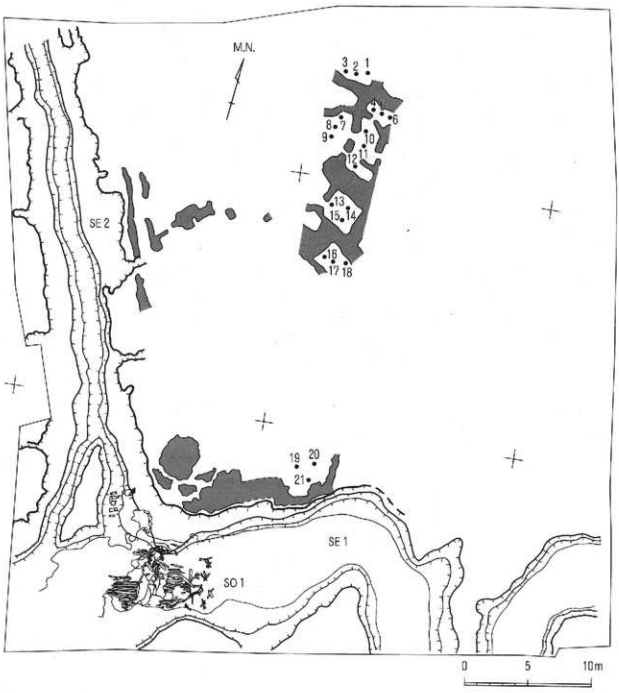


図1　B地区試料採取地点（S＝1／300）

以上のことから、調査区北部の4層下面の堆積当時は、ヨシ属などが繁茂する湿地の状況であったものと推定される。調査区南部の4層上面では、このような湿地を利用して水田稲作が行われていたと考えられ、周辺ではススキ属やネザサ節なども見られたものと推定される。

6．まとめ

プラント・オパール分析の結果、畦畔状遺構が検出された調査区南部の4層上面ではイネが多量に検出され、ここで稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、調査区北部の4層下面では、稲作が行われていた可能性は認められなかった。調査区周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属が繁茂する湿地的な環境であったと考えられ、4層上面の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，p.73-85.

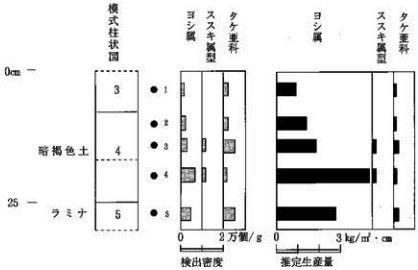


図2　町屋敷遺跡B区、A地点におけるプラント・オパール分析結果

表1　宮崎県、町屋敷遺跡B区におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
								4	層	確	認	面									
イネ																		15	52	15	30
ヒエ属型														8							
ヨシ属	38	45	98	75	45	83	23	67	60	53	53	23	45	61	53	15	45	53	22	15	30
ススキ属型	8				8	8		22		8	15				8		15	15	67	22	45
タケ亜科	45	67	76	8	8	23	23	37	38	23	23	31	30	23	8	38	8	91	119	217	212

検出密度（単位：kg／m³・cm）

イネ																		0.45	1.54	0.44	0.89
ヒエ属型														0.64							
ヨシ属	2.37	2.83	6.21	4.73	2.84	5.24	1.42	4.24	3.82	3.34	3.34	1.45	2.85	3.87	3.34	0.97	2.86	3.35	1.41	0.94	1.91
ススキ属型	0.09				0.09	0.09		0.28		0.09	0.19				0.09		0.19	0.83	0.83	0.28	0.56
タケ亜科	0.02	0.32	0.36	0.04	0.04	0.11	0.11	0.18	0.18	0.11	0.11	0.15	0.14	0.11	0.04	0.18	0.04	0.57	0.57	1.04	1.02

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度　検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料	1	2	3	4	5
	A	地	点		
イネ					
ヒエ属型					
ヨシ属	15	23	30	69	45
ススキ属型			15	15	
タケ亜科	22	23	53	15	53

検出密度（単位：kg／m³・cm）

イネ					
ヒエ属型					
ヨシ属	0.95	1.43	1.90	4.35	2.86
ススキ属型			0.19	0.19	
タケ亜科	0.11	0.11	0.25	0.07	0.25

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

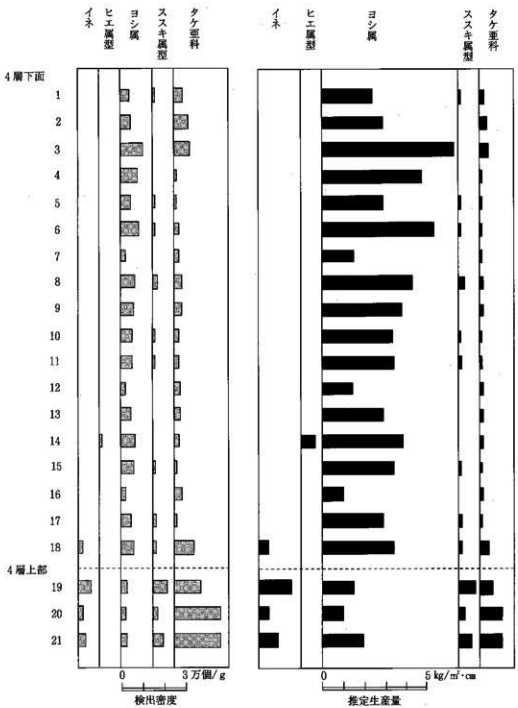


図3　町屋敷遺跡B区、4層確認面におけるプラント・オパール分析結果

2　平成10年３月　宮崎県、町屋敷遺跡Ｃ・Ｄ区におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

町屋敷遺跡Ｃ・Ｄ区の発掘調査では、Ⅲ層上面およびⅣ層上面から畦畔遺構が検出された。ここでは、これらの遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

２．試料

分析試料は、Ｄ区の第１地点～第３地点から採取された27点、Ｃ区Ⅲ層検出面から採取された27点、Ｄ区Ⅲ層検出面から採取された26点、Ｄ区Ⅳ層検出面から採取された19点の合計99点である。試料採取箇所を、分析結果の模式柱状図および遺構平面図（図１）に示す。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対して直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1～表3および図2～図7に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5．考　察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、宮崎県内では密度が3,000個／ｇ程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個／ｇとして検討を行った。表4に各地点・各層準におけるイネの検出状況を示す。

1）Ⅲ層（3層）

高原スコリア（Kr-ThS，約9～13世紀）混の3層（Ⅲ層）では、D区の第1地点～第3地点（図2～図4）から採取された5点、C区Ⅲ層検出面（図1－1）から採取された27点、およびD区Ⅲ層検出面（図1－2）から採取された26点の合計58点について分析を行った。

その結果、C区Ⅲ層検出面の試料№59を除く57点からイネが検出された。このうち、全体の56％にあたる32点では密度が3,000個／ｇ以上と高い値であり、平均でも約2,900個／ｇと比較的高い値である。このことから、同検出面では調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。なお、イネが検出されなかったC区Ⅲ層検出面の試料№59は、畦畔の確認されない部分に位置しており、水田域外であった可能性が考えられる。

表4　町屋敷遺跡C・D区におけるイネのプラント・オパールの検出状況

記号：◎5,000個／ｇ以上，○3,000個／ｇ以上，△3,000個／ｇ未満
×未検出，－該当試料なし

層準＼地点	D区 第1	D区 第2	D区 第3	C区 検出面※	D区 検出面※	備　考
Ⅲ層（3層）	◎	○	○	△	△	高原スコリア混
Ⅳ層（4層）	○	○	△	－	○	高原スコリア直下
5層上部	○	○	△	－	－	
5層下部	×	◎	△	－	－	
6層	×	－	×	－	－	
8層	×	－	－	－	－	

※検出面については全地点の平均値で示した。

2）Ⅳ層（4層）

高原スコリア直下の4層（Ⅳ層）では、D区の第1地点～第3地点（図2～図4）から採取された6点、およびD区Ⅳ層検出面（図1－3）から採取された19点の合計25点について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、全体の72％にあたる18点では密度が3,000個／g以上と高い値であり、平均でも約3,700個／gと高い値である。このことから、同検出面では調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

3）5層上部

D区の第1地点～第3地点から採取された6点について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。このうち、第1地点と第2地点では密度が3,000個／g以上と高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。第3地点では密度が1,000個／g未満と低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の可能性も否定できない。

4）5層下部

D区の第1地点～第3地点から採取された4点について分析を行った。その結果、第2地点と第3地点の試料からイネが検出された。このうち、第2地点では密度が5,000個／g以上と高い値である。したがって、同地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。第3地点では密度が1,000個／g未満と低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の可能性も否定できない。

5）6層

D区の第1地点と第3地点から採取された3点について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

6）8層

D区第1地点から採取された2点について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) 稲籾の生産総量の推定

畦畔遺構が検出されたⅢ層とⅣ層について、そこで生産された稲籾の総量を算出した（層厚を10cmと仮定）。その結果、Ⅲ層では面積10a（1,000m²）あたり約3,000kg、Ⅳ層では約3,800kgと算出された。当時の稲籾の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、Ⅲ層ではおよそ30年間、Ⅳ層ではおよそ38年間にわたって稲作が営まれていたものと推定される。ただし、これらの値は収穫が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて水田から

持ち出されていた場合は、その割合に応じて修正する必要がある。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、全体的にタケ亜科が多く検出され、ヨシ属も比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、5層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。また、遺跡周辺ではネザサ節などのタケ亜科植物も比較的多く見られたものと推定される。

6．まとめ

プラント・オパール分析の結果、畦畔遺構が検出された高原スコリア混のⅢ層（3層）および高原スコリア直下のⅣ層（4層）では、ほとんどの試料からイネが多量に検出され、これらの遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、Ⅳ層より下位の5層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、5層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

文　献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

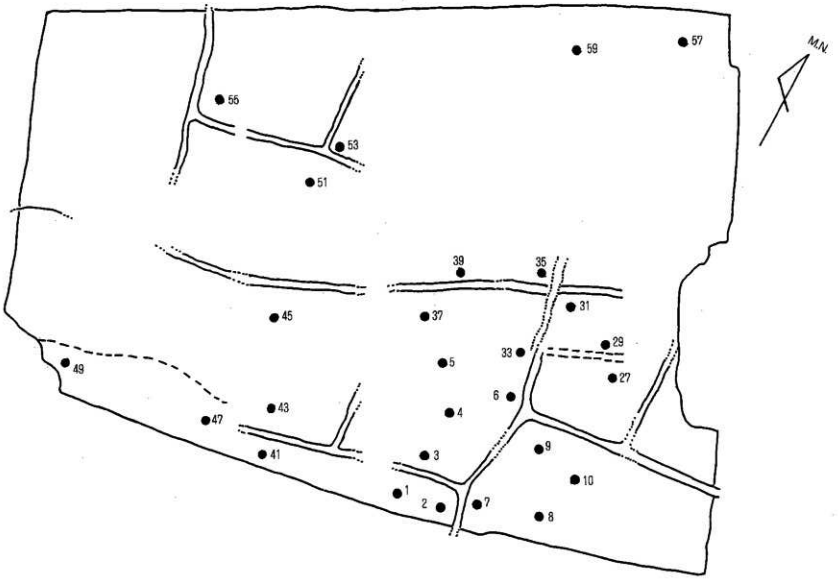


図1－1　町屋敷遺跡、C区Ⅲ層検出面における試料採取地点

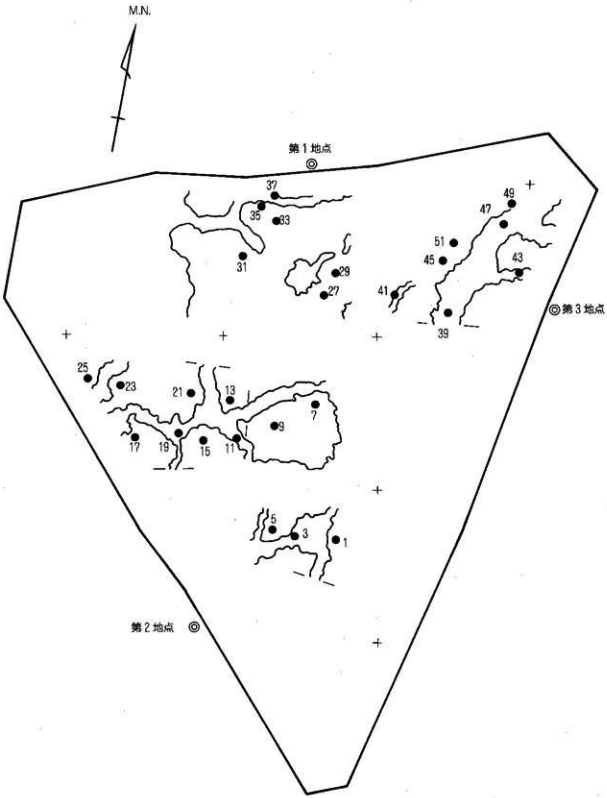


図1－2　町屋敷遺跡、D区Ⅲ層検出面における試料採取地点

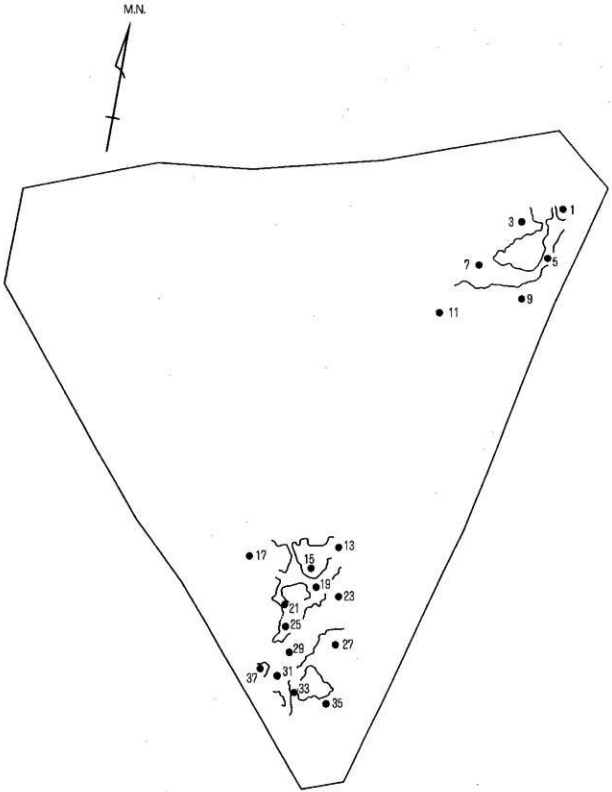


図１－３　町屋敷遺跡、Ｄ区Ⅳ層検出面における試料採取地点

表1　宮崎県、町屋敷遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

地点・試料 / 分類群＼試料 学名	D区第1地点 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	D区第2地点 1	2	3	4	5	6	8	9
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	50	74	30	37	46	30					30	8	23	38	30	8	53	46
ヒエ属型 *Echinochloa type*									8	8								8
ヨシ型 *Phragmites (reed)*		7	15	15	30	15	30	8	38	30	15	46	75	30	46	38	8	15
ススキ属型 *Miscanthus type*	36	29	8		8			23		15	15	8	23	23	23	15	15	
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	180	81	83	22	53	45	67	128	84	60	91	38	53	75	23	122	38	23

検出密度（単位：kg／m²・cm）

分類群＼試料 学名	D区第1地点 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	D区第2地点 1	2	3	4	5	6	8	9
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	1.48	2.16	0.89	1.10	1.34	0.89					0.89	0.22	0.66	1.11	0.90	0.22	1.56	1.34
ヒエ属型 *Echinochloa type*									0.64	0.63								0.64
ヨシ型 *Phragmites (reed)*		0.46	0.96	0.94	1.92	0.95	1.89	0.48	2.41	1.90	0.96	2.88	4.75	1.90	2.88	2.41	0.48	0.96
ススキ属型 *Miscanthus type*	0.45	0.37	0.09		0.09			0.28		0.19	0.19	0.09	0.28	0.28	0.28	0.19	0.19	
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	0.86	0.39	0.40	0.11	0.26	0.22	0.32	0.61	0.40	0.29	0.44	0.18	0.25	0.36	0.11	0.59	0.18	0.11

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度　検出密度（単位：×100個／g）

地点・試料 / 分類群＼試料 学名	D区第3地点 1	2	3	4	5	6	7	8
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	45	22	15	8	8	8		
ヒエ属型 *Echinochloa type*								
ヨシ型 *Phragmites (reed)*		37	22	38	38	15	8	7
ススキ属型 *Miscanthus type*	30		22			15	8	
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	60	52	60	98	60	38	91	15

検出密度（単位：kg／m²・cm）

分類群＼試料 学名	D区第3地点 1	2	3	4	5	6	7	8
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	1.32	0.66	0.44	0.22	0.22	0.22		
ヒエ属型 *Echinochloa type*								
ヨシ型 *Phragmites (reed)*		2.35	1.42	2.39	2.38	0.95	0.48	0.47
ススキ属型 *Miscanthus type*	0.37		0.28			0.19	0.09	
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	0.29	0.25	0.29	0.47	0.29	0.18	0.44	0.07

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表2　町屋敷遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料　学名	地点・試料	C区Ⅲ層検出面（南側）																					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	27	29	31	33	35	37	39	41	43	45	47	49
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*	37	23	15	15	37	31	8	23	31	23	22	23	45	45	22	38	38	15	38	38	53	30
ヒエ属型	*Echinochloa type*		8														8			8	8		
ヨシ型	*Phragmites (reed)*	7	8	15	52	30	38	38	15	38	15	30	38	37	38	15	61	23	30	23	15	15	37
ススキ属型	*Miscanthus type*	15		30	15		8	30	30	8	31	7	8		8		8	38	7	8	23	8	22
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*	45	60	38	37	37	31	91	53	61	69	82	61	37	98	45	91	45	127	75		53	90

検出密度（単位：kg／m²・cm）

分類群＼試料　学名	地点・試料	C区Ⅲ層検出面（南側）																					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	27	29	31	33	35	37	39	41	43	45	47	49
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*	1.10	0.66	0.44	0.44	1.10	0.90	0.22	0.67	0.90	0.68	0.66	0.67	1.32	1.32	0.66	1.12	1.10	0.44	1.11	1.11	1.55	0.88
ヒエ属型	*Echinochloa type*		0.63														0.64			0.63	0.63		
ヨシ型	*Phragmites (reed)*	0.47	0.48	0.95	3.31	1.88	2.42	2.40	0.95	2.41	0.97	1.89	2.41	2.36	2.37	0.94	3.84	1.42	1.89	1.43	0.95	0.95	2.36
ススキ属型	*Miscanthus type*	0.19		0.37	0.19		0.10	0.38	0.37	0.09	0.38	0.09	0.09		0.09		0.09	0.47	0.09	0.09	0.28	0.09	0.28
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*	0.22	0.29	0.18	0.18	0.18	0.15	0.44	0.25	0.29	0.33	0.40	0.29	0.18	0.47	0.21	0.44	0.22	0.61	0.36		0.25	0.43

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度　検出密度（単位：×100個／g）

分類群＼試料　学名	地点・試料	C区Ⅲ層検出面（北側）				
		51	53	55	57	59
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*	22	23	46	30	
ヒエ属型	*Echinochloa type*			8		
ヨシ型	*Phragmites (reed)*	30	23	30	8	22
ススキ属型	*Miscanthus type*	15	8			
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*	104	61	15	121	150

検出密度（単位：kg／m²・cm）

分類群＼試料　学名	地点・試料	C区Ⅲ層検出面（北側）				
		51	53	55	57	59
イネ	*Oryza sativa (domestic rice)*	0.66	0.67	1.34	0.89	
ヒエ属型	*Echinochloa type*			0.64		
ヨシ型	*Phragmites (reed)*	1.88	1.43	1.92	0.48	1.42
ススキ属型	*Miscanthus type*	0.18	0.09			
タケ亜科	*Bambusoideae (Bamboo)*	0.50	0.29	0.07	0.58	0.72

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表3　町屋敷遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

地点・試料	D区 II層検出面																								
分類群＼試料　学名	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	33	35	37	39	41	43	45	47	49	51
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	30	53	22	37	23	22	30	38	38	53	45	67	15	45	45	15	30	23	30	30	23	30	53	30	15	30
ヒエ属型 *Echinochloa type*							7											8								
ヨシ型 *Phragmites (reed)*	23	8	15	15	15	15	22	38	23	8	23	22	69	53	23	23	7	15	8	30	15	8	15	46	8	38
ススキ属型 *Miscanthus type*	23		7	7	8	15	7	8		8	8	22	23	15	8			8			38	23	8	8	15	30
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	30	30	30	22	68	37	52	46	76	53	75	37	168	75	53	68	52	53	84	53	60	30	45	84	30	53

検出密度（単位：kg／m²・cm）

イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	0.90	1.54	0.66	1.10	0.67	0.66	0.88	1.12	1.12	1.55	1.33	1.98	0.45	1.32	1.32	0.44	0.88	0.67	0.89	0.88	0.67	0.89	1.55	0.90	0.44	0.89
ヒエ属型 *Echinochloa type*							0.63											0.64								
ヨシ型 *Phragmites (reed)*	1.44	0.47	0.94	0.95	0.95	0.94	1.42	2.40	1.44	0.48	1.42	1.42	4.34	3.31	1.42	1.42	0.47	0.96	0.48	1.90	0.95	0.48	0.95	2.88	0.47	2.38
ススキ属型 *Miscanthus type*	0.28		0.09	0.09	0.09	0.19	0.09	0.09		0.09	0.09	0.28	0.28	0.19	0.09			0.09			0.47	0.28	0.09	0.09	0.19	0.37
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	0.15	0.14	0.14	0.11	0.33	0.18	0.25	0.22	0.37	0.25	0.36	0.18	0.81	0.36	0.25	0.32	0.25	0.25	0.40	0.25	0.29	0.15	0.22	0.40	0.14	0.25

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度　検出密度（単位：×100個／g）

地点・試料	D区 II層検出面																		
分類群＼試料　学名	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	33	35	37
イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	30	23	38	30	30	15	38	45	54	53	60	23	60	30	30	54	30	15	45
ヒエ属型 *Echinochloa type*			8												7	8			
ヨシ型 *Phragmites (reed)*	8	38	69	15	22	75	38	30	54	8	22	61	45	8	30	46	38	45	30
ススキ属型 *Miscanthus type*	30	15	15	8	22	15	8	30	8	23	22	23	15	8	15	23	8	23	15
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	98	53	99	83	90	75	60	38	38	68	60	83	52	60	52	122	30	45	60

検出密度（単位：kg／m²・cm）

イネ *Oryza sativa (domestic rice)*	0.89	0.67	0.12	0.89	0.88	0.44	1.10	1.33	1.58	1.55	1.76	0.67	1.76	0.89	0.88	1.57	0.89	0.44	1.33
ヒエ属型 *Echinochloa type*			0.64												0.63	0.64			
ヨシ型 *Phragmites (reed)*	0.48	2.38	4.33	0.95	1.42	4.72	2.37	1.90	3.39	0.48	1.41	3.83	2.84	0.48	1.89	2.89	2.39	2.85	1.90
ススキ属型 *Miscanthus type*	0.37	0.19	0.19	0.09	0.28	0.19	0.09	0.37	0.10	0.28	0.28	0.28	0.19	0.09	0.19	0.28	0.09	0.28	0.19
タケ亜科 *Bambusoideae (Bamboo)*	0.47	0.25	0.48	0.40	0.43	0.36	0.29	0.18	0.18	0.33	0.29	0.40	0.25	0.29	0.25	0.59	0.15	0.22	0.29

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

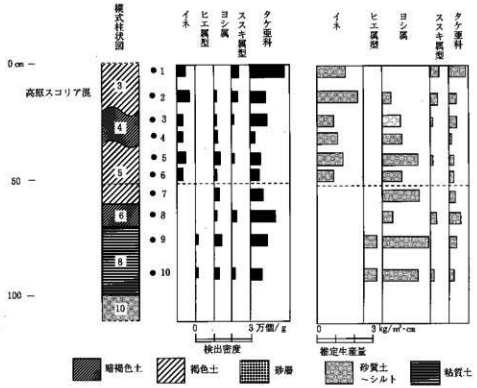


図2　町屋敷遺跡、D区第1地点におけるプラント・オパール分析結果

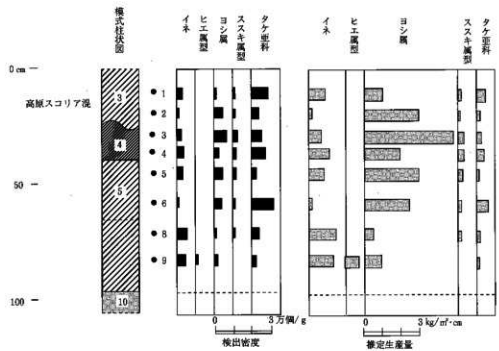


図3　D区第2地点におけるプラント・オパール分析結果

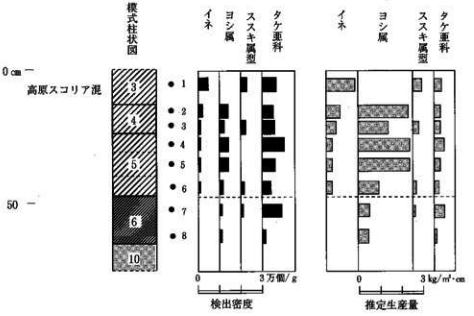


図4　D区第3地点におけるプラント・オパール分析結果

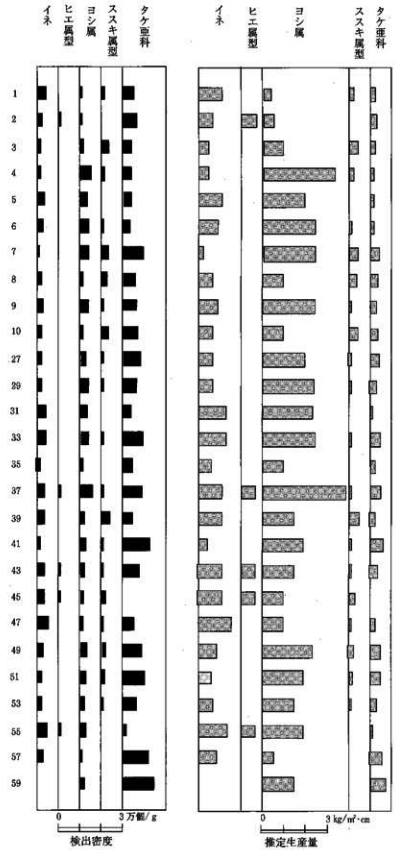


図5　町屋敷遺跡、C区Ⅲ層検出面におけるプラント・オパール分析結果

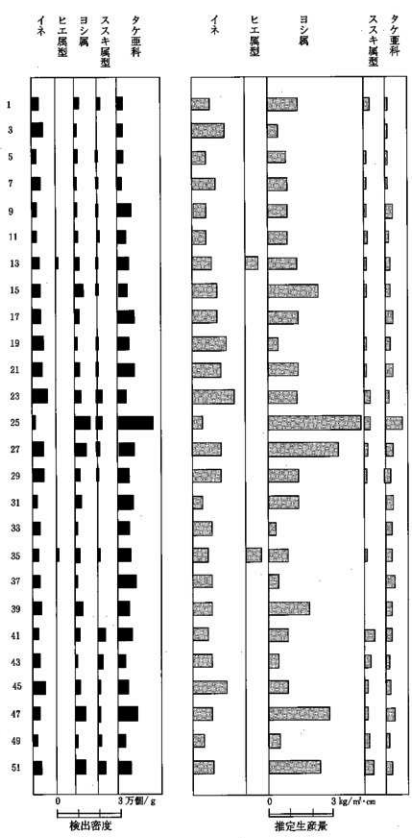


図6　町屋敷遺跡、D区Ⅲ層検出面におけるプラント・オパール分析結果

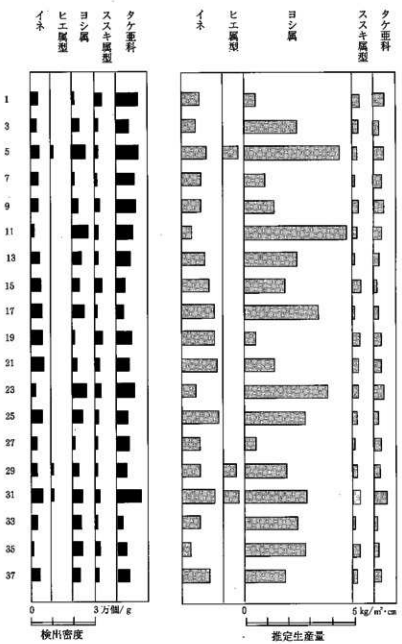


図7　町屋敷遺跡、D区Ⅳ層検出面におけるプラント・オパール分析結果

3　平成10年10月　宮崎県、町屋敷遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．町屋敷遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地　点	種　　類	前　処　理　・　調　整	測　定　法
No.1	B区	堰加工木材No.9	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.2	D区	柱状木材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.3	A区	柱状木材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.4	A区	加工木材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.5	A区	下流の堰杭No.7	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.6	A区	上流の堰杭No.3	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法
No.7	B区	堰杭No.9	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	β線計数法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西　暦）	測定No.（Beta－）
No.1	1850±60	−27.0	1810±60	交点：AD235 1σ：AD135～265，AD290～320 2σ：AD85～390	123398
No.2	1470±60	−28.6	1410±60	交点：AD650 1σ：AD615～670 2σ：AD555～705	123399
No.3	1600±60	−28.2	1540±60	交点：AD550 1σ：AD440～605 2σ：AD410～645	123400
No.4	1710±60	−27.6	1670±60	交点：AD405 1σ：AD340～435 2σ：AD245～540	123401
No.5	1430±50	−28.8	1370±50	交点：AD665 1σ：AD645～685 2σ：AD615～770	123402
No.6	1700±60	−27.0	1670±60	交点：AD405 1σ：AD340～435 2σ：AD245～540	123403
No.7	1820±60	−27.0	1790±60	交点：AD245 1σ：AD160～340 2σ：AD100～405	123404

1）^{14}C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、5,568年を用いた。

2）$\delta^{13}C$測定値

試料の測定$^{14}C/^{13}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正14C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{13}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年ＢＰより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

Ⅱ．町屋敷遺跡出土木材の樹種同定

1．試　料

試料は、町屋敷遺跡から出土した堰遺構の用材19点である。試料の詳細を表１に示す。

2．方　法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結　果

結果は表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表１　町屋敷遺跡出土木材の樹種同定結果

試　料	地　点　・　種　類	樹　　種（和　名　／　学　名）
No.1	B区堰加工木材No.3	フジ　*Wisteria floribunda* D C.
No.2	A区加工木材	ヤブツバキ　*Camellia japonica Linn.*
No.3	D区柱状木材	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.4	A区柱状木材	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.5	A区臼状木材	クスノキ　*Cinnamomum camphora Presl*
No.6	B区柄状木材	環孔材　*ring-popous wood*
No.7	B区堰杭No.11	コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*
No.8	A区下流の堰杭No.1	シイ属　*Castanopsis*
No.9	A区上流の堰杭No.3	クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*
No.10	B区堰杭No.4	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.11	B区堰杭No.15	クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*
No.12	B区堰杭No.9	ネムノキ　*Albizzia julibrissin Durazz.*
No.13	B区堰杭No.12	イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia K. Koch*
No.14	B区堰杭No.8	エゴノキ属　*Styrax*
No.15	B区堰加工木材No.12	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.16	B区堰加工木材No.1	ムクノキ　*Aphananthe aspera(Thunb.)Planch.*
No.17	B区堰加工木材No.14	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
No.18	A区扇状木器	クスノキ　*Cinnamomum camphora Presl*
No.19	B区くびれのある加工木材	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*

a．イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia K. Koch　イヌガヤ科　　図版1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

b．ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科　　図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

c．クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　　図版3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

d．シイ属　Castanopsis　ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布

する。常緑高木で、高さ20m、径1.5m に達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片の為、広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどまる。

e．コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　　図版4

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

f．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　　図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

g．ムクノキ　Aphananthe aspera (Thunb.) Planch.　ニレ科　　図版6

横断面：中型から小型の厚壁で放射方向にのびた道管が、年輪界にむけて径を減少しながら、単独あるいは2～3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では、数細胞幅で帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

h．クスノキ　Cinnamomum camphora Presl　クスノキ科　　図版7

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものが存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

i．ネムノキ　Albizzia julibrissin Durazz.　マメ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少し、晩材部の小道管はたいへん小さく、周囲を囲む軸方向柔細胞と同じくらいの大きさである。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型である。幅は1～3細胞幅で、少し角張ったものが多い。

以上の形質よりネムノキに同定される。ネムノキは本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、高さ20m、径40cmに達する。材は耐朽、保存性低く、建築、器具、下駄、薪炭などに用いられる。

j．フジ　Wisteria floribunda DC.　マメ科

横断面：年輪のはじめに大型で丸い道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では中型の道管のほかに、ごく小型の道管が多数集合して木部柔組織とともに接線方向の帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は同性に近い異性放射組織型で、1～8細胞幅である。

以上の形質よりフジに同定される。フジは本州、四国、九州に分布する。つる性の落葉木本である。

k．ヤブツバキ　Camellia japonica Linn.　ツバキ科　　図版8

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、結晶を含みダルマ状に膨れているものが

存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

1．エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　　図版9

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

m．環孔材　ring-popous wood

横断面：年輪のはじめに大型の道管が配列する環孔材である。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：多列の放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかったことから、環孔材の同定にとどめた。

4．所　見

同定された樹種はイヌガヤ、ヒノキ、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属クヌギ節、ムクノキ、クスノキ、ネムノキ、フジ、ヤブツバキ、エゴノキ属、環孔材の13分類群であった。いずれも暖温帯に生育する樹木であり、周囲の森林から容易に供給できる樹木である。樹種が多様であるが、堰の用材であるため、樹種を選択せずに使用したものと考えられる。

文　献

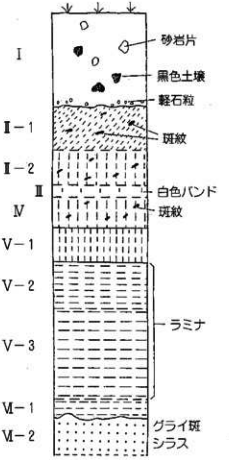
佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20－48.
佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49－100.

4　土壌分析

(1)　東九州自動車道町屋敷遺跡Ｂ区土壌調査（調査年月日：平成９年９月９日）

調査地点：宮崎市大字糸原町屋敷遺跡Ｂ区西側側溝壁面

土壌統群（現在の水田）：細粒灰色低地土造成相



Ｂ区　西側側溝土層柱状図

土壌断面形態

Ⅰ　0～30cm黄灰（2.5Y４／１）色の砂壌土（ＳＬ）。

基盤整備後の現在の水田、黄褐（2.5Y４／１）色砂岩片、下部に黒褐（2.5Y３／１）色土塊（埴壌土でスコリア混じり）が見られる。角塊状構造、可そ性中、粘着性中、透水性中、腐植をわずかにふくむ。ち密度は28～30㎜でかなり硬いジピリジルによる呈色反応は認められなかった。層界は明瞭。

Ⅱ－1　30～40cm過去の表層。黒褐（10ＹＲ３／１）色の軽埴土（LiC）角塊状構造、黒褐（10ＹＲ３／１）色点状～雲状斑を含む。可そ性強、粘着性強、透水性弱、腐植に富む。ち密度は29㎜でかなり硬い。ジピリジルによる呈色反応は認められなかった。層界は明瞭。

Ⅱ－2　44～55cm黒褐（10ＹＲ３／１）色の軽埴土（LiC）角塊状構造、暗褐（7.5ＹＲ３／４）色点状斑、褐（7.5ＹＲ４／３）色の雲状斑が上層より多く集積。可そ性強、粘着性強、透水性弱、腐植を含む。ち密度は28㎜で硬い。ジピリジルによる呈色反応は認められなかった。層界は明瞭。

Ⅲ　55～59cm灰白（2.5Y７／１）～黄灰（2.5Y６／１）混色の軽埴土（LiC）。

白色バンド層。弱角塊状構造、オリーブ褐（2.5Y４／６）色の雲状斑を少量含む。可そ性強、粘着性強、透水性弱、腐植はない。ち密度は27㎜で上層よりやわらかい。ジピリジルによる呈色反応はわずかに赤紫色を示した（弱グライ層）。層界は明瞭。

Ⅳ　59～69cm黒褐（2.5Y３／１）色の軽埴土（LiC）

団塊状構造。にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）色雲状斑、黄褐（2.5Y５／６）色糸状斑を含む。１㎜大の黒色植物遺体片を少量含む。可そ性強、粘着性強、透水性弱、腐植を含む。ジピリジルによる呈色反応は鮮明な赤紫色を現し、グライ層を示した。層界はやや明瞭。

Ⅴ－1　69～80cm灰（５Ｙ４／１）色～黄（2.5Y６／１）色の混色の軽埴土（LiC）。

弱団塊状構造。褐（10ＹＲ４／６）色糸状斑を少量認む。小粒の黒色炭化物片が多い。可そ性強、粘着性強、透水性弱、腐植を含む。ち密度は27㎜で硬い。ジピリジルによる呈色反応では鮮やかな

赤紫色を呈し、グライ層を示す。層界は明瞭。

V－2　80～95cm灰（7.5Y5／1）色～灰（5Y4／1）色の互層（3～5cm間隔）をなす軽埴土（LiC）。

ラミナ層。ジピリジル呈色反応では鮮やかな赤紫色を呈し、グライ層を示す。斑紋なし、黒色植物炭化物片が多い。層界は明瞭。

V－3　95～124cm灰（5Y4／1）～灰（7.5Y5／1）色互層（2～3mm間隔）の微砂質埴壌土（SiCL）。

弱団塊状構造、オリーブ褐（2.5Y4／6）色雲状斑少量あり。グライ層（ジピリジルによる呈色反応で鮮やかな赤紫色）。可そ性中、粘着性中、透水性弱、小粒の黒色炭化物片が多い。ち密度は18mmで上層より軟らかい。層界は明瞭。

VI－1　124～130cm黄灰（2.5Y5／1）色の細砂質壌土（FSL）。

弱団塊状構造。グライ層（ジピリジルによる呈色反応で鮮やかな赤紫色を示す）可そ性中、粘着性中～小。ち密度は22mm。層界は明瞭。

VI－2　130～140＋cm灰（10Y6／1）色の細壌土（FSL）～砂土（S）。

シラス再堆積物。極弱団塊状構造。上部に明瞭なグライ斑が認められた。グライ層（ジピリジルによる呈色反応は鮮やかな赤紫色）。可そ性中～小。透水性大を示した。

本断面はI／II（埋没土）／III（白色バンド層）／IV（埋没土）／V（埋没土、ラミナ層）／VI（再堆積シラス）の層序を示し、度重なる堆積が行われたことを現している。III層以下はジピリジル液による呈色反応が弱赤紫色～鮮やかな赤紫色を示し、グライ層の存在が見られ、過湿状態にあることを示していた。

分析結果

1）粒度（表1）

断面I～VIの土性は軽埴土（LiC）～重埴土（HC）で、塚原遺跡土壌に比べて極めて粘質であった。特にIII層（白色バンド層）は砂含量が少なく、粘土含量が最も多かった。

2）一次鉱物組成（表2）

各層位の細砂部分の一次鉱物組成は表2に示したとおりである。全体を通じてみると、いずれも単斜輝石、斜方輝石、石英、斜長石、火山ガラスなどが見られ、いずれも火山灰噴出物のほか河川堆積物を母材として堆積したものと考えられた。

植物蛋白石含量はI層とII層で多く認められ、他の層間では明瞭な違いは見られなかった。V－2層以下（ラミナ層）は火山ガラスが多く、特にV－3層以下は40～35%で多くなり、斜長石、石英が少なくなっており、下層のシラス層が水の影響によってラミナ層が形成されていることを示している。

3）化学的性質

各層位の化学的性質は表3に示したとおりである。pH（水）はVI－1層を除き、5.1～6.0の範囲で

あった。無機態窒素量は2.4～4.5の範囲で、Ⅳ層、Ⅴ－３層、Ⅵ－１層でやや多く、Ⅱ－１で低い値を示した。有効態リン酸量は、1.1～7.1mg／100ｇの範囲で現在の水田Ⅰ層で多く、Ⅲ層～Ⅴ－２層で最も低い傾向であった。そのほか、交換性石灰含量をみると、現在の水田Ⅰ層、Ⅱ－２層で最も多く、Ⅵ－１層をのぞき、他の断面は350～223mg／100ｇでⅥ－１層は101mg／100ｇで最も少なかった。交換性苦土含量はⅥ－１層（25.5mg／100ｇ）をのぞき、71～118mg／100ｇの範囲で、各層位間には明瞭な差異は見られなかった。交換性カリ含量はⅣ層（13～30mg）で上層（１～10mg）より多い傾向を示し、下方へ溶脱集積していることを示しているものと思われた。

以上のことから、土壌断面形態、粒度、細砂中の一次鉱物組成および化学的性質結果より、下よりシラス層（Ⅵ）／再堆積した層（Ⅴ－１～Ⅴ－３）（ラミナ層）／Ⅳ／Ⅲ（白色バンド層）／現在の水田（Ⅰ～Ⅱ）が見られ、湿地上に数回の堆積が繰り返されたものと考えられた。

表１　町屋敷Ｃ区（トレンチ壁面）の粒度

（乾土100ｇ当たり）

層位	深さ (cm)	分解された有機物 (%)	砂（２－0.02mm） (%)	微砂（20－２u） (%)	粘土（＜２u） (%)	土性
Ⅰ	0－ 26	0.8	47.5	27.2	24.5	ＣＬ
Ⅱ－１	26－ 47	0.3	24.3	31.3	44.1	ＬｉＣ
Ⅱ－２	47－ 63	0.8	34.0	29.7	35.5	ＬｉＣ
Ⅲ	63－ 76	1.2	20.4	35.1	43.3	ＬｉＣ
Ⅳ	76－ 90	0.9	21.2	39.1	38.8	ＬｉＣ
Ⅴ－１	90－102	1.2	16.0	40.9	41.9	ＬｉＣ
Ⅴ－２	102－115	1.4	19.5	47.3	31.8	ＳｉＣ

表2　町屋敷C面（トレンチ壁面）細砂中の一次鉱物組成（%）

層位	深さ (cm)	総粒数	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	磁鉄鋼	石英	斜長石	火山ガラス (n=1.50)	植物蛋白石 (n=1.45)	岩片	被覆鉱物
Ⅰ	0－ 26	177	2			1	11	18	28	33	6	3
Ⅱ－1	26－ 47	129				3	23	33	16	14	9	2
Ⅱ－2	47－ 63	154		＋		1	31	42	3	9	10	1
Ⅲ	63－ 76	130	2			2	31	39	9	10	7	2
Ⅳ	76－ 90	113	＋	＋	＋	2	30	52	6	4	3	2
Ⅴ－1	90－102	115		＋		3	31	43	10	2	9	3
Ⅴ－2	102－115	198	＋	＋		1	3	5	81	2	7	2

＋；1％以下

表3　町屋敷C区北面（トレンチ壁面）の化学的性質

乾土100g当たり

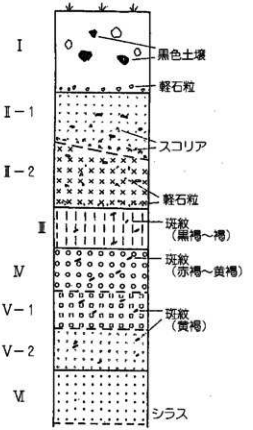
層位	深さ (cm)	pH (水) (1：5)	EC	アンモニア態窒素 (mg)	硝酸態窒素 (mg)	無機態窒素 (mg)	有効態窒素 (mg)	交換性石灰 (mg)	交換性苦土 (mg)	交換性カリ (mg)	陽イオン交換容量 (mg)	塩基飽和度 (%)	燐酸吸収係数	石灰飽和度 (mg)	腐植
Ⅰ	0－ 26	5.6	0.2	3.3	6.0	9.3	27.8	263.8	57.2	14.4	7.3	173	800	129	含む
Ⅱ－1	26－ 47	5.9	0.1	2.0	1.0	3.0	2.4	413.4	60.5	12.5	11.0	165	910	135	含む
Ⅱ－2	47－ 63	6.0	0.1	2.8	0.3	3.1	1.9	414.0	70.9	11.6	14.4	128	1100	103	あり
Ⅲ	63－ 76	6.0	0.1	2.8	0.2	3.0	1.8	510.9	72.4	11.5	14.4	153	920	126	含む
Ⅳ	76－ 90	5.9	0.1	2.2	0.1	2.3	2.1	397.1	78.5	11.6	11.4	161	915	125	含む
Ⅴ－1	90－102	6.0	0.1	3.4	0.0	3.4	1.4	475.8	93.3	14.4	15.4	143	1080	110	富む
Ⅴ－2	102－115	5.8	0.1	3.1	0.1	3.2	1.2	392.2	90.5	13.7	15.3	123	860	92	含む

(2) 東九州自動車道町屋敷遺跡C区土壌調査

調査年月日：平成9年9月9日

調査地点：宮崎市大字糸原町屋敷遺跡C区東側側溝壁面

土壌統群（現在の水田）：細粒灰色低地土造成相



C区　東側側溝土層柱状図

土壌断面形態

I　0～26cm灰オリーブ（5Y5／2）色～黄褐（2.5Y4／1）色の砂壌土（SL）。

基盤整備後の水田表土。角塊状構造。黒褐（10YR3／2）点状～雲状斑。褐（7.5YR4／4）～にぶい黄褐（7.5YR5／4）色雲状斑あり。円れきにやや富む。腐植を含む。可そ性弱、粘着性弱、透水性弱、小粒の風化軽石粒を含む。ち密度は31mmできわめて硬い。層界はきわめて明瞭。

II－1　26～42（～47）cm黄灰（2.5Y4／1）色の砂質軽埴土（SCL）。

角塊状構造、灰白（2.5Y7／1）～にぶい黄褐（10YR7／2）色風化軽石粒（1mm以下、2～3mm大が多い）を多く含む（軽石粒：スコリア）。基質内には黒褐（7.5YR3／2）～暗褐（7.5YR3／3～3／4）色の点状斑が多い。黄褐（10YR5／6）色糸状～雲状斑が混在。可そ性中、粘着性中、透水性弱、腐植に含む。ち密度は30mmで硬い。層界は明瞭。

II－2　42（47）～63cm黒褐（10YR3／1）色～褐灰（10YR4／1）色の混色の軽壌土（LiC）（一部は砂壌土）。

角塊状構造、暗褐（7.5YR3／4）色の点状斑を多く含む。灰白（2.5Y7／1）色～にぶい黄褐（10YR7／2）色風化軽石粒（1mm以下、2～5mm大が多い）また、下部に軽石粒が多く塊状をなしている。上層より多い。可そ性やや強、粘着性やや強、透水性中、腐植あり。ち密度は26mmでやや硬い。層界は明瞭。

III　63～76cm灰（5Y6／1）～黄灰（2.5Y4／1）混色の軽埴土（LiC）。

角塊状構造、褐（10YR4／6）色糸状～雲状斑と黒褐（10YR3／2）点状斑が多い。可そ性強、粘着性強、透水性中、細孔隙あり、腐植を含む。ち密度は29mmで硬い。層界は明瞭。

IV　76～90cm褐灰（10YR5／1）色の軽埴土（LiC）

角塊状構造。明褐（7.5YR5／6）色糸状斑～管状、うん管状斑を多く含む。軽石粒なし。可そ

性強、粘着性強、透水性中、細孔隙あり。腐植を含む。ち密度は28mmで硬い。層界はやや明瞭。

V－1　90～102cm黒（10YR2／1）色～褐灰（10YR4／1）色の混色の軽埴土（LiC）。

角塊状構造。上層より腐植が多い。明褐（7.5YR5／6）色糸状～管状斑がやや多い。可そ性強、粘着性強、透水性中、軽石粒なし。腐植を含む。層界は漸変。

V－2　102～115cm褐灰（10YR5／1）色の軽埴土（LiC）。

団塊状構造。褐（7.5YR4／6）～にぶい黄褐（10YR5／4）色雲状斑、褐（7.5YR4／6～10YR4／4）色の管状斑に富む。可そ性強、粘着性強、透水性中、ち密度は21mmで上層より軟らかい。層界は漸変。

VI　115～130＋cm灰（10YR6／1）色の土（S）。

再堆積シラス層。極弱団塊状構造。可そ性弱、粘着性弱。透水性大。ち密度は21mm。

本断面はI／II（埋没土）／III（埋没土）／IV（埋没土）／V（埋没土）／VI（再堆積シラス）の層序を示し、ジピリジルによる呈色反応は認められず、B地区の断面に比べて、地下水位が低く、全層とも乾いた状態であることを示している。B地区との類似点は、II層中のスコリア粒、軽石粒がB地区断面のI層中の土塊中に認められたほか、V－1層はB地区断面のV－1層と類似していると思われるが、シラス上部のV－2層の違いは多分当時の堆積状況の違いがあったのではないかと考えられる。

分析結果

1）粒度（表1）

断面I～Vの土性はI層の埴壌土（CL）をのぞき、断面II～Vの土性は軽埴土（LiC）～微砂質埴土（SiC）で粘質であり、全体的にはB区のそれらより粘土含量が少ない傾向を示した。断面Iは基盤整備後の土層で土壌が攪乱されており、粒度組成でも断面II以下のそれらとは明瞭に区別された。

2）一次鉱物組成（表2）

各層位の細砂部分の一次鉱物組成は表2に示したとおりである。全体的に見ると、単斜輝石、斜方輝石、磁鉄鉱、石英、斜長石、火山ガラスなどが見られ、火山噴出物および河川堆積物を母材として堆積したものと考えられた。植物蛋白石はI、II層で多く見られ、他の層間では明瞭な違いは認められなかった。この傾向はB区のそれらとよく類似していた。V－2層では火山ガラスが多く認められ、下層のVI層（シラス層）の影響を受けていることを示していた。

3）化学的性質（表3）

各層位の化学的性質は表3に示したとおりである。pH5.6～6.0の範囲であった。無機態窒素量は2.3～9.3mg／100gの範囲で表層で最も多く、他の層位間では大きな差異は見られなかった。有効態リン酸量は27.8～1.2mg／100gの範囲で現在の水田I層で多く、他の層位では少なく、2.4mg／100g以下で層位間では大きな差異はなかった。そのほか交換性石灰含量は約264～511mg／100gの範囲であり、B区のそれらに比べてやや多い傾向を示した。交換性苦土含量は約57～93mg／100gの範囲でV－1層以下でやや多い傾向を示した。交換性カリ含量はI層を除き、11.0～15.3mg／100gの範囲であったが、

層間では大きな差異は見られなかった。化学的性質は全体的に各成分ともB区のそれらと類似しており、塚原断面の各層位中のそれらに比べて、各成分とも量的に多い傾向を示していた。

以上のことから、本断面は土壌断面形態、粒度、一次鉱物組成および化学的性質から見て、Ⅰ／Ⅱ（埋没土）／Ⅲ（埋没土）／Ⅳ（埋没土）／Ⅴ（埋没土）／Ⅵ（再堆積シラス層）を示し、B区断面に比べて、地下水位が低く、前層とも乾いた状態であった。粒度、科学性は類似している傾向を示している。

表1　町屋敷B区（トレンチ壁面）の粒度

（乾土100ｇ当たり）

層位	深さ (cm)	分解された有機物 (%)	砂（2－0.02mm） (%)	微砂（20－2μ） (%)	粘土（＜2μ） (%)	土性
Ⅰ	0－ 30	1.6	24.9	34.5	39.0	LiC
Ⅱ－1	30－ 44	1.1	13.1	35.9	49.9	HC
Ⅱ－2	44－ 55	0.2	12.9	35.9	51.0	HC
Ⅲ	55－ 59	0.1	8.2	31.5	60.2	HC
Ⅳ	59－ 69	0.9	14.3	41.7	43.1	LiC
Ⅴ－1	69－ 80	0.8	12.6	42.9	43.7	LiC
Ⅴ－2	80－ 95	0.6	22.6	42.6	34.2	LiC
Ⅴ－3	95－124	0.2	13.8	43.9	42.1	LiC
Ⅵ－1	124－130	1.2	25.4	58.5	14.9	SiCL

表2　町屋敷C面（トレンチ壁面）細砂中の一次鉱物組成（%）

層位	深さ (cm)	総粒数	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	磁鉄鋼	石英	斜長石	火山ガラス (n=1.50)	植物蛋白石 (n=1.45)	岩片	被覆鉱物
Ⅰ	0－ 26	177	2			1	11	18	28	33	6	3
Ⅱ－1	26－ 47	129				3	23	33	16	14	9	2
Ⅱ－2	47－ 63	154		＋		1	31	42	3	9	10	1
Ⅲ	63－ 76	130	2			2	31	39	9	10	7	2
Ⅳ	76－ 90	113	＋	＋	＋	2	30	52	6	4	3	2
V－1	90－102	115		＋		3	31	43	10	2	9	3
V－2	102－115	198	＋	＋		1	3	5	81	2	7	2

＋；1％以下

表3　町屋敷C区北面（トレンチ壁面）の化学的性質

乾土100ｇ当たり

層位	深さ (cm)	pH (水)	EC (1：5)	アンモニア態窒素 (mg)	硝酸態窒素 (mg)	無機態窒素 (mg)	有効態窒素 (mg)	交換性石灰 (mg)	交換性苦土 (mg)	交換性カリ (mg)	陽イオン交換容量 (mg)	塩基飽和度 (%)	燐酸吸収係数	石灰飽和度 (mg)	腐植
Ⅰ	0－ 26	5.6	0.2	3.3	6.0	9.3	27.8	263.8	57.2	14.4	7.3	173	800	129	含む
Ⅱ－1	26－ 47	5.9	0.1	2.0	1.0	3.0	2.4	413.4	60.5	12.5	11.0	165	910	135	含む
Ⅱ－2	47－ 63	6.0	0.1	2.8	0.3	3.1	1.9	414.0	70.9	11.6	14.4	128	1100	103	あり
Ⅲ	63－ 76	6.0	0.1	2.8	0.2	3.0	1.8	510.9	72.4	11.5	14.4	153	920	126	含む
Ⅳ	76－ 90	5.9	0.1	2.2	0.1	2.3	2.1	397.1	78.5	11.6	11.4	161	915	125	含む
V－1	90－102	6.0	0.1	3.4	0.0	3.4	1.4	475.8	93.3	14.4	15.4	143	1080	110	富む
V－2	102－115	5.8	0.1	3.1	0.1	3.2	1.2	392.2	90.5	13.7	15.3	123	860	92	含む

図版5

A区　北壁土層断面

A区　ＳＯ２検出状況

A区　ＳＯ３検出状況

A区　ＳＥ３検出状況

A区　ＳＥ１・ＳＥ３断面

A区　ＳＥ１屈曲部礫群

A区　ＳＯ２検出状況

A区　ＳＥ１杭列検出状況

図版6

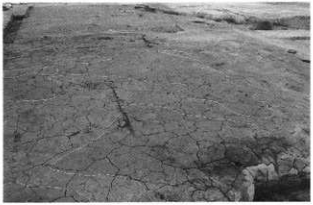
A区　SO2検出状況

A区　SE1土器状況

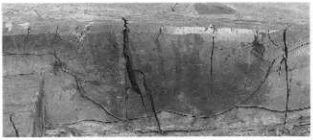
A区　SO3樹皮部分

A区　SE7網代出土状況

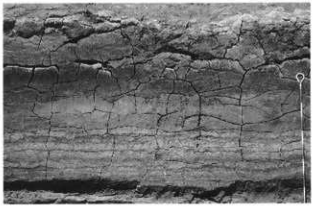
B区　Ⅳ－Ⅴ層畦畔検出状況



B区　Ⅳ－Ⅴ畦畔検出状況（南から）



B区　3号水口断面（西から）



B区　西壁土層断面（東から）